岩手県文化財調査報告書　第106集

岩手の洞穴遺跡

平成12年３月

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書　第106集

岩手の洞穴遺跡

平成12年 3 月

岩手県教育委員会

序　文

当教育委員会では、私たちの祖先より受け継いできた貴重な歴史遺産である埋蔵文化財を保護するため、各種開発事業との調整を日常的に行っておりますが、埋蔵文化財包蔵地の中には特殊な性格や意味・内容を持つものがあり、それらは、可能な限り現状で保存すべきであると考えております。そのためには、その位置と範囲について、十分に関係機関に周知しておく必要があります。

このような趣旨にのっとり、当教育委員会では、これまで、中世城館、貝塚の分布調査を実施し、報告書を刊行してまいりました。今回の洞穴遺跡調査事業は、これらに続くものであります。

洞穴遺跡は、貝塚と並んで動物の骨などがよく残存しているため、当時の生活を解明する上で貴重な資料を提供してくれます。また、旧石器時代の人骨の出土が期待されるなど、その重要性はよく知られているところであります。岩泉町瓢箪穴洞穴では、日本最古の原人の化石人骨の発見を目的として現在調査が行われています。

一方、洞穴遺跡は小規模なものが多いため、保護策が後手にまわると壊滅する危険性を常にはらんでいます。

本報告書は、２カ年の調査成果をまとめたもので、従来から知られていた洞穴遺跡の他に、今回新たに遺跡として確認したものなどを含んでおります。本報告書が活用されることで、文化財の保護に資することがあれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施と報告書の作成に当たり、関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し、心より感謝申し上げます。

平成12年３月

岩手県教育委員会
教育長　大隅　英喜

例　　言

1　本書は、岩手県教育委員会が平成10年度から11年度にかけて実施した県内洞穴遺跡調査事業に係る調査結果の報告である。なお、本事業は国庫補助金の交付を受けて実施したものである。事業額は以下のとおりである。

平成10年度	943,747円		
平成11年度	2,738,130円	計	3,681,877円

2　本事業は、岩手県教育委員会が調査主体となり、県教育委員会が委嘱した洞穴調査員が主として現地調査を行い、関係市町村教育委員会の協力を得ながら実施した。委嘱した調査員は、次のとおりである。

全県担当	熊谷　常正	(盛岡大学文学部)
	三浦　謙一	(岩手県立博物館)
	日下　和寿	(岩手県立博物館)
	佐々木　清文	(㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
	佐々木　務	(岩手県教育委員会、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
岩手・盛岡地区担当	菅原　　修	(岩手町教育委員会)
	神原　雄一郎	(盛岡市教育委員会)
紫波・稗貫地区担当	中村　良幸	(大迫町教育委員会)
	桜井　芳彦	(紫波町教育委員会、平成10年度)
	橋本　征也	(花巻市役所、平成11年度)
江刺地区担当	佐藤　　靖	(江刺市教育委員会)
両磐地区担当	菊地　敏雄	(東山ケイビングクラブ)
	畠山　篤雄	(千厩町役場)
気仙地区担当	熊谷　　賢	(陸前高田市立博物館)
上閉伊地区担当	小向　裕明	(遠野市役所)
下閉伊地区担当	田鎖　康之	(岩泉町教育委員会)
	鎌田　祐二	(宮古市教育委員会)
	安達　尊伸	(田野畑村教育委員会)
	有原　靖裕	(岩泉郵便局)
九戸・二戸地区担当	工藤　　仁	(久慈市教育委員会)
	中村　明央	(一戸町教育委員会)

3　洞穴遺跡位置図は、国土地理院発行の１／50,000地形図と１／25,000地形図を原図として使用した。

4　本調査で対象とした洞穴遺跡は、おおむね近世までの洞穴・岩陰遺跡である。

5　本事業の報告書編集等は、岩手県教育委員会事務局文化課の佐藤嘉広文化財主査、金子昭彦研修員が担当した。本文中、第１章　岩手県における洞穴遺跡研究史は、熊谷常正調査員、第２章各地区の概要及び各洞穴遺跡データについては、各洞穴調査員の原稿により編集した。第３章については、事務局及び熊谷調査員、日下調査員、佐々木務調査員、高橋信雄が担当した。

調査の全般にわたり、菊池強一氏（伊保内高等学校）、熊谷常正氏よりご指導いただいた。

6　調査、整理については、次の方々のご協力をいただいた（敬称略）。

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、東山ケイビングクラブ、弘前大学探検部鍾乳洞班、柳沢忠昭、鈴木勇、小野寺美佐雄、橋本恒政、瀬川幸子、桑野真理

7　本事業の記録及び出土品は、岩手県教育委員会事務局文化課が保管している。

目　　次

序文
例言
第１章　岩手県における洞穴遺跡研究史……1
第２章　岩手県内洞穴遺跡の概要……5
　全体概要……5
　盛岡・岩手地区の概要……6
　紫波・稗貫地区の概要……7
　胆江地区（江刺地区）の概要……9
　両磐地区の概要……10
　気仙地区の概要……12
　上閉伊地区の概要……13
　下閉伊地区の概要……14
　九戸・二戸地区の概要……16
第３章　岩手県内重要洞穴遺跡（岩谷洞穴）調査報告……75
　概要……75
　土器……76
　石器……84
　土製品・石製品……91
　骨角貝器……93
　動物遺存体……97
　まとめ……103

図版目次

第１図　岩手県内洞穴遺跡分布図……20
第２～12図　岩手県内洞穴遺跡位置図１～11……21～31
第13～18図　岩谷洞穴遺跡出土土器(1)～(6)……78～83
第19～21図　岩谷洞穴出土石器(1)～(3)……86～88
第22図　岩谷洞穴出土剥片類データ……89
第23図　岩谷洞穴出土土製品・石製品……92
第24～25図　岩谷洞穴出土骨角貝器(1)～(2)……94、96

表目次

第１表　岩手県内洞穴遺跡一覧表(1)……18
第２表　岩手県内洞穴遺跡一覧表(2)……19
第３表　岩谷洞穴出土石器一覧(1)……88
第４表　岩谷洞穴出土石器一覧(2)……90
第５表　岩手県内洞穴関連文献一覧表(1)……104
第６表　岩手県内洞穴関連文献一覧表(2)……105

写真図版……106

第１章　岩手県における洞穴遺跡研究史

本県の洞穴遺跡探求は、1905年夏当時東京帝国大学雇であった柴田常恵の東北地方遺跡踏査にはじまる。この折り、水沢在住で東京人類学会会員の青木禎次郎と鈴木貞吉が案内役をつとめた。柴田のノートには、彼らからの聞き取り情報だろうが東磐井郡下長坂村大字羽根堀、大原町小字松井、田河津村大字横沢の三洞穴の記載が見られる。だが、日程の関係からか発掘は行っていない。

本格的な洞穴遺跡調査は、それから17年後の1922年７月、東北帝国大学松本彦七郎による住田町蛇王洞洞穴の発掘であろう。これは、岩手師範学校の鳥羽源蔵からの情報提供が契機と思われる。この発掘では、女性の埋葬人骨が検出され、また獣骨・貝類・石器などと共に、幾何学的文様を施した土器などが出土した。後述するがこの土器の拓本が後年、芹沢長介氏の注目するところとなり、再発掘の契機となった。また、人骨は近年放射性炭素による測定が行われ、約7,000前という年代が得られている。全国的にも縄文早期に属する稀少な、また本県最古の人骨でもある。

洞穴からの人骨出土は、人類学者の注目するところとなり、同時に1918年公布された『史跡名勝天然記念物保存法』による史跡対象としても意識されるようになった。

1923年夏、内務省史跡考査員となった柴田常恵が指定史跡調査のため気仙地方を訪れた。これに随行したのが小田島禄郎である。柴田はすでに富山県大境洞穴を調査し洞穴の重要性を承知していた。直前にも福井県内の洞穴を訪れており、気仙地方では貝塚と共に洞穴遺跡の指定候補選択を目的としていた。

８月24日、遠野を経由し気仙郡下有住村に入った柴田は、早速蛇王洞を調査する。この日小田島は広田村から下有住に移動し、柴田到着までの間蛇王洞の小発掘を試みている。次いで26日には陸前高田市矢作町の女神洞穴を発掘、多数の獣骨を得ている。さらに29日には大船渡市日頃市町の関谷洞穴を調査した。関谷洞穴では土器や骨角器が出土し、また層位的な観察も行われている。この踏査によって翌年７月、陸前高田市中沢浜・大船渡市下船渡・同蛸ノ浦の三貝塚と共に関谷洞穴が仮指定された。1934年に三貝塚は国史跡となるが、関谷洞穴は指定から外れている。

さて、このような経緯を経て気仙地方の貝塚や洞穴遺跡に対して行政的な措置が講じられるようになった。1925年７月、岩手県内務部庶務課は気仙郡長・盛警察署長宛に管内の遺跡について発掘を制限する内容の通牒を発している。

この文書で該当したのが、二日市貝塚（陸前高田市）大洞・舞良貝塚（大船渡市）と女神洞穴であった。内務省以外の機関・人物が発掘しないよう地主に指示すると共に、大学等の発掘には職員を立会させ、報告書提出を求め、出土遺物も人骨以外を当該の町村へ引き渡すことなども記されている。これは、大学等による発掘の閉め出しと読みとれる。だがこの直後、小金井良精・長谷部言人・大山柏らによる岩手県南の遺跡発掘が実施されたことなどから、当局がその計画に関わるため為されたものとも考えられる。事実、県は一旦不認可とするが、長谷部らは、柴田や東大の松村瞭らの仲介により許可を取り付けている。

この遺跡調査には、貝塚での人骨収集と旧石器文化存否究明のための洞穴遺跡調査という目的があった。後者は後に、一定の計画でなされた最初の洞穴調査でエポックを画したなどと評価されたが、その実は女神洞穴を除けばいずれも短時間の調査であった。８月19日朝一関に到着した一行は自動車で高田方面に向かう。途中、東山町長坂の羽根堀洞穴を遠望、笹の田峠を越え女神洞穴の写真撮影を行う。翌日女神洞穴の発掘を開始、21日午前に発掘と測量をして調査を終えている。その

日の午後には、大山は矢作川上流の木戸口蝙蝠穴を踏査。29日関谷洞穴踏査。30日には帰路、長坂の熊穴洞穴で小発掘を試みている。およそ二週間の調査旅行中、洞穴に費やした日数は踏査も含め僅か四日間にすぎない。

大山は1923年、戦史研究のためヨーロッパに留学、その間ドイツのシュミットやフランスのブルイユらのもとで旧石器文化について研鑽を積んできた。帰国後、わが国での旧石器確認に関心を持ち、有力遺跡として俎上にあがったのが石灰岩洞穴であった。岩手県南の石灰岩洞穴情報は、柴田などからもたらされたのだろうか。また考古学雑誌に掲載された鈴木貞吉による熊穴洞穴での遺物発見記事に触発されたのかもしれない。だが大山の目的は達成できなかった。ほどなく大山は、日本には旧石器文化は存在しないとの説を唱える。近年では春成秀爾氏らによりあまりにも拙速な結論との評価が出されている。

一方、小田島禄郎はその後も洞穴遺跡踏査を精力的に進めた。1925年川崎村布佐洞穴、1926年東山町田河津・長坂地区の洞穴群、1927年岩泉町内の洞穴群、1928年紫波町舟久保洞穴、1931年山形村内などのほか、江刺市周辺でも洞穴を確認している。これらに先立ち1921年には伊能嘉矩らが中心となり『上閉伊郡史跡名勝天然記念物総覧』が刊行され、遠野市綾織の蝦夷岩などの洞穴遺跡が記載された。さらに、紫波町舟久保洞穴を1931年に菅野義之助が調査し、1934年には上田三平も調査に訪れている。

この結果、1928年刊行の『日本石器時代遺物発見地名表（第五版）』には県内で25ヶ所の洞穴遺跡が記載されるまでになった。大半が小田島の情報提供によるものである。次いで1934年、当時内務省神社局勤務の大場磐雄は「本邦上代の洞穴遺跡」を発表する。この論文には、全国洞穴遺跡53ヶ所、類似遺跡9ヶ所との記載がある。そのうち東北地方は26ヶ所と最多で、宮城県塩釜市崎山囲洞穴以外は岩手県内の洞穴遺跡で占められている。これらが小田島の報告に基づくのはいうまでもない。両者を比較すると『地名表』には蛇王洞穴に近接する御殿平洞穴があり、大場論文にはそれに代わって紫波町舟久保洞穴が記載されている。

大場論文には、大山柏らによる女神・関谷それに熊穴などの図面が掲載されている。周知のように大山が主宰した史前学研究所は太平洋戦争時空襲で被災し、ほとんどの遺物や記録類は焼失した。その点でも貴重な記録といえる。文章では、洞穴規模や主要な遺物に触れ、女神洞穴から精巧な両頭銛の出土も記してある。これは後に佐藤達夫によって紹介された開窩式の鹿角製離頭銛で、時期的には弥生時代後期～古代の北方的な特徴を示す資料である。

大場は、石灰岩洞穴は洪積世人類遺物発見の有力候補地として徹底的な調査の必要性を指摘するが、この頃から小田島を含め本県の洞穴遺跡への関心は次第に希薄になっていった。

戦後、相沢忠洋の群馬県岩宿遺跡発見が契機となって縄文文化以前の遺跡探求が始まった。同時に編年研究の進展に伴い最古の縄文土器追求が活発化する。1952年６月、文化財保護委員会の齋藤忠氏が関谷洞穴を訪れている。同年８月には江坂輝彌氏による岩泉町内での踏査が行われた。江坂氏は当時岩泉中学校に勤務していた三留孝らの案内で赤穴洞穴、横道洞穴、瓢箪穴洞穴、龍泉洞、尼額洞穴などを巡って小発掘を試みる。また、三留採集の遺物を実見し、赤穴洞穴の土器が続縄文的な特徴を示すこと、瓢箪穴からは繊維土器が出土することなどを確認した。江坂氏によれば赤穴の土器を山内清男に持参した際、山内から同様な土器片は岩手県下の洞穴遺跡で他にも数カ所から出土している旨の教示があったと述べている。山内は直接県内の洞穴は発掘していない。江坂氏の報告の中には加藤孝氏が前年夏に発掘していると記載している。加藤氏はこの頃山内の名義を借りて発掘の届出をしており、おそらく加藤氏発掘資料を事前に見ていた可能性がある。

1956年４月には吉田義昭氏による盛岡市鬼ヶ瀬洞穴踏査が行われ、盛岡市内での初の洞穴遺跡が確認されている。1960年『岩手県史第一巻』が刊行された。これには県内洞窟遺跡地名表として28ヶ所の洞穴が記載されている。しかし、事実記載に誤りが多く、遺跡数も基本的には1953年刊行の『岩手県を主とする考古学提要』の情報を超えるものではない。

1962年には日本考古学協会に洞穴遺跡調査特別委員会が設置され、全国規模にわたる組織的な調査が開始された。本県では、瓢箪穴が江坂輝彌氏・笹津備洋氏によって、また蛇王洞穴が芹沢長介氏・林謙作氏らによって発掘調査が行われている。瓢箪穴は、縄文前期の文化層が予想されていた。当時、縄文中期以前の洞穴は県内ではほとんど知られておらず、より古い時期の洞穴利用を確認することが調査の目的であったという。調査は1961年７月、次いで翌年８月に行われた。第Ⅰ・Ⅱ層から弥生後期の天王山式が、Ⅲ層の灰黒色土層からは夥しい獣骨と共に縄文晩期大洞Ａ、C2式土器、その下の第Ⅳ層黒色土層から縄文早期中葉の白浜式土器が出土した。二次調査ではその下層約1.5ｍまでを探ったが、1.2ｍ以下には全く遺物はなかったという。

江坂氏は、この調査の折り周辺のいくつかの洞穴を巡り、小発掘や踏査を試みている。このような調査の中から、岩泉町内の洞穴遺跡の特徴としてまず、縄文晩期後半から弥生後期末までの遺物を出土する洞穴が多いことから、彼らが何故に急峻な岩壁の洞穴を利用したのか、その理由を探るべきことを指摘する。また、早期初頭さらには旧石器時代の洞穴遺跡発見の可能性も夢ではないと述べている。

一方、住田町蛇王洞穴は、芹沢氏が後藤守一博士の遺品整理の際に、かつて松本彦七郎が発掘した貝殻文土器の拓本を目にしたことから始まる。1961年10月、芹沢氏は吉崎昌一氏と共に現地確認し、1964年10月発掘調査を実施している。芹沢氏らは、松本によって包含層が４層ありそれぞれ異なった土器型式が出土したという報告を意識し、層位的な確認に基づく編年研究を目的とした。調査の結果、最下層の押型文＋縄文＋無文土器から第Ⅰ層の縄文条痕土器に至る変遷を把握できた。特に、槻木１式が貝殻文系と縄文条痕系の間に位置すること、吹切沢式と物見台式の編年位置が従来の江坂氏の編年とは異なり逆転すること、貝殻文系土器以前に撚糸文と沈線文を施す土器（蛇王洞式）が存在すること、さらに押型文土器がそれに先行することなど多くの成果を上げたのだった。後日、吹切沢式と物見台式の関係については第Ⅲ層出土土器自体が吹切沢式の範疇で捉えられ得るか、あるいは最下層の押型文＋縄文＋無文という組み合わせが一時期にまとまり得るかなどの批判や指摘もなされたが、層位的把握を重視したその調査成果は、その後東北地方の編年研究に大きな影響を与えた。

このような調査成果を受け、岩泉高校郷土研究部を指導する菊池強一氏らによって1960年代後半から70年代にかけ洞穴調査が行われた。この時期は北上市和賀仙人遺跡、湯田町大台野遺跡など県内でも旧石器遺跡の発見が相次いだ時期でもある。まず1966年３月、瓢箪穴の発掘が行われ、翌年も実施された。また1967年には龍泉洞対岸の龍泉新洞が工事中に発見され、調査が行われている。県南部では1968年春に大船渡市関谷洞穴が後藤勝彦氏・及川洵氏らによって、1970年10月には川崎村布佐洞穴が相原康二氏・及川洵氏・小野寺信吾氏氏らによって、翌71年9月には草間俊一・小片保・及川洵氏らによって住田町湧清水洞穴の発掘が行われている。

龍泉新洞以外は学術調査であった。また、龍泉新洞も、保存され、現在洞穴科学館として公開されている。布佐・湧清水では洞壁を利用した埋葬人骨が、関谷では縄文早期後半の良好な資料が出土している。また、瓢箪穴と龍泉新洞では蛇王洞最下層の無文土器に類似する土器が発見されている。特に龍泉新洞Ｎ洞南地点では爪形文土器や有舌尖頭器も確認できたという。両洞穴から出土し

た無文土器は、押型文土器より先行するのは確実だろうが口縁部断面の形状や器厚などにより細分される可能性もあり、その編年的位置づけについては議論があった。しかし、岩手県内では70年代から大規模開発に伴う発掘調査が開始され、危機に瀕した遺跡調査に多くの時間が割かれるようになり、洞穴遺跡を学術目的で体系的に調査する動きはやがて少なくなってしまった。

80年代、開館を控えた岩手県立博物館では「北上山地の洞穴遺跡」と題する展示テーマのもと、1978年度から県内の代表的な洞穴遺跡を踏査していた。その結果、学史的にも著名な東山町熊穴洞穴の調査を計画し、1979年春と1981年秋に発掘を行った。この発掘で洞口部壁際から再葬人骨が発見され、縄文時代最終末の墓地であることが確認できた。この調査では一部分であったが１ｍほど黄褐色粘土層を掘り下げたが、より古い時期の遺物は発見できなかった。また、この頃から立命館や明治大学など大学ケイビングクラブによる洞穴学的な調査も本格化する。1984年には佐々木清文が「岩泉町内の洞穴遺跡」を発表した。これにはそれまで佐々木自身の現地調査による岩泉町内23ヶ所の洞穴遺跡に加え、県内の41ヶ所の洞穴遺跡が記載されている。都合64ヶ所もの洞穴遺跡が確認されたことになる。また、岩泉町に設置されている日本洞穴学研究所の地道な活動も岩泉安家石灰岩体を中心にして成果を蓄積してきている。

1980年、仙台市山田上の台遺跡で約三万年前の川崎スコリア層の下から石器が出土した。東北地方で始めて確実な層準での３万年を超える所謂「前期旧石器」の確認であった。その後宮城県北部を中心に、旧人・原人段階の石器が次々に発見された。その主体は石器文化談話会という組織であった。その会員の一人、鎌田俊昭氏はかつて瓢箪穴の発掘に参加したメンバーでもあり、彼らの目はやがて、北上山地の石灰岩洞穴へ向けられていった。前期旧石器についてその真偽が話題になっていた頃ではあったが、芹沢長介氏は1985年雑誌『科学朝日』の「最古の日本人を求めて」と題した特集で北上山地の石灰岩洞穴調査の重要性を述べ、旧石器時代人骨発見の鍵を握る場所と指摘している。

それから約10年後の1995年春、石器文化談話会メンバーが中心となり、調査団を組織して瓢箪穴の発掘調査が始まった。初年度に洞口部から斜軸尖頭器などの石器が出土し、その後も着実な成果を上げてきている。また、同年夏には大迫町アバクチ洞穴、翌年からはその上流約１㎞に所在する風穴洞穴の調査を東北大学医学部が中心となって実施された。このうちアバクチでは弥生時代の幼児のほぼ完全な全身骨格が出土し、また風穴からはゾウの大腿骨やツキノワグマ中手骨が出土している。前者の放射性炭素の年代値が約18,000年前、後者は約46,000年前と測定されており、特に後者の年代は大方の予想を大きく超えるものだった。さらに岩手県立博物館では、蛇王洞穴の上流に位置する小松洞穴の発掘を1996年から開始し、縄文早期末の縄文条痕土器の層位的な検出にあたっている。

かつて北上山地に限られていた本県の洞穴・岩陰遺跡は沢内村や紫波町など奥羽山脈地域でもいくつか確認され、その分布は広範囲に及ぶようにもなった。さらに1988年には山形村、1989年からは岩泉町が管内の遺跡分布調査を実施し、新たな洞穴遺跡を追加記載している。

確かにこれまでも道路工事や石灰岩採取のためいくつかの洞穴が消失してきた。しかし幸いなるかな、多くの洞穴はその所在地が山中にあり大規模な開発の波が今のところは本格的には及んでいない。岩手の洞穴遺跡は、たとえば縄文晩期から弥生時代、そして古墳時代にかけての北方的な影響を受けた活動を検討する上でも重要になるだろうし、貝塚と相互比較することによって先史社会の生業の在り方を具体的に示す遺跡としても貴重な遺跡となることは疑いない。なによりも日本原人発見の舞台は次第に整いつつあることを意識しながら、今後の展開を見守っていきたい。

第２章　岩手県内洞穴遺跡の概要

（1）全体概要

先に、事業の概要及び本報告書の作成要領について述べておく。

本事業は、岩手県内の洞穴遺跡の周知を目的として、野外分布調査を中心に、重要洞穴遺跡（岩谷洞穴遺跡）の整理、文献調査を併せて行ったものである。調査・整理は、平成10年度、平成11年度の二カ年にわたって行った。また、周知の遺跡以外に洞穴遺跡・岩陰遺跡と思われるものがあるかどうか、各市町村教育委員会にアンケート調査を平成11年度に実施している。なお、整理についての詳細は、第3章を参照していただきたい。

野外分布調査の対象は、旧石器から近世（近代）の洞穴・岩陰遺跡（以下、洞穴遺跡と略称）とし、周知の洞穴遺跡の現況、及び、遺跡の可能性の高い、あるいは近い将来開発の恐れのある洞穴を調査した。

実際の調査では、周知の洞穴遺跡以外は、東山ケイビングクラブ作成の岩手県内洞穴一覧表や柳沢忠昭氏、岡本透氏の作成した北部北上山地の洞穴一覧表（「北部北上山地のカルストと湧水」『岩手県立博物館研究報告』第15号、1997年12月）、上記のアンケート調査などを元に、遺跡の可能性のある洞穴を調査した。

野外分布調査は、県教育委員会が委嘱した洞穴調査員が主として行った。調査員は、例言に示したように各地区ごとに任命し、月1回程度、各年度計５～6回、計10回程度調査を行った。また、事務連絡のための調査員会議を平成10年度は7月に、平成11年度は5月に行っている。

調査員には、事前に調査計画書を、終了後は調査日誌、調査カード、撮影したフィルムを提出してもらった。調査の際は必ず複数で行動することとし、写真は35ミリカラーフィルムを使用した。

調査カードは、Ａ４版両面刷りで、表面は文章記載、裏面は図（１／25,000位置図、遺跡までの略図、平面模式図）を貼付するようになっている。表面に記載した調査項目は、25頁以下の表に掲げたものに加え、土地所有者、周囲の状況（山林、原野等）である。

報告書の主体をなす本章の個々の遺跡表は、上記の調査カードに基づいて事務局が作成した。その他の章は、基本的に各担当者が執筆した。遺跡表は、紙幅の関係と、個々の洞穴遺跡の情報量の差が大きく一律に報告することが困難なことから、情報量によって三つの様式に分けた。

事業を終えてみると、洞穴遺跡は、山奥にあるものが多いので行くまでが大変で、また危険を伴うものも多く調査もはかどらず、二年の調査期間（積雪があるので冬季は難しい）では足りなかったかもしれない。今後も調査を継続する必要があろう。

次に、岩手県内洞穴遺跡の概要。本書で報告する洞穴遺跡は、全部で104箇所である（第１表参照）。平成11年度岩手県遺跡基本台帳では68箇所となっており、今回の調査で36箇所増えたことになる。なお、第１表では、今後の洞穴調査の一助になればとの思いから、調査はしたが遺跡と確認できなかったものも、調査カードの提出があったものを中心に参考として掲げている（1000番代のもの）。

今回の報告遺跡を、地域別に見ると、岩手・盛岡６、紫波・稗貫９、和賀１、江刺10、両磐17、気仙20、上閉伊８、下閉伊29、九戸・二戸４となり、両磐（東磐井）、気仙、下閉伊という明らかに石灰岩洞穴の多い地域に遺跡も多い。これらの地域は、もともと知られていた遺跡が多く、研究史に見るように、人骨などの残りにくいものが残るという特長が古くから注目を集めたからであろう。やや特異なのが江刺地区で、岩陰遺跡ではあるが、石灰岩洞穴以外の遺跡が既に６遺跡知られてい

る。北上川右岸(奥羽山系)は、逆の意味で遺跡が少ないのだが、これまで一関市の１遺跡が知られており、今回の調査で、岩手地区に１遺跡、和賀地区に１遺跡追加された。石灰岩以外の洞穴遺跡については、岩手・盛岡地区に比較的知られ、担当の神原雄一郎氏が特に注意している。

今回報告する遺跡を、時期別に見ると、旧石器が２、縄文が69、弥生が26、古代が７、中世が１、近世が３、近代が１、不詳が23である(複数カウント)。縄文のうち細別時期が分かっているもの38遺跡では、草創期３、早期８、前期13、中期10、後期22、晩期24となる(複数カウント)。同時期の開地遺跡の数に比較して中期の土器を出土する遺跡は少なく、特に単独で出土する遺跡は上閉伊地区の大橋桜沢岩陰遺跡のみであった。同様に、縄文時代以外の単独遺跡は少なく、旧石器時代は１、弥生時代は７、近代以降１で、ほとんどが下閉伊地区の岩泉のみで確認されている。

最後に、特徴的な遺跡を挙げる。和賀地区のヤス穴洞穴は、近代以降の遺跡ではあるが、マタギの解体場として注目される。両磐地区の川底第２洞は、洞口より約170mも奥で遺物が発見され、注目すべき遺跡として今回東山ケイビングクラブほかがビデオ撮影を行った。下閉伊地区の銭吹穴鍛冶遺跡は、贋金造りの跡とされている。

（２）盛岡・岩手地区の概要

盛岡・岩手地区は、岩手県中央部北部に位置し、盛岡市・雫石町・滝沢村・玉山村・岩手町・西根町・松尾村・安代町・葛巻町の９市町村を含む。実際に現地踏査を行ったのは盛岡市・岩手町・葛巻町・松尾村の４市町村である。

実地踏査は、過去の踏査例や情報から北上川の東岸を横走する北上山地を中心に行った。その結果、盛岡市８(２)、岩手町１、葛巻町２(２)、松尾村１の洞穴・岩陰を確認することができた((　)内は周知の数)。盛岡・岩手地区東部の山地は地質構造上、北上帯の主要な境界である早池峰構造帯の西縁部にあり、北部北上帯と南部北上帯の双方を含む地域となっている。北部北上帯に属する山地では中起伏山地の外山山地・小起伏山地の玉山山地があり、南部北上帯に属する山地では中・小起伏山地である手代森山地が位置する。その両者にはさまれた早池峰構造帯に属する中起伏山地では、高森山(626m)を中心とする高森山山地、朝島山(607m)を中心とする朝島山山地、鬼ヶ瀬山(724m)を中心とする鬼ヶ瀬山山地が連なる。

上記の山地では、凝灰岩・安山岩・チャートを主体とする岩帯が見られ、鬼ヶ瀬山洞穴群、中津川上流域に分布する洞穴群はこれらの岩帯に形成されたものである。鬼ヶ瀬山洞穴群は、鬼ヶ瀬山頂上から尾根に露出する安山岩質凝灰岩の岩塊に形成されたものであるが、水流などの要因によるものではなく、岩の崩壊によって生じた岩塊の隙間が洞穴状になったものである。付近一帯は洞穴・岩陰状の景観を呈した岩塊が多く見られ、鬼ヶ瀬山から南方に位置する黒森山、北方に位置する桐ノ木沢山においても同様の景観を見ることができる。

前述した、桐ノ木沢山の南斜面に位置する手代木沢岩陰は、凝灰岩の岩塊基部が沢の水流による浸食によって庇状の岩陰が形成されたものである。今回は実地踏査を行わなかったが、過去の踏査によって縄文時代早期から弥生時代後期の土器片が採集されている。

岩手町付近においては、北上川西岸に広く火山岩が分布しており、松尾村長峰岩陰遺跡、岩手町山辺内洞穴など安山岩質凝灰岩の岩塊基部に形成された岩陰・洞穴が発見された。安代町においてもだんぶり長者洞穴など石英安山岩質凝灰岩が浸食されて形成された洞穴が発見されている。

葛巻町東部は安家石灰岩帯の西辺にあたり、周知の洞穴遺跡である車門明神穴洞穴、五日市ざる穴洞穴などの石灰岩洞穴を踏査したが、明神穴洞穴については、沢の河床面に接し、流水量が多い

洞穴であることから洞穴遺跡の可能性は少ないものと思われる。過去における調査でも、明神穴洞穴より遺物等が採集された記録はないようである。しかし、明神穴洞穴より上流の分水嶺付近に大きなドリーネが見られ、それより下流の沢沿い各所からは、湧水や沢水の浸透が見られることから未確認の石灰岩洞穴が発見される可能性がある。

盛岡・岩手地区における洞穴調査は、昭和31年に吉田義昭氏に踏査された盛岡市鬼ヶ瀬山洞穴が最初であろう。洞内からは縄文時代後期の土器片を採集している他、境界を越えた旧都南村側にも縄文時代の遺物が採集される洞穴が発見されていることを報告している。この時期に前後して吉田氏は盛岡市手代木沢岩陰遺跡を踏査し、縄文時代早期～弥生時代後期の遺物を採集している。これらの盛岡市南東部に所在する洞穴・岩陰について吉田氏は、早池峰構造帯に分布する石灰岩に形成された洞穴であろうと考えた。

昭和62年に、千田和文・神原によって手代木沢岩陰が再踏査され、縄文時代早期の貝殻文・弥生時代後期の土器破片が採集された。報告のなかで、岩陰が形成されている岩塊についても石英安山岩質凝灰岩であったことにふれ、石灰岩地帯以外でも洞穴・岩陰遺跡が存在することに注意した。

盛岡・岩手地区について、石灰岩洞穴・岩陰は葛巻町以外では確認されなかったものの、石英安山岩質凝灰岩に形成された洞穴・岩陰が各地区より確認されたことは大きな成果といえよう。この地区は、将来的に石灰岩洞以外の洞穴・岩陰遺跡が発見される可能性が高い。

今後は、今回の結果を踏まえて県・市町村による分布調査を継続し、山地における道路・砂防ダム等の開発行為に備えるべきであろう。

（3）紫波・稗貫地区の概要

紫波・稗貫地区は岩手県のほぼ中央部に位置し、東は北上山地、西は奥羽山脈とに挟まれ、中央を北上川が南流している。とくに、北上山地は古生代の地層が発達し、ＮＮＷ－ＳＳＥ方向に走る盛岡－気仙沼構造線に沿って、石灰岩層がレンズ状に幾筋にも貫入しているため、石灰岩洞穴が数多く見られる。紫波地区は矢巾町・紫波町の２町、花巻地区は石鳥谷町・大迫町・東和町・花巻市の１市３町である。

矢巾町は、北上山地に接していないため、現在のところ洞穴遺跡と思われるのものは確認されていない。

紫波町は東側の北上山地に沿って石灰岩層が厚くみられ、赤沢・舟久保地区では現在でも石灰岩の採掘が行われている。町内では自然洞穴として10箇所が確認されているが、そのうち、現在正式に遺跡登録されているは舟久保洞窟、片山洞穴の２箇所のみである。ただし、昭和62(1987)年に菊地敏雄氏を中心とする東山ケイビングクラブの調査により、赤沢地区の三ツ石洞穴・きつね穴洞穴と、佐比内地区の無名穴２洞穴の３箇所が遺跡の可能性があるとして報告されている。今回はこれらの洞穴を確認をするとともに、きつね穴洞穴の100mほど東側の山腹で新たに発見した、たぬき穴洞穴(仮称)から土器・剥片等を確認した。したがって、合計６箇所の洞穴遺跡があり、遺跡密度としてはかなり濃い。

これらのうち発掘調査されたのは舟久保洞窟のみである。これは昭和７(1932)年に小田島禄郎が行ったもので、洞内ホールの西側50㎡ほどの範囲で、多くの土器や石器、焼土などが確認され、県内では珍しい洞窟住居として、昭和32(1957)年に県指定史跡となった。しかし、このときの調査は未報告のままで、遺物は小田島コレクションとして県立博物館に所蔵された。昭和63(1988)に東山ケイビングクラブと紫波町教育委員会が刊行した『紫波町の洞穴』には、このとき出土した土器・

石器の一部が掲載されている。それをみると、出土遺物の中心時期は縄文時代後期中葉から晩期前半のものであり、弥生時代後期と思われる土器片もみられる。

紫波町の洞穴遺跡の特徴は、いずれも現河床からの比高が低く、洞穴の入口周辺には開地遺跡が存在していることが大きな特徴となっている。したがって、時期的にも縄文時代後期～晩期、弥生時代などが多く、縄文時代早期以前の古い時期の遺物は確認されていない。そのうえ、きつね穴洞穴のように、人間が這ってしか入れないような狭い通路状の空間に土器・骨が散乱している例もあり、住居として利用されたのではなく、何らかの祭祀か墓域などとして利用された可能性の方が強いようである。いずれにしても、紫波町内の東側山間部沿いは石灰岩の分布状況から見ても、未発見の洞穴が数多くあるものと推測され、山間部の悉皆調査を実施する必要のある地域である。

大迫町は、町の中央を盛岡ー気仙沼構造帯が通っており、石灰岩層もこの構造線に沿って貫入していることから、東側～北側の外川目地区・内川目地区に石灰岩洞穴が集中する。現在、20カ所ほどの洞穴が報告されているが、河川に沿って露出した石灰岩層に開口した洞穴が多く、洞内に水流がみられるものもある。聞き取り調査によると、まだ宮守村・遠野市に接する山間地に未発見の洞穴がありそうであるが、石灰岩の質があまりよくない洞穴が多く、崩落しているものもあるものと考えられる。このうち遺跡台帳に登録されているのは外川目地区のアバクチ洞穴・風穴(かざあな)洞穴、内川目地区の弥兵エ穴の３箇所であり、さらに未登録の内川目地区の上の岩洞穴で土器が発見されている。

調査された洞穴は、外川目地区の八木巻川右岸に開口したアバクチ洞穴と風穴洞穴である。アバクチ洞穴遺跡は、昭和57(1982)年・昭和62(1987)年に大迫町教育委員会が遺跡確認のための試掘調査を行い、弥生時代後期から縄文時代前期までの遺物を採集している。この際、弥生時代の層からはベンケイガイの腕輪と多量の焼土・灰層が検出され、縄文時代中期～後期の層からは鹿角製のヤス、クマの犬歯などが出ている。

平成７(1995)年からは、東北大学医学部解剖学第１講座の百々幸雄教授を中心として、北上山地で旧石器人骨を探す調査の一環として調査を行っている。平成８(1996)年には弥生時代の層から、埋葬されたほぼ完全な幼児骨が発見された。幼児骨は左側臥屈葬で、右手首に貝製の小玉を69個繋いだ腕飾りをしていた。歯の観察により、この幼児は４歳ぐらいと推定され、放射性炭素年代測定により2165±49 year BPという年代が出ており、これは人骨とともに出土した弥生時代中期前半の土器と矛盾するものではなかった。また、人骨よりコラーゲンを抽出し、炭素・窒素安定同位体比を測定した結果、この弥生の幼児が生前に摂取していたタンパク質の大部分は陸獣に由来していた可能性が高く、海産物やＣ４植物(アワ・ヒエ・キビ・トウモロコシ等)はほとんど摂っていないことがわかった。ほかに、幼児の歯の計測値や頭蓋骨の形質的な観察により、この人骨が北部九州の渡来系弥生人に近似していることが指摘されており、かなり早い段階で渡来系弥生人の東北地方への進出があったことを窺わせる貴重な資料となっている。

他に、アバクチ洞穴では、洞口部付近の縄文時代後期の層から、人工的と考えられる集石遺構がみつかっている。集石周辺からは、12体分以上の犬歯を中心としたクマの骨が集中しており、さらに20数個の石鏃が出土している。洞穴内からクマの骨が出土する例は、新潟県上川町室谷洞穴や長野県真田町唐沢岩陰などで報告されているが、アバクチ洞穴のように集石遺構に伴って出土した例はないため、当時の動物儀礼等を考える上で非常に貴重な例となるであろう。

風穴洞穴は、平成８(1996)年から慶応大学文学部民族考古学研究室の阿部祥人教授を中心とするグループにより調査され、第３層と分類した黒色土層より縄文時代後期中葉の土器群が出土して遺

跡と確認された。この洞穴では、下部の第４層と呼ばれる粘性の強い黄褐色土層より、多数の獣骨が出土した。その中には、絶滅動物も含まれており、後期更新世に属する層であることが判明した。絶滅大型動物では、ナウマンゾウと考えられるゾウの大腿骨、ヘラジカの歯などが出土している。とくにヘラジカは日本で４番目の化石産出地となった。ゾウの大腿骨は放射性炭素年代測定により、18060±60year BPの数値が出ている。他には、ムササビやノウサギが多く、シカやイノシシは見られずにニホンカモシカが多いなど、後期更新世の化石産地のなかでは非常にユニークな動物相がみられる。また、ムササビなど森林系の動物群のほかにシントウトガリネズミなど寒冷地の動物群も混じっていることから、第４層の堆積時期の気候は、現在よりもやや寒冷であったものの、寒さはそれほど厳しくはない森林地帯であった可能性が指摘されている。このほかには、ニホンザルの数体分の骨が見つかっている。後期更新世から生息していると考えられていたニホンザルの標本は非常に限られていたが、本洞穴の調査によりほぼ完全な頭蓋骨が復元できることになり、ニホンザルの歴史を考える上で極めて貴重な資料となった。

新たに発見した洞穴遺跡として上の岩洞穴がある。この洞穴は、標高787ｍの上の岩山の山頂下部に開口した洞穴で、洞穴遺跡の標高としては県内でもかなり高い方であると思われる。試掘調査では、表土下30㎝ほどで土器片が出土したが、それ以上は調査が出来ず内容は不明の点が多いが、かなり古い時期の遺物を期待できそうな洞穴である。

花巻市・東和町では洞穴並びに洞穴遺跡の報告はなかった。しかし、今回は人骨等の発見の可能性のある北上山地の石灰岩地帯を中心に実地調査したため、この地域ではそれ以外の岩石で形成された洞穴や岩陰などがあると思われ、今後の悉皆調査が必要な地域である。

（４）胆江地区（江刺地区）の概要

胆江地区は岩手県南部に位置し、水沢市、江刺市、金ヶ崎町、前沢町、胆沢町、衣川村の６市町村によって構成されている。東の南部北上山地と西の奥羽山地に挟まれた北上低地をその中心とし、面積は1,173.12キロ平方メートルを有する。

本地区における地形の特徴は、中央部を流れる北上川よって形成された沖積平野とその支川沿岸に拡がる盆地状地形があげられ、この地層は新生界第４系沖積層に属する。また、北上川を挟むように、西側に奥羽山地、東側に南部北上山地が位置している。奥羽山地付近は、新第３紀層を基盤として焼石岳溶岩が覆っており、この山地部より供給された土砂が胆沢川の移動により下流地域では扇状地を形成している。南部北上山地付近は古生界に属する地層で形成されており、山頂部には北上山地特有の浸蝕平坦面が広範囲にみられる。

本地区の特徴である北上川沿岸の沖積平野では、古くより農耕が行われ、台地上あるいは微高地上には集落が形成された。また、北上川を利用した舟運により、政治・文化・交易等の中心となった胆沢城などの古代遺跡が多く所在しており、開発行為に伴う発掘調査の実施により多くの成果をあげている。

一方、縄文時代の遺跡を正式に調査した例はあまり多くない。特に今回の調査対象である洞穴遺跡については、５市町で９箇所しか確認されていない。胆江地区の市町村別洞穴遺跡数を見てみると、江刺市８、金ヶ崎町１となっている。今回踏査できた洞穴遺跡数は、江刺市７、金ヶ崎町１であったが、石灰岩洞穴は江刺市の口沢洞穴のみであった。これは溶蝕空洞が多く確認できる石灰岩が、この地域にはほとんど含有されていないことが起因しているものと考えられる。

胆江地区内の洞穴で正式な調査が行われたものはないが、以前に土器等を採取されたことがある

という記述が残っている根岸洞穴と赤部洞穴の２遺跡について触れてみたい。

根岸洞穴については、昭和36年調査の埋蔵文化財包蔵地調査カード(江刺市教育委員会)よれば、昭和初年頃小田島禄郎氏が試掘調査を実施し、出土した縄文土器を持ち帰ったとの記述がある。しかし、今回の調査では遺物は採取されなかったし、この洞穴はいわゆる洞窟とは違い、どちらかといえば岩陰遺跡としての可能性が高く、『住民址』的な用途を持つ洞穴とは考えられなかった。

また、赤部洞穴については、岩手県史において「事実江刺市梁川町野手崎の赤部山中には洞窟住民址の周囲の岩石を採掘した痕跡と、それで作成したらしい石鏃その他の石器などが発見されており、その洞窟の近くからも石器の出土するところからみて、当時の生活圏内に入る遺跡であることが知られる」(『岩手県史』第１巻上古篇上代篇)との記述がある。調査の結果では岩石を採取したと思われる穴については確認できたものの、遺物は採取できなかった。さらには県史中に記載のある洞窟住居址をも確認することができなかった。このため、今回の調査では岩石の採取が行われた穴を赤部洞穴として置くこととし、今後の調査によりその付近の詳細を把握されることが望まれる。

これら２洞穴のほか、今回調査を実施した洞穴ではすべて遺物は収集されなかった。本地区の洞穴遺跡は岩陰遺跡的なものが多く、奥行きのあるものはほとんど皆無であった。地質や地形上から一般的にいわれる洞窟が形成されにくい土地なのであろう。

以上、胆江地区の概要を述べてきたが、本地区は地形や地質の特徴から洞穴遺跡が多く存在するとは決して言えない。しかしながら、南部北上山地付近には石灰岩洞穴が発見される余地を残している。今後の調査の進展により、新たな発見がされることを期待する。

（５）両磐地区の概要

岩手県の南端に位置する当地区は、秋田、宮城両県に隣接し１市６町２村(一関市、花泉町、平泉町、大東町、藤沢町、千厩町、東山町、室根村、川崎村)で構成する。同地区は北上川流域に所属し、ほぼ中央を北上川が南東に流れ、狐禅寺峡谷を形成し更に南流し宮城県石巻市で太平洋に注いでいる。室根村内を流れる大川は宮城県気仙沼市で、津谷川は宮城県本吉町で太平洋に流れ込み流域を異にしている。両磐地区の面積は、約1,319.6平方キロメートルで県土の8.6％を占める。

周知の遺跡を中心に調査を実施した。周知の洞穴遺跡が所在しないのは、平泉町、千厩町、藤沢町、室根村である。周知の洞穴遺跡数は、10ヶ所、新規の遺跡と思われる洞穴が６ヶ所、である。その他の洞穴３ヶ所(現地調査の結果、本調査の目的外であった洞穴。)合わせて19ヶ所を現地に赴いて調査した。一関市１ヶ所、花泉町２ヶ所、大東町３ヶ所、東山町11ヶ所、川崎村２ヶ所である。

本事業の対象の洞穴遺跡は、砂鉄川流域の石灰岩地帯に濃厚に分布する。この砂鉄川は、北上川の支流の一つで、大東町大原の鷹ノ巣山(792.1m)にその源流を持つが、沖田川、猿沢川、山谷川等の大小の河川が合流し川崎村門崎で北上川に注いでいる。

「山口洞穴遺跡」(大東町大原字山口)は、砂鉄川の支流山口川の右岸にある石灰岩の洞穴である。山口川と洞口の比高差は約５mである。開口部分は、土が盛られやや狭くなっているが、内部は広い空間が保たれている。洞内を湧水が流れ山口川に注いでいる。天井部分は高く、居住空間の可能性が高いと見られる。開口部前面の畑より、縄文土器片や獣骨片(時代不明)、鉄滓(時代不明)が表採された。

「箕穴洞穴遺跡」(東山町田河津字横沢)は、横沢川の左岸に位置し石灰岩の大きな岩壁基部に開口している。洞口と横沢川との比高差は約２mである。入り口は狭いものの内部は広い空間がある。今回の調査では、獣骨片を採集している。調査歴は古く、明治38年(1905年)柴田常恵、鈴木貞太郎

の調査記録がある。

「熊穴洞穴遺跡」(東山町長坂字小豆用)は、猿沢川の右岸にあり石灰岩の大きな路頭の基部に開口する。洞穴の主軸は南北方向である。猿沢川との比高差は約27mである。現河川との比高差においては、調査洞穴中布佐洞穴遺跡に次ぐ高さである。 今回の調査は、洞口より約70m奥の小田島禄郎が調査した地点まで行い、土器片、獣骨片等を多数表採している。

大正13年(1924)に鈴木貞太郎、青木禎次郎によって最初の発掘調査が行われ、翌年には小金井良精、長谷部言人、小田島禄郎他が発掘調査を行っている。その後昭和54年(1979)県立博物館開設準備室が、昭和56年に同博物館が調査を行い、人骨、土器片が出土している。人骨は壁際のやや窪みのある箇所にまとまって出土し、再葬と見られる。縄文晩期大洞A′式かやや新しいと見られる土器である。洞口部を中心とした調査であるが層位の確認をしている。

「川底第2洞穴遺跡」(東山町田河津字高金)は、山谷側の右岸に位置し、石灰岩の大きな岩壁基部に開口している。総延長約270m＋αの洞穴で洞口と山谷川の比高差は約4mである。当洞穴の北側には「川底洞穴遺跡」が近接所在し、地下水路で繋がっている。

今回の調査では、遺物発見地点が洞口より約170m奥のホールにある事から、東山ケイビングクラブ、弘前大学探検部鍾乳洞班の協力を得て調査を実施した。ホールより縄文土器片が採集された。電源の確保を行い調査状況のビデオ撮影も行った。洞内からの最初の遺物の発見は、昭和58年(1983)の東山ケイビングクラブの単独調査である。土器片やツキノワグマの頭骨片、ウサギの骨や炭化物が確認され、昭和60年(1985)の菊地敏雄、畠山篤雄の調査では、粗製深鉢の大型土器片や炭化物が採集されている。

「布佐洞穴遺跡」(川崎村門崎字石蔵)は石灰岩の洞穴で、洞口と砂鉄川との比高差が大きく、今回調査した洞穴遺跡の中では最大である。現在もまれに洞穴内部から縄文土器片が採集されるが、摩耗していることが多い。開口部に東屋が設置され環境整備がなされている。

1925年には小田島禄郎が調査を行い、昭和45年(1970)に開口部の平坦部分の発掘調査が行われ、炉跡等が検出されている。縄文土器片、人骨、獣骨等の出土がある。調査歴が古く多くの研究者が訪れている。

東磐井区では、砂鉄川流域に多くの洞穴が確認されている。東山ケイビングクラブの調査報告によれば、大東町、東山町、川崎村で確認された洞穴は96ヶ所である。これらの内、今回調査の対象とした洞穴は、遺跡台帳にある周知の遺跡、過去の調査報告・人骨・土器等の出土報告の洞穴を中心に調査を実施した。この地区に洞穴遺跡が多く見られるのは、砂鉄川流域に古生代の地質の形成があり、また石灰岩の岩体がレンズ状に広く分布し、自然洞穴が形成されやすい状況にあることがその要因の一つであろう。

洞穴内より獣骨のみ発見された洞穴(東本町の穴他)や開口部が高所にある姫穴(東山町田河津)など居住以外の用途も考えられる洞穴もある。遺跡の性格付けについては、今後の調査を待つ以外にない。多くの洞穴は出土遺物から縄文時代後・晩期と見られるが、当地区においては、発掘調査事例が少ないので表採遺物から伺うのみである。大正時代以後当流域の洞穴遺跡において、発掘調査が行われたのは「熊穴洞穴」と「布佐洞穴」である。

以上概要を述べたが、過去において、土器や人骨の出土報告がある洞穴で、今回遺物を確認出来ない洞穴も多い。新しい洞穴遺跡の発見が待たれるところである。

西磐井郡には、石灰岩の洞穴を利用した遺跡の報告はない。火山活動による堆積層が広く分布しており、地質学的には内部的地下水流による溶食作用における洞穴形成がされにくい為であろう。

周知の遺跡では、一関市厳美町本寺に所在する「不動窟」、花泉町金沢字穴の沢に所在する「穴の沢洞穴」である。また、同町金沢字滝ノ沢に「刈生沢の穴」が所在する。何れも中世から近代にかけての宗教、生産関連遺構と推測される。

両磐地区は岩手県の洞穴調査の先駆的地区である。1905年柴田常恵、鈴木貞太郎を始めとして、大山柏、八幡一郎、小金井良精、鈴木貞吉、青木禎次郎が来県し、県内では小田島禄郎が調査に訪れている。日本考古学史上、洞穴遺跡調査嚆矢の地といっても過言でなかろう。

（6）気仙地区の概要

気仙地区は本県の南東部に位置する。太平洋に面した大船渡市（186.03㎢）、陸前高田市（232.19㎢）、三陸町（137.13㎢）、と内陸に位置する住田町（334.83㎢）の二市二町（旧気仙郡）からなり、合計面積は890.18㎢で本県全体の１割弱を占めている。

各市町の遺跡数は大船渡市95（うち洞穴遺跡４）、陸前高田市221（８）、三陸町56（現在のところ洞穴遺跡は確認されていない）、住田町100（７）である。

今回の調査では、周知の洞穴遺跡及びケービングクラブなどの調査報告書中に遺物と思われる記述のある洞穴を中心に踏査を行った。なお、洞穴遺跡および遺跡の可能性の高い洞穴が確認されていない三陸町については調査を行わなかった。

洞穴遺跡は、大船渡市では盛川の支流鷹生川沿いと上坂本沢、陸前高田市では気仙川の支流で中平川と生出川が合流する矢作川沿いと生出川沿い、住田町では気仙川沿いと合地沢、中沢川沿いの石灰岩露頭に所在している。標高では50～300ｍの範囲に位置し、川との比高差は知り得た洞穴で４～30ｍの範囲であった。開口部は幅１～15ｍ、高さ１～10ｍの規模で、北に開口する洞穴が多い。

出土遺物は土器（縄文土器が多い）、石器、動物遺存体などがある。動物遺存体ではイノシシ、シカ、貝類が多く、貝類のほとんどが海産種であった。この傾向は住田町の小松洞窟にも見られ、内陸部まで海産種が持ち込まれている（魚骨についても同様である）。

本地区の洞穴遺跡研究は、大正末期から昭和初期にかけて人骨研究を主目的として行われた本地区の貝塚調査の歴史と共にある。大正11年の松本彦七郎による住田町蛇王洞窟の調査をはじめ、大正13年の柴田常恵、小田島禄郎による住田町蛇王洞窟、陸前高田市女神洞窟、大船渡市関谷洞窟の調査、大正14年の大山柏、小金井良精、八幡一郎らによる岩手県南部の洞穴調査（陸前高田市木戸口蝙蝠穴、同女神洞窟、大船渡市関谷洞窟）がある。これらの調査内容については人類学雑誌などに若干の報告が見られるのみで、詳細な内容についての報告はされていなかったが、昭和９年大場磐雄によってその概要が報告されている。この中には関谷洞窟の外観写真及び実測図、女神洞窟の実測図及び層位図と出土した土器、骨角器の写真などが記述と共に掲載されている。特筆すべきは女神洞窟出土の抉入離頭銛で、時期は不明であるが土師器に伴なう遺物と思われ、平安時代頃と推定されている。本資料は本県においてこの時期の銛としては唯一のものである。

昭和初期から昭和39年の「蛇王洞Ⅱ式」の設定がなされた芹沢長介、林謙作らによる蛇王洞窟の調査が行われるまで本地区での洞穴調査は行われていないが、この間、関谷洞窟が昭和32年に県史跡として指定されている。昭和40年代に入り、昭和43年の後藤勝彦、及川洵、山口興典らによる関谷洞窟の調査、昭和46年住田町教育委員会による湧清水洞窟の調査が相次いで行われている。関谷洞窟の調査では、縄文時代早期中頃の貝殻文尖底土器にはじまる最下層から弥生土器・土師器・須恵器に至るまでの最上層まで９層の文化層が確認されている。また、湧清水洞窟の調査では27体もの縄文時代後期の埋葬人骨が確認されている。

平成に入り、平成７年～10年の４ヶ年にわたり岩手県立博物館による小松洞穴の調査が行われている。この調査では、動物遺存体の定量的分析が行われ、本地区の内陸部における食料資源利用の一端が明らかになろうとしている。

本地区の洞穴遺跡は、貝塚にみる沿岸部の生業活動と内陸部のそれを比較する上で重要であり、今後の科学的分析によるデータの集積、研究が待たれるところである。

（７）上閉伊地区の概要

上閉伊地区は、北上高地の南半部、釜石市、遠野市、上閉伊郡大槌町、同宮守村に属し、内陸の北上川支流猿ヶ石川中上流部及び三陸海岸部に跨がる地域である。総面積1,467㎢、岩手県の約１割を占めている。地質は、遠野盆地を中心とする中生代に貫入した遠野花崗岩体とその周囲に中生代の火成岩類及び古生層の堆積岩が分布する。古生層中には石灰岩層が狭在し、少なからず石灰岩洞穴が発達している。

現在、遺跡地図に搭載されている周知の洞穴遺跡は８遺跡に止まるが、今回はこれらの他、岩陰遺跡を含め４遺跡を追加した。確認できなかった周知の遺跡は、洞泉弁天沢遺跡及び鵜崎遺跡の２遺跡である。釜石市及び大槌町には小規模な石灰岩層が分布し、幾つかの洞穴遺跡が見られる。宮守村達曽部地区には、小規模な洞穴は存在するが、遺跡として確認できたものはなかった。遠野市小友地区の石灰岩地帯についてもこれまでの調査で岩陰、洞穴遺跡を見出していない。今回の調査では、山中の大方の中上部を除いている。また、過去に工事及び表面採集により発見されている遺物は確認するに至らなかった。

本地区の洞穴では、正式な発掘調査が実施されたことはないが、大正10年(1921)遠野町出身の伊能嘉矩が県の史蹟名勝天然記念物調査会委員に任命されると鈴木重男とともに、佐々木喜善らの協力のもと、大正12年に「岩手県上閉伊郡石器時代遺物発見地名表」を出版している。この中には、洞穴遺跡として、遠野市上郷町沓掛観音窟(観音穴)及び同市綾織町中澤山蝦夷岩(鵜崎蝦夷岩)遺跡が搭載され、沓掛観音窟遺跡を「洞：食屑・獣骨」、中澤山蝦夷岩遺跡を「窟：土器・石器」としている。釜石市では、三留孝が精力的に分布調査を実施し、平成３年に「釜石市埋蔵文化財分布調査報告書」を著した。その中で新に洞穴遺跡として雄岳洞タラ窟遺跡、枯松沢土倉洞穴遺跡及び大橋桜沢岩陰遺跡の３遺跡を掲げている。

遠野市沓掛地区には、厚い石灰岩層が分布し多くの洞穴が存在しており、新たな岩陰及び洞穴遺跡を確認した。洞穴の多くは、石灰岩層を貫く横谷沿いに発達する傾向にあり、馬場野遺跡、本地域周辺の小松洞穴、蔵王洞穴など県内の多くの洞穴の立地とも一致する。沓掛地区の洞穴の発達には、沖積段丘に対比できるものと洪積段丘に対比できる洞穴に分けられ、前者には沓掛観音穴遺跡、観音岩第２洞穴及び沓掛鋳銭穴遺跡、後者には母沢岩陰遺跡がある。これより高位に小規模な母沢第５洞穴遺跡が存在するが、洞穴自体は沖積世に形成されたものと推定される。馬場野遺跡は少なくとも沖積高位面以上に相当する段丘形成期に形成された洞穴と見られるが、県道工事の際、前洞部が破壊されている。残った洞穴には、岩石が詰め込まれ、道路法面モルタル吹き付けの内側に封じ込められている。枯松沢土倉洞穴遺跡及び雄岳タラ窟遺跡は、最上流部に存在し、現在も形成されている洞穴に立地する。観音岩第２洞穴は、大規模な石灰岩洞穴である。

東京国立博物館の所蔵品の中に釜石市甲子町天洞から出土したとする骨角器が存在することを三留孝が指摘している。今回の調査で天洞地区の聞き取り及び踏査をしたものの確認できなかったが、周辺の状況から岩陰遺跡が存在した可能性があり、骨角器は道路或いは鉄道工事の際に出土した可

能性が高く、遺跡は壊滅しているものと考えられる。

花崗岩地帯では、花崗岩特有のサイコロ状風化を基本とした風化形態から、角が取れた円状、楕円状及び板状の岩石が形成され、これが氷期後の岩塊流の転石として、また現位置に巨大な花崗岩が取り残され、風化流出、折り重なりなどにより空洞が形成される。特に最終氷期に周氷河現象を受けた北上高地の花崗岩地帯には、これに伴う空洞が出現し、そこには遺跡が営まれることがある。この例として遠野花崗岩体の真っ只中、山中に位置し、洞穴遺跡として登録されている鵜崎蝦夷岩遺跡を掲げることができる。本例に止まらず遠野花崗岩体、栗橋花崗岩体、氷上花崗岩体など北上高地の花崗岩地帯には、同様の巨岩が点在することは知られており、今後小規模な岩陰遺跡として認識されるものも存在すると思われる。

（8）下閉伊地区の概要

岩手県の沿岸中央部に位置する下閉伊地区は、北から田野畑村、岩泉町、田老町、宮古市、新里村、川井村、山田町の7市町村からなり、総面積が約 2,400㎢にもおよび、岩手県全体の面積の約15％を占める。

この地区は、北上山地の東側にあり、山間地は谷底の浸食が激しく地形は極めて険阻である。地質は、石灰岩が分布するほかには、粘板岩や砂岩、頁岩に加えてチャートなどがあり、海岸沿いには花崗岩の分布がみられる。この中で石灰岩が分布する所には洞穴が確認されており、先人が居住又は祭祀的な場所として利用している可能性が高い。今回の調査では、洞穴が確認されている田野畑村、岩泉町、川井村、山田町の4町村を対象に現地調査を実施したが、岩泉町のほかには洞穴・岩陰遺跡は確認できなかった。

岩泉町には、安家石灰岩と呼ばれる南北約50㎞、東西幅の最大が約4㎞にもおよぶ国内最大規模の石灰岩帯があり、その北端は九戸郡大野村まで達している。また、南北約10㎞、東西約1㎞の石灰岩帯やレンズ状の石灰岩帯がみられ、それらの石灰岩帯には透明度世界一の大地底湖を有する龍泉洞や、全長1万2千mを越える日本最長の洞穴、安家洞など、大小の洞穴が 111カ所存在する。

このうち今回の調査では、縦穴は規模やその立地条件からみて遺跡としての可能性が低いことから調査対象から外し、可能性が高い横穴を対象に調査を実施した。岩泉町における周知の洞穴・岩陰遺跡は、昭和62年から平成元年にかけて実施された、日本洞穴学研究所の洞穴遺跡パトロール事業によって、非石灰岩のものも含めて25カ所確認されていたが、今回の調査で新たに4カ所の洞穴遺跡が確認され、洞穴・岩陰遺跡の数は合わせて29カ所となった。

本格的な調査が実施されたのは瓢箪穴遺跡が最初で、昭和36年と37年に慶応大学の江坂輝弥氏によって始められた。調査では縄文時代の遺物のほかに弥生時代の遺物も発見され、断続的に洞穴を利用していたことが判明した。昭和41年には県立岩泉高等学校教諭の菊池強一氏によって発掘調査が実施され、縄文時代早期までの土器片のほかに骨角器等も層位的に発見された。その後固い石灰華に阻まれ、旧石器時代の地層までには至らなかった。平成7年に東北旧石器文化研究所と東北福祉大学考古学研究会を調査主体とした瓢箪穴遺跡調査団が結成され、旧石器時代の生活痕を探るべく発掘調査を実施した。調査初日から約4～5万年前のものとみられる斜軸尖頭器が発見され、日本最古の洞穴遺跡であることが判明した。その後調査は毎年ゴールデンウィークに実施され、平成11年までの調査で6枚の地層から遺物が出土しており、継続的に利用されていたことがわかった。また、洞奥から土壙も検出され、ますます人類化石発見の期待が高まっている。また、平成10年に同調査に伴い瓢箪穴遺跡の下のしんいち岩陰遺跡を調査したところ、旧石器時代の遺物や縄文時代、

弥生時代の遺物が発見された。

そのほかには、昭和43年に県立岩泉高等学校教諭の菊池強一氏によって龍泉洞新洞遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代草創期～早期の貴重な資料が得られている。また、昭和50年には岩手県教育委員会によって岩谷洞穴遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代後・晩期を中心とした遺物が発見され、その中でも貝殻などの装飾品は縄文時代の文化の高さを物語っている。

岩泉町安家地区では、安家石灰岩帯に形成された洞穴で遺跡として確認されたものは６カ所である。川口相良向かい洞穴遺跡、おなめ穴遺跡、銭吹穴鍛冶遺跡は既に知られている遺跡で、川口相良向かい洞穴遺跡、おなめ穴遺跡は川との比高が50m以上の所に開口しており、どちらも弥生時代の遺物が採集されている。銭吹穴鍛冶遺跡は贋金造りの跡とされており、縄文土器のほかに鉄滓や密鋳銭枝銭が採集されている。新規の遺跡としては松林洞穴Ⅰ遺跡、松林洞穴Ⅱ遺跡、桃の木洞遺跡があり、松林洞穴Ⅰ遺跡は洞穴の規模が小さい。松林洞穴Ⅱ遺跡は攪乱が著しい。桃の木洞遺跡は洞奥からの流出が認められ、残存状態は良好とはいえない。

岩泉地区では洞穴遺跡11カ所、岩陰遺跡６カ所が確認された。前述した瓢箪穴遺跡と龍泉洞新洞遺跡のほかによく知られているのが赤穴洞穴遺跡である。出土した土器は弥生時代の標準資料とされている。龍泉洞遺跡は整地されているため保存状態は良好とはいえない。穴岩洞穴遺跡は洞奥からの流出によって壊滅状態に近い。白土穴の口遺跡、穴の口上方穴遺跡は保存状態が良好である。瓢箪穴遺跡の北側にある三沢洞穴遺跡は盗掘により保存状態は良好といえない。申籠洞穴遺跡は保存状態が良好である。中倉洞穴遺跡と大穴遺跡は洞口から20m以上入った地点からも遺物が採集されている。岩陰遺跡は三沢岩陰遺跡、しんいち岩陰遺跡、横道遺跡、横道岩陰遺跡、女神岩陰遺跡、乙茂岩陰遺跡があり、三沢岩陰遺跡と横道遺跡は盗掘により保存状態は良好とはいえない。横道岩陰遺跡は土砂の堆積が厚く、掘り下げれば洞穴になる可能性がある。しんいち岩陰遺跡は前述したとおりである。女神岩陰遺跡は土器片のほかに鉄滓が採集されている。乙茂岩陰遺跡は急峻な場所に位置する。

そのほかの地区では、小本地区で洞穴遺跡が３カ所確認されている。中里大穴遺跡は洞口部が大きく、生活空間は十分にある。土器片のほかに海水性の巻貝が採集されている。中里洞穴Ⅰ遺跡は縄文土器が採集されている。中里洞穴Ⅱ遺跡は中里洞穴Ⅰ遺跡の真上に位置し、小規模の洞穴である。大川地区では非石灰岩帯で下医者待沢岩陰遺跡が確認されている。小川地区では前述した岩谷洞穴遺跡がレンズ状の石灰岩帯にある。そのほかに非石灰岩帯で見内川Ⅲ遺跡が岩陰遺跡として確認されている。

田野畑村では、岩泉町に近い石灰岩帯で１カ所の洞穴が確認されたが、遺跡としては確認されなかった。しかし、その規模等から人の出入りは可能であり、今後の調査によっては新たな洞穴遺跡としての可能性がある。川井村では、遠野市に近いレンズ状の石灰岩帯で洞穴１カ所が確認されたが、埋没が著しく洞内への立ち入りはできなかった。地元の人の話では以前に出入りができたとのことで、遺跡としての可能性は捨てきれない。山田町では、３カ所の洞穴が確認されており、いずれもレンズ状の石灰岩帯にある洞穴である。関口不動穴は河床から３mの比高しかないため可能性は低い。オソノエラ洞と穴乳洞穴は沢との比高が50m以上にもおよぶ険しい山腹にあり、今回の調査では確認されなかったが遺跡の可能性は高い。

以上簡単に説明したが、今回確認された洞穴・岩陰遺跡は石灰岩帯の遺跡が27カ所、非石灰岩帯が２カ所で、地質・地形などから見ると石灰岩帯のほうが圧倒的に洞穴や岩陰が多く存在しており、利用されやすい条件を兼ね備えている。また、非石灰岩帯では洞穴の数は少ないにしても、岩陰は

もっと存在していたものと思われ、石灰岩に比べると岩の崩落は多かったであろうことから、その数も少なくなったことが考えられる。今回の調査では、その規模や条件などから生活の場として適地と認められたところは、ほとんど遺跡として確認されている。ただ、川に近い所や洞穴内からの流出が認められる所では、水の影響があり使用されていないのが現状である。このような分布状況で、石灰岩帯にある遺跡は平地では確認できにくい骨や貝類などの遺物の発見が期待される。また、瓢箪穴遺跡の例で見ると、比較的規模の大きい洞穴は、その立地条件により旧石器時代の遺物が発見される可能性はあるが、旧石器時代の地層に達する前に落盤などの岩石が存在するものとみられ、今後の調査で大きな支障になるものと思われる。

今回の調査で遺跡としては確認されなかったが、洞穴の規模や立地条件から遺跡の可能性が捨てきれない洞穴が数カ所あり、今後の調査によっては新たな洞穴・岩陰遺跡が確認できる可能性は高い。また、今回踏査を行わなかった市町村においても、非石灰岩帯の中で洞穴或いは岩陰が存在する可能性が十分にあり、注意していく必要がある。

（9）九戸・二戸地区の概要

九戸・二戸地区は岩手県の北部に位置し、前者には久慈市、種市町、大野村、山形村、野田村、普代村、後者には二戸市、一戸町、浄法寺町、軽米町、九戸村が含まれる。両地区の面積は2,176.972㎢で岩手県の約14.2％を占めている。

洞穴は九戸地区の久慈市及び山形村に集中していて80ケ所以上が確認されている。二戸地区においては数ケ所しかみつかっていないことと、周知の洞穴遺跡がないことから今回の調査では九戸地区を重点的に行った。九戸地区には北部北上山地のほぼ中央に位置する安家石灰岩地帯があり、カルスト地形が発達していることから多くの石灰洞が分布しているが、その中には山形村の３ケ所の洞穴遺跡が確認されている。今回はこの３ケ所を含めて調査したが、新たな遺跡は見つけることはできなかった。もう一つ、内間木洞穴が遺跡として周知されているが、後述のように不明である。

本地区における洞穴遺跡の調査は、浄法寺町出身の故小田島禄郎氏によって大正12年に成谷洞穴と権の穴(下岩穴)の発掘調査に始まる。その後、考古学的な洞穴調査はしばらく行われることはなかった。平成元年度に山形村教育委員会が実施した村内遺跡詳細分布調査で、よしだれ岩(よしのしだれ)遺跡を調査した結果、遺物は採集できなかったが、聞き取り調査で過去に土器や石器が出土したことがあるとの情報を得て、遺跡として報告している。以上の３遺跡が周知の遺跡である。

成谷洞穴は、山形村霜畑に所在する。遠別岳(標高1,235m)と平庭岳(標高1,060m)を水源とする小河川が合流した遠別川が形成した沖積地とその背後の山との境にあり(標高約340m)、現在は畑の客土によって入口が塞がれてしまっている。山形村遺跡分布調査報告書３(1992：山形村教育委員会)によると「現在出土遺物の行方は不明だが、縄文時代前期の土器片や奈良時代の土師器片と共にツキノワグマ・ニホンザル・イノシシなどの動物遺骸が発見されている」、「弥生土器が発見されている」とある。

権の穴は、山形村小国字内間木に所在する。成谷洞穴から直線距離にして約8.5㎞南東、遠島山(標高1,263m)を水源とする小河川が形成した長さ約600m、幅約250m程の谷底平野と山地との境に開口している(標高約470m)。谷底平野には、縄文時代早期・晩期、奈良時代の集落跡内間木Ⅱ遺跡、奈良時代の集落跡内間木Ⅲ遺跡の２遺跡があるが、権の穴周辺からは遺跡は確認されていない。今回の調査では落盤が厚く遺物を採集することはできなかったが、地元の方の所有している資料には、縄文時代後期、晩期、弥生時代後期、奈良時代の土器片が含まれていた。

内間木集落のある谷底平野の深奥部、権の穴より南(上流)に約500m程いったところの絶壁の基部に開口している内間木洞(上岩穴)は山形村遺跡分布調査報告書3によると小田島氏が調査した遺跡で、縄文時代の遺跡として古くから知られていたと報告されている。しかし、地元の複数の方から調査したのは権の穴であるとの話を聞くことができたため、氏が調査したのは権の穴で間違いないようである。内間木洞の入口は現在客土により平坦に整地されており、遺物を採集することはできなかった。また、洞内に入り約100m 程奥まで遺物の採集を試みたが1片も採集することはできなかった。

よしだれ岩遺跡(よしのしだれ)は、北上山地の北端部の山中を流れる戸呂町川の右岸、川から傾斜45度以上の急斜面を約40m程登ったところ(標高約180m)に位置している。洞内より弥生時代後期の土器2片、土師器と思われる土器1片を採集することができた。

成谷洞穴と権の穴は北上山地の北端の山から放射状に伸びる小河川が形成した谷底平野と山との境、つまり山地の基部にあり、平坦面から全く山を登ることなく洞内に入れる事で共通している。一方、よしだれ岩遺跡は山地(急斜面)にあり立地条件がかなり異なっていた。

遺跡表凡例

33頁以下の表の記載内容は、以下のとおりである。なお、第1表を索引として、第1図～第8図で大体の位置を確認し、個々の遺跡の表で、遺跡の内容と詳細の位置を確認していただければ幸いである。また、次のように機関名を省略する場合がある。教育委員会→教委。博物館→博。高等学校→高校。なお、一部写真のない遺跡があることをお断わりしておく。

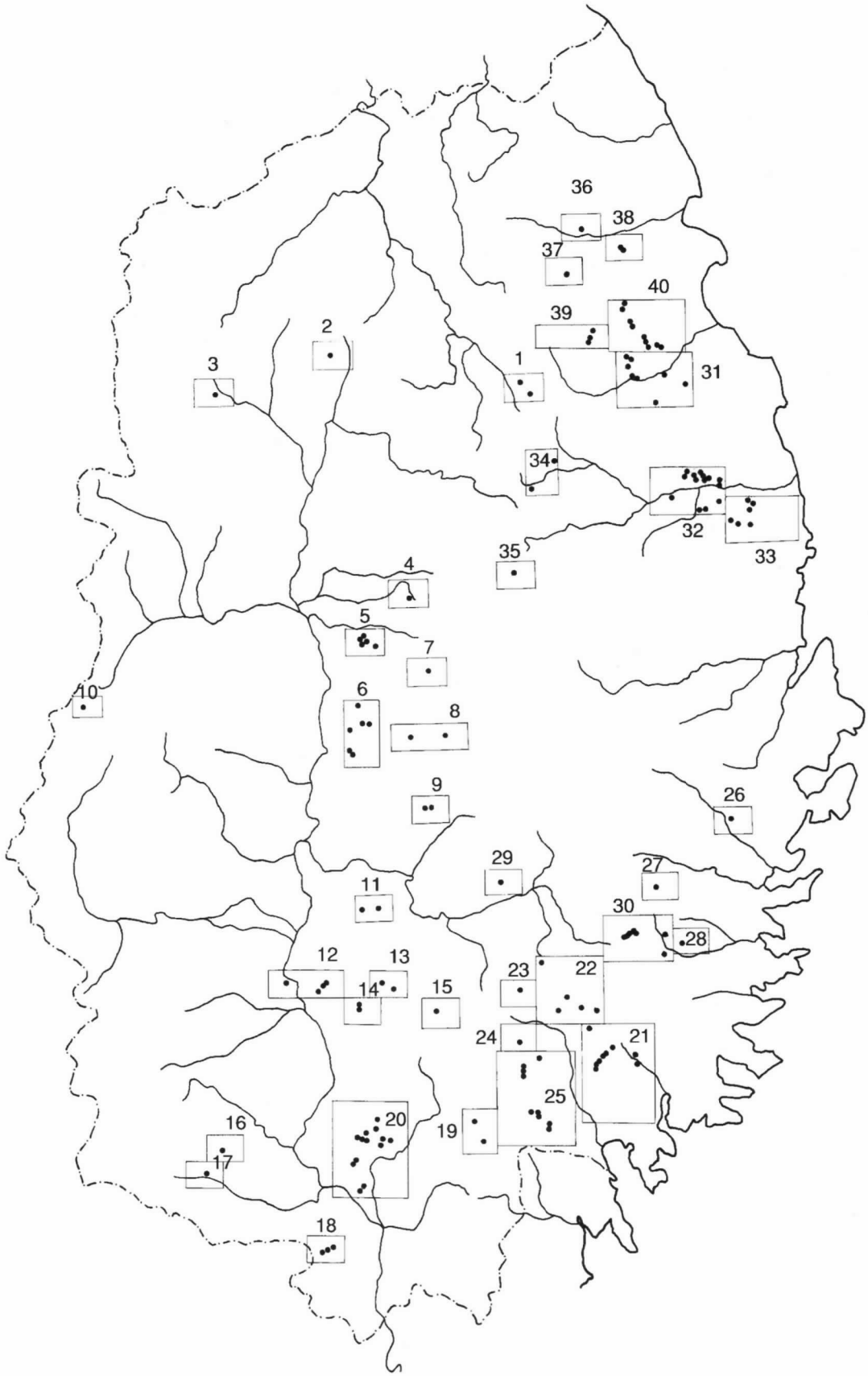
No.　　；岩手県内洞穴遺跡の通し番号。第1表の番号と同じ。
遺　跡　名；岩手県遺跡基本台帳に登録されている遺跡名。今後変更する予定の遺跡は変更後の名称。(　) 内はよみがな。
遺跡コード；岩手県遺跡基本台帳に登録されているコード名。〔　〕内に記載。
別　　称；遺跡名としたもの以外の呼び方。(　) 内はよみがな。
所　在　地；遺跡の所在する市町村字名地番等。(　) 内は詳細図N0.
図　　幅；国土地理院発行1／25000地形図番号。
洞穴の成因；洞穴の岩帯。石灰岩、凝灰岩等。
標高・比高差；海抜高度と隣接する河川との比高差。
立地・目印；立地は、河川、沢との関連を中心に記載。
時　　期；(　) 内は詳細時期。
残存状況；良好、一部破壊、壊滅に区分して記載。(　) 内は詳細。
調　査　歴；遺跡調査を中心とした過去の主な調査歴を記載。調査年－調査者。
規　　模；洞口の幅、奥行、高さで記載。単位m。
遺　　構；過去の調査において確認された遺構を記載。(　) 内は記載されている文献←調査年。
遺　　物；過去の調査及び今回の調査で確認された主な遺物を記載。(　) 内は詳細。〔　〕内は資料保管場所。
資料保管場所；出土資料が保管されている機関等。B、C表では、遺物の欄に記載。
文　　献；関連文献を、巻末の文献一覧表の番号で記載。
備　　考；他の欄に入れられなかったことで、特筆すべき事項を記載。

第１表　岩手県内洞穴遺跡一覧表（１）

No.	遺　跡　名	地区	市町村	成　因	時代等（遺跡、壊滅か否か）	新発見の有無	位置図	本書での記載
1	ざる穴	岩手	葛巻町	石灰岩	縄文	周知	第２図１	p.50
2	明神穴	岩手	葛巻町	石灰岩	縄文（遺跡の可能性少ない）	周知	第２図１	p.50、7
3	長嶺岩陰	岩手	松尾村	石英質安山岩？	縄文（前･晩）	新規	第２図３	p.50
4	鬼ヶ瀬山北第１洞穴	盛岡	盛岡市	凝灰岩質変成岩	縄文（後）	周知	第２図５	p.51
5	鬼ヶ瀬山南第２洞	盛岡	盛岡市	不明	不詳	新規	第２図５	p.51
6	手代木沢岩陰	盛岡	盛岡市	？	縄文	周知	第３図７	－
7	三ッ石岩穴	紫波	紫波町	石灰岩	縄文（後?、晩？）、弥生？	新規	第２図６	p.51
8	舟久保洞窟	紫波	紫波町	石灰岩	縄文（後、晩）、弥生（後）	県史跡	第２図６	p.32、7～8
9	きつね穴	紫波	紫波町	石灰岩	縄文（後）、弥生？	新規	第２図６	p.52
10	たぬき穴	紫波	紫波町	石灰岩	縄文（後？）	新規	第２図６	p.52
11	片山洞穴	紫波	紫波町	石灰岩	縄文	周知	第２図６	p.52
12	弥兵エ穴	稗貫	大迫町	石灰岩	縄文（前、後）、奈良、平安	周知	第３図９	p.53
13	上の岩洞穴	稗貫	大迫町	石灰岩	縄文、弥生	新規	第３図９	p.53、9
14	アバクチ洞穴	稗貫	大迫町	石灰岩	縄文（草創、前～後）、弥生	周知	第３図８	p.33、8～9
15	風穴洞穴	稗貫	大迫町	石灰岩	縄文（後、晩）	周知	第３図８	p.34、8～9
16	ヤス穴	和賀	沢内村	溶結凝灰岩	近代以降	新規	第３図10	p.53
17	東浦洞穴	江刺	金ヶ崎町	？	不詳	周知	第３図12	－
18	赤部洞穴	江刺	江刺市	安山岩	縄文	周知	第３図11	p.54、10
19	月山堂洞穴	江刺	江刺市	安山岩	縄文	周知	第３図11	p.54
20	根岸洞穴第１	江刺	江刺市	安山岩	不詳	周知	第３図12	p.54、10
21	根岸洞穴第２	江刺	江刺市	安山岩	縄文	周知	第３図12	p.55、10
22	根岸洞穴第４	江刺	江刺市	安山岩	不詳	周知	第３図12	p.55、10
23	馬馳洞穴	江刺	江刺市	不明	不詳	周知	第４図13	p.55
24	阿茶山洞窟	江刺	江刺市	花崗岩	不詳	周知	第４図13	p.56
25	毘沙門洞穴	江刺	江刺市	火山礫	不詳	周知	第４図14	p.56
26	居内洞穴	江刺	江刺市	不明	（採石により破壊）	周知	第４図14	p.56
27	不動窟	両磐	一関市	浮石流凝灰岩	縄文	周知	第４図17	p.57、12
28	箕穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文	周知	第５図20	p.45、11
29	姫穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文	周知	第５図20	p.57
30	川底洞穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文	周知	第５図20	p.45
31	川底下の穴	両磐	東山町	石灰岩	不詳	新規	第５図20	p.57
32	川底第２洞穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文（晩）	新規	第５図20	p.46、11
33	高金の穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文？	新規	第５図20	p.58
34	熊穴洞穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文（晩）、平安	周知	第５図20	p.35、11
35	子安観音穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文	周知	第５図20	p.58
36	東本町の穴	両磐	東山町	石灰岩	不詳	新規	第５図20	p.58
37	羽根堀の穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文	新規	第５図20	p.59
38	バクチ穴	両磐	東山町	石灰岩	縄文（晩）	周知	第５図20	p.46
39	松井洞穴	両磐	大東町	石灰岩	不詳	新規	第４図19	p.59
40	山口洞穴	両磐	大東町	石灰岩	縄文	周知？	第４図19	p.47、11
41	布佐洞穴	両磐	川崎村	石灰岩	縄文（後）、弥生	周知	第５図20	p.36、11
42	猪穴	両磐	川崎村	石灰岩	不詳（布佐洞穴と同じ？）	周知？	第５図20	p.59
43	穴ノ沢第１	両磐	花泉町	凝灰質砂岩	（周知だが、3つの洞穴があり、詳細不明）	周知	第４図18	p.60、12
44	ホホユワ左洞	気仙	大船渡市	石灰岩	縄文	新規	第６図21	p.60
45	行人沢第1洞	気仙	大船渡市	石灰岩	縄文（晩）	周知	第６図21	p.60
46	行人沢第２洞	気仙	大船渡市	石灰岩	縄文（後）	周知	第６図21	p.61
47	関谷洞穴	気仙	大船渡市	石灰岩	縄文（早～晩）、弥生、奈良、平安	県史跡	第６図21	p.37
48	小松洞穴	気仙	住田町	石灰岩	縄文（早～晩）、弥生、平安、近世	周知	第７図22	p.38
49	蔵王洞穴	気仙	住田町	石灰岩	縄文（早･後･晩）／別称蛇王洞窟	周知	第７図22	p.39
50	玉泉寺の穴	気仙	住田町	石灰岩	縄文（後･晩）	周知	第７図22	p.47
51	管岩洞穴	気仙	住田町	石灰岩	縄文（後･晩）	周知	第７図22	p.61
52	奥新切こうもり穴	気仙	住田町	石灰岩	縄文（晩）	新規	第７図22	p.61
53	湧清水洞穴	気仙	住田町	石灰岩	縄文（早･前･後）、弥生、中世	周知	第６図21	p.40
54	鬼丸洞穴	気仙	住田町	石灰岩	縄文（後）	周知	第８図25	p.62
55	折壁Ⅱ	気仙	住田町	石灰岩	縄文	新規	第７図24	p.62
56	宝龍洞窟	気仙	陸前高田市	石灰岩	縄文（後･晩？）、弥生	周知	第８図25	p.62
57	宝龍第一岩陰	気仙	陸前高田市	石灰岩	不詳	周知	第８図25	p.63
58	宝龍第二岩陰	気仙	陸前高田市	石灰岩	不詳	周知	第８図25	p.63
59	木戸口蝙蝠穴	気仙	陸前高田市	石灰岩	縄文（前～晩）、弥生	周知	第８図25	p.48
60	座頭穴	気仙	陸前高田市	石灰岩	不詳	周知	第８図25	p.63
61	赤魚洞窟	気仙	陸前高田市	石灰岩	不詳	周知	第８図25	p.64
62	仙婆巌岩陰	気仙	陸前高田市	不明	不詳	周知	第８図25	－
63	女神洞窟	気仙	陸前高田市	石灰岩	縄文（早～晩）、弥生、平安	周知	第８図25	p.41、13
64	馬場野	上閉伊	大槌町	石灰岩	縄文	周知	第９図26	p.64、14
65	雄岳洞タラ窟	上閉伊	釜石市	石灰岩	縄文	周知	第９図27	p.64
66	大橋桜沢岩陰	上閉伊	釜石市	粘板岩	縄文（中）	周知	第９図30	p.65
67	枯松沢土倉洞穴	上閉伊	釜石市	石灰岩	不明（土器破片）	周知	第９図30	p.65
68	洞泉弁天沢	上閉伊	釜石市	石灰岩	縄文	周知	第９図28	－
69	鵜崎蝦夷岩	上閉伊	遠野市	石灰岩	（今回発見できず）	周知	第９図29	－
70	沓掛銭鋳穴	上閉伊	遠野市	石灰岩	不詳	周知	第９図30	p.65

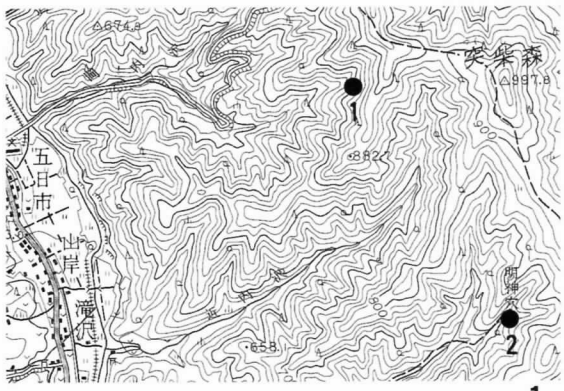
第２表　岩手県内洞穴遺跡一覧表（２）

No.	遺　跡　名	地区	市町村	成　因	時代等（遺跡、壊滅か否か）	新発見の有無	位置図	本書での記載
71	沓掛観音穴	上閉伊	遠野市	石灰岩	不詳	周知	第９図30	p.66
72	松林洞穴Ⅰ	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文（早）	新規	第10図31	p.66
73	松林洞穴Ⅱ	下閉伊	岩泉町	石灰岩	不詳	新規	第10図31	p.66
74	銭吹穴鍛冶	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文、近世	新規	第10図31	p.67
75	桃の木洞	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文	新規	第10図31	p.67
76	川口相良向かい洞穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文（中･晩）、弥生	周知	第10図31	p.67
77	おなめ穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	弥生	周知	第10図31	p.68
78	龍泉洞	下閉伊	岩泉町	石灰岩	奈良、平安	周知	第10図32	p.68
79	龍泉洞新洞	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文（草創・早）	周知	第10図32	p.42
80	横道	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文（前･中･晩）	周知	第10図32	p.68
81	横道岩陰	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文	周知	第10図32	p.69
82	三沢岩陰	下閉伊	岩泉町	石灰岩	弥生	周知	第10図32	p.69
83	三沢洞穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	弥生	周知	第10図32	p.69
84	しんいち岩陰	下閉伊	岩泉町	石灰岩	旧石器、弥生	新規	第10図32	p.70
85	瓢箪穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	旧石器、縄文（草創･早･晩）、弥生	周知	第10図32	p.43､14～15
86	赤穴洞穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文･弥生	周知	第10図32	p.70
87	女神岩陰	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文、弥生	周知	第10図32	p.48
88	白土穴の口	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文（中･晩）	周知	第10図32	p.70
89	穴の口上方穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文	周知	第10図32	p.71
90	穴岩洞穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	弥生	周知	第10図32	p.71
91	乙茂岩陰	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文	周知	第10図32	p.71
92	大穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	弥生	新規	第11図33	p.72
93	中里洞穴Ⅰ	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文	周知	第11図33	p.72
94	中里洞穴Ⅱ	下閉伊	岩泉町	石灰岩	不詳	周知	第11図33	p.72
95	中里大穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文（前）、弥生	周知	第11図33	p.49
96	中倉洞穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文（前）	周知	第11図33	p.49
97	申籠洞穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文	周知	第11図33	p.73
98	見内川Ⅲ	下閉伊	岩泉町	砂岩	縄文（前･晩）	周知	第11図34	p.73
99	岩谷洞穴	下閉伊	岩泉町	石灰岩	縄文（前～晩）、近世	周知	第11図34	p.44､第３章
100	下医者待沢岩陰	下閉伊	岩泉町	粘板岩	縄文	周知	第11図35	p.73
101	攀枝垂岩	九戸	山形村	石灰岩	弥生	周知	第11図36	p.74
102	成谷洞穴	九戸	山形村	石灰岩	弥生	周知	第12図37	p.74、16
103	権の穴	九戸	山形村	石灰岩	縄文（後･晩）、弥生、奈良	新規	第12図39	p.74、16
104	内間木洞穴	九戸	山形村	石灰岩	縄文	周知	第12図39	－
1001	山辺内洞穴	岩手	岩手町	水	（遺跡でない可能性あり）		第２図２	－
1002	ぱくち穴	盛岡	盛岡市		（遺跡の可能性あり）		第２図４	－
1003	鬼ヶ瀬山北第２洞穴	盛岡	盛岡市	変成岩	不明（遺跡である可能性が高い）		第２図５	－
1004	鬼ヶ瀬山西洞	盛岡	盛岡市		不明（遺跡である可能性が高い）		第２図５	－
1005	鬼ヶ瀬山南第1洞	盛岡	盛岡市		不明（遺跡である可能性が高い）		第２図６	－
1006	無名穴２	紫波	紫波町	石灰岩	（遺跡ではないようである）		第２図６	－
1007	口沢洞穴	江刺	江刺市	石灰岩	（遺跡とは確認できなかった）		第４図15	文献39
1008	霧山洞穴	江刺	衣川村		（遺跡とは確認できなかった）		第４図16	文献69
1009	穴ノ沢第２	両磐	花泉町	凝灰質砂岩	（周知だが、3つの洞穴があり、不明）	周知？	第４図18	－
1010	穴ノ沢第３	両磐	花泉町	凝灰質砂岩	（周知だが、3つの洞穴があり、不明）	周知？	第４図18	－
1011	膳棚洞穴	気仙	大船渡市	石灰岩	（遺跡とは確認できなかった）		第６図21	－
1012	ホホユワ右洞	気仙	大船渡市	石灰岩	（遺跡とは確認できなかった）		第６図21	－
1013	立ちきり洞	気仙	大船渡市		（遺跡とは確認できなかった）		第６図21	－
1014	沢穴	気仙	大船渡市		（遺跡とは確認できなかった）		第６図21	－
1015	川内洞	気仙	大船渡市		（中は調査できなかった）		第６図21	－
1016	奥火の土熊の穴	気仙	住田町	石灰岩	（遺跡の可能性高い）		第７図23	－
1017	母沢岩陰	上閉伊	遠野市	石灰岩	（遺跡とは確認できなかった）		第９図30	－
1018	母沢第5洞穴	上閉伊	遠野市	石灰岩	不明（遺跡の可能性あり）		第９図30	－
1019	観音岩第2洞穴	上閉伊	遠野市	石灰岩	不明		第９図30	－
1020	氷渡の水穴	下閉伊	岩泉町		（遺跡ではないようである）		第10図31	－
1021	かさどり穴	下閉伊	岩泉町		（遺跡ではないようである）		第10図31	－
1022	熊の穴Ｎｏ．１	九戸	久慈市		（遺跡とは確認できなかった）		第12図38	－
1023	熊の穴Ｎｏ．２	九戸	久慈市		（遺跡とは確認できなかった）		第12図38	－
1024	尻跳洞	九戸	久慈市		（工事により消滅）		－	－
1025	サンパチ穴	九戸	久慈市		（工事により消滅）		－	－
1026	くますけ穴	九戸	久慈市		（工事により消滅）		－	－
1027	おっかない沢の穴	九戸	久慈市		（住環境には不適）		第12図40	－
1028	川向いの穴	九戸	久慈市		（住環境には不適）		第12図40	－
1029	山根洞	九戸	久慈市		（遺跡とは確認できなかった）		第12図40	－
1030	岩井窟	九戸	久慈市		（遺跡とは確認できなかった）		第12図40	－
1031	蝙蝠穴	九戸	久慈市		（遺跡とは確認できなかった）		第12図40	－
1032	上戸鎮洞	九戸	久慈市		（遺跡とは思われない）		第12図40	－
1033	ゴミ穴	九戸	久慈市		（遺跡とは思われない）		第12図40	－
1034	水穴Ｎｏ．１	九戸	久慈市		（遺跡とは思われない）		第12図40	－
1035	水穴Ｎｏ．２	九戸	久慈市		（遺跡とは思われない）		第12図40	－
1036	（名称不明）	九戸	山形村		（遺跡と確認できず）		第12図39	－

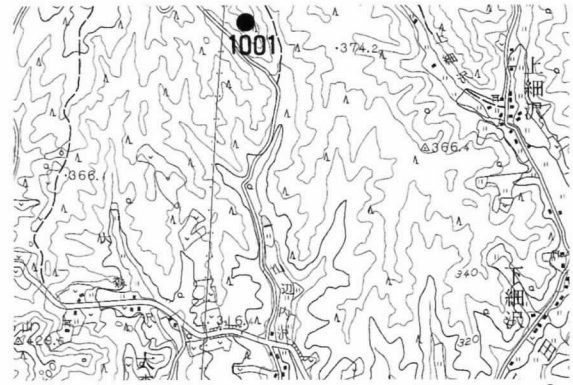


第１図　　岩手県内洞穴遺跡分布図

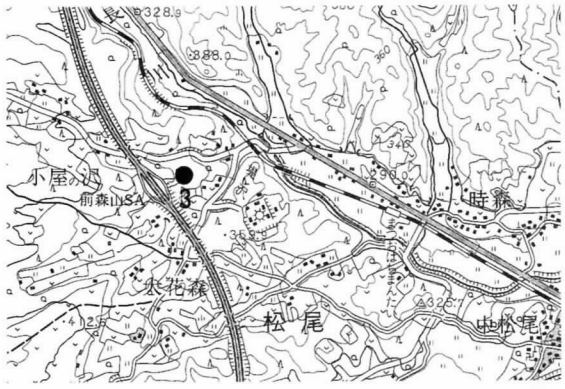
（番号は第２図～第12図に対応）



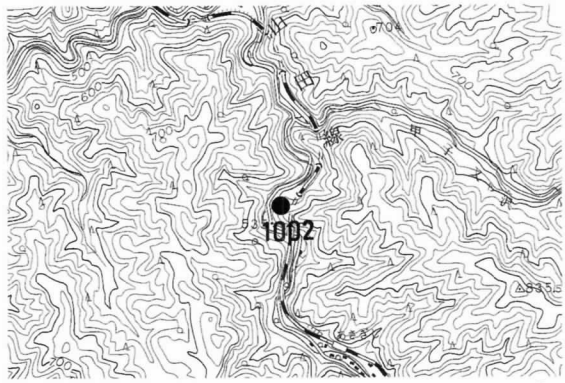
1



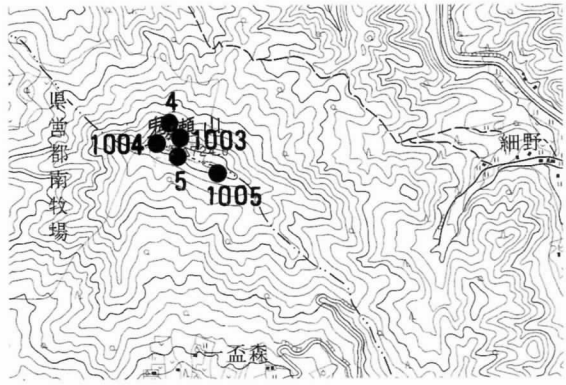
2



3



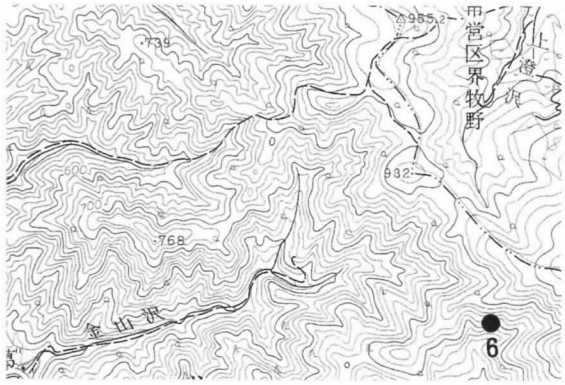
4



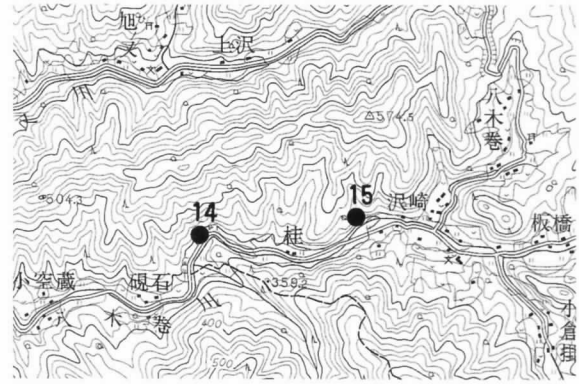
5

6

第２図　　岩手県内洞穴遺跡位置図１

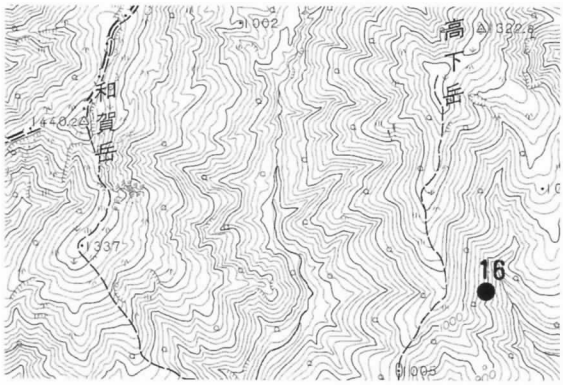


7



8

9



10

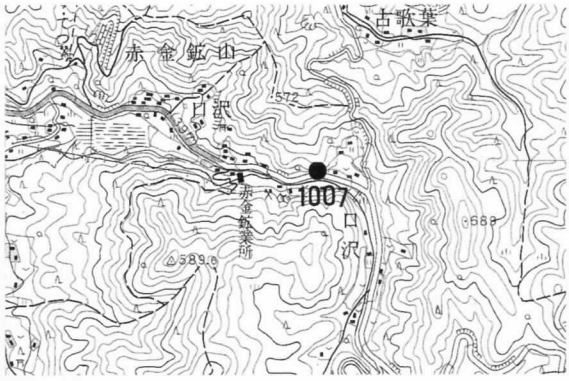
11

12

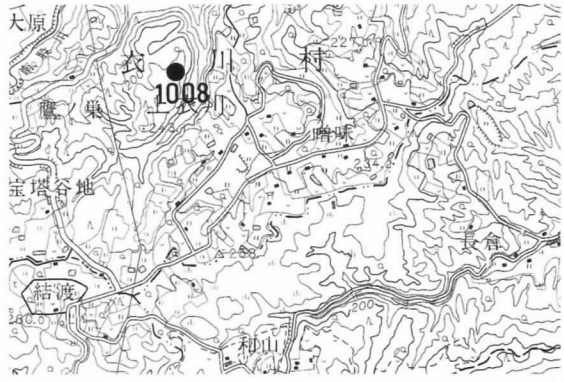
第3図　岩手県内洞穴遺跡位置図2

13

14

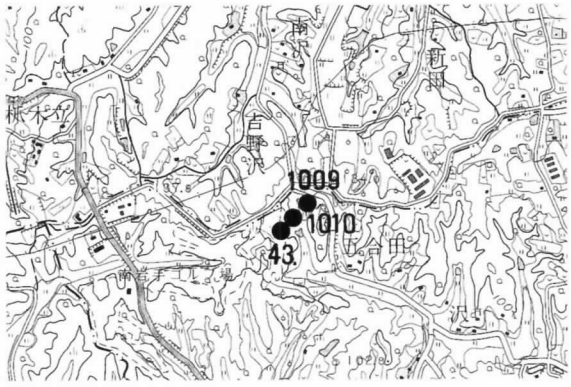


15



16

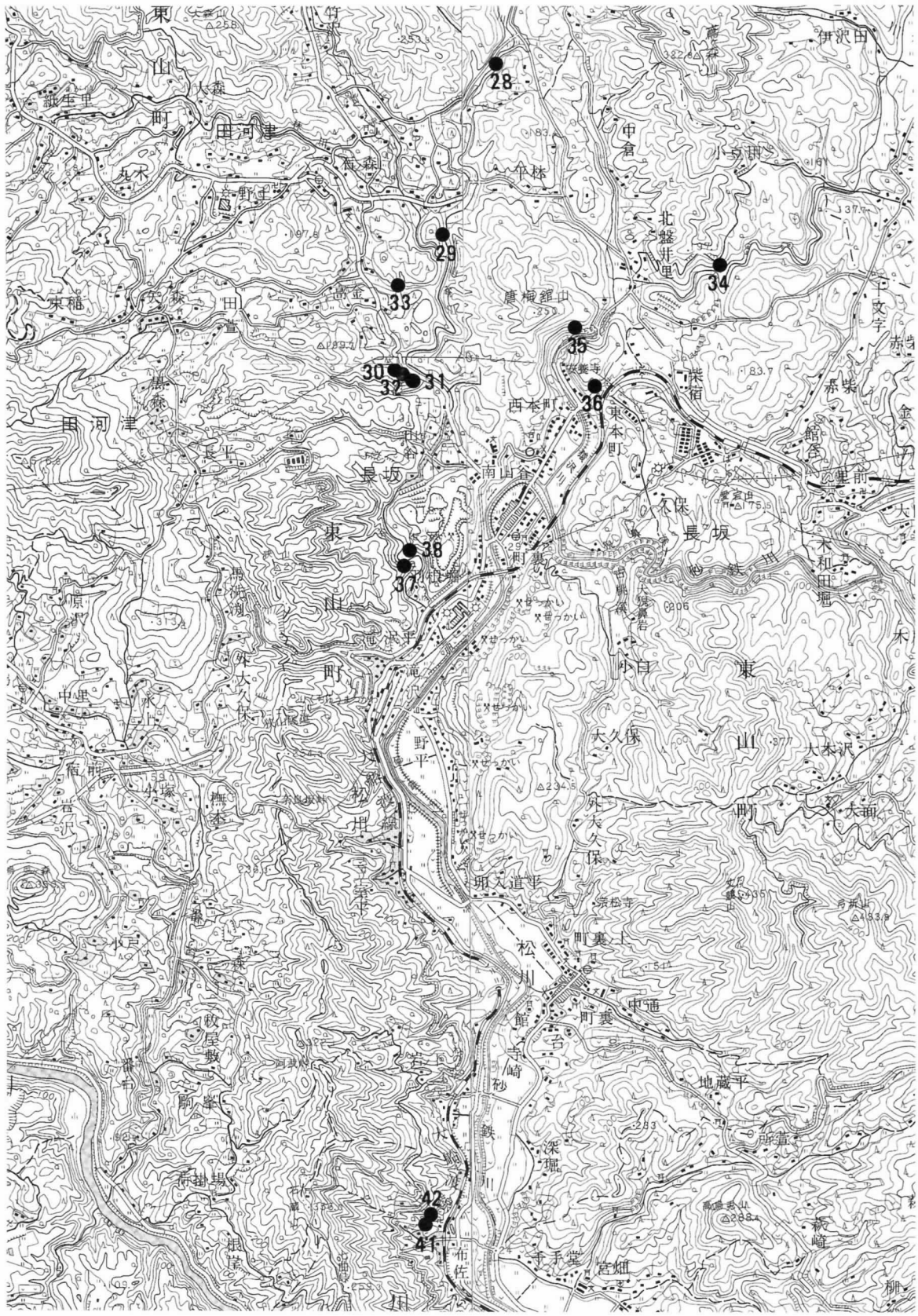
17



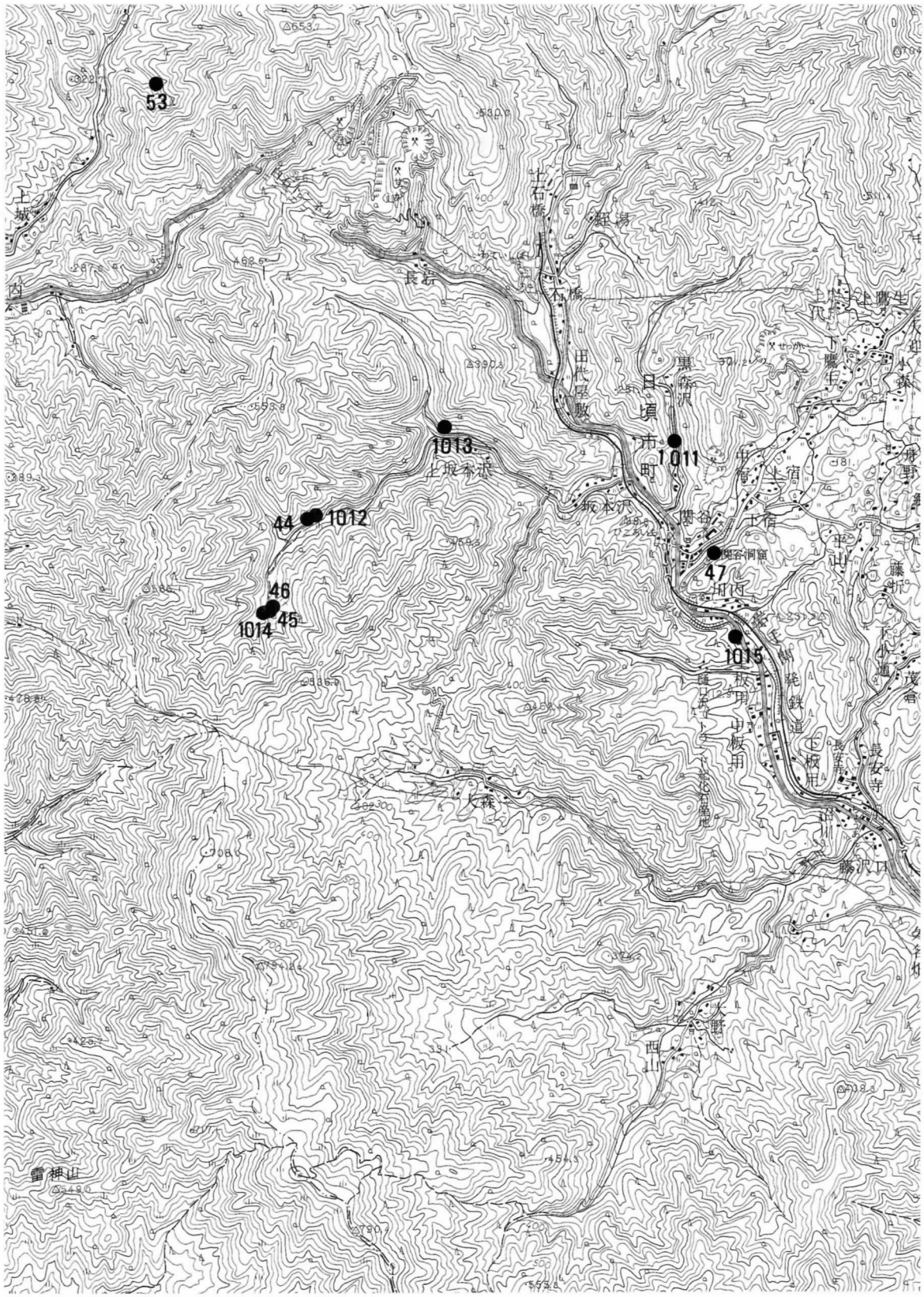
18

19

第４図　　岩手県内洞穴遺跡位置図３

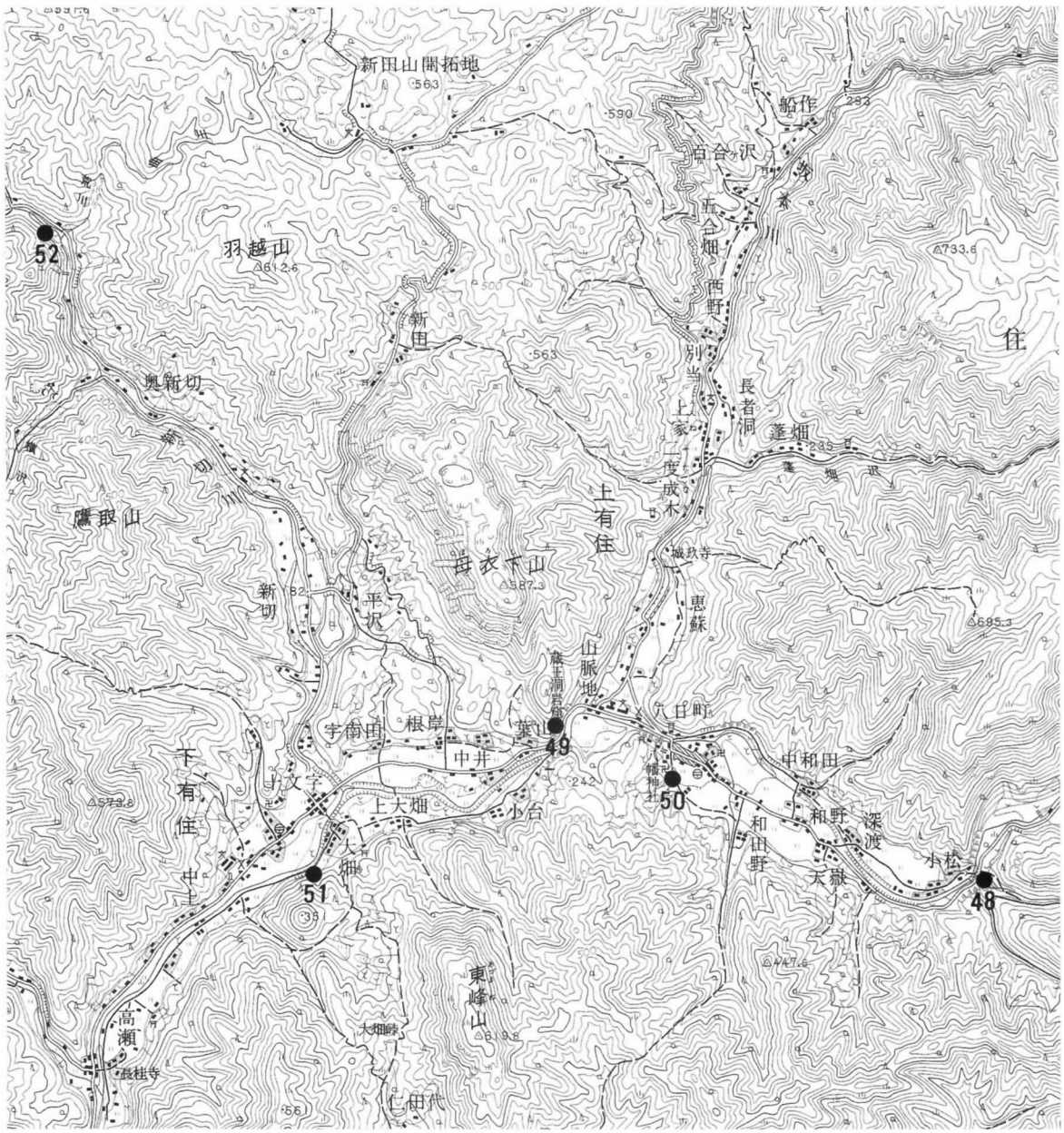


第５図　　岩手県内洞穴遺跡位置図４

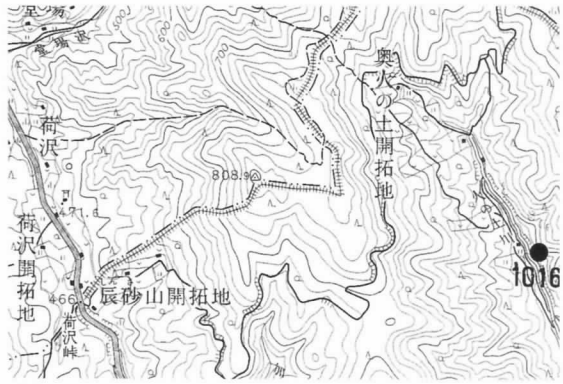


21

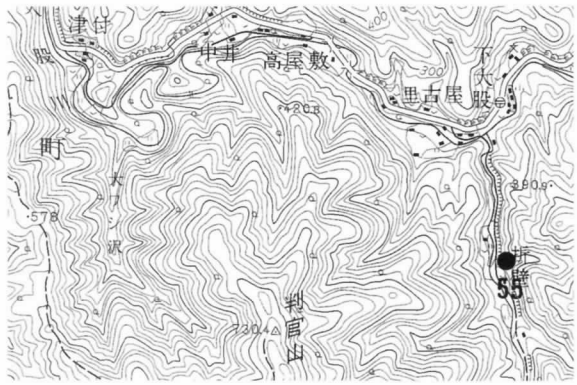
第６図　　岩手県内洞穴遺跡位置図５



22

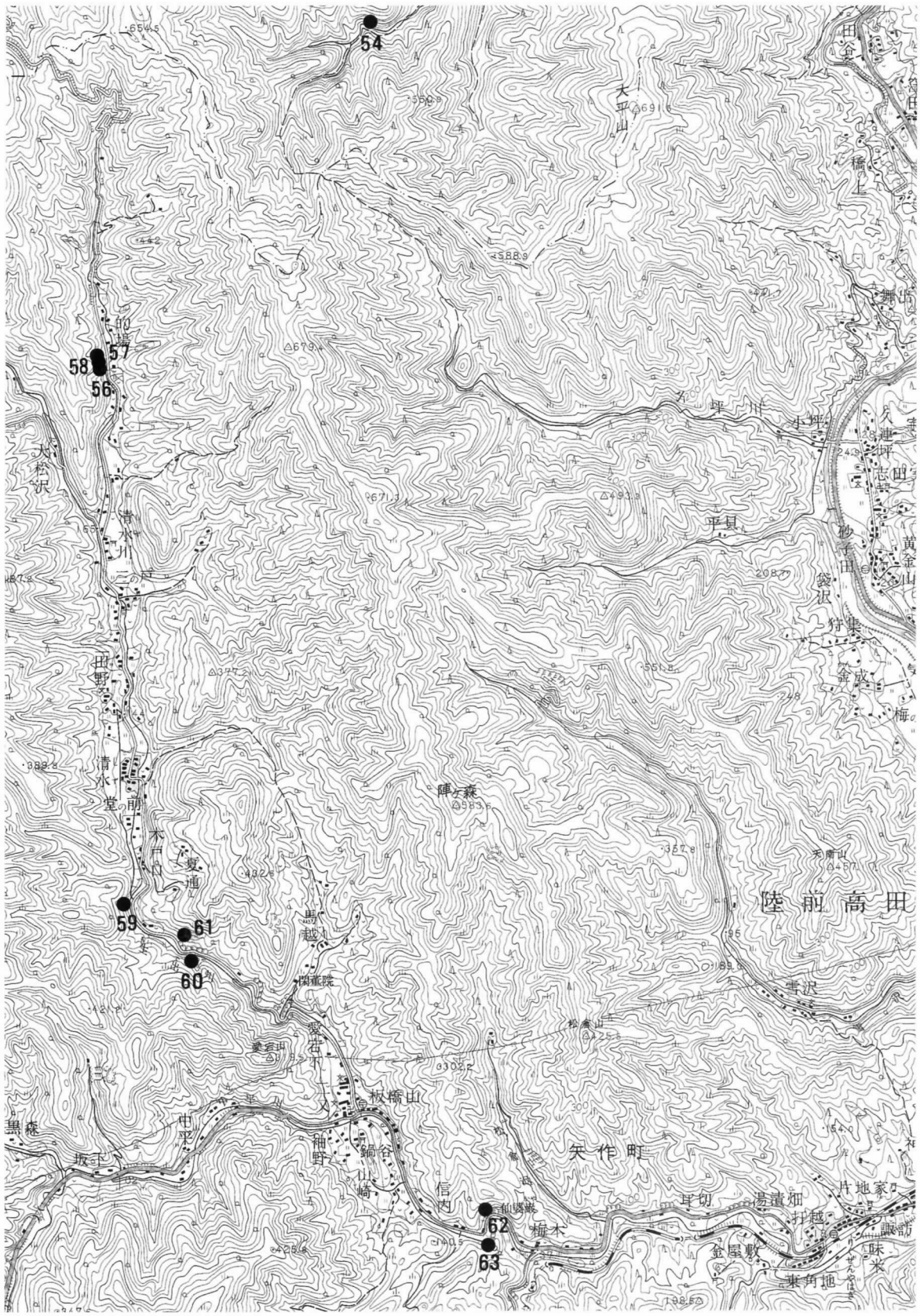


23



24

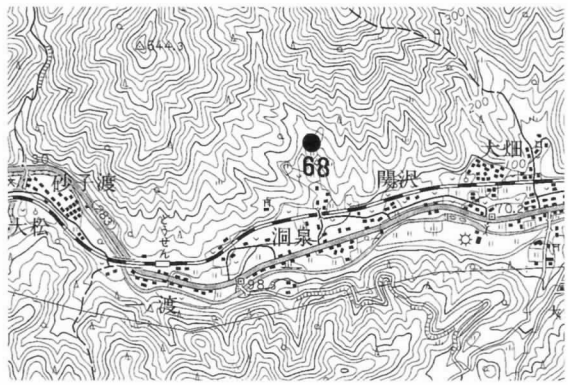
第７図　　岩手県内洞穴遺跡位置図６



第8図　　岩手県内洞穴遺跡位置図7

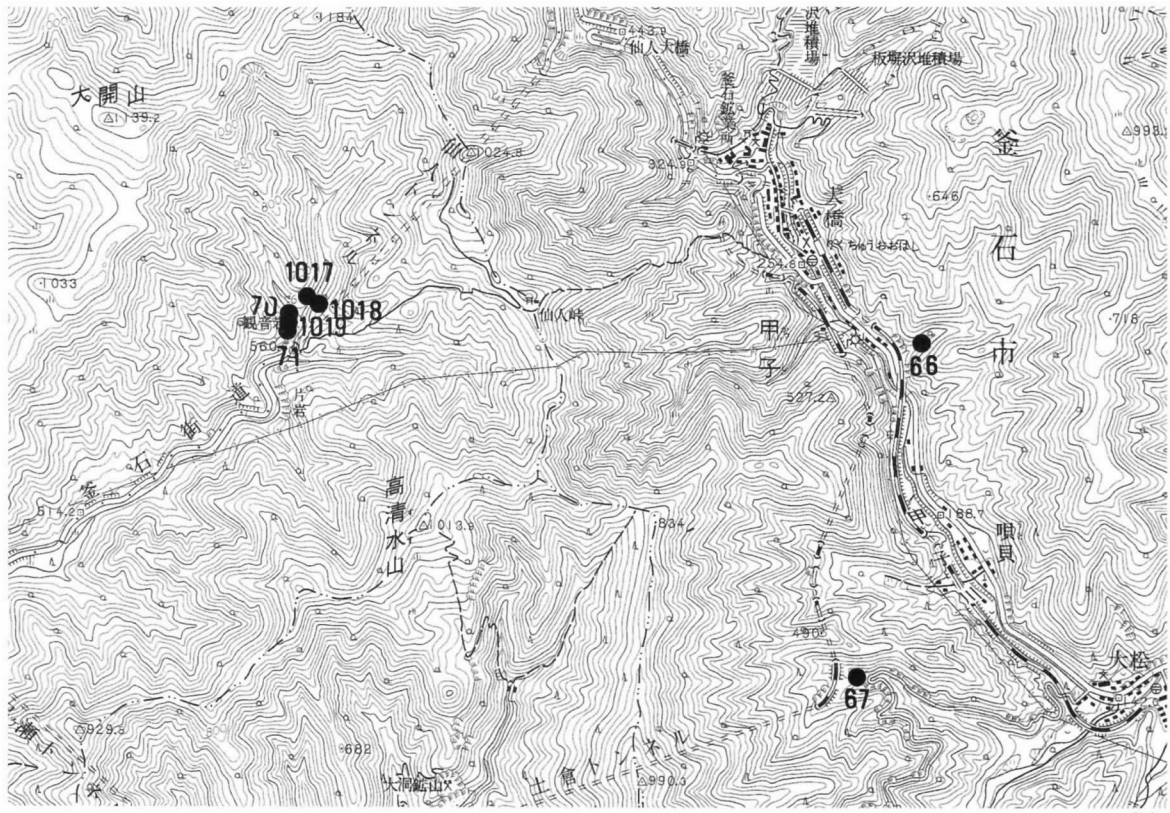
26

27



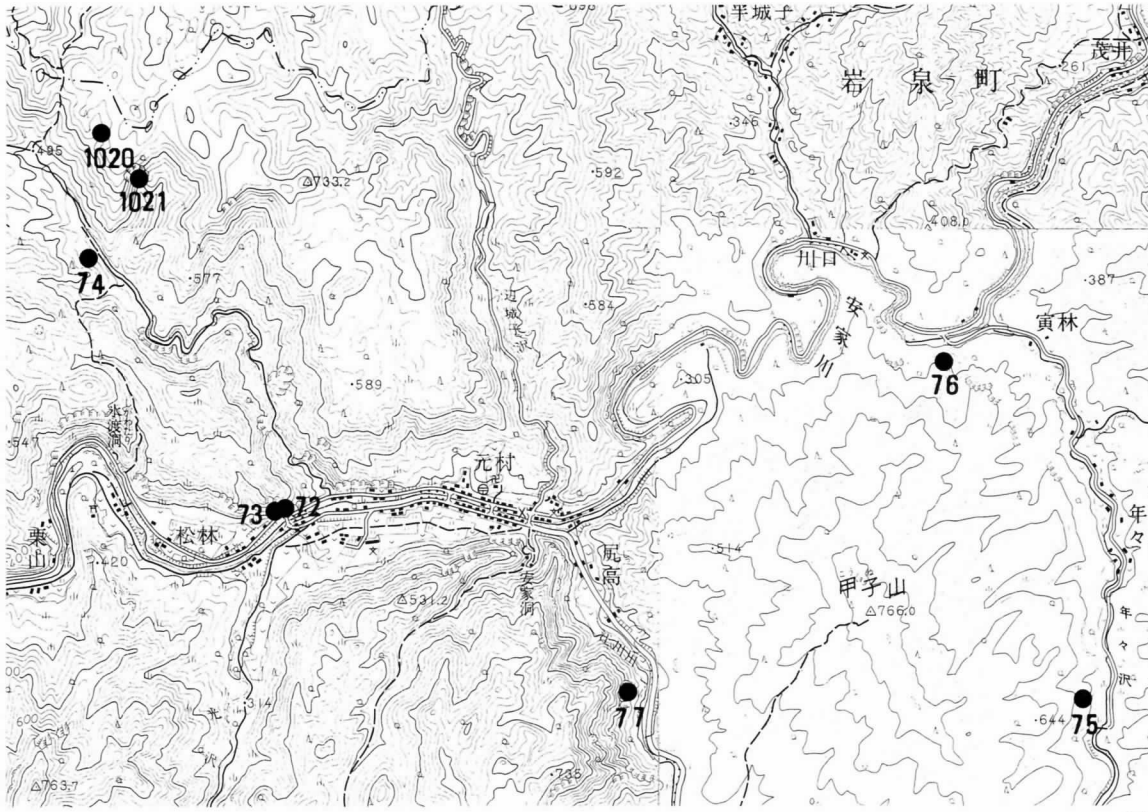
28

29

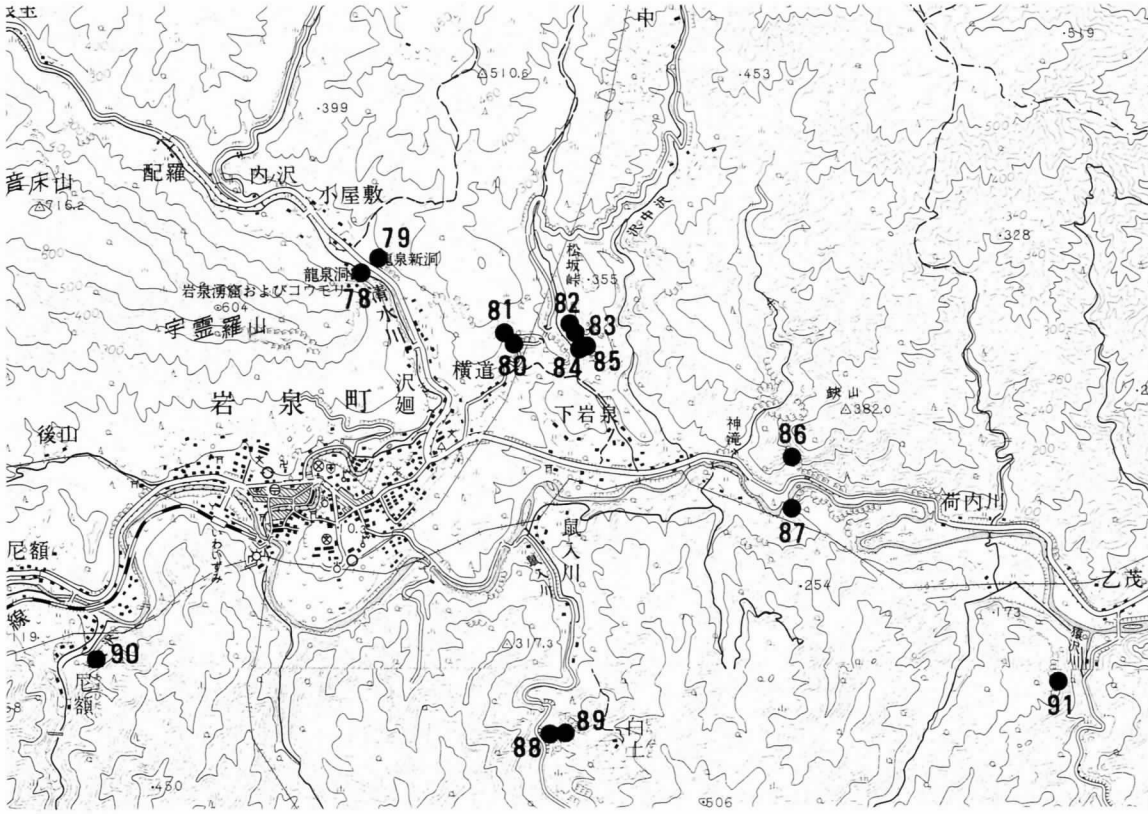


30

第９図　　岩手県内洞穴遺跡位置図８

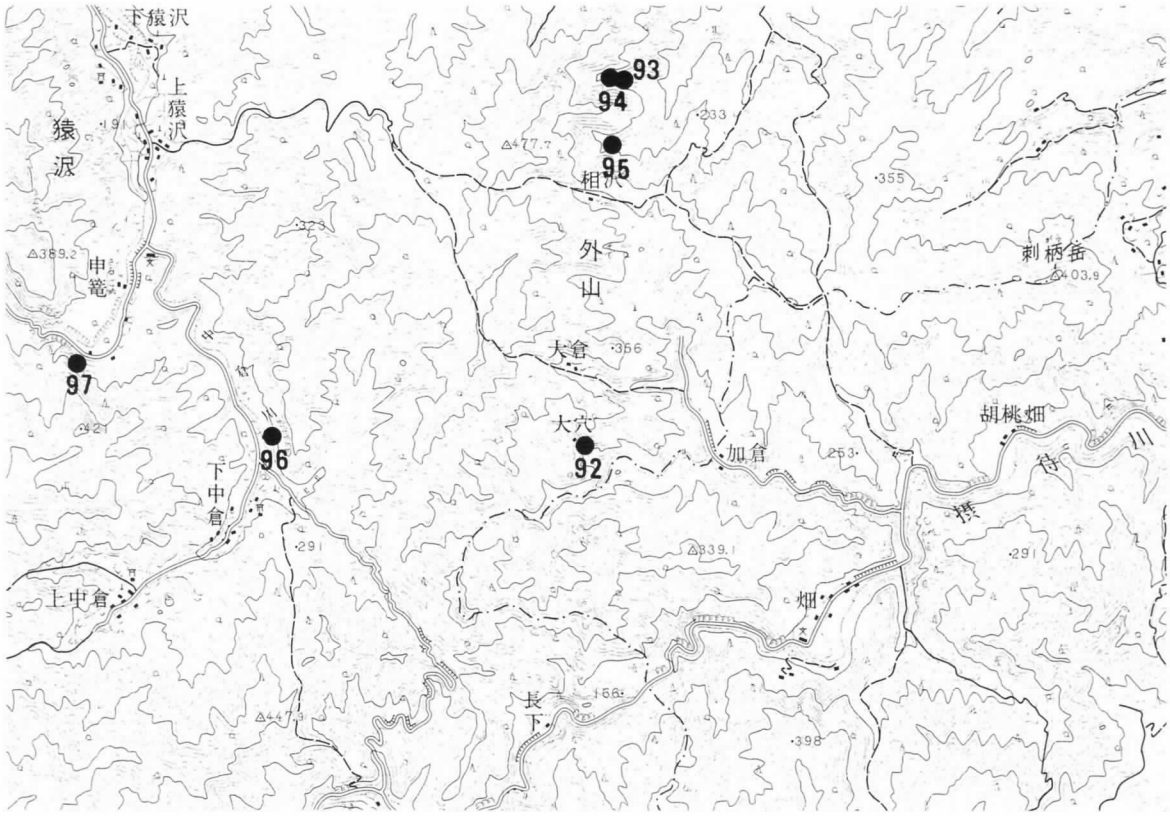


31

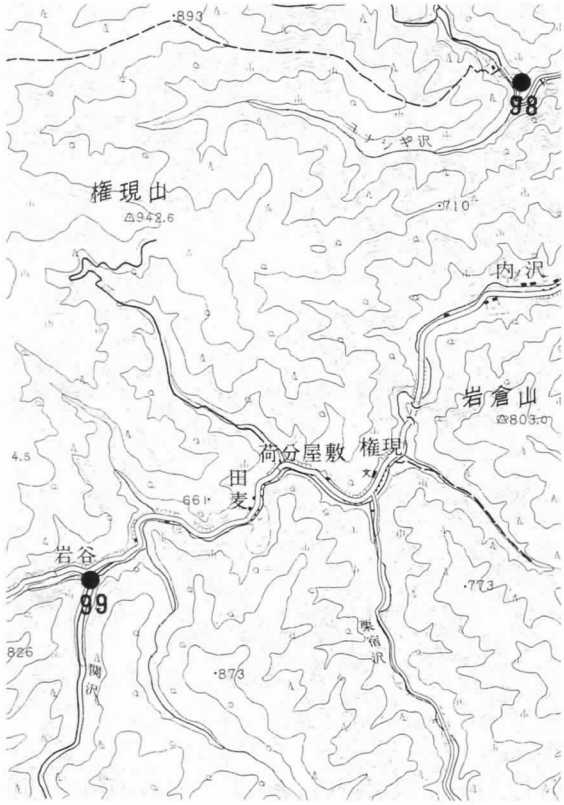


32

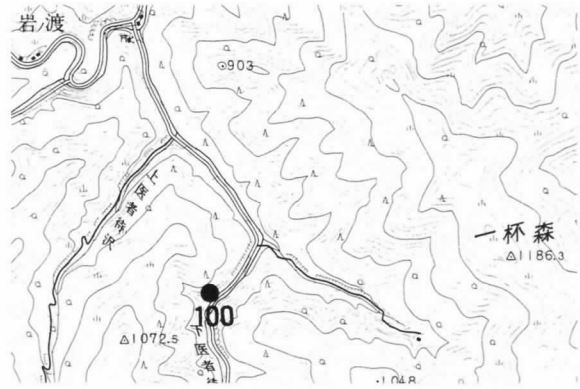
第10図　　岩手県内洞穴遺跡位置図 9



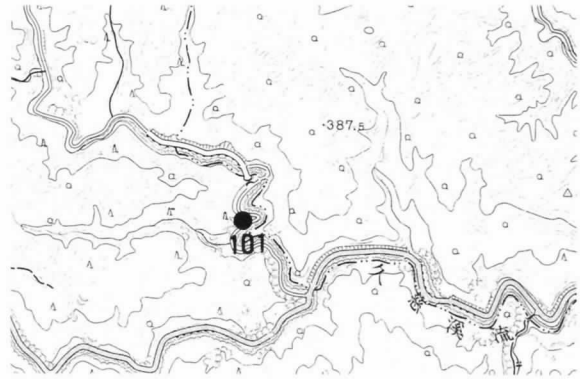
33



34



35

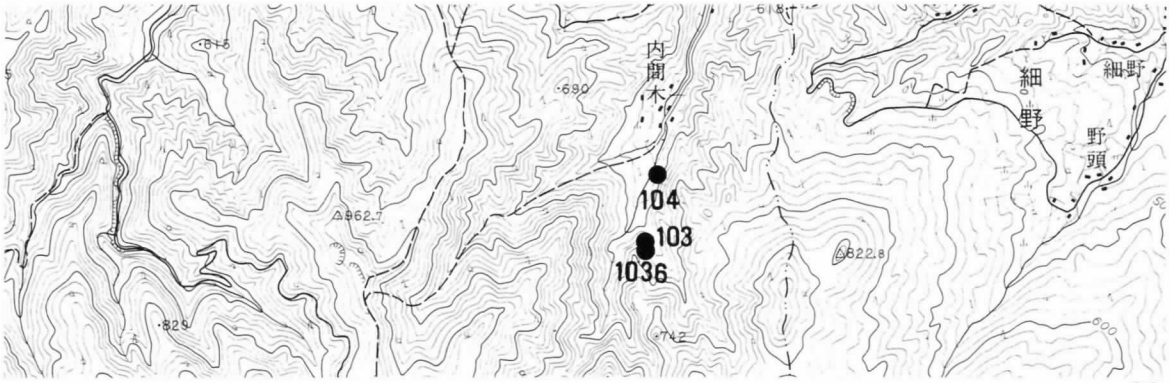


36

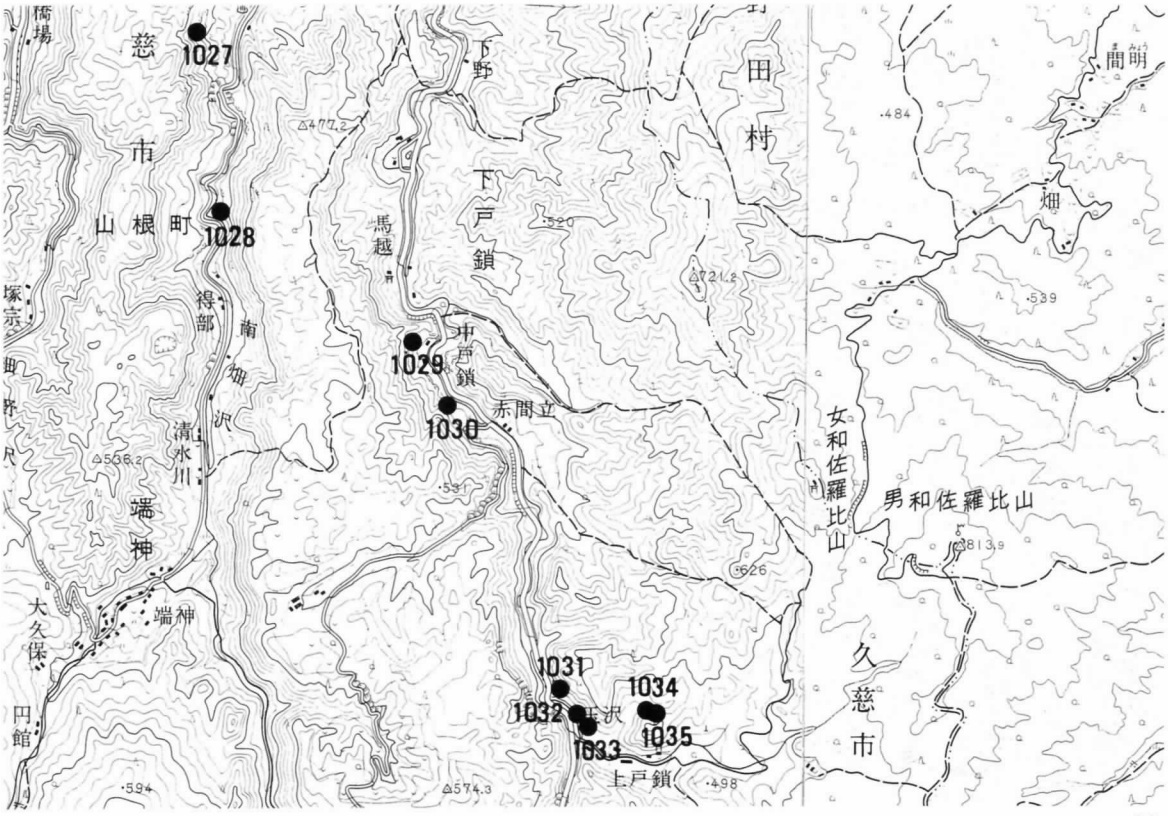
第11図　　岩手県内洞穴遺跡位置図10

37

38



39

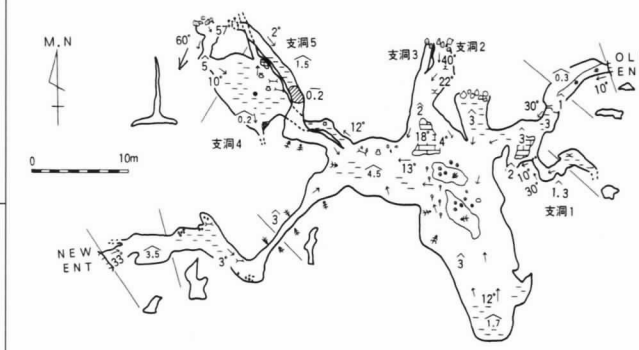


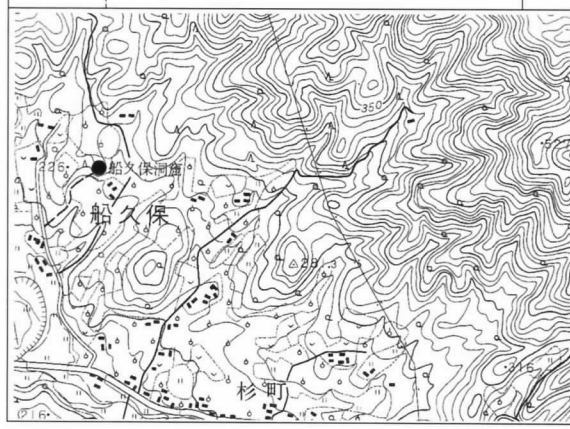
40

第12図　　岩手県内洞穴遺跡位置図11

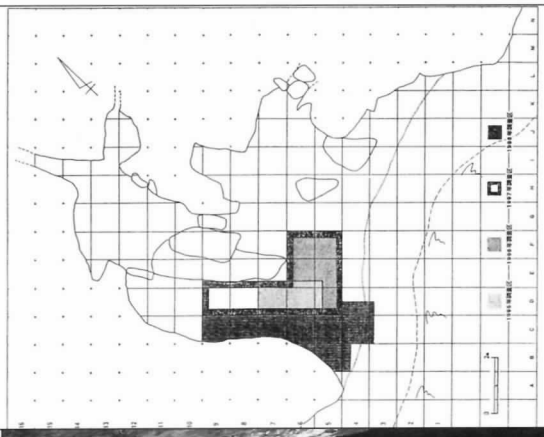
No.	8	遺跡名・遺跡コード 別称	舟久保洞窟（ふなくぼ） 百沢鍾乳洞　（ももさわしょうにゅうどう）	〔LE69-0033〕

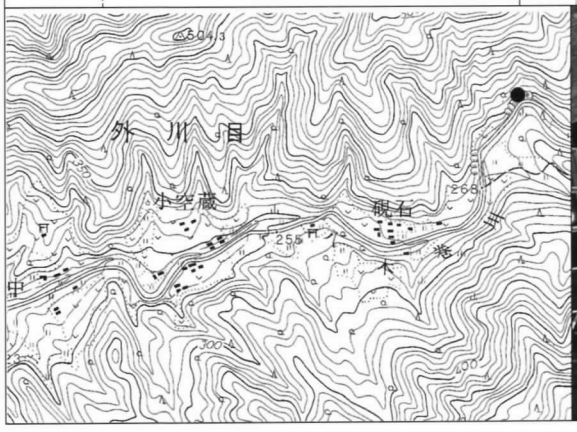
所在地	紫波郡紫波町舟久保字百沢47			図幅	ＮＪ-54-13-11-４、陸中折壁
洞穴の成因	石灰岩	標　高 比高差	230ｍ ３～４ｍ	立地目印	山裾・県道から約500ｍ北へ。
時　期	縄文(後、晩)、弥生(後)			残存状況	一部破壊
調査歴	昭和7（1932）年－小田島禄郎、昭和62（1987）年－東山ケイビングクラブ				
規　模	幅1、奥176、高0.6ｍ	遺　構	焼土遺構（炉？）		
人　口 遺　物	縄文土器(後期中葉・後葉、晩期大洞ＢＣ式)、弥生土器、石器(石鏃、石箆、石匙、掻器、磨製石斧)、石製品(石棒)、骨角器(骨針)				
自　然 遺　物	哺乳鋼骨(シカ、イノシシ、クマ、アナグマ？、カモシカ？、ウシ？)、魚骨(サケ科)				
備　考	県指定史跡。現在の洞口は人工で、本来の洞口は東側にある。試掘、盗掘多数。新洞口の南側畑地でも、多量の土器出土。				
資料保管場所	岩手県立博物館（小田島コレクション） 個人				
文　献	76				

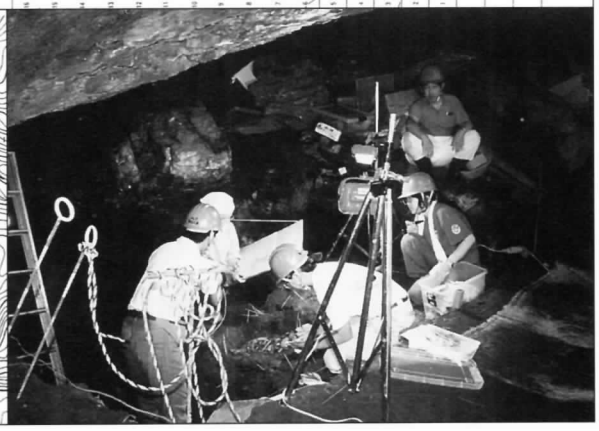




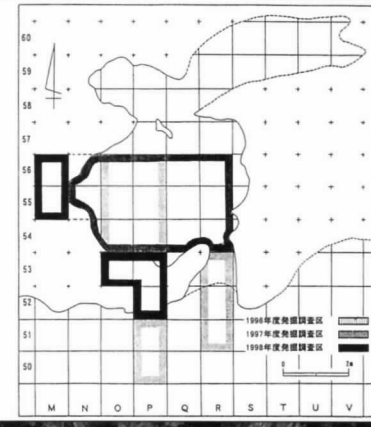
No.	14	遺跡名・遺跡コード 別称	アバクチ洞穴	〔MF01－0095〕
所在地	稗貫郡大迫町外川目字大倉掛		図幅	NJ-54-13-12-4、大迫
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	290m 約8m	立地目印 八木巻川の右岸・町道の脇に開口（標柱あり）
時期	縄文（草創・前～後）、弥生		残存状況	一部破壊（町道工事で削平）
調査歴	昭和57（1982）、62（1987）年－大迫町教育委員会、平成7（1995）～10（1998）年－アバクチ洞穴、風穴洞穴遺跡発掘調査団			
規模	幅約8、奥約12、高約2m	遺構	弥生時代の墓壙（人骨あり）、縄文時代前期の集石遺構	
人口遺物	縄文土器、石器（石鏃、石匙）、骨角器（鹿角製ヤス）、弥生土器、骨角器（貝輪、貝製平玉）ほか			
自然遺物	人骨、哺乳類骨			
備考				
資料保管場所	土器→大迫町教育委員会、石器→慶応義塾大学文学部、骨類→東北大学医学部			
文献	97,106,107			

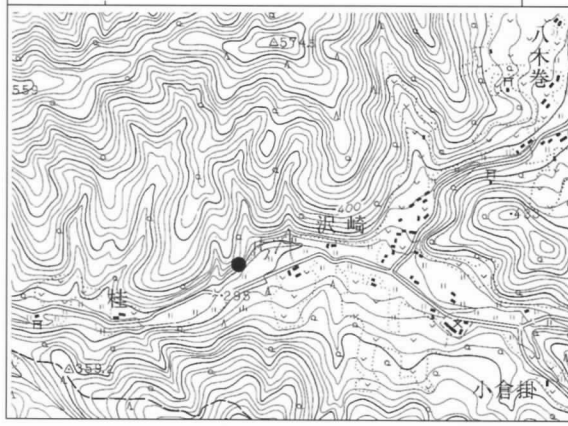




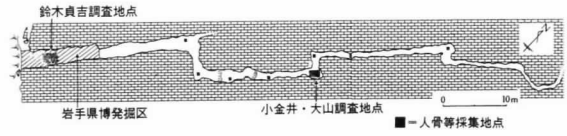


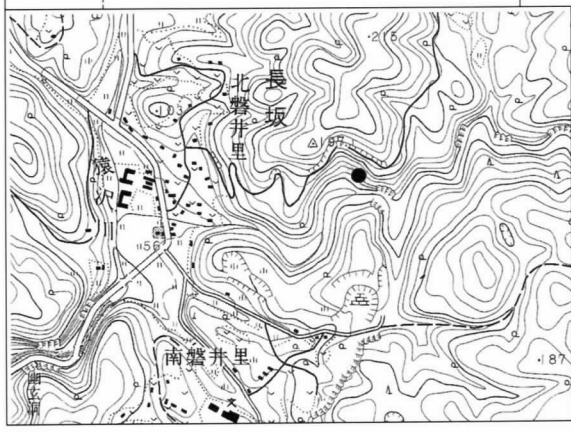
No.	15	遺跡名・遺跡コード 別称	風穴洞穴　（かざあな）　〔ＭＦ01－0195〕
所在地	稗貫郡大迫町外川目沢崎	図幅	ＮＪ-54-13-12-４、大迫
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	313ｍ 約12ｍ
立地目印	八木巻川の右岸の山の中腹		
時期	縄文（後、晩）	残存状況	一部破壊
調査歴	平成8（1996）～10（1998）年－アバクチ洞穴・風穴洞穴遺跡発掘調査団		
規模	幅約1、奥約10、高約１ｍ	遺構	なし
人口遺物	縄文土器、石器		
自然遺物	ナウマンゾウ、ヘラジカなどの絶滅種を含む獣骨		
備考	内部は高さ約3.5ｍ		
資料保管場所	土器→大迫町教育委員会、石器→慶応義塾大学文学部、獣骨→愛知教育大学		
文献	106,107		



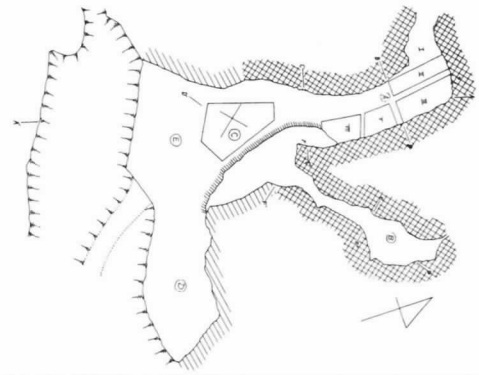


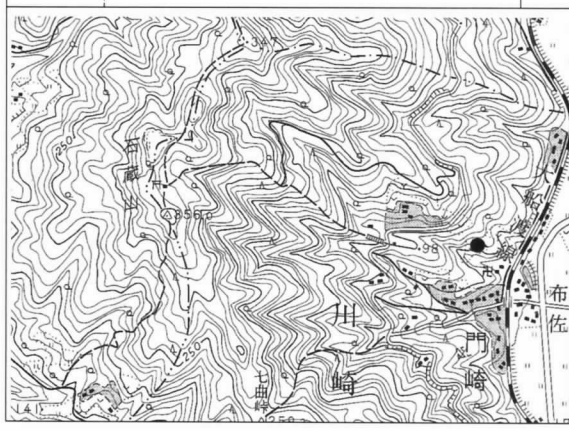
No.	34	遺跡名・遺跡コード 別称	熊穴洞穴　　（くまあな）　　〔ＮＥ69－2201〕
所在地	東磐井郡東山町長坂字小豆用	図幅	ＮＪ－54－14－10－4、沖田
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	125ｍ 約27ｍ
立地目印	猿沢川右岸		
時期	縄文（晩）、平安	残存状況	良好
調査歴	大正13（1924）年－鈴木貞吉・青木禎次郎、大正14（1925）年－小金井良精・大山柏・八幡一郎・池上啓介・長谷部言人・小田島禄郎、昭和54（1979）、56（1981）年－岩手県立博物館、昭和56（1981）年－洞窟学研究会		
規模	幅3.5、奥300＋α、高4.5ｍ	遺構	再葬墓（基本的には安置で、一部に掘り込みがある）
人口遺物	縄文土器（晩期→大洞Ａ´式）、土師器（平安）、石器（掻器、磨製石斧ほか）、土製品（装飾品？）、骨角器（刀子状・ニホンジカの中足骨を加工・平安時代、貝輪）		
自然遺物	人骨、哺乳鋼骨（ニホンジカ、イノシシ、ノウサギ、ネズミの類、コウモリの類）、魚鋼骨（サケ科の一種）、腹足類（トコブシ、ユキノカサ）、斧足類（ホタテガイ、エゾイシカゲガイ、ハマグリ、カワシンジュガイ）、陸産貝類（キセルモドキ、ヤマキサゴ、ニッポンマイマイ、ヒダリマキマイマイ）		
備考	内部はクランク状を呈し、段差を持つ。最初の曲がり角まではほぼ平坦で、遺物も比較的多い。		
資料保管場所	岩手県立博物館		
文献	52		



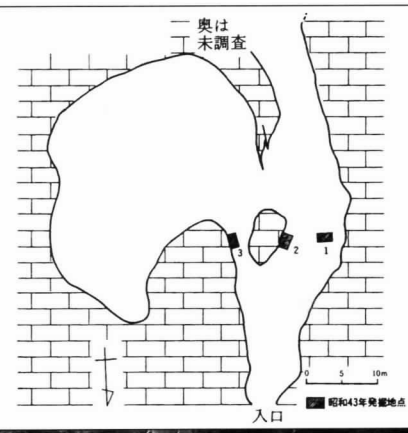


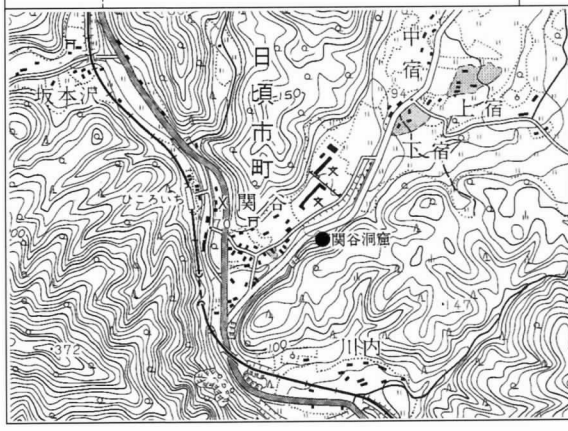
No.	41	遺跡名・遺跡コード 別称	布佐洞穴　　（ふさ）	〔ＮＥ98—1316〕
所在地	東磐井郡川崎村門崎字石蔵		図幅	ＮＪ－54－14－15－1、一関
洞穴の成因	石灰岩	標　高 比高差	57ｍ 41ｍ	立地目印：最明寺脇の沢を登り詰めた場所。南西に向けて開口、前は平場、平場の前は枯沢、入口に看板。
時　期	縄文（後）、弥生		残存状況	良好
調査歴	昭和元（1925）年－小田島禄郎、昭和40（1965）年～43（1968）年－一関第一高校、昭和45（1970）年－布左洞穴遺跡発掘調査団、昭和47（1972）年～53（1978）年－東北大学教養部地学ゼミナール、昭和52（1977）年～53（1978）年－宮城県立涌谷高校地学部、昭和61（1986）年－川崎村教委、昭和61（1986）～平成元（1989）年－東山ケイビングクラブ・明治大学地底研究部			
規　模	幅６、奥1,292＋α、高３ｍ	遺　構	敷石様遺構・石囲炉（文献36←昭和45年調査）	
人　口 遺　物	縄文土器、石器（小型石斧、横型石匙）			
自　然 遺　物	人骨、哺乳鋼骨（キツネ、イノシシ、シカ）、貝類			
備　考	開口部の上部は石灰岩の岸壁。洞穴最奥部手前10ｍ（230ｍ地点）の水流部分で土器片散乱。川崎村教育委員会が洞内全体を撮影したスライドを持っており、貸し出し可能。			
資料保管場所	川崎村教育委員会 村立門崎小学校			
文　献	６，８，10，20，31，36，41，44，46，47，50，48，51，71，74，92			



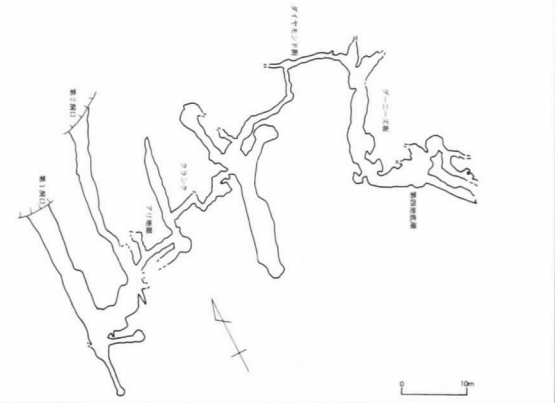


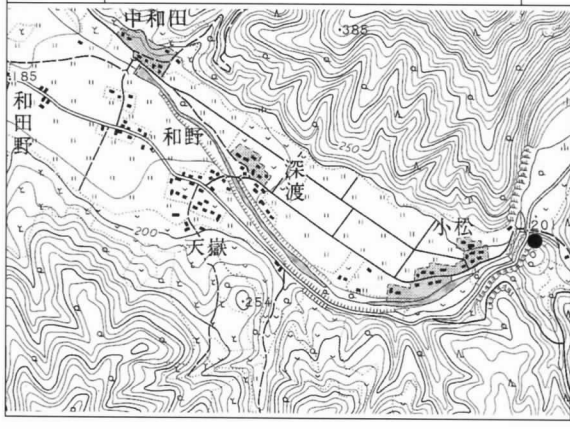
No.	47	遺跡名・遺跡コード 別称	関谷洞穴　（せきや）	〔ＮＦ28－1009〕
所在地	大船渡市日頃市町字関谷		図幅	ＮＪ－54－14－６－1、盛
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	85ｍ 25ｍ	立地目印　鷹生川左岸。県道沿い。標柱・説明版あり。
時期	縄文（早・前・中・後・晩）、弥生、奈良、平安		残存状況	良好
調査歴	昭和4（1929）年－小田島禄郎、昭和41、43（1966、1968）年－大船渡市立博物館、昭和59、60（1984、1985）年－大船渡市教育委員会・東山ケイビングクラブ			
規模	幅3.4、奥25？、高2ｍ	遺構	炉跡	
人口遺物	縄文土器、石器（石槍、石匙、石斧、石皿、敲石）、骨角器（骨針、刺突具、装身具・ワシタカ科の末節骨製、貝輪）			
自然遺物	人骨、哺乳鋼骨（シカ、イノシシ、ツキノワグマ、キツネ、テン）、鳥鋼骨（ワシタカ科の一種・装身具に加工）、腹足鋼（ツメタガイ、トコブシ？、クロアワビ？、ウミニナ）、二枚貝鋼（オオノガイ、ハマグリ、アサリ、マガキ、イガイ、ムラサキインコ、ホタテガイ、アカガイ、オキシジミ）			
備考	県指定史跡。入り口付近に大岩。			
資料保管場所	大船渡市立博物館			
文献	29，22，85			



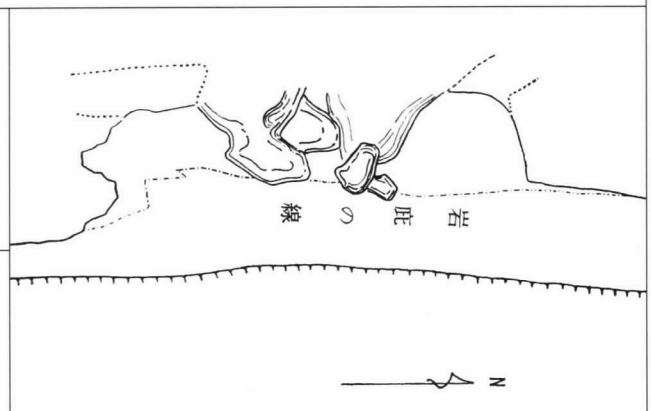


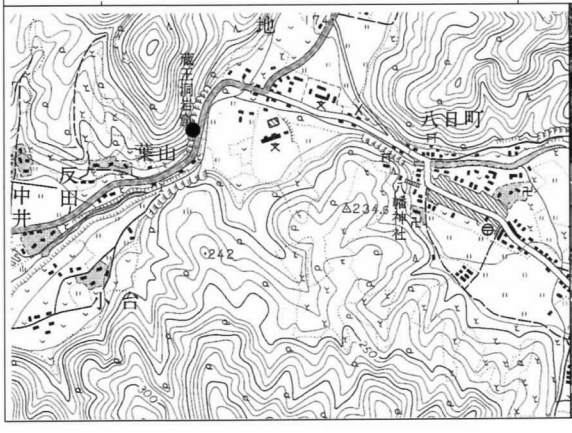
No.	48	遺跡名・遺跡コード 別称	小松洞穴　（こまつ）　〔ＮＦ07－0032〕 小松ほいど穴　（こまつほいどあな）		
所在地	気仙郡住田町上有住字小松149の６			図幅	ＮＪ-54-14-５-４、陸前八日町
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	203ｍ 7.5ｍ	立地目印	気仙川左岸。道路沿い。標柱あり。
時期	縄文（早・前・中・後・晩）、弥生、平安、近世			残存状況	一部破壊
調査歴	平成7～11（1995～1999）年－岩手県立博物館				
規模	幅５、奥292＋α、高40ｍ		遺構	焼土、ピットなど	
人口遺物	縄文土器（早期赤御堂式・早稲田５類、前期初頭・大木6式、中期大木7式・8a・８ｂ式、9式・10式、後期初頭・中葉・後葉、晩期大洞Ａ式）、弥生土器（前期砂沢式、後期天王山式）、土師器（9～10世紀）、石器（石鏃、石匙、不定形石器、磨石、石錘）、土製品（円盤状土製品）、石製品（円盤状石製品）、骨角器（骨針・釣針・貝輪・穿孔品）、古銭（寛永通宝）、陶磁器（現代）				
自然遺物	哺乳鋼骨（ネズミ科の一種、ノウサギ、ツキノワグマ、タヌキ、キツネ、イノシシ、ニホンジカ、オオヤマネコ？）、鳥鋼骨（キジ科の一種）、魚鋼骨（ニシン？、サケ？、サバ？、カツオ・マグロ属、フサカサゴ科の一種）、腹足鋼（アワビ、スガイ、クロタマキビガイ、タマキビガイ、オオヘビガイ、ウミニナ、エゾタマガイ、タカラガイ科の一種、イボニシ、チヂミボラ）、二枚貝鋼（コベルトフネガイ、ベンケイガイ、タマキガイ、ムラサキインコガイ、イガイ、ホタテガイ、マガキ、カワシンジュガイ、アサリ、イソシジミガイ、オオノガイ）、蔓脚亞鋼（チシマフジツボ）				
備考	洞口が二つある。				
資料保管場所	岩手県立博物館 大船渡市立博物館 陸前高田市立博物館 住田町民俗資料館				
文献	103，37，43				

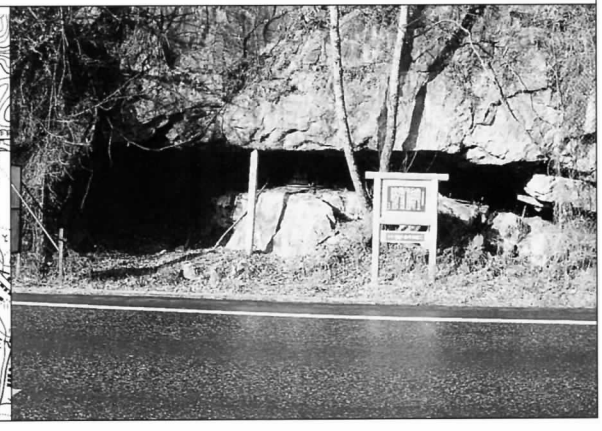




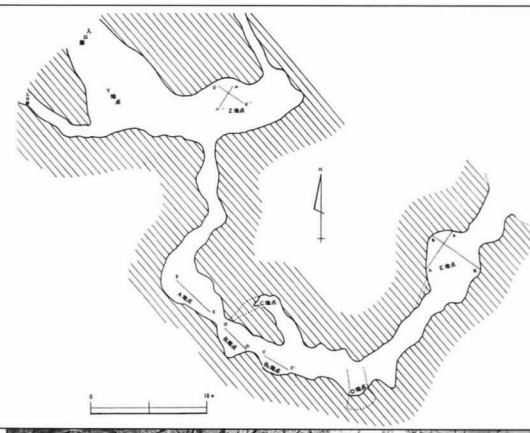
No.	49	遺跡名・遺跡コード 別称	蔵王洞穴　（ざおう） 蛇王洞穴　（じゃおう）	〔MF96－2121〕
所在地	気仙郡住田町上有住字葉山64－1		図幅	NJ-54-14-5-4、陸前八日町
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	160m 7.6m	立地目印　国道の傍らに標柱と案内板。
時期	縄文（早・後・晩）		残存状況	良好
調査歴	大正11(1922)年－松本彦七郎、大正13(1924)年－柴田常恵、昭和39(1964)年－洞穴遺跡調査特別委員会(芹沢長介)			
規模	幅10、奥約4、高2m	遺構	?	
人口遺物	縄文土器(早期→押型文・蛇王洞Ⅱ式・明神裏Ⅲ式・大寺Ⅰ式・槻木Ⅰ式・舟入島下層式)			
自然遺物	骨片・歯			
備考				
資料保管場所	東北大学 岩手県立博物館 大船渡市立博物館			
文献	103, 93, 86, 60, 7, 26, 64, 13			

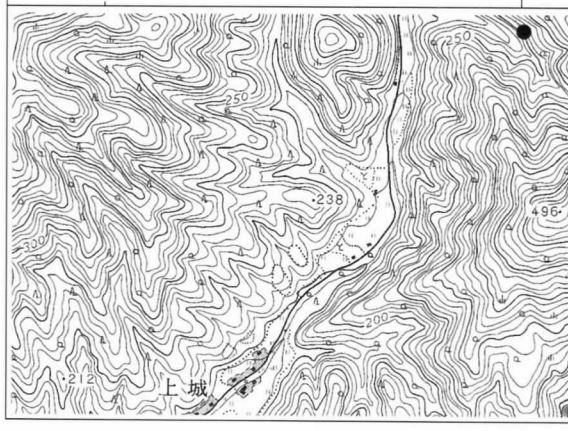




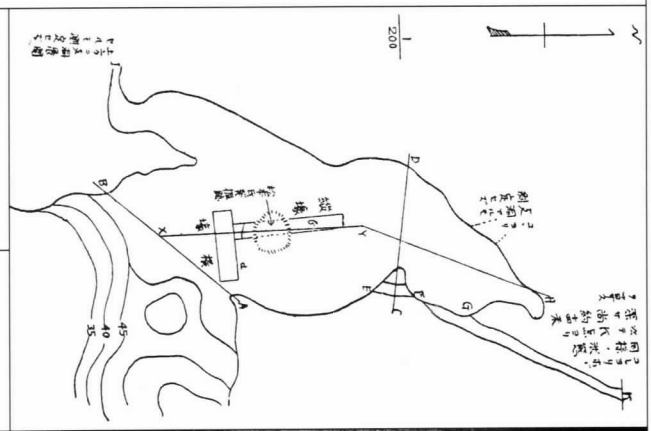


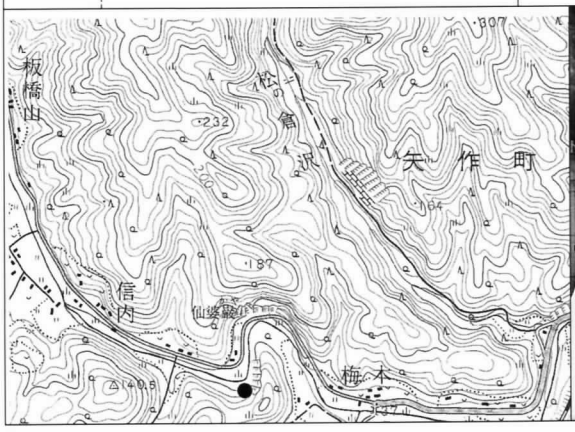
No.	53	遺跡名・遺跡コード 別称	湧清水洞穴　（わきしみず） 上城　（かみじょう）	〔ＮＦ07－2084〕
所在地	気仙郡住田町世田米字上城144－1		図幅	ＮＪ-54-14-6-3、世田米
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	250m 50m	立地目印：沢の源とその上に三つ洞穴が重なるように開口、一番上が遺跡の入り口。ビニールハウス対岸の丸木橋から１km奥。
時期	縄文(早・前・後)、弥生、中世		残存状況	一部破壊(調査と観光開発による)
調査歴	昭和46（1971）年－草間俊一・小片保ほか調査、調査年不詳－小田島禄郎			
規模	幅５、奥500、高２ｍ	遺構	墓？	
人口遺物	縄文土器(早期蛇王洞Ⅱ式・赤御堂式、前期初頭、後期中葉)、弥生土器(後期赤穴式)、石器（石鏃、石斧、掻器、凹石)、骨角器(骨針、貝輪)、古銭（洪武通宝）			
自然遺物	人骨片			
備考	石灰石輸送路から約1.5km奥に民家とビニールハウスがあり、丸木橋からの途中に水道タンクがある。			
資料保管場所	？			
文献	103, 38, 64, 10, 37, 43, 45, 66, 13, 20			

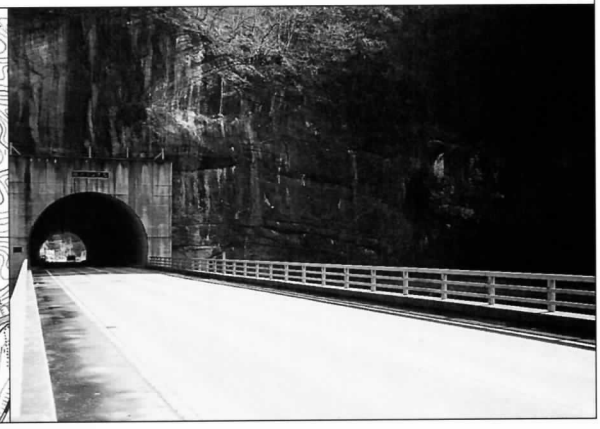




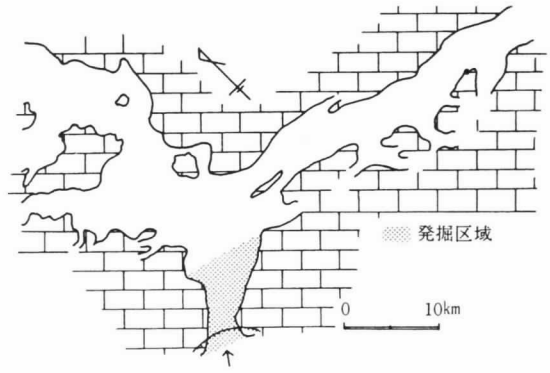
No.	63	遺跡名・遺跡コード 別称	女神洞窟　（めがみ）　〔ＮＦ65－0158〕
所在地	陸前高田市矢作町字信内	図幅	ＮＪ-54-14-6-4、今泉
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	50m 10m
立地目印	矢作川右岸。めがみ橋下に標柱		
時期	縄文(早・前・中・後・晩)、弥生、平安	残存状況	一部破壊(包含層の流出)
調査歴	大正13(1924)年－柴田常恵・小田島禄郎、大正14(1925)年－小金井良精・大山柏・松本彦七郎・広瀬啓介・小田島禄郎・八幡一郎・長谷部言人		
規模	幅17、奥240、高約7m	遺構	なし
人口遺物	縄文土器(早期素山式、前期上川名Ⅱ～大木6式、中期大木8ｂ式、後、晩)、弥生土器(後期・赤穴式)、骨角器(針、銛頭、貝器)		
自然遺物	人骨、哺乳鋼骨(シカ、イノシシ、タヌキ)、魚骨(マダイ)、貝(イガイ、クボガイ)		
備考	平安時代の抉入離頭銛(文献4←大正14年調査)。開口部付近に上洞からの土砂堆積し洞床を覆っている。気仙川の氾濫で包含層一部流出。		
資料保管場所	岩手県立博物館 大船渡市立博物館		
文献	10, 90, 22, 4, 93		

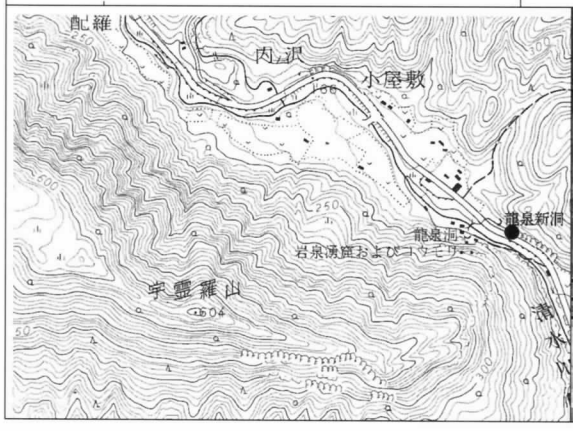




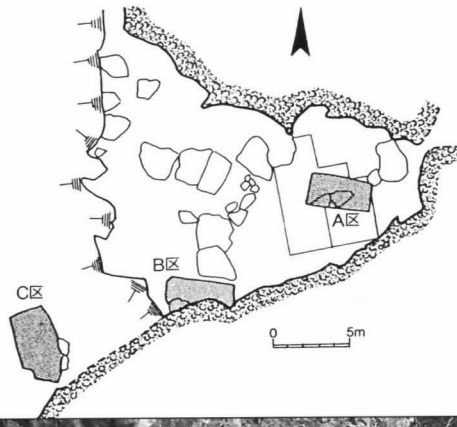


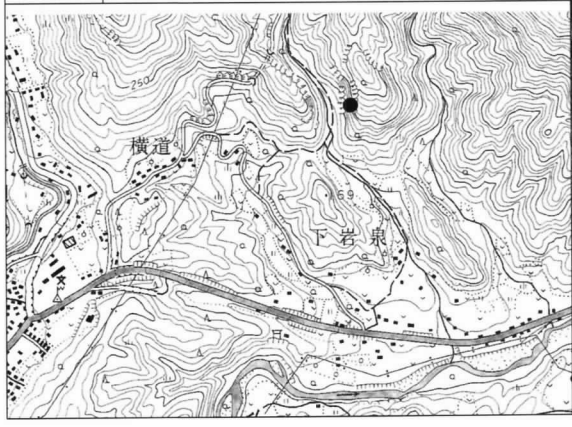
No.	79	遺跡名・遺跡コード 別称	龍泉洞新洞　（りゅうせんどうしんどう）　〔ＫＧ50－0239〕
所在地	下閉伊郡岩泉町岩泉字小屋敷	図幅	ＮＪ-54-13-１-４、岩泉
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	150ｍ ７ｍ
立地目印	清水川の右岸。現在は観光洞の出口。		
時期	縄文（草創・早）	残存状況	一部破壊
調査歴	昭和43（1968）年－岩泉町教育委員会		
規模	幅４、奥150、高1.5ｍ	遺構	なし
人口遺物	土器、石器、骨角器		
自然遺物			
備考	昭和42年道路改修工事の際発見。遺物は開口部付近から出土。		
資料保管場所	岩泉町民会館		
文献	34，91		



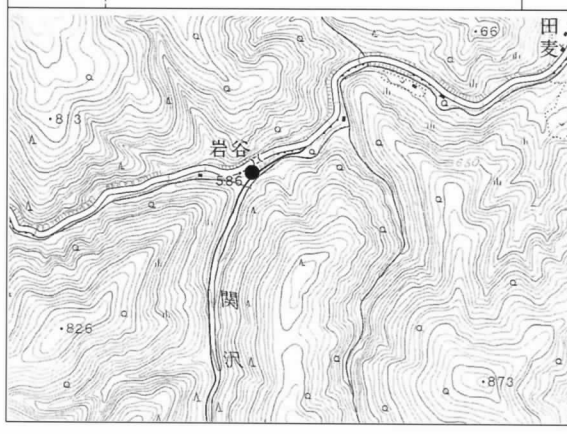


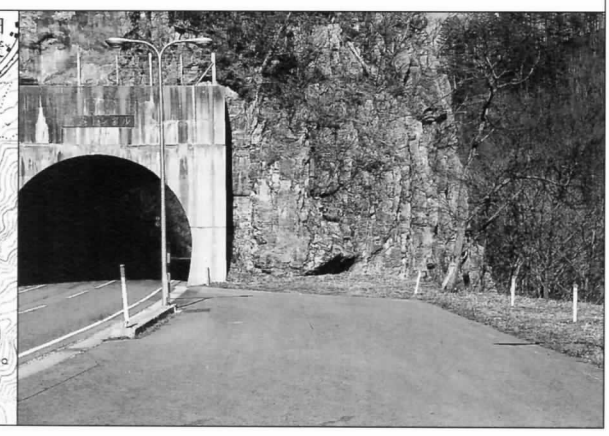
No.	85	遺跡名・遺跡コード 別称	瓢箪穴（ひょうたんあな） 大穴　（おおあな）	〔KG51－0082〕
所在地	下閉伊郡岩泉町岩泉字大北川		図幅	NJ-54-13-1-4、岩泉
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	178m 50m	立地目印　三沢の左岸。
時期	旧石器、縄文（草創・早・晩）、弥生		残存状況	良好
調査歴	昭和36～37（1961～1962）年－江坂輝弥、昭和41（1966）年－岩泉町教育委員会、平成7（1995）年～－瓢箪穴発掘調査団			
規模	幅20、奥25、高10m	遺構	土坑	
人口遺物	旧石器（斜軸尖頭器、スクレイパー）、土器、石器、石製品、骨角器			
自然遺物	哺乳鋼骨（クマ・旧石器時代、シカ）			
備考	30万年前以前に開口。洞口部天井の崩落著しい。			
資料保管場所	岩泉町民会館 東北旧石器文化研究所			
文献	32, 10, 91, 95, 98, 111			



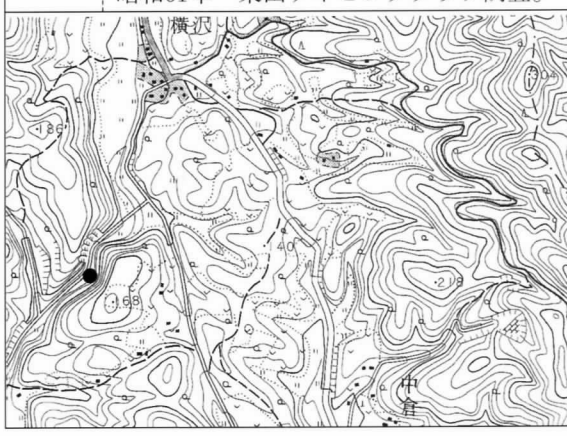


No.	99	遺跡名・遺跡コード 別称	岩谷洞穴（いわや） 〔KF55－1082〕
所在地	下閉伊郡岩泉町釜津田字上栗宿	図幅	ＮＪ-54-13-５-４、早坂高原
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	約590ｍ ７ｍ
立地目印	関沢の西岸・国道沿い、岩谷トンネルの真下。		
時期	縄文(前～晩)、近世	残存状況	
調査歴	昭和50(1975)年－県教委調査		
規模		遺構	なし
人口遺物	縄文土器、土製品、石製品、骨角器		
自然遺物	サルほか		
備考	本書で報告。		
資料保管場所	岩手県教育委員会		
文献	67，96，ほか		

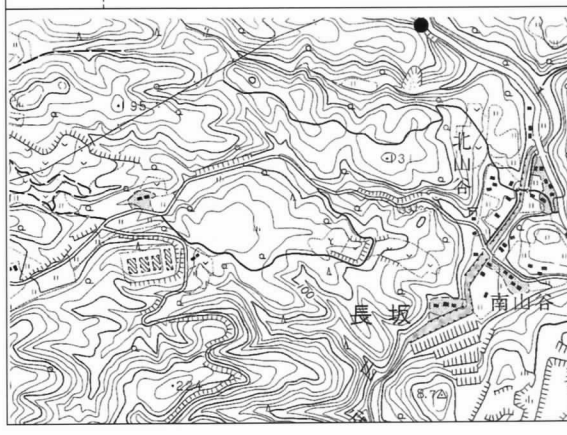




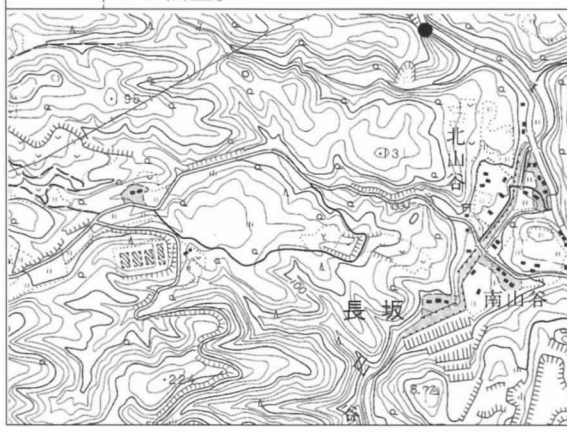
No.	28	遺跡名・遺跡コード 別称	箕穴　（みのあな） 横沢洞穴　（よこさわ）	〔NE69－0043〕
所在地	東磐井郡東山町田河津字横沢281番地４		図幅	NJ-54-14-10-4,沖田
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	85m 約2m	立地目印　夏山川左岸・町道横沢線、宮城石灰の採掘場の対岸
時期	縄文		残存状況	良好
規模	幅2.8、奥101＋α、高1.3m	遺物	縄文土器、貝製装飾品、骨片	文献　1，9，10，52，71，75
備考	明治38年－柴田常恵他、昭和元年小田島禄郎、同年頃－田沢金吾、昭和56年－洞窟学研究会、昭和61年－東山ケイビングクラブ調査。			



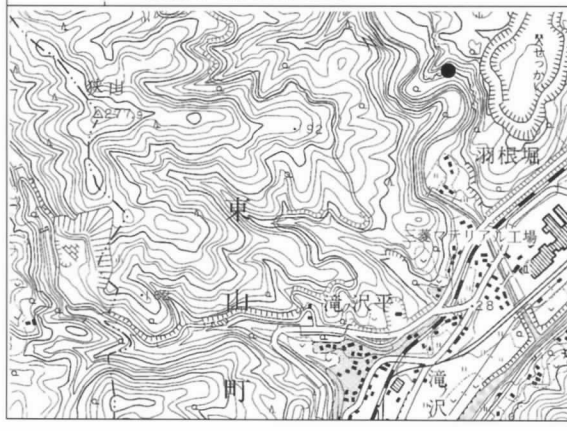
No.	30	遺跡名・遺跡コード 別称	川底洞穴　（かわそこ） 川底岩穴洞窟（かわそこいわあな）・山谷洞穴（やまや）	〔ＮＥ78－0304a〕
所在地	東磐井郡東山町田河津字高金46番地の1		図幅	NJ-54-14-15-１,一関
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	50m 約４m	立地目印　山谷川右岸・県道沿い、標柱あり。
時期	縄文		残存状況	良好（県道土砂流入）
規模	幅4.2、奥72、高2.1～0.4m	遺物	縄文土器、貝製装飾品、半化石獣骨（ウシ）	文献　8，10，20，52，71，75
備考	昭和元年－小田島禄郎、昭和56年－洞窟学研究会調査。増水するとプール状に。			

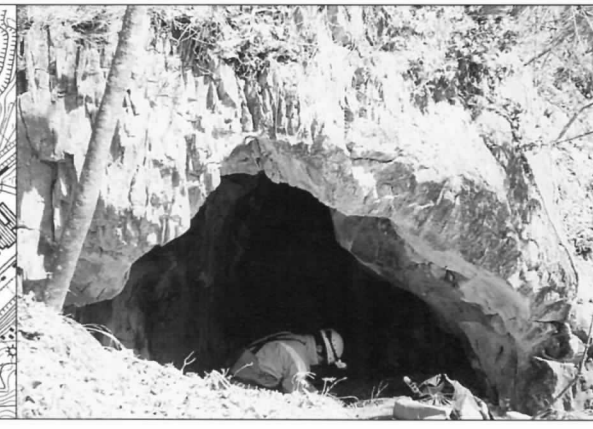


No.	32	遺跡名・遺跡コード 別称	川底第２洞（かわそこだいにどう）〔NE78-0304b〕		
所在地	東磐井郡東山町田河津字高金			図幅	NJ-54-14-15-１,一関
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	50m 約４m	立地目印	山谷川右岸・川底洞穴の南
時期	縄文（晩）			残存状況	良好
規模	幅2.6、奥278＋α、高２m	遺物	縄文土器片、獣骨片（クマ、ウサギ）、炭化物　〔東山ケイビングクラブ〕	文献	75
備考	出土位置が奥にあり特異な遺跡。昭和56年－洞窟学研究会、昭和58、60年－東山ケイビングクラブ調査。				

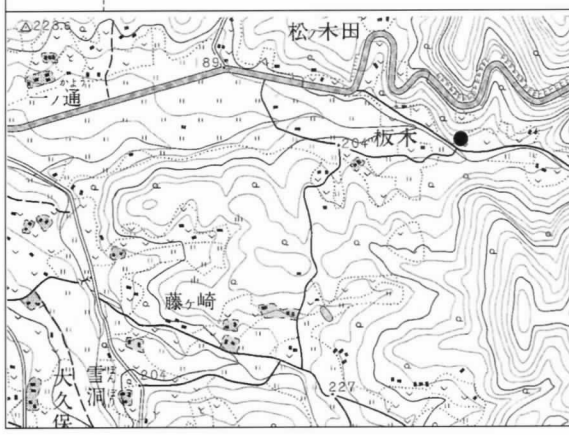


No.	38	遺跡名・遺跡コード 別称	バクチ穴〔NE78－1324〕 羽根掘洞窟（はねぼり）、長田山洞穴（ながたやま）		
所在地	東磐井郡東山町長坂字羽根堀			図幅	NJ-54-14-15-１,一関
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	約45m 約30m	立地目印	山谷川左岸・石灰岩採掘坑の背後。内部に町教委建立の文化財標柱。
時期	縄文（晩？）			残存状況	良好
規模	幅2.9、奥3.5、高１～２m	遺物	縄文土器、「石甕」、石鏃　〔岩手県立博物館〕	文献	1,4,5,6,8,10,20,52,71,75
備考	明治38年－柴田常恵他、大正14年－大山柏、小金井良精他、昭和元年－小田島禄郎、昭和56年－洞窟学研究会調査。				

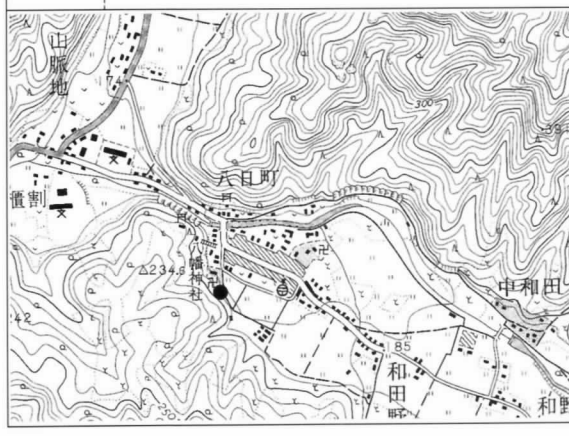




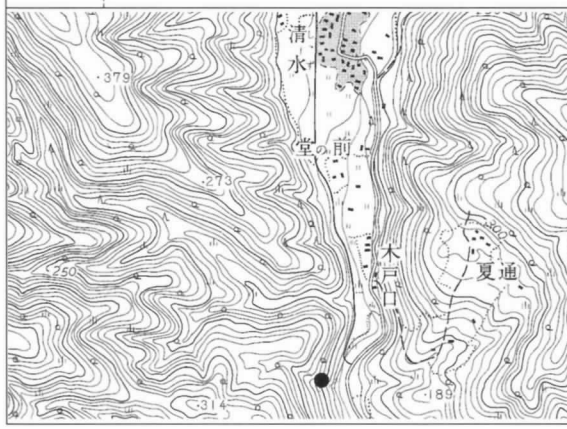
No.	40	遺跡名・遺跡コード 別称	山口洞穴（やまぐち） 岩穴（いわあな）	〔ＮＦ63－1063〕
所在地	東磐井郡大東町大原字山口38番地		図幅	NJ-54-14-10-２,陸中大原
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	220m 5m	立地目印：山口川右岸・町道沿い
時期	縄文		残存状況	良好
規模	幅1.2、奥98、高2.4～1.8m	遺物	縄文土器片、獣骨片	文献：65，73，71
備考	昭和58年－日本ケイビング協会、東山ケイビングクラブ調査。最奥部湧水。			



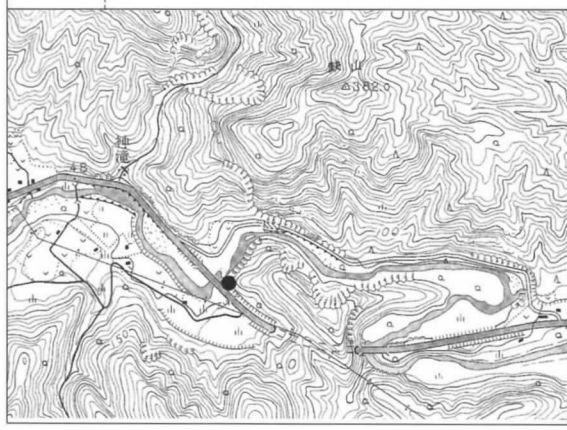
No.	50	遺跡名・遺跡コード 別称	玉泉寺の穴（ぎょくせんじのあな） 八日町遺跡（ようかまち）	〔MF96－2158〕
所在地	気仙郡住田町上有住八日町		図幅	NJ-54-14-５-４,陸前八日町
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	190m 20m	立地目印：気仙川左岸・玉泉寺東の墓地の裏側
時期	縄文（後・晩）		残存状況	良好
規模	幅1、奥10、高1m	遺物	縄文土器（後、晩期大洞C2、A～A′式）、獣骨〔住田町民俗資料館・大船渡市立博物館〕	文献：103，43，37
備考	床の堆積土薄く、すぐ岩盤。			



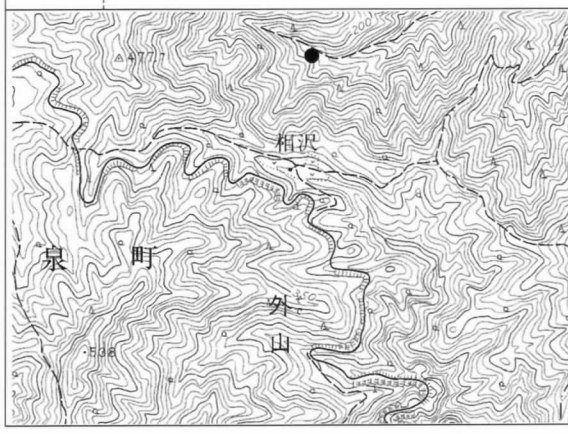
No.	59	遺跡名・遺跡コード 別称	木戸口蝙蝠穴（きどぐちこうもりあな） 〔NF54－0277〕
所在地	陸前高田市矢作町字木戸口	図幅	NJ-54-14-6-4，今泉
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	150m 約7m
立地目印	生出川右岸・県道から沢沿いの道を迂回して、杉の植林地を抜ける。		
時期	縄文（前～晩）、弥生	残存状況	良好
規模	幅3、奥508、高1.5m	遺物	縄文土器（晩期末）、弥生土器（前期砂沢式？、後期天王山式）、動物遺存体（イガイ、ウバガイ、アワビ、シカ、イノシシ他）〔大船渡市博・岩手県博〕
文献	22，61，86，90		
備考	5箇所の洞口。遺物多量。昭和54～57年－明治大学地底研究部調査。		



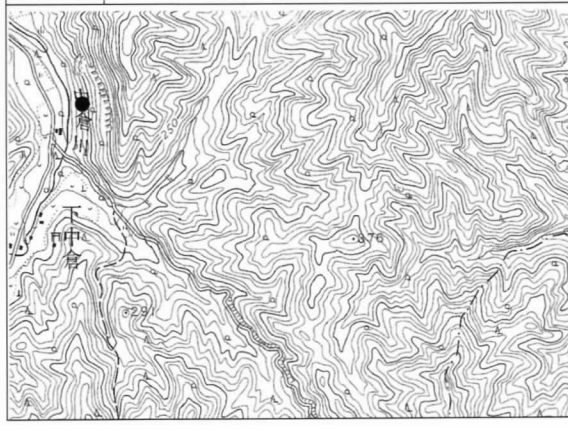
No.	87	遺跡名・遺跡コード 別称	女神岩陰（めがみいわかげ） 〔KG51－1196〕
所在地	下閉伊郡岩泉町岩泉字指畑	図幅	NJ-54-13-1-4，岩泉
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	45m 7m
立地目印	小本川右岸・国道女神橋のたもと		
時期	縄文、弥生	残存状況	良好
規模	幅15、奥5、高7m	遺物	縄文土器、弥生土器、石器、鉄滓、動物遺存体（タヌキ、カワシンジュガイ）〔岩泉町民会館〕
文献	91		
備考	平成5（1993）年－岩泉町教委調査。大きな岩陰。		

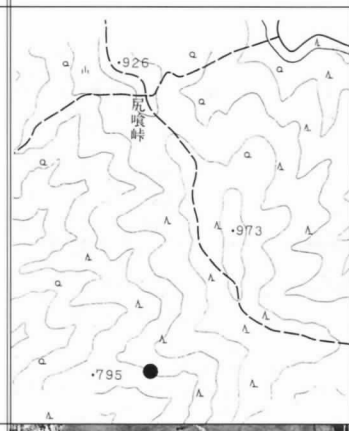
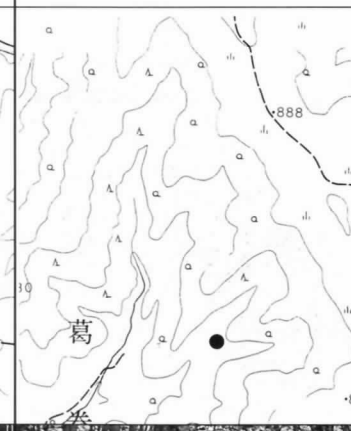


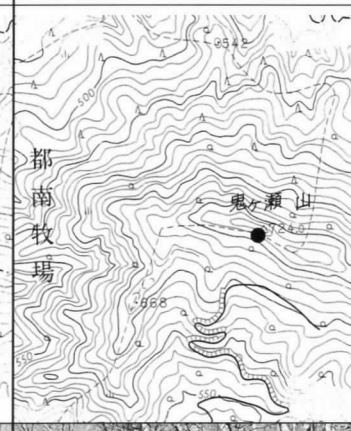
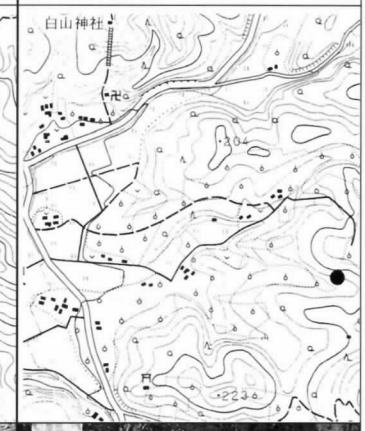
No.	95	遺跡名・遺跡コード 別称	中里大穴（なかさとおおあな） おかゆえの穴（あな）	〔KG62—2305〕
所在地	下閉伊郡岩泉町中里字中里		図幅	NJ-54-13-２-１,田老鉱山
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	190m 20m	立地目印：沢の右岸
時期	縄文（前）、弥生		残存状況	良好
規模	幅5、奥13、高10m	遺物	縄文土器、弥生土器、人骨、動物遺存体（イノシシ、キツネ、イヌ、ヒメエゾボラ、エゾタマキビガイ）〔岩泉町民会館〕	文献：87
備考	平成5（1993）年－岩泉町教委調査。			

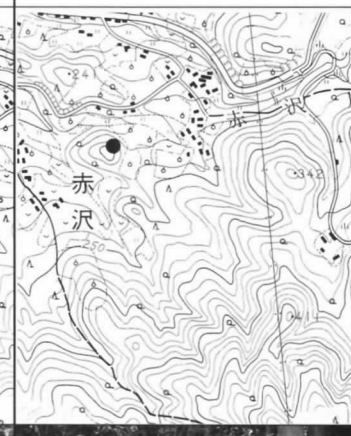
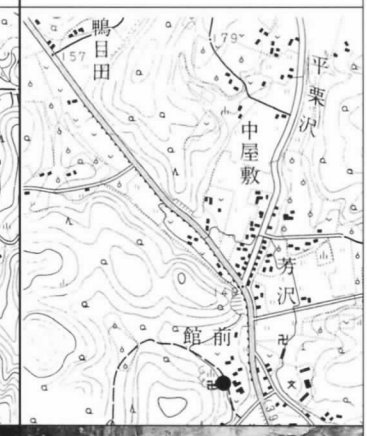
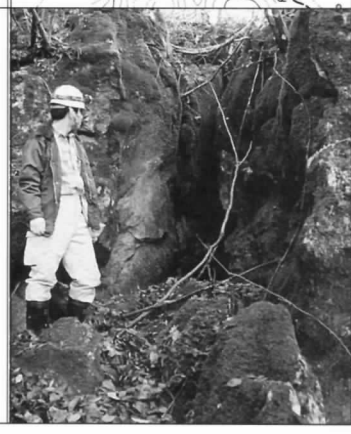


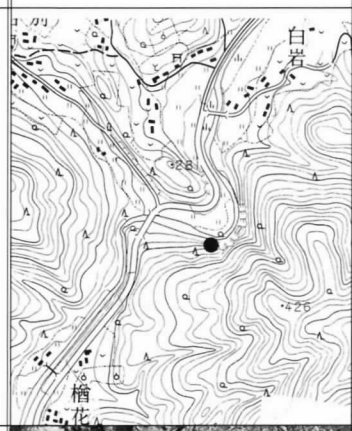
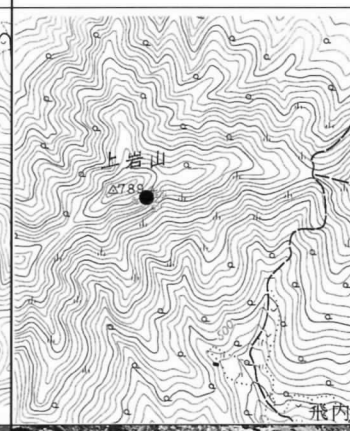
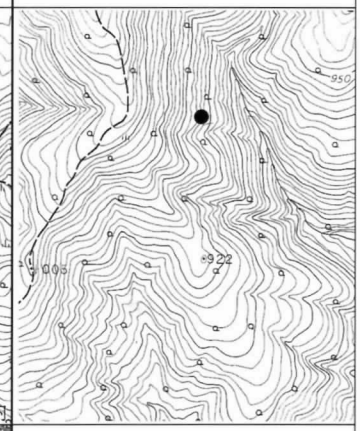
No.	96	遺跡名・遺跡コード 別称	中倉洞穴（なかくら） 相平の穴（あいひらのあな）	〔KG72－0183〕
所在地	下閉伊郡岩泉町猿沢字堤		図幅	NJ-54-13-２-１,田老鉱山
洞穴の成因	石灰岩	標高 比高差	175m 約15m	立地目印：中倉川右岸・石灰岩の絶壁
時期	縄文（前）		残存状況	良好
規模	幅3、奥80、高2.5m	遺物	縄文土器、石器、骨角器、動物遺存体（シカ、イノシシ、ツキノワグマ、キジ、ムササビ）〔岩泉町民会館〕	文献：35，91，77
備考	昭和40～41（1965～1966）年－立命館大学、昭和62（1987）年－日本洞穴学研究所調査。			

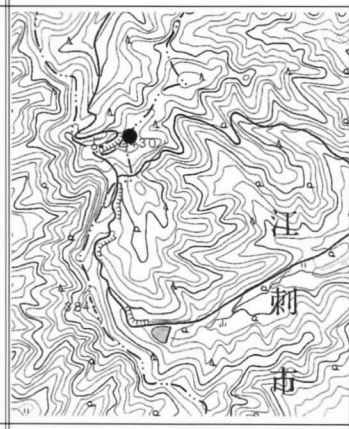
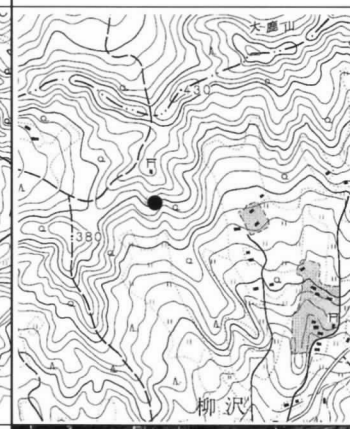
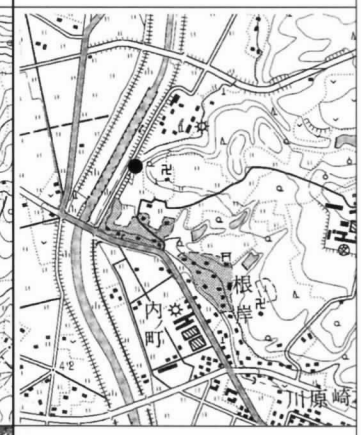


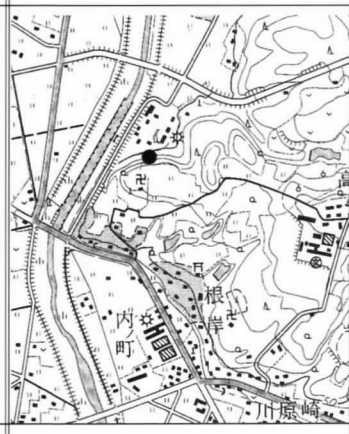
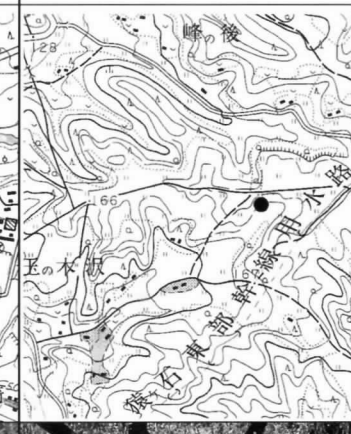
No.コード	1	〔KF04－2326〕	2	〔KF15－2063〕	3	〔KE14－0037〕
遺跡名 ／別称	ざる穴		明神穴（みょうじんあな） ／車門鍾乳洞（くるまかどしょうにゅうどう）		長嶺岩陰（ながみねいわかげ）	
所在地	岩手郡葛巻町葛巻17地割地内		岩手郡葛巻町葛巻17地割地内		岩手郡松尾村大字松尾字法生坊？地内	
図幅	ＮＪ-54-13-５-３、陸前五日市		ＮＪ-54-13-５-３、陸前五日市		ＮＪ-54-13-13-３、平館	
成因・標高・比高	不明 約800ｍ・－		不明 約720ｍ・－		石英質安山岩 340ｍ・不明	
立地・周囲の目印	分水嶺付近・道路ヘアピンカーブから伸びる林道を約1㎞東進。		車門地区に案内板あり。進行方向に対し道路右側の斜面下。		不明・長者屋敷公園内	
時期	縄文		縄文		縄文（前、晩）	
残存状況	良好		良好		一部破壊（土砂流入）	
遺構 遺物	－		－		縄文土器〔個人〕	
備考	林道北側にある。柳善寺住職が事情に詳しい。		洞穴内は流水激しいか、グアノが多量に堆積。図面等は岩手県博が保管。		周辺には多量の縄文前期（円筒下層ｃ式？）、晩期（大洞Ｂ～Ｃ２式）土器散布。	
文献	なし		104		なし	
位置図						
写真						

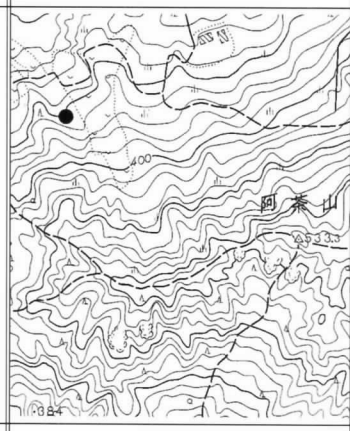
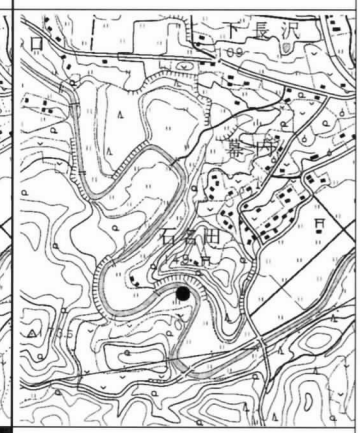
No.コード	4	〔LE39－0048〕	5	〔LE39－0048〕	7	〔LE68－2345〕
遺跡名／別称	鬼ヶ瀬山北第1洞穴（おにがせやま）		鬼ヶ瀬山南第２洞（岩陰）（おにがせやま）		三ッ石岩穴　（みついしいわあな） ／三ッ石洞穴　（みついし）	
所在地	盛岡市根田茂鬼ヶ瀬山		盛岡市乙部字大ヶ生鬼ヶ瀬山		紫波郡紫波町赤沢字漆沢	
図幅	ＮＪ-54-13-11-３、区界		ＮＪ-54-13-11-３、区界		ＮＪ-54-13-15-２、日詰	
成因・標高・比高	凝灰岩 、水流による侵食 約650ｍ・－		不明 約707ｍ・－		石灰岩 180ｍ・約3ｍ	
立地・周囲の目印	鬼ヶ瀬山山頂の岩塊北側・自然林と植林の境界の小道を登る。		鬼ヶ瀬山山頂の岩塊南側基部・北第1洞参照		農道を進むとブドウ畑の中に小さな社があり、そのそば	
時期	縄文（後）		不詳		縄文（後?、晩？）、弥生?	
残存状況	良好		良好		良好	
遺構遺物	縄文土器（後期） 〔盛岡市中央公民館〕		なし		土器、獣骨	
備考			岩陰の南には平坦なテラス。立地条件から遺跡と登録。		昭和62（1987）年－東山ケイビングクラブ調査（きつね穴遺跡も）	
文献	15，17		15，17		76	
位置図						
写真						

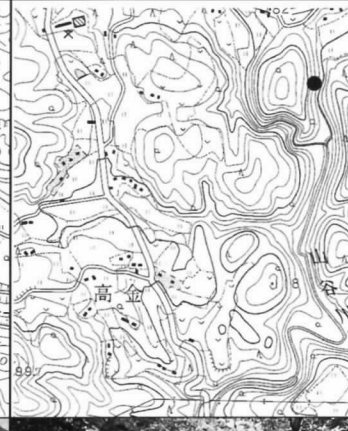
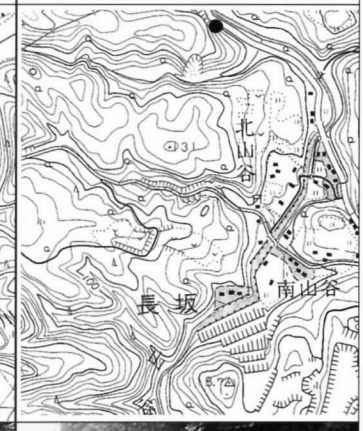
No.コード	9	〔LE69－1064〕	10	〔LE69－1065〕	11	〔LE88－1302〕
遺跡名／別称	きつね穴		たぬき穴 ／無名穴		片山洞穴（かたやま） ／岩谷観音洞（いわやかんのんどう）	
所在地	紫波郡紫波町赤沢字御蔵山		紫波郡紫波町字御蔵山		紫波郡紫波町佐比内字館前	
図幅	ＮＪ-54-13-11-４、陸中折壁		ＮＪ-54-13-11-４、陸中折壁		ＮＪ-54-13-15-２、日詰	
成因・標高・比高	石灰岩 205ｍ・２ｍ		石灰岩 220ｍ・15ｍ		石灰岩 150ｍ・約3ｍ	
立地・周囲の目印	沢		山の斜面・きつね穴遺跡より100ｍ東側		山麓・洞口付近に鳥居、岩谷観音の案内板	
時期	縄文（後）、弥生？		縄文（後？）		縄文	
残存状況	良好		一部破壊		一部破壊（観音様参拝のための整備）	
遺構遺物	土器、敲石、獣骨 〔大迫町教育委員会〕		縄文土器、フレイク、炭化物 〔大迫町教育委員会〕		石鏃等（洞口整備の際出土）	
備考	洞口から７～8ｍ程入ったやや広い場所に遺物が散乱。洞口、周囲の畑からも遺物出土。三ッ石岩穴の備考参照。		穴が遺跡ではなく、岩陰が遺跡。崩落激しい。		昭和62（1987）年－東山ケイビングクラブ調査	
文献	76		なし		76	
位置図						
写真						

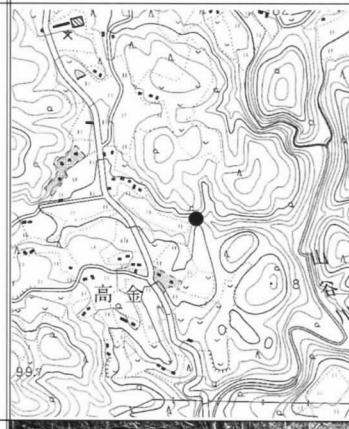
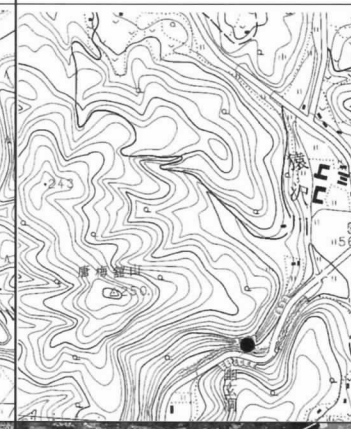
No.コード	12	〔LF70－2330〕	13	〔LE71－1371〕	16	〔LD69－1023〕
遺跡名／別称	弥兵ェ穴（やへいあな）		上の岩洞穴（かみのいわ）		ヤス穴	
所在地	稗貫郡大迫町内川目字白岩		稗貫郡大迫町内川目字飛内		和賀郡沢内村	
図幅	ＮＪ-54-13-11-４、陸中折壁		ＮＪ-54-13-11-２、早池峰山		ＮＪ-54-19-3-4、北川舟	
成因・標高・比高	石灰岩 230ｍ・３ｍ		石灰岩 730ｍ・約230ｍ		溶結凝灰岩 約900ｍ・－	
立地・周囲の目印	稗貫川の左岸・石灰岩の露頭している一帯の西端		上岩山山頂付近		尾根の東側斜面・和賀岳の登山道から林道へ、沢の合流点から尾根筋を登る。	
時期	縄文（前、後）、奈良、平安		縄文、弥生		近代以降	
残存状況	良好		良好		良好（崩落著しい）	
遺構遺物	縄文土器、土師器、獣骨（シカ中心）〔大迫町教育委員会〕		土器 〔大迫町教育委員会〕		哺乳鋼骨（カモシカ、ニホンザル、ノウサギ、テン）〔個人〕	
備考	下部の穴から遺物出土。		平成11（1999）年、大迫町教育委員会ほかで試掘。洞口の下は崖。		骨に焼痕。解体作業場。	
文献	49		40		なし	
位置図						
写真						

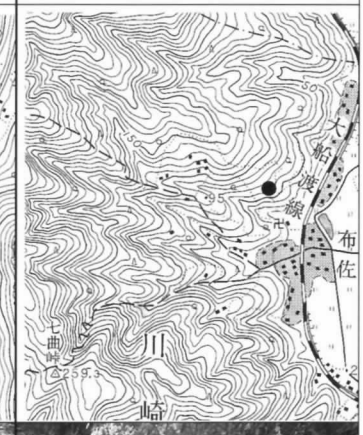
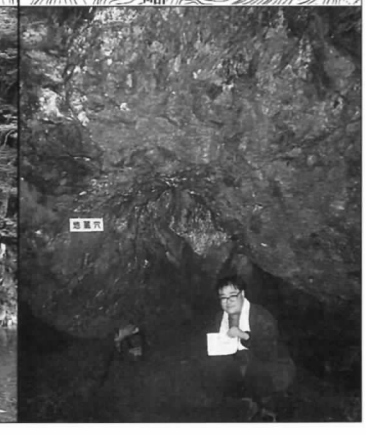
No.コード	18	〔ME58－1372〕	19	〔ME59－1159〕	20	〔ME97－1016〕
遺跡名／別称	赤部洞穴　（あかぶ） ／箱岩（はこいわ）		月山堂洞穴（つきやまどう）		根岸洞穴第1　（ねぎし）	
所在地	江刺市梁川字赤部		江刺市梁川字柳沢		江刺市岩谷堂字根岸159番地	
図幅	ＮＪ-54-14-13-1、口内		ＮＪ-54-14-9-3、野手崎		ＮＪ-54-14-13-2、陸中江刺	
成因・標高・比高	安山岩 約430ｍ・－		安山岩 約340ｍ・－		安山岩 50ｍ・不明	
立地・周囲の目印	山頂部・国道ＪＡから晴山線を北上、道路沿いの標柱から約1km北西へ。		山頂部・月山神社そば		広瀬川左岸・岩瀬橋から川沿いに数十ｍ上流の崖面基部。	
時期	縄文		縄文		縄文	
残存状況	良好		良好		壊滅（道路工事で洞口封鎖）	
遺構遺物	住居址、石鏃その他の石器（文献20より）		縄文土器、石器（県遺跡台帳）		焚火跡、縄文土器（中期）、石鏃、石匙、「曲玉」（県遺跡台帳）	
備考	住居址というより原石採掘場。今回は遺跡の確認できず。		原石採掘場。今回は遺跡の確認できず。		根岸洞穴（群）として遺跡周知。	
文献	19，20，57		19，57		19	
位置図						
写真						

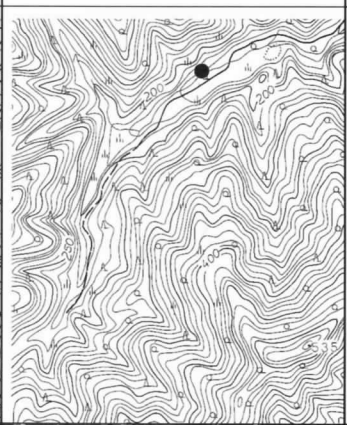
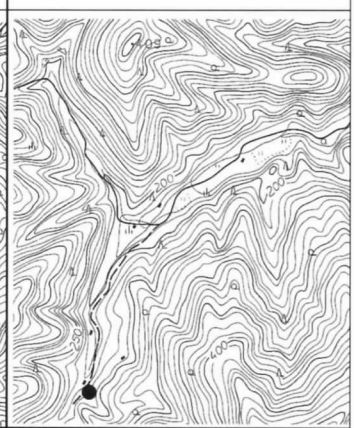
No.コード	21	〔ME97－1016〕	22	〔ME97－1016〕	23	〔ME89－1394〕
遺跡名／別称	根岸洞穴第２（ねぎし）		根岸洞穴第４（ねぎし）		馬馳洞穴（まはせ）	
所在地	江刺市岩谷堂字根岸229の２		江刺市岩谷堂字根岸229の２		江刺市玉里字玉ノ木沢	
図幅	ＮＪ-54-14-13-２、陸中江刺		ＮＪ-54-14-13-２、陸中江刺		ＮＪ-54-14-９-４、人首	
成因・標高・比高	安山岩 60ｍ・不明		安山岩 60ｍ・不明		不明 約170ｍ・－	
立地・周囲の目印	根岸洞穴群。東北油化の工場の南側の丘陵緩斜面。		根岸洞穴群。第２に近接。		不明・人首街道沿い。	
時期	縄文		縄文		不詳	
残存状況	良好		良好		一部破壊（ヒューム管埋設）	
遺構遺物	爐跡、縄文土器（遺跡台帳より）〔岩手県博小田島コレクション〕				－	
備考	洞穴というより岩陰。小田島禄郎調査（昭和初年頃）。		洞穴というより岩陰。洞穴群の上部台地畑より縄文中期土器片広域に出土。		文献57中の所在地は間違い。縦穴で、最下部からは横穴伸びる。	
文献	19		19		19，57	
位置図						
写真						

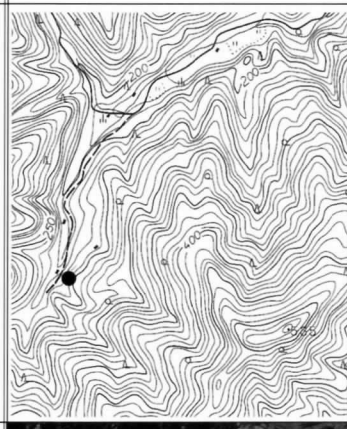
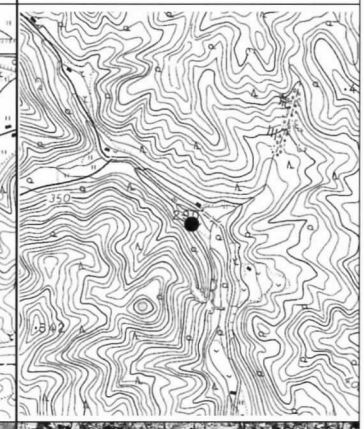
No.コード	24	〔MF90－1139〕	25	〔NE08－1385〕	26	〔NE08－2314〕
遺跡名／別称	阿茶山洞穴（あちゃやま）／泥棒岩（どろぼういわ）		毘沙門洞窟（びしゃもん）／毘沙門岩窟（びしゃもんがんくつ）		居内洞穴（いない）／かもり穴	
所在地	江刺市米里字南新田		江刺市藤里字石名田25		江刺市藤里字日照田	
図幅	ＮＪ-54-14-9-4、人首		ＮＪ-54-14-13-2、陸中江刺		ＮＪ-54-14-13-2、陸中江刺	
成因・標高・比高	花崗岩 約300ｍ・－		火山礫を含む岩帯 120ｍ・不明		不明 約100ｍ・不明	
立地・周囲の目印	阿茶山山腹・平田牧場から牧草地を横切り、阿茶山牧野組合の作業道を数百ｍ歩いた地点を下る。		伊手川右岸にある愛宕山中腹・愛宕山自然公園中の奥の院南側。		伊手川左岸（蛇行部分）・毘沙門洞窟の対岸	
時期	不詳		不詳		不詳	
残存状況	良好		良好		破壊（採石による）	
遺構遺物	なし？		古銭（遺跡台帳による）		－	
備考	入口狭い。案内人必要。洞窟というより岩陰。		洞穴というより岩陰。内部に社。愛宕山は中世城館。			
文献	19，57		19		19，57	
位置図						
写真						

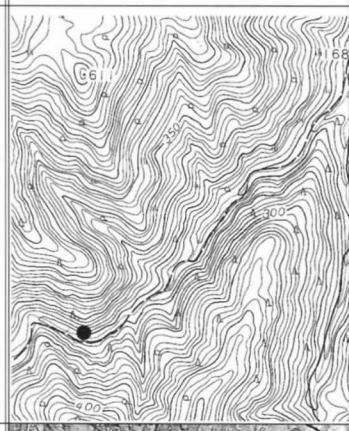
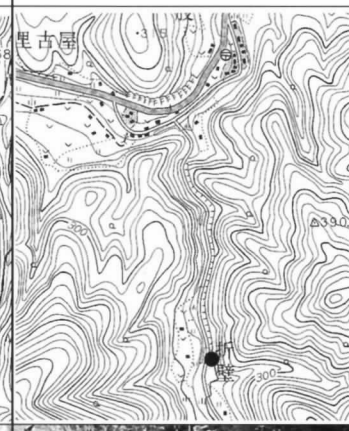
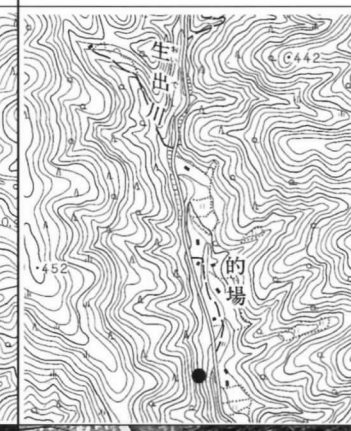
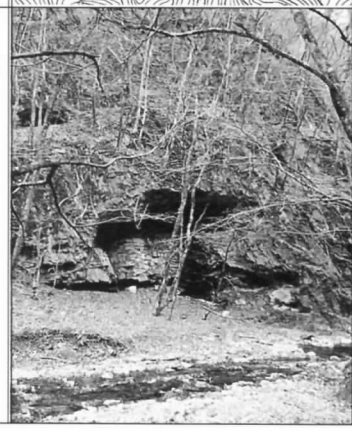
No.コード	27	〔NE82－0306〕	29	〔NE68－1378〕	31	〔NE78－0304c〕
遺跡名／別称	不動窟（ふどうくつ）		姫穴（ひめあな）		川底下の穴（かわそこしたのあな）	
所在地	一関市厳美町本町字下真坂80－2		東磐井郡東山町田河津字石の森28番地		東磐井郡東山町田河津字高金	
図幅	ＮＪ-54-20-3-１、本寺		ＮＪ-54- 14-14-2、前沢		ＮＪ-54-14-15-1、一関	
成因・標高・比高	浮石流凝灰岩（厳美層） 190m・30m		石灰岩 60m・約10m		石灰岩 55m・約10m	
立地・周囲の目印	本寺川左岸の山の中腹・本寺川の中を渡って林の中を過ぎた竹林付近。		夏山川の右岸の崖の中程・県道橋から夏山川を溯る。		山谷川の右岸・川底第2洞穴と近接	
時期	縄文		縄文		不詳	
残存状況	良好		一部破壊		良好	
遺構遺物	縄文土器		縄文土器、貝製装飾品、獣骨片		人為的に破壊された獣骨片（シカ他）〔東山ケイビングクラブ〕	
備考	洞床に黒土堆積。		洞内は乾燥し、土砂の流入著しい。		昭和63（1988）年－東山ケイビングクラブ調査。洞口前は平場がなく狭い。	
文献	なし		52，71，75		75	
位置図						
写真						

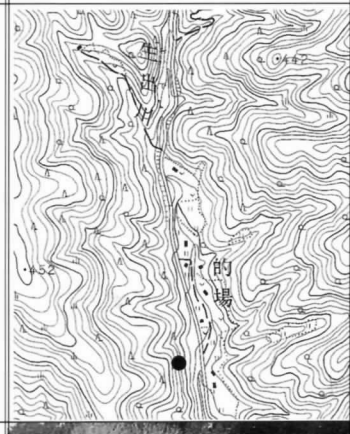
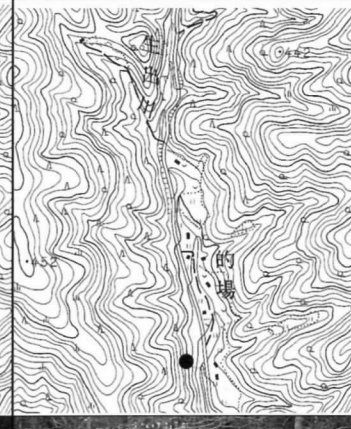
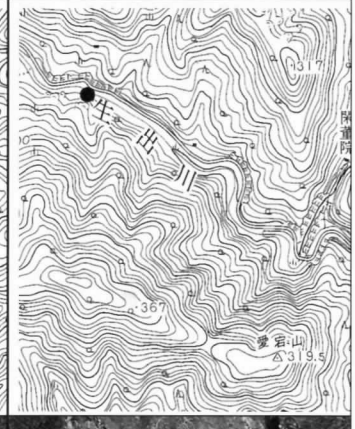
No.コード	33	〔NE68－2325〕	35	〔NE69－2161〕	36	〔NE79－0112〕
遺跡名／別称	高金の穴（たかがねのあな）		子安観音穴（こやすかんのんあな）／マリア観音洞(かんのんどう)		東本町の穴（ひがしもとまちのあな）	
所在地	東磐井郡東山町田河津字高金		東磐井郡東山町長坂字西本町		東磐井郡東山町長坂字東本町	
図幅	ＮＪ-54-14-14-2、前沢		ＮＪ-54-14-10-４、沖田		ＮＪ-54-14-11-3,千厩北部	
成因・標高・比高	石灰岩 85m・約５m		石灰岩 60m・約15m		石灰岩 55m・約５m	
立地・周囲の目印	山谷川に注ぐ小河川の右岸・県道高金バス停から小河川に沿う道を下る。		猿沢川右岸の崖の中腹・マリヤ観音の奥		小河川の右岸・旧県道今泉街道に接する。	
時期	縄文		縄文		不詳	
残存状況	良好		一部破壊（観光開発）		良好	
遺構遺物	縄文土器、獣骨片（人為的破壊）〔東山ケイビングクラブ〕		－		人為的に破壊された獣骨片（シカ他）〔東山ケイビングクラブ〕	
備考	開口部と川原の間は急傾斜。		観光整備により洞床はコンクリートで固められ、周辺には多数の石仏が安置。		昭和56（1981）年－洞穴学研究会、昭和59（1984）年－東山ケイビングクラブ調査。	
文献	75		52，71，75		75	
位置図						
写真						

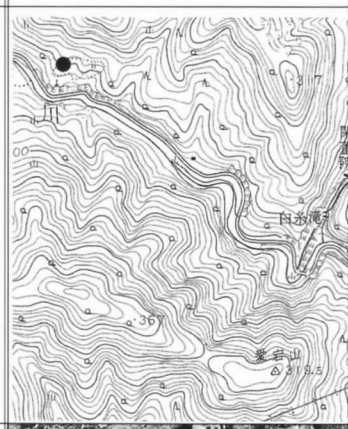
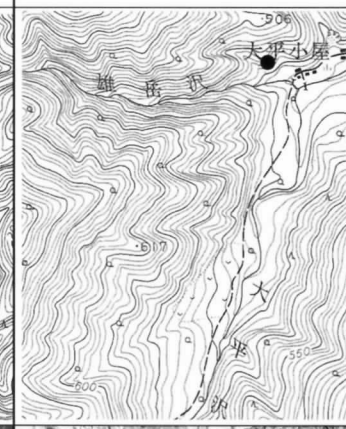
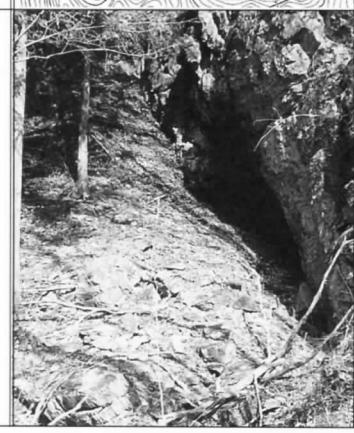
No.コード	37	〔NE78－1356〕	39	〔NF52－2334〕	42	〔NE79－0112〕
遺跡名／別称	羽根掘の穴(はねぼりのあな)		松井洞穴（まつい）		猪穴（いのししあな）／地蔵穴（じぞうあな）	
所在地	東磐井郡東山町長坂字長平		東磐井郡大東町大原字松井		東磐井郡川崎村門崎字石蔵161番地2	
図幅	ＮＪ-54-14-15-１、一関		ＮＪ-54-14-10-2、陸中大原		ＮＪ-54-14-15-1、一関	
成因・標高・比高	石灰岩 30ｍ・２ｍ		石灰岩 190ｍ・約６ｍ		石灰岩 57ｍ・－	
立地・周囲の目印	山谷川の右岸		砂鉄川右岸の岸壁		布佐洞穴の右側。洞内に看板。	
時期	不詳		不詳		不詳（布佐洞穴と同じ？）	
残存状況	良好（土砂流入）		良好		良好	
遺構遺物	近世の鍾乳石採集痕跡。		人骨		土器片、古銭片（今回の調査で採取）	
備考	洞口入り口は二箇所。		明治38（1905）年－柴田常恵、鈴木貞次郎調査		昭和45（1970）年調査（団長高橋泰三）。	
文献	52		１，71，73		36，41	
位置図						
写真						

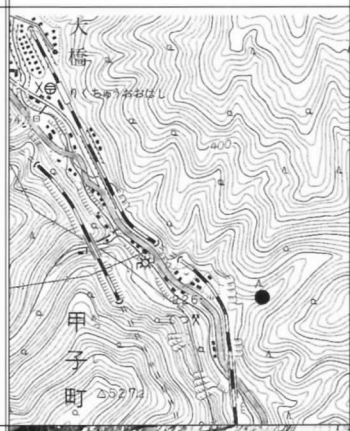
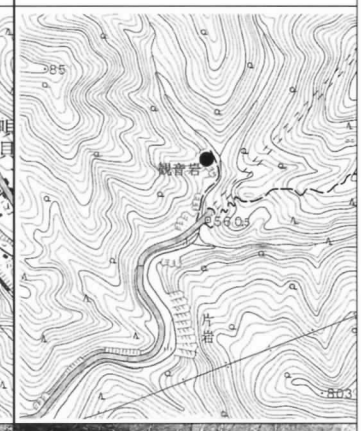
No.コード	43	〔OE17－2005〕	44	〔NF27－0176〕	45	〔NF27－1140a〕
遺跡名／別称	穴の沢（あなのさわ）		ホホユワ左洞（ほほゆわさどう）		行人沢第1洞（ぎょうにんさわだいいちどう）	
所在地	西磐井郡花泉町金沢字穴の沢		大船渡市日頃市町字上坂本沢		大船渡市日頃市町字上坂本沢	
図幅	ＮＪ-54-14-15-2、有壁		ＮＪ-54-14-6-1、盛		ＮＪ-54-14-6-1、盛	
成因・標高・比高	凝灰質砂岩 100ｍ・－		石灰岩 170ｍ・37ｍ		石灰岩 220ｍ・20ｍ	
立地・周囲の目印	丘陵緩斜面・町道を芭蕉石碑脇の旧道にそれ、大きなため池の西側。		石灰岩の路頭に開口		林道から沢（上に砂防ダム）沿いに登った石灰岩の露頭	
時期	遺跡でない？（亞炭採掘における試し掘り？）		縄文		縄文（晩）	
残存状況	良好		良好		良好	
遺構遺物	－		縄文土器、獣骨片〔岩手県立博物館〕		縄文土器、哺乳類骨（イノシシ、シカ）、鳥骨（種不明）、貝類（アサリ、ウチムラサキ）	
備考	7個の洞穴があったとの情報があり（現存は3個）、どの洞穴が遺跡指定されたのか不明。		開口部は縦に長い。		昭和60（1985）年－東山ケイビングクラブ調査	
文献	14		70		70	
位置図						
写真						

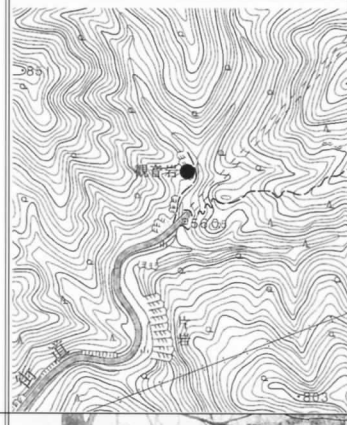
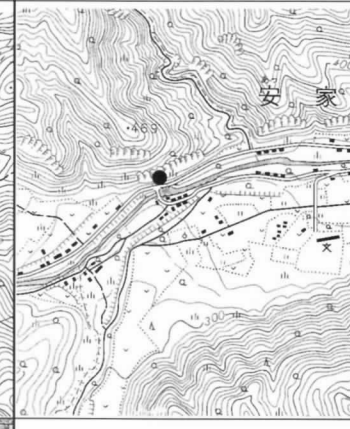
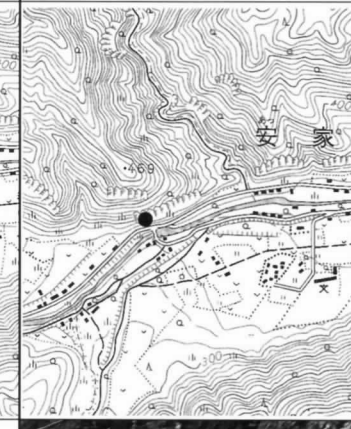
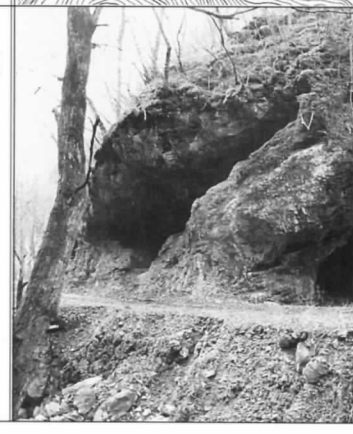
No.コード	46	〔NF27－1140b〕	51	〔NF05－0343〕	52	〔MF85－1164〕
遺跡名 ／別称	行人沢第２洞（ぎょうにんさわだいにどう）		管岩洞穴（すげいわ） ／中上の岩穴（なかがみのいわあな）？		奥新切こうもり穴（おくにいぎり・あな） ／蝙蝠穴（こうもりあな）	
所在地	大船渡市日頃市町字上坂本沢		気仙郡住田町上有住大畑		気仙郡住田町上有住字奥新切	
図幅	ＮＪ-54-14-6-1、盛		ＮＪ-54-14-５-４、陸前八日町		ＮＪ-54-14-５-４、陸前八日町	
成因・標高・比高	石灰岩 220m・20m		石灰岩 150m・20m		石灰岩 300m・４m	
立地・周囲の目印	沢を挟んで第1洞の向かい		気仙川左岸・道路際		新切川右岸・砂防ダム近くの保安林の看板の上	
時期	縄文（後）		縄文(後・晩)		縄文（晩）	
残存状況	良好		良好		良好	
遺構 遺物	縄文土器片		土器、石器		縄文土器（晩期大洞Ａ式）、獣骨〔陸前高田市立博物館〕	
備考	昭和60（1985）年－東山ケイビングクラブ調査		奥に向かって下がる。幅8、奥5、高２m。		近くに車の待避所あり。	
文献	70		103，43，37		56	
位置図						
写真						

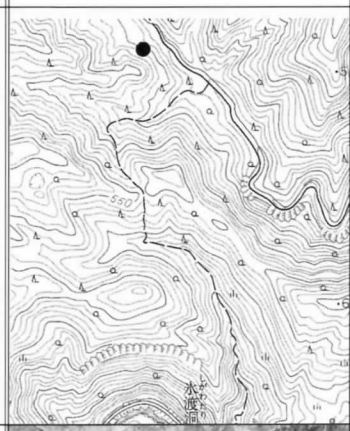
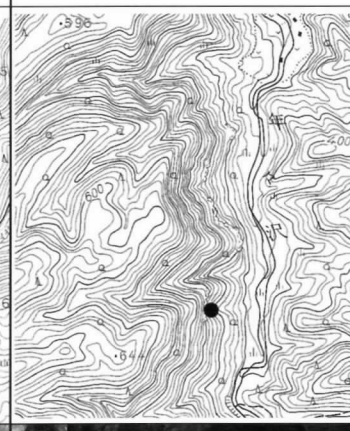
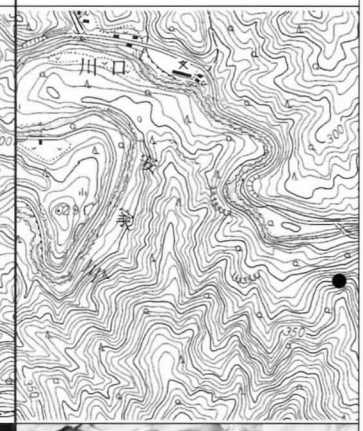
No.コード	54	〔NF25－2159〕	55	〔NF24－0112〕	56	〔NF34－2224〕
遺跡名 ／別称	鬼丸洞穴（おにまる） ／鬼のマヤ		折壁Ⅱ（おりかべに）		宝龍洞窟（ほうりょう） ／権現穴（ごんげんあな）	
所在地	気仙郡住田町世田米合地沢（鬼丸？）		気仙郡住田町下大股地内		陸前高田市矢作町字的場	
図幅	ＮＪ-54-14-6-3、世田米		ＮＪ-54-14-10-1、鷹巣山、 ＮＪ-54-14-6-1、世田米		ＮＪ-54-14-6-3、世田米	
成因・標高・比高	石灰岩 250m・約4m		石灰岩 約150m・約3m		石灰岩 250m・10m	
立地・周囲の目印	合地沢上流の左岸		沢に面する・県道246号沿い		生出川支流の右岸・県道を宅地前で曲がり海童神社へ。	
時期	縄文（後）		縄文		縄文（後？、晩）、弥生	
残存状況	良好				良好（洞口部に神社）	
遺構 遺物	縄文土器、加工痕のある動物遺骸		一部破壊（県道により削平）		縄文、弥生土器、動物遺存体（イガイ、シカ）〔大船渡市博、岩手県博〕	
備考	他に二箇所洞穴。県遺跡地図の出土位置間違い。		土器片、骨片		開口部から50mの地点で弥生土器採集。碑あり。	
文献	103，37，43		なし		22，86	
位置図						
写真						

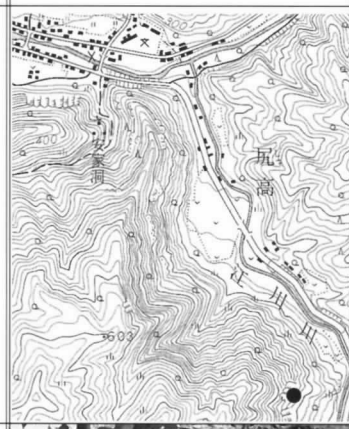
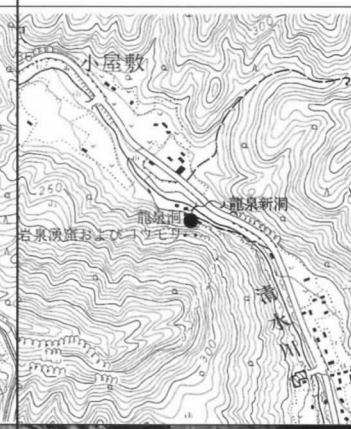
No.コード	57	〔NF34－2232〕	58	〔NF34－2225〕	60	〔NF54－1322〕
遺跡名／別称	宝龍第一岩陰（ほうりょうだいいちいわかげ）		宝龍第二岩陰（ほうりょうだいにいわかげ）		座頭穴（ざとうあな）	
所在地	陸前高田市矢作町字的場		陸前高田市矢作町字的場		陸前高田市矢作町字木戸口	
図幅	ＮＪ-54-14-６-３、世田米		ＮＪ-54-14-６-３、世田米		ＮＪ-54-14-６-４、今泉	
成因・標高・比高	石灰岩 270ｍ・20ｍ		石灰岩 250ｍ・5ｍ		石灰岩 110ｍ・約３ｍ	
立地・周囲の目印	生出川支流の右岸・第二岩陰の北側の崖上30ｍ		生出川支流の右岸・海童神社の脇に標柱あり。		生出川右岸・県道沿いに看板	
時期	不詳		不詳		不詳	
残存状況	良好（土砂流入）		良好（内部にガラスビン等廃棄）		良好	
遺構遺物	人骨？		－		土器、石器（スクレイパー？）、動物遺存体（シカ・鳥？）	
備考	幅10、奥1、高１ｍ。位置違う可能性あり。		県道左脇に住宅がある所を右折。位置違う可能性あり。		洞口から20ｍで石器、流水。流水内にシカの骨。	
文献	なし		なし		22	
位置図						
写真						

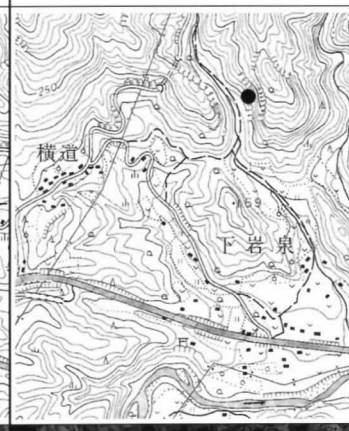
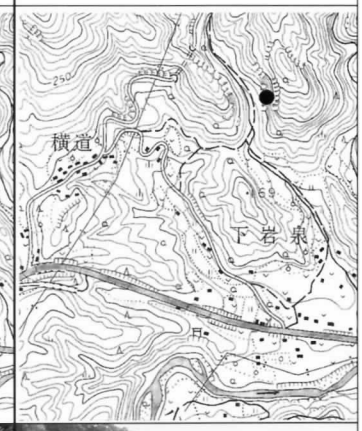
No.コード	61	〔NF54－0392〕	64	〔MG11－0384〕	65	〔MF49－2126〕
遺跡名／別称	赤魚洞窟（あかうお）		馬場野（ばばの）		雄岳洞タラ窟（おだけどうたらくつ）	
所在地	陸前高田市矢作町字木戸口		大槌町大槌字馬場野		釜石市橋野町第32地割	
図幅	ＮＪ-54-14-６-４、今泉		ＮＪ-54-13-４-３、陸中金沢		ＮＪ-54-14-５-１、陸中大橋	
成因・標高・比高	石灰岩 150ｍ・約30ｍ		石灰岩 70ｍ・11.5ｍ		石灰岩 420ｍ・30ｍ	
立地・周囲の目印	生出川左岸・県道から墓地へ行く道にそれると朽ちかけた標柱		金沢川左岸・県道沿い		雄岳沢の左岸	
時期	不詳		縄文		縄文	
残存状況	良好（土砂流入）		一部破壊（前洞部削平、穴に詰め物）		良好	
遺構遺物	土器		縄文土器（晩期）、獣骨		縄文土器片、骨片、黒曜石〔釜石市教育委員会？〕	
備考	洞内から流水。その水を引くためのパイプ敷設。		コンクリートの吹きつけにより、中に入れない。			
文献	22		なし		84	
位置図						
写真						

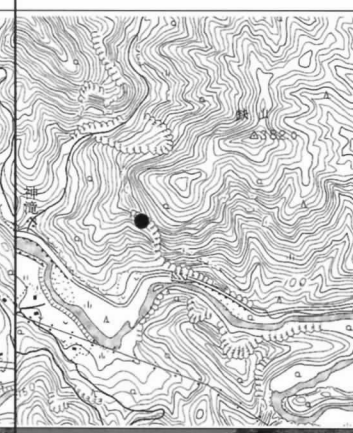
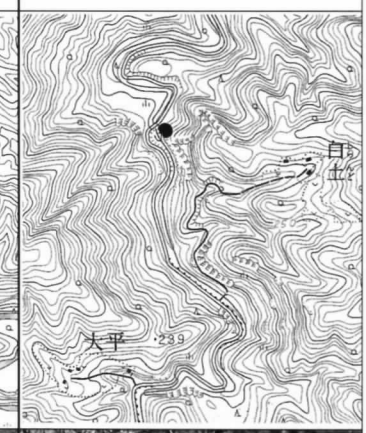
No.コード	66	〔MF69－2144〕	67	〔MF79－1069〕	70	〔MF68－2121〕
遺跡名／別称	大橋桜沢岩陰（おおはしさくらざわいわかげ）		枯松沢土倉洞穴（かれまつざわつちくら）		沓掛銭鋳穴（くつかけぜにかけあな）／観音岩第3洞（かんのんいわだいさんどう）	
所在地	釜石市甲子町第1地割		釜石市甲子町第2地割地崎国有林内		遠野市上郷町細越字沓掛	
図幅	ＮＪ-54-14-５-１、陸中大橋		ＮＪ-54-14-５-１、陸中大橋		ＮＪ-54-14-５-１、陸中大橋	
成因・標高・比高	粘板岩 260ｍ・４ｍ		石灰岩 310ｍ・1.6ｍ		石灰岩 575ｍ・2.5ｍ	
立地・周囲の目印	桜沢左岸・桜沢付近の貯水池から沢の奥へ、簡易取水口付近		沢の左岸・県道がカーブする辺りから沢沿いに		早瀬川右岸・仙人トンネル手前の駐車場から奥へ、一番奥の洞穴	
時期	縄文（中）		不詳		不詳	
残存状況	良好		良好		一部破壊（石灰岩採掘）	
遺構 遺物	土器 〔釜石市教育委員会〕		土器片 〔釜石市教育委員会〕		土器	
備考	桜沢に通じる歩道あり。		河床との比高差少なく、時期は新しい？		前面は石灰岩採掘により広場となっている。	
文献	84		84		なし	
位置図						
写真						

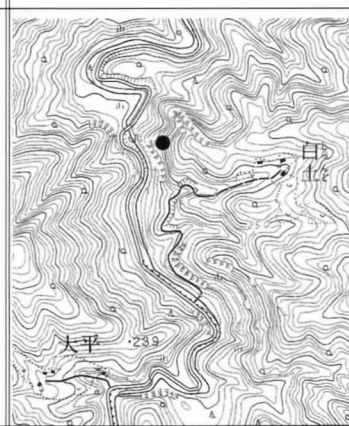
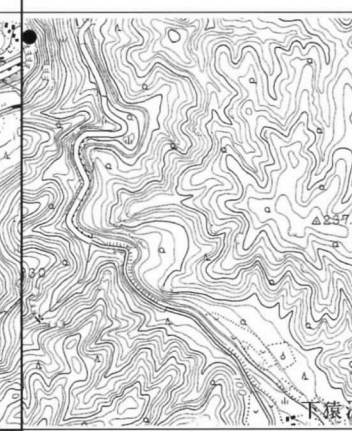
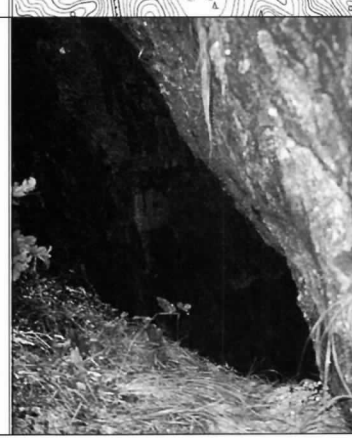
No.コード	71	〔MF68－2142〕	72	〔KF08－1337〕	73	〔KF08－1336〕
遺跡名／別称	沓掛観音穴（くつかけかんのんあな）／観音岩第Ⅰ洞（かんのんいわだいいちどう）・観音窟（かんのんくつ）		松林洞穴Ⅰ（まつばやしどうけついち）		松林洞穴Ⅱ（まつばやしどうけつに）	
所在地	遠野市上郷町細越字沓掛		下閉伊郡岩泉町安家字松林		下閉伊郡岩泉町安家字松林	
図幅	ＮＪ-54-14-５-１、陸中大橋		ＮＪ-54-13-５-１、安家		ＮＪ-54-13-５-１、安家	
成因・標高・比高	石灰岩 570ｍ・2.5ｍ		石灰岩 280ｍ・12ｍ		石灰岩 285ｍ・17ｍ	
立地・周囲の目印	早瀬川右岸・仙人トンネル手前の駐車場から奥へ、最初の洞穴		安家川の左岸・擁壁裏		安家川左岸・Ⅰ遺跡の奥（上流側）	
時期	不詳		縄文（早）		不詳	
残存状況	良好		一部破壊（盗掘）		一部破壊（ビン等捨ててある）	
遺構遺物	土器、「食屑」		石器 〔岩泉町民会館〕		土器片 〔岩泉町民会館〕	
備考	入り口に早瀬観音を祀った跡。		幅2.5、奥4.5、高1.5ｍ		幅7、奥7、高４ｍ	
文献	2		77		77	
位置図						
写真						

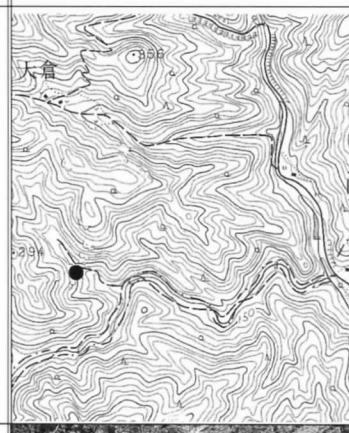
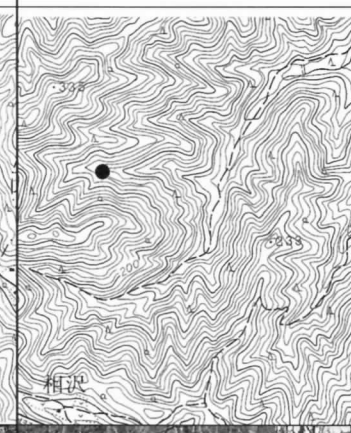
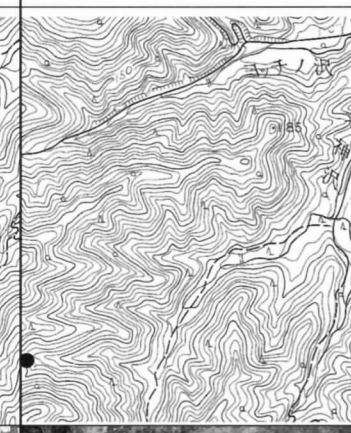
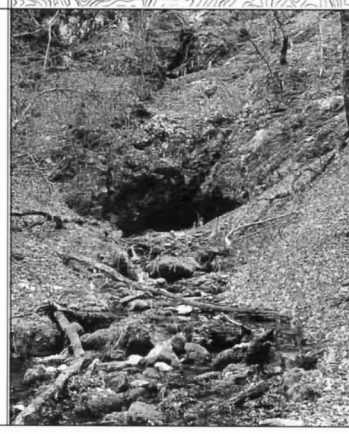
No.コード	74	〔JF98－2273〕	75	〔KG00－2160〕	76	〔KF09－0359〕
遺跡名／別称	銭吹穴鍛冶（ぜにふきあなかじ）		桃の木洞（もものきどう）		川口相良向かい洞穴（かわぐちあいらむかい）／相良向かいの穴(あいらむかいのあな)	
所在地	下閉伊郡岩泉町安家字松林		下閉伊郡岩泉町安家字年々		下閉伊郡岩泉町安家字年々	
図幅	ＮＪ-54-13-５-１、安家		ＮＪ-54-13-１-３、沼袋		ＮＪ-54-13-１-３、沼袋	
成因・標高・比高	石灰岩 450ｍ・約30ｍ		石灰岩 430ｍ・約80ｍ		石灰岩 300ｍ・約100ｍ	
立地・周囲の目印	長内川右岸		年々沢左岸		安家川右岸の山腹上部	
時期	縄文、近世		縄文		縄文（中・晩）、弥生	
残存状況	一部破壊		一部破壊		良好	
遺構遺物	縄文土器、密鋳銭枝銭、鉄滓 〔個人・岩泉町民会館〕		土器片 〔岩泉町民会館〕		土器片、石器、骨針、骨角器 〔岩泉町民会館〕	
備考	偽金造りの跡という伝承。平成７（1995）年－町教委調査。幅17、奥47、高４ｍ。		角礫散在（洞奥からの流れ？）。幅7、奥1,650、高10ｍ。		昭和63（1988）年－日本洞穴学研究所調査。幅5、奥300、高３ｍ。	
文献	94		なし		83，78	
位置図						
写真						

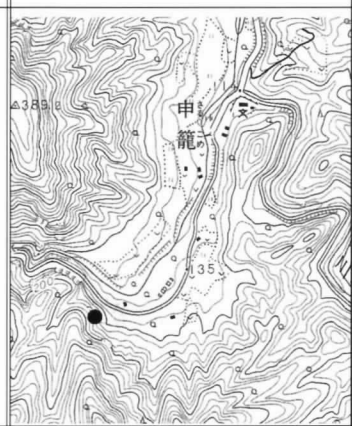
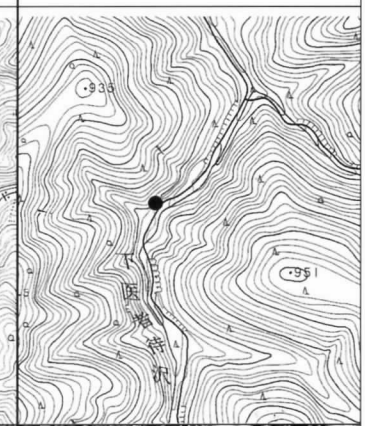
No.コード	77	〔KF09－2240〕	78	〔KG50－0237〕	80	〔KG50－0387〕
遺跡名／別称	おなめ穴（おなめあな）／大穴（おおあな）		龍泉洞（りゅうせんどう）		横道（よこみち）	
所在地	下閉伊郡岩泉町安家字江川		下閉伊郡岩泉町岩泉字神成		下閉伊郡岩泉町岩泉字横道	
図幅	ＮＪ-54-13- 5-１、安家、ＮＪ-54-13-１-３、沼袋		ＮＪ-54-13-１-４、岩泉		ＮＪ-54-13-１-４、岩泉	
成因・標高・比高	石灰岩 380ｍ・約90ｍ		石灰岩 160ｍ・20ｍ		石灰岩 175ｍ・－	
立地・周囲の目印	江川川左岸・開口部に木が一本立つ		清水川の左岸・龍泉洞入口の上部に開口		涸沢右岸	
時期	弥生		奈良、平安		縄文(前・中・晩)	
残存状況	良好		壊滅(入口がふさがれている)		一部破壊	
遺構遺物	土器片、石器、骨角器 〔岩泉町民会館〕		土師器		縄文土器、貝 〔岩泉町民会館〕	
備考	平成2(1990)年－日本洞穴学研究所調査。幅7.5、奥35、高7.5ｍ。		龍泉洞の旧入洞口。清水川神社の祠あり。幅3、奥1,500、高６ｍ。		岩陰。幅5、奥5、高2.5ｍ。岩泉高校郷土研究部の試掘トレンチあり。	
文献	82，91		91		91	
位置図						
写真						

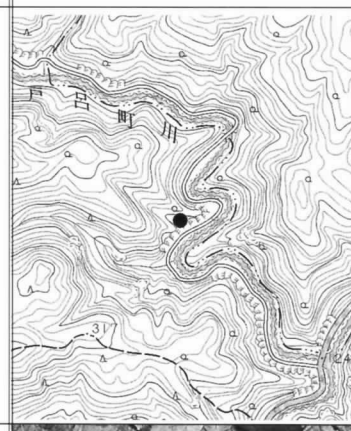
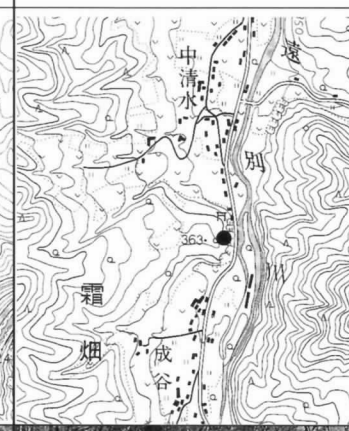
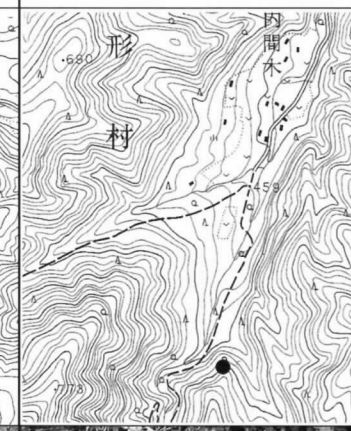
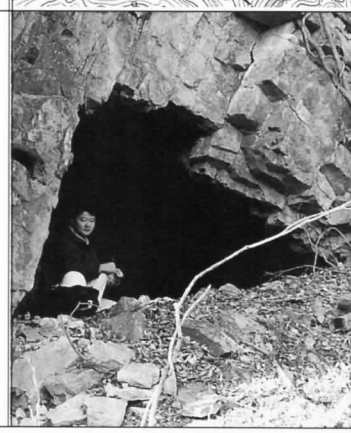
No.コード	81	〔KG50－0367〕	82	〔KG51－0062〕	83	〔KG51－0072a〕
遺跡名／別称	横道岩陰（よこみちいわかげ）		三沢岩陰（みさわいわかげ）		三沢洞穴（みさわ）	
所在地	下閉伊郡岩泉町岩泉字横道		下閉伊郡岩泉町岩泉字大北川		下閉伊郡岩泉町岩泉字大北川	
図幅	ＮＪ-54-13-１-４、岩泉		ＮＪ-54-13-１-４、岩泉		ＮＪ-54-13-１-４、岩泉	
成因・標高・比高	石灰岩 230ｍ・－		石灰岩 160ｍ・30ｍ		石灰岩 160ｍ・30ｍ	
立地・周囲の目印	横道遺跡の上部		三沢の左岸、一番上流側		三沢の左岸、瓢箪穴の斜め下上流側	
時期	縄文		弥生		弥生	
残存状況	良好		一部破壊		一部破壊	
遺構遺物	縄文土器 〔岩泉町民会館〕		弥生土器、石器 〔岩泉町民会館〕		弥生土器 〔岩泉町民会館〕	
備考	昭和63（1988）年－日本洞穴学研究所調査。幅６、奥２、高３ｍ。		昭和36(1961)年－江坂輝弥調査。幅15、奥14、高８ｍ。		昭和36(1961)年－江坂輝弥調査。幅15、奥10、高３ｍ。	
文献	77，91		91		91	
位置図						
写真						

No.コード	84	〔KG51－0072b〕	86	〔KG51－1156〕	88	〔KG61－0051〕
遺跡名／別称	しんいち岩陰（いわかげ）		赤穴洞穴（あかあな）		白土穴の口（しらんどあなのくち）	
所在地	下閉伊郡岩泉町岩泉字大北川		下閉伊郡岩泉町岩泉字外川目		下閉伊郡岩泉町岩泉字白土	
図幅	ＮＪ-54-13-１-４、岩泉		ＮＪ-54-13-１-４、岩泉		ＮＪ-54-13-１-４、岩泉、ＮＪ-54-13-２-３、有芸	
成因・標高・比高	石灰岩 155ｍ・30ｍ		石灰岩 200ｍ・160ｍ		石灰岩 110ｍ・10ｍ	
立地・周囲の目印	三沢の左岸、瓢箪穴の約20ｍ下		小本川に面する缺山中腹・女神橋手前の町道に入り、ロックシェルターの上		鼠入川右岸の段丘状の地形・道路に面する。	
時期	旧石器、弥生		縄文(中・後・晩)、弥生		縄文(中・晩)	
残存状況	一部破壊		壊滅		良好	
遺構遺物	石器、弥生土器 〔東北旧石器文化研究所〕		土器片、石器、骨角器 〔岩泉町民会館〕		土器、骨角器 〔岩泉町民会館〕	
備考	平成10(1998)年－瓢箪穴発掘調査団調査。幅2、奥2、高1.5ｍ。		昭和62(1987)年－日本洞穴学研究所調査。幅5、奥160、高2.5ｍ。		岩陰状。昭和62(1987)年－日本洞穴学研究所調査。幅12、奥15、高5ｍ。	
文献	なし		91，10，77		10，77，91	
位置図						
写真						

No.コード	89	〔KG61－0040〕	90	〔KG50－2190〕	91	〔KG61－0304〕
遺跡名／別称	穴の口上方穴（あなのくちじょうほうあな）		穴岩洞穴（あないわ）／尼額の穴（あまぶでいのあな）		乙茂岩陰(おともいわかげ)	
所在地	下閉伊郡岩泉町岩泉字白土		下閉伊郡岩泉町尼額字松坂		下閉伊郡岩泉町乙茂字上向	
図幅	ＮＪ-54-13-１-４、岩泉、ＮＪ-54-13-２-３、有芸		ＮＪ-54-13-１-４、岩泉、ＮＪ-54-13-２-３、有芸		ＮＪ-54-13-１-４、岩泉、ＮＪ-54-13-２-３、有芸	
成因・標高・比高	石灰岩 200ｍ・100ｍ		石灰岩 130ｍ・16ｍ		石灰岩 200ｍ・160ｍ	
立地・周囲の目印	鼠入川右岸、白土穴の口遺跡の上部。		尼額大沢右岸・中に穴岩神社あり。		猿沢川左岸の山頂近く	
時期	縄文		弥生		縄文	
残存状況	良好		壊滅		一部破壊	
遺構遺物	骨角器 〔岩泉町民会館〕		土器、石器、人骨 〔岩泉町民会館〕		縄文土器 〔日本洞穴学研究所〕	
備考	昭和62(1987)年－日本洞穴学研究所調査。幅4、奥12、高３ｍ。		幅10、奥60、高４ｍ。		昭和62(1987)年－日本洞穴学研究所調査。幅4、奥1.5、高３ｍ。	
文献	77，91		10，91，77		77，91	
位置図						
写真						

No.コード	92	〔KG72－0393〕	93	〔KG62－1354〕	94	〔KG62－1344〕
遺跡名 ／別称	大穴（おおあな）		中里洞穴Ⅰ（なかさとどうけついち） ／よこゆえのあな		中里洞穴Ⅱ（なかさとどうけつに）	
所在地	下閉伊郡岩泉町猿沢字外山		下閉伊郡岩泉町中里字中里		下閉伊郡岩泉町中里字中里	
図幅	ＮＪ-54-13-２-１、田老鉱山		ＮＪ-54-13-２-１、田老鉱山		ＮＪ-54-13-２-１、田老鉱山	
成因・標高・比高	石灰岩 200ｍ・０ｍ		石灰岩 180ｍ・10ｍ		石灰岩 185ｍ・15ｍ	
立地・周囲の目印	沢の奥部・入口に摂待不動妙王の石碑。		沢の右岸・砂防ダムから3番目の沢を450ｍ奥へ。		中里洞穴Ⅰ遺跡の真上。	
時期	弥生		縄文		不詳	
残存状況	良好		良好		良好	
遺構 遺物	土器片 〔岩泉町民会館〕		縄文土器		石器	
備考	昭和62(1987)年－日本洞穴学研究所調査。幅8、奥1,300、高2.5ｍ。		平成元(1989)年－日本洞穴学研究所調査。幅6、奥15、高2.5ｍ。		平成元(1989)年－日本洞穴学研究所調査。幅２、奥３、高２ｍ。	
文献	77		79，87		79，87	
位置図						
写真						

No.コード	97	〔KG72－0050〕	98	〔KG45－1350〕	100	〔KF94－2284〕
遺跡名／別称	申籠洞穴（さるごめ）／笠松穴（かさまつあな）		見内川Ⅲ（みないかわさん）		下医者待沢岩陰（しもいしゃまちざわいわかげ）	
所在地	下閉伊郡岩泉町猿沢字日向前		下閉伊郡岩泉町門字見内川		下閉伊郡岩泉町釜津田字大板屋	
図幅	ＮＪ-54-13-２-３、有芸		ＮＪ-54-13-５-４、早坂高原		ＮＪ-54-13-６-４、害鷹森	
成因・標高・比高	石灰岩 180ｍ・約36ｍ		砂岩 470ｍ・７ｍ		粘板岩 740ｍ・約15ｍ	
立地・周囲の目印	主要地方道猿沢トンネルの乙茂側約150ｍから松林上部へ。		見内川左岸		沢の左岸	
時期	縄文		縄文(前・晩)		縄文	
残存状況	良好		良好		良好	
遺構遺物	縄文土器、動物遺存体(ツキノワグマ)〔岩泉町民会館〕		縄文土器(前、晩) 〔岩泉町民会館〕		石器 〔日本洞穴学研究所〕	
備考	昭和62(1987)年－日本洞穴学研究所調査。幅7、奥35、高５ｍ。		幅4、奥4.5、高1.5ｍ。		平成元(1989)年－日本洞穴学研究所調査。幅1.5、奥2、高0.5ｍ。	
文献	91，77		83		79，89	
位置図						
写真						

No.コード	101	〔JF37－2005〕	102	〔JF56－2175〕	103	〔JF87－1121〕
遺跡名／別称	攀枝垂岩（よしだれいわ）／ヨシノシダレ		成谷洞穴（なりや）		権の穴（ごんのあな）／下岩穴（しもいわあな）	
所在地	九戸郡山形村戸呂町11地割		九戸郡山形村霜畑11地割		九戸郡山形村小国	
図幅	Nk-54-18-7-2、大川目		Nk-54-18-8-3、陸中関		Nk-54-18-8-2、端神	
成因・標高・比高	露岩 180m・約40m		石灰岩 約350m・約5m		石灰岩 約470m・約3m	
立地・周囲の目印	小国川左岸・旧道沿い		遠別川の左岸・県道脇		沢の右岸・桂の大木	
時期	縄文、弥生		弥生		縄文(後・晩)、弥生(後)、奈良	
残存状況	良好		一部破壊(畑の客土に塞がれている)		一部破壊	
遺構遺物	縄文土器(晩期)、弥生土器、石器、土師器？、動物の骨？		弥生土器		土器片 〔地元個人蔵〕	
備考	三つ開口。動物の骨は洞外開口部付近から。		大正12(1923)年－小田島禄郎調査。		大正12(1923)年－小田島禄郎調査。落盤ひどい。	
文献	80		88		なし	
位置図						
写真						

第３章　岩手県内重要洞穴遺跡（岩谷洞穴）調査報告

１．概要

岩谷洞穴は、北上高地の北部に位置する下閉伊郡岩泉町釜津田字上栗宿にある洞穴遺跡である。北上高地は、丘陵性山地が連なる浸食の進んだ純平原であり、地質的には古生界の石灰岩や粘板岩それに白亜紀に貫入した花崗岩や変成岩が基盤となって複雑な分布を示している。このような地質構造から水系や山系も入り組んでおり、各地に石灰岩が分布する。

特にも岩泉町は、石灰岩が広く分布し、鍾乳洞の発達がみられ、百以上に及ぶ洞穴が確認されている。洞穴遺跡も昭和初期から知られ、近年においても旧石器時代の調査が実施されている瓢箪穴洞穴はじめ赤穴洞穴や竜泉新洞等著名な洞穴遺跡が多く分布する。また、岩泉町の小本川流域は、藩政時代より「小本街道」として、別名「鉄の道」、「塩の道」として内陸部と沿岸部を結ぶ重要な地域であった。遺跡の名前が付けられている岩谷付近は、街道沿いの牛馬宿があったとされる地域である。

遺跡は、大森山（1004ｍ）と権現山（942ｍ）に挟まれた山間で、小本川の支流である三田貝川に流れ込む関沢に面し、南方の石峠から北流してくる関沢の西岸に位置する。また、当該洞穴は、盛岡より早坂峠を経て門から岩泉、小本に通じる国道455号（旧、主要地方道盛岡岩泉線）沿いにあり、早坂峠から岩泉方面にしばらく下り、最初のトンネル（岩谷トンネル・長さ36ｍ）の真下にある。洞穴は石灰岩が部分的に張り出した路頭基部に開口している。

洞穴の標高は約590ｍであり、近接する関沢の河床から約７ｍ程のところに開口する。遺跡は、トンネル工事の際に人骨らしいものが多く出たという報告を受け、岩泉土木事務所の依頼を受け、岩手県教育委員会文化課の現地調査で洞穴遺跡であることが確認された。トンネル工事自体はほぼ完成していたことから、落盤を防ぐための応急措置のため、1975年７月に緊急発掘調査が行われた。

トンネル工事及び道路の拡幅工事等によって、洞穴の開口部分は土砂で埋まり、一部開口部は確認されたものの、奥行き等については不明である。ただし、言い伝えによると、街道を往来した人が洞穴で休んだとか馬喰の博打場になっていた等の言い伝えがあることからするとかなりの広さを持っていたと推定される。

発掘調査は、開口部入り口のごく狭い範囲幅2.5ｍ×１ｍ程の面積で開始された。ただし下位に行くに従って幅が広くなっており、幅が４ｍ程まで確認されている。

最上層の黒色土は、中央部では数㎝程の厚さを持つ灰層が数枚確認できた。ただし、壁際では剥落した石灰岩が多く、中央部より低くなっており柔らかく、層を明確に確認できなかった。しかも、遺物は壁際から後晩期の遺物が出ていたが、後期と晩期の層を区分できなかったし、装身具等もこの壁際の不明確な黒色土から出土したものが多かった。

黒色土の下位の暗褐色の層は、１～10㎝程の灰の層が何重にも見られた。この層は１ｍ以上もの堆積が見られ、かなり長期に渡り生活の痕跡が確認されている。時期は縄文時代前期末から中期中葉を主とすると考えられる。若干の骨角器や石製装身具も出土している。

さらにその下位にはやや褐色の強い層があり、壁際では大形の石灰岩を含む層であり、前期前葉までの土器を確認している。しかし、調査範囲が狭く危険であったことと工事による破壊が及ばないことからここまでで調査を終了した。この層の下位にも遺物が存在する可能性は高いと考えられる。

岩谷洞穴は、貝殻象嵌製や川真珠貝製等多くの装身具類が出土したことが、特筆されるが、内陸部と沿岸部の交流を示す遺物ともいえる。また、自然遺物の中では、サルが非常に多いと云うことも特徴のひとつである。

今回の再整理に当たり調査時の記録を捜したが、アルバムの一部以外見つけることはできなかった。したがって、以下の個々の遺物に記載されていたグリッド(区)・層位名をそのまま使用したが、詳細は不明である。区名としては、ＯＡ区、Ａ区、Ｃ区、Ｄ区、Ｅ区、Ｆ区、層名として、撹乱、表土黒土、１層、Ｉb層、Ｉd層、１－２層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅳb層、Ⅳc層、Ⅵ層、Ⅵb層、Ⅵc層、Ⅶ層、Ⅶb層、Ⅶc層、Ⅷ層、Ⅷa層、Ⅷb層、Ⅸ層、Ⅸb層、Ⅸc層、Ⅸe層、Ⅸh層、Ｘa層、Ｘb層、Ｘe層がある。土層はおそらくこの逆の順に堆積しているようであり、その層順は基本的にどこの区にも当てはまるようである。

なお、調査時の写真もあまり良いものがなく、今回は省略することとした。

２．出土遺物

(1)土器

最初に出土土器の概要および再整理の経過について述べておく。

調査では、30×40×20㎝のコンテナ10箱分（復元前）の土器が出土している。１点近世の擂り鉢が出土した他は、いずれも縄文土器である。

各層の出土土器の傾向を見ると、表土黒土～１層→後期中葉～晩期、Ｉｂ層→後期前葉、１－２層→中期後葉～後期前葉、Ⅲ層→中期後葉（大木８ｂ式新）、Ⅳｂ層→中期中葉、Ⅵ～Ⅶｃ層→中期前半、Ⅷ～Ⅸｂ層→前期末～中期初頭、Ⅸｃ～Ⅸｅ層→前期前半、Ⅸｈ～Ｘｂ層→前期初頭となるが、混入も多くあくまで傾向である。また、今回定量的に示す余裕がなかったが、粗製土器も意外に多いという印象も持った。

再整理をするにあたって、土器は次のような状態だった。水洗、注記は全て終了し、ビニール袋に収納され、ビニール袋には出土位置・層が記されていた。また、無文土器とそれ以外を別に収納しているものもあった。一部接着剤で接合されているものがあり、接合作業は済んでいるものと判断した。袋を開けてみても、接合できそうな土器はなかった。このような次第で、再整理は、図化のための選別から始めた。

選別の基準は以下のとおりである。出土土器をざっと見た所、下層から上層に向かって新しい時期の土器が多くなる傾向は認められたが、同じ袋に入っているものを見ると、混在しているという印象が強かった。そこで、出土土器の全ての時期、型式を網羅することを主眼とし、それに、ある程度出土量を反映させることを目的として、次のような選別基準を立てた。無文・地文のみ（ただし、特殊な原体で、時期･型式区分の目安になるようなものは有文扱い）のものは、10×10cm以上の破片のみを選ぶ。文様を持つものは、５×５cm以上の破片を選ぶ。ただし、それ以下でも、同じ時期･型式の破片が他になければ選ぶ。また、底部のみの破片は、1/2周以上残存しているものだけ選別した。なお、小型土器は、この限りではないが、実際に図化が可能なものは２点のみであった。

この基準によって256点の土器が選別されたが、紙幅の関係で90点前後に絞る必要があった。そこで、256点の土器から、撹乱層以外で、同一地点・同一層出土土器が1点のみの場合は必ず選び、複数出土している場合は、全体の出土量に比例させて２～５点程度を、大きいものから順に選んだ。ただし、他に同一時期・同一型式のものがない場合は、小さくても選んだ。これで約50点となり、

残りを撹乱層から、大きいもの、これまでに選んだものの中にない時期・型式のものを中心に、40点程度を選んだ。

掲載土器の概要。まず時期・土器型式。縄文時代前期初頭→18（早期？）、81（円筒下層ａ式に近い？）、84、85、86。前期前葉→18（円筒下層ａ式？）？、75（円筒下層ｂ１式？）。前期後葉→3（円筒下層ｄ１式）、4（大木６式）、47（ｄ１式）、52（円筒下層ｄ式）、78（大木５式）、80（ｄ１式）、83（円筒下層ｃ式？）。中期初頭～前葉→45（円筒上層ａ２式）、59（大木７ｂ式）、60、61（７ｂ式）、62（７ａ式）、65（７ｂ式？）、67（７ｂ式）、70（７ｂ式？）、74（７ａ式？）、76（糠塚式？）、77（７ｂ式？）。中期中葉→58（大木８ａ式）、59（８ａ式？）、64（８ａ式）。中期後葉→40（大木８ｂ式新）、43（８ｂ式新）、44（８ｂ式新）、48（８ｂ式新）、53（８ｂ式）、54（９式）、55（８ｂ式）。中期末→37（大木10式新）、38（10式新）、39、41（大木10式古？）？、42？、46（10式古）。

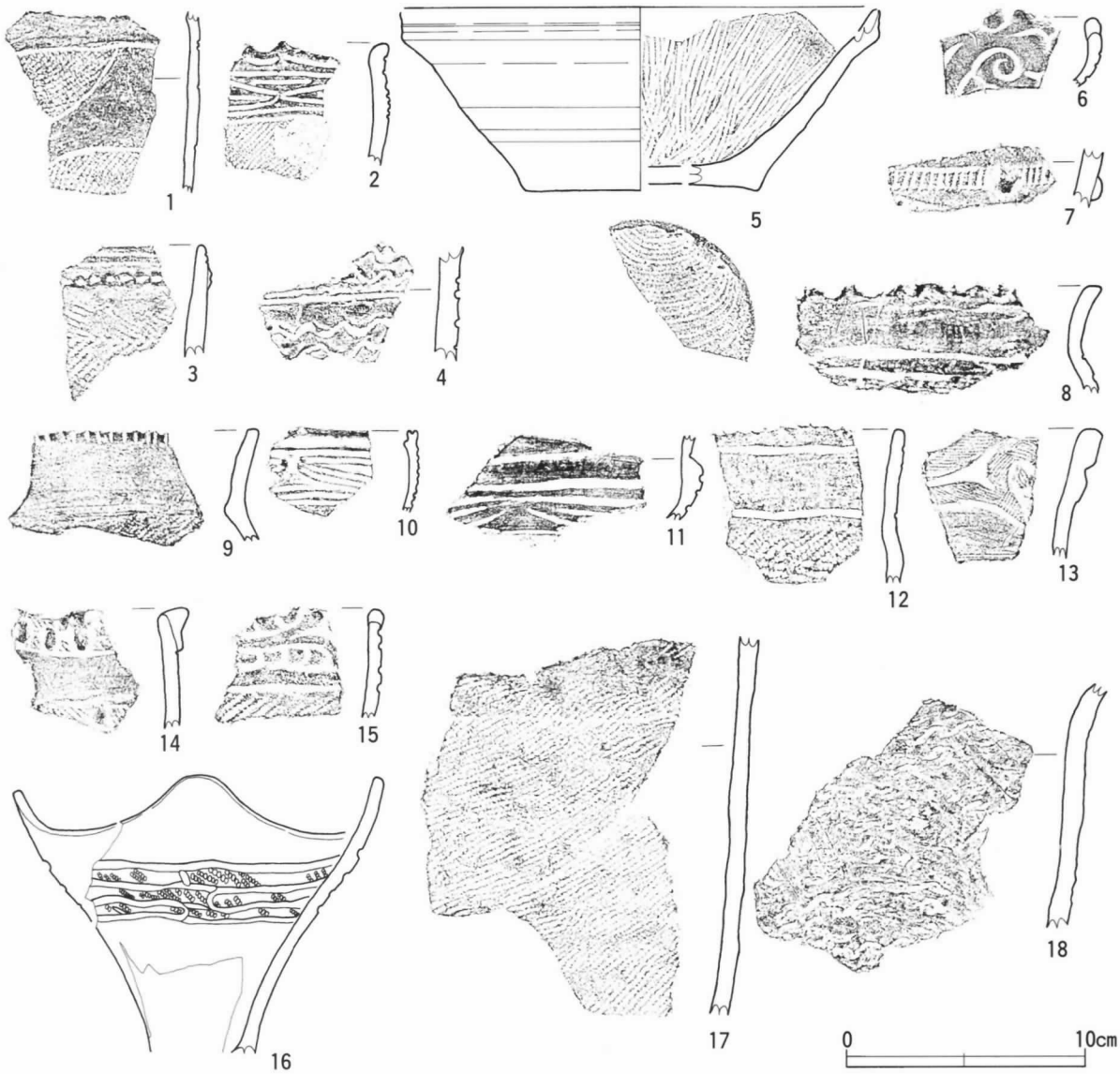
後期初頭→35（上村式）、36（上村式）。後期前葉→20、24（螢沢式？）、25（螢沢式－十腰内Ⅰ式古中間型式）、29（大湯式新）、30（大湯式新）、31、32（十腰内Ⅰ式古）、33（大湯式？）、34（大湯式新）、51（宮戸Ⅰb式新？）、63、66（大湯式新）、71、72（十腰内Ⅰ式前後）。後期中葉→１（後期中葉～後葉）、16（新山権現社３式？）、21（新山権現社１式？）、22（新山権現社３式）、28（新山権現社２式）。後期後葉→７（瘤付土器第Ⅲ段階）、14（第Ⅱ段階）、19、56？。晩期初頭～前葉→６（大洞Ｂ2式）、13（Ｂ1式古）、15（ＢＣ2式）。晩期中葉→８（大洞Ｃ2式古）、９（Ｃ2式後半）。晩期後葉～末→２（大洞Ａ1式？）、10（Ａ′式古）、11（Ａ′式新）、23（Ａ式？）。

５は近世である（19世紀の在地産のもののようである）。筆者の不勉強で時期が特定できないもの→12（大洞Ｃ２式？）、73（十腰内Ⅰ式？、弥生時代後期？）、82。その他、地文だけなどのために時期が特定できないもの→17（後～晩期）、26（後期中～）、27（後期後葉？）、49、50、52（前期）、57、68、69（後期前葉？）、79。なお時期・土器型式の認定に当たっては、参考文献に掲げた文献を参照した。

最後に表の補足。８の口唇部の突起は三角形と逆ノ字の陰刻の連続である（金子　1995：Ⅳ群３類ａ１類の変形）。10は内外面摩耗。20は胎土に１～２㎜程度の石を多く含む。23の頸部には三日月形の刺突列。全体に残り悪く白いもの（石灰岩？）が付着している。29＝30らしい。30の補修孔は表裏両側からせん孔している。45の突起口唇部に刻目列。67のボタン状貼付文の両側に低い隆帯があり、その上に縄（R）の側面圧痕を刺突状に施している。80は縄の側面圧痕を羽状に施しており、口縁部から胴部上部にかけて右傾、左傾、左傾、（隆帯）、左傾、右傾となっており、胴部の撚糸文は、左側と右側で異なっており、左側は右傾、右側は左傾となっている。

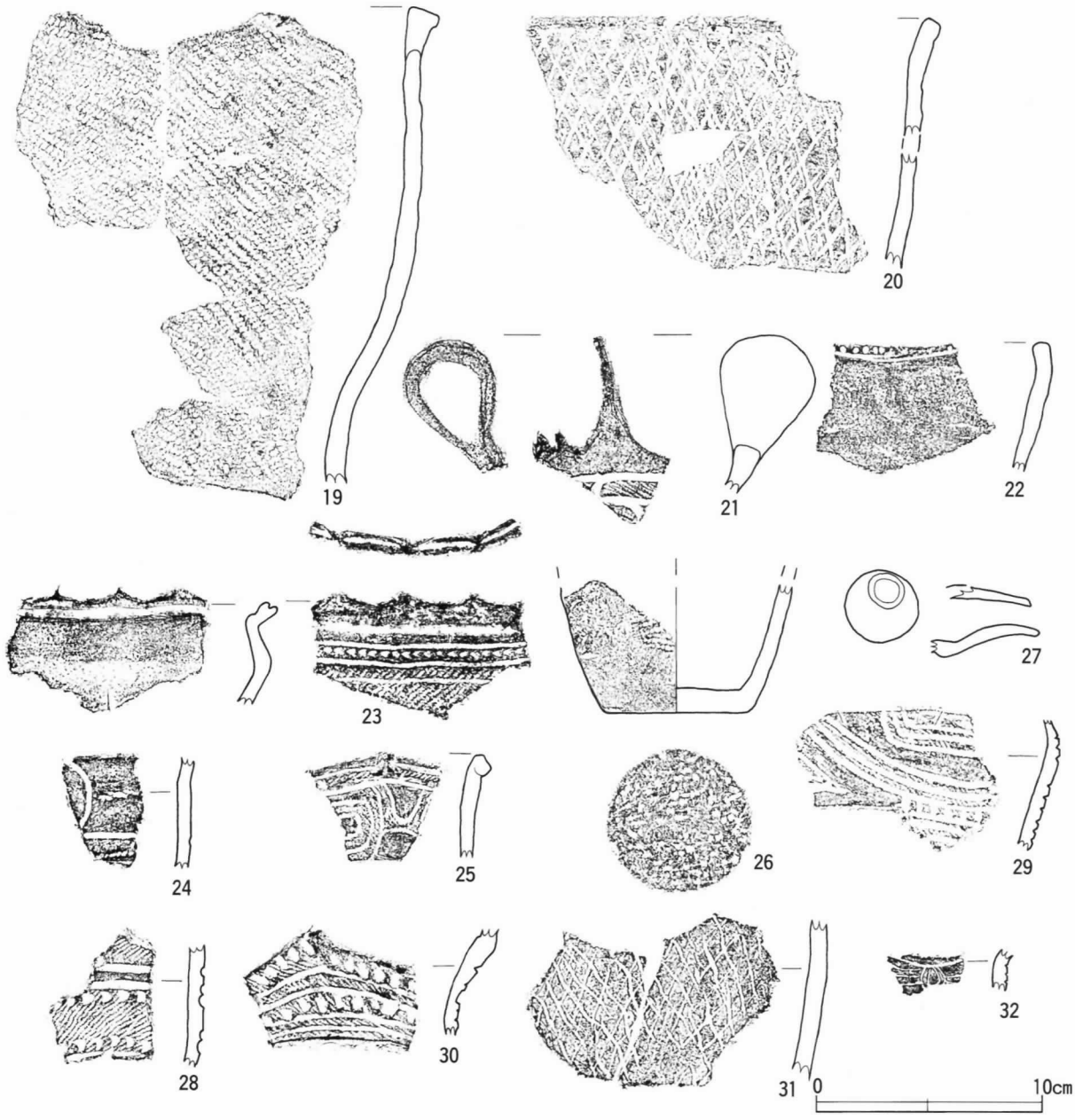
参考文献

金子昭彦　1994「東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器」『紀要』ⅩⅣ岩手県埋蔵文化財センター
1995「岩手県上鷹生遺跡における土器口縁部の突起」『紀要』ⅩⅤ岩手県埋蔵文化財センター
1998「十腰内Ⅰ式（新）に併行する東北地方中部の土器(3)」『縄文時代』９縄文時代文化研究会（埼玉県）
熊谷常正　1983「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告』１
高橋龍三郎　1993「大洞Ｃ２式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』４阿佐ヶ谷先史学研究会（東京都）
高柳圭一　1988「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代』85早稲田大学考古学会
1997「Ⅴ　調査の成果」『北柳１・２遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター
丹羽　茂　1989「中期大木式土器様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』小学館
本間　宏　1987「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」『よねしろ考古』４よねしろ考古学研究会（秋田県鹿角市）
1988「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』５よねしろ考古学研究会
三宅徹也　1989「円筒土器下層様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』小学館
1989「円筒土器上層様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』小学館
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』１－３



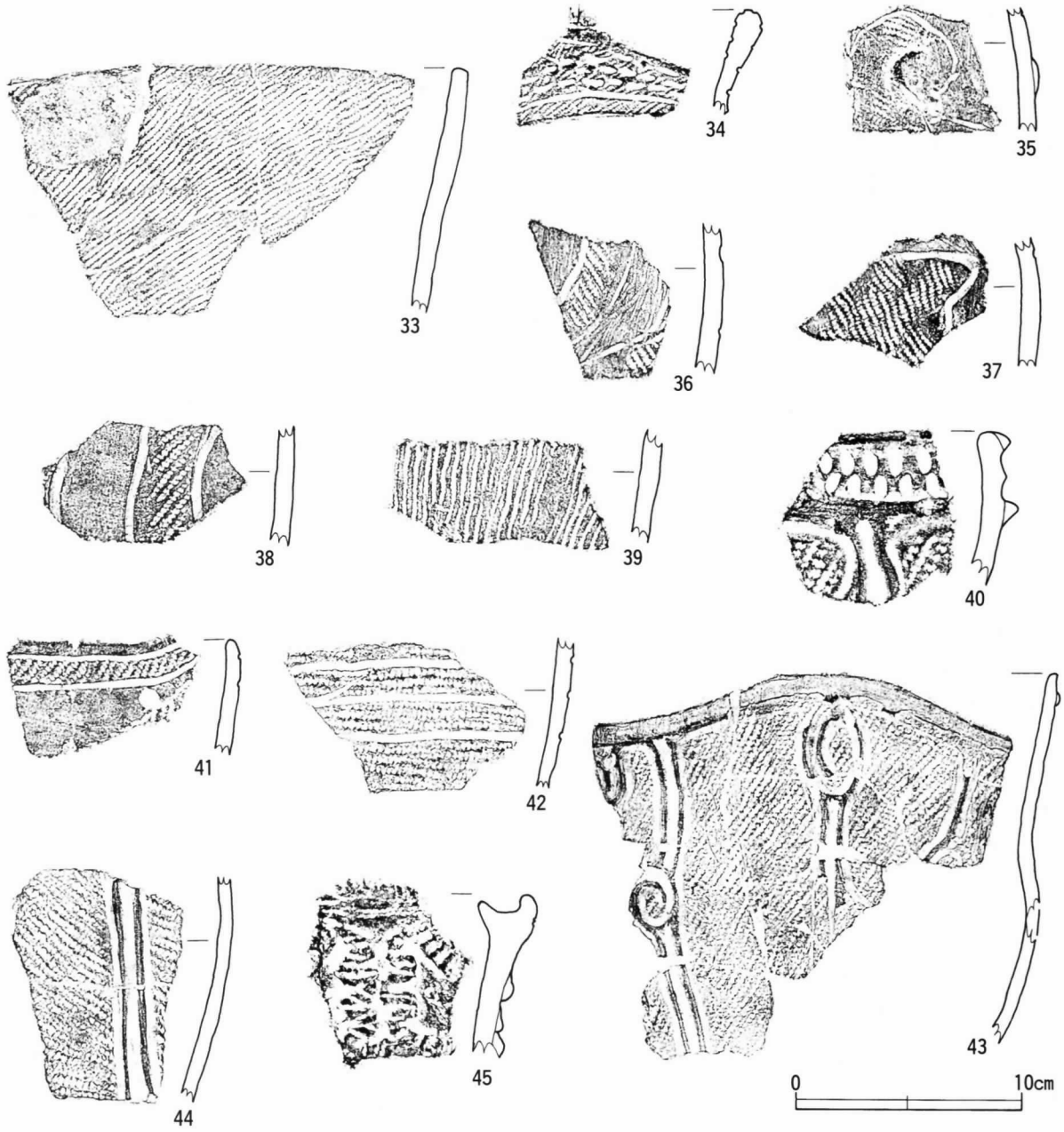
No	出土地点・層位	器種・部位	外面（文様・装飾、地文、原体など）	内面（調整など）	備　考	本文記載
1	区名不明・上撹乱	鉢？・胴部	縄文（LR）→沈線→ミガキ	ナデ？		
2	A区・撹乱	鉢・口縁部	2個1対のA突起・口縁部突起はさんで断続した沈線・沈線→縄文（LR）	ナデ？	外面スス・文様帯器面平坦	
3	E区・撹乱	深鉢・口縁部	縄(L)の側面圧痕・隆帯上に刺突列・羽状縄文（結節？RL？）	ナデ？		
4	E区・撹乱	深鉢・胴部	ナデ→深い沈線	ミガキ？		
5	区名不明・撹乱	擂鉢(1/3周)	ロクロ成形→底部付近ナデ			
6	A区・表土黒土	注口・口縁皿部	B突起（・ミガキ）	ミガキ		
7	A区・表土黒土	深鉢・胴部	縦長の刻目→丸くて高い瘤状突起	ナデ	内面スス付着	
8	A区・表土黒土	深鉢・口縁部	口唇部削り出しによる突起列（・外面整形雑）	ナデ		P.77
9	A区・表土黒土	深鉢・口縁部	口縁部刻目列・胴部縄文（LR）→頸部ナデ	ナデ	外面スス・内外面摩耗	
10	A区・表土黒土	・口縁部	口唇部低いA突起をはさんで断続した沈線・隆帯による変形工字文・交点に瘤状突起	ミガキ？	内面1条水平沈線	P.77
11	A区・表土黒土	高坏・胴部	沈線深いが交点ナデでつぶされている	ミガキ？	外面やや摩耗	
12	A区・表土黒土	鉢・口縁部	口唇部押圧による小波状・縄文(LR）→沈線→ナデ	ナデ(雑)	内外面スス付着	
13	A区・表土黒土	深鉢・口縁部	大波状口縁・深く削り込んだ三叉文・縄文(RL）→沈線→ミガキ	ミガキ		
14	A区・表土黒土	深鉢・口縁部	大波状口縁・口縁部前面に突出する突起・縄文（R）→浅い沈線→瘤状突起→ミガキ	ミガキ？	瘤状突起は楕円形で低い	
15	A区・表土黒土	深鉢・口縁部	B突起・縄文(RL）→沈線	ナデ	外面摩耗	
16	A区・表土黒土	鉢	4大波状口縁・縄文（RL）→太く浅めの沈線→ミガキ	ミガキ	1/2周弱	
17	C区・表土黒土	深鉢・胴部	縄文（RL）→所々指なで（故意ではない？）	ナデ	外面全面スス付着	
18	E区・表土黒土	深鉢・胴部	横位の綾繰文（・底部は尖底？）	ヘラナデ(雑)		

第13図　岩谷洞穴遺跡出土土器（1）



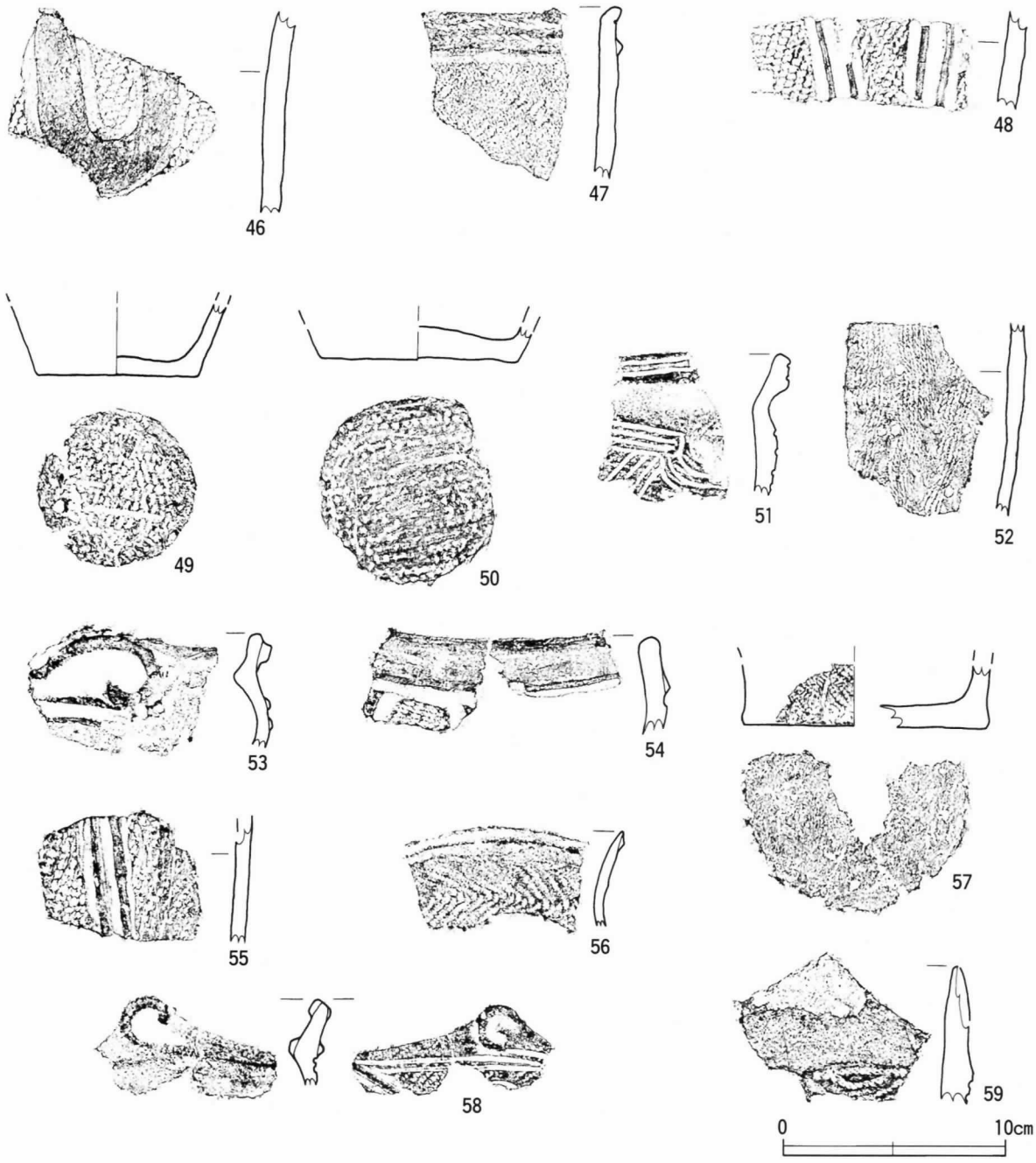
No	出土地点・層位	器種・部位	外面（文様・装飾、地文、原体など）	内面（調整など）	備　考	本文記載
19	E区・表土黒土	深鉢(1/4周弱)	上面押圧した台形突起・縄文(LR)→底部付近ほかナデ	ナデ(雑)	内外面スス付着	
20	E区・表土黒土	深鉢・口縁部	ヘラナデ→網目条撚糸文(R)	ナデ	1/3周弱	P.77
21	OA区・1層	深鉢・口縁部	突起・縄文（RL）→太く深い沈線→ミガキ	ミガキ	突起拓影は突起の右側を採ったもの	
22	OA区・1層	深鉢・口縁部	大波状口縁・口縁刻目列（・ミガキ？）	ミガキ？		
23	OA区・1層	台付鉢・口縁部	小波状口縁・口唇部突起頂部をはさんで断続した沈線・縄文(LR)→沈線	ナデ？	口縁内面水平沈線	P.77
24	OA区・1層	深鉢？胴部	太めの太い沈線→ナデ・縄の側面圧痕2列（上RL、下R）	ナデ		
25	OA区・1層	深鉢・口縁部	口縁部隆帯状、上に縄文（LR）→沈線・縄文（LR）→沈線→ナデ	ミガキ？	外面スス付着	
26	OA区・1層	深鉢・底部	縄文（RL）・底面網代痕（消えかかっている）	ミガキ？	外面スス付着	
27	OA区・1層	注口部	下部沈線（一周する？）（・ミガキ）	指なで		
28	OA区・Ib層	深鉢・胴部	縄文（LR）→押し引き刺突列、沈線→ミガキ	ナデ	内面オレンジ色	
29	OA区・Ib層	深鉢・胴部	縄文(RL、0段多条？）→深く鋭角的な沈線→ナデ	ナデ	文様の間に縦の刻目列	P.77
30	OA区・Ib層	深鉢・口縁部	波状口縁・縄文(RL、0段多条）→深く鋭角的な沈線、刺突列	ナデ(丁寧)	突起内面水平短沈線・補修孔	P.77
31	OA区・Ib層	深鉢・胴部	網目状撚糸文(L)→ナデ	ナデ		
32	OA区・Ib層	壷？頸部？	細く深い沈線	指なで		

第14図　岩谷洞穴遺跡出土土器（2）



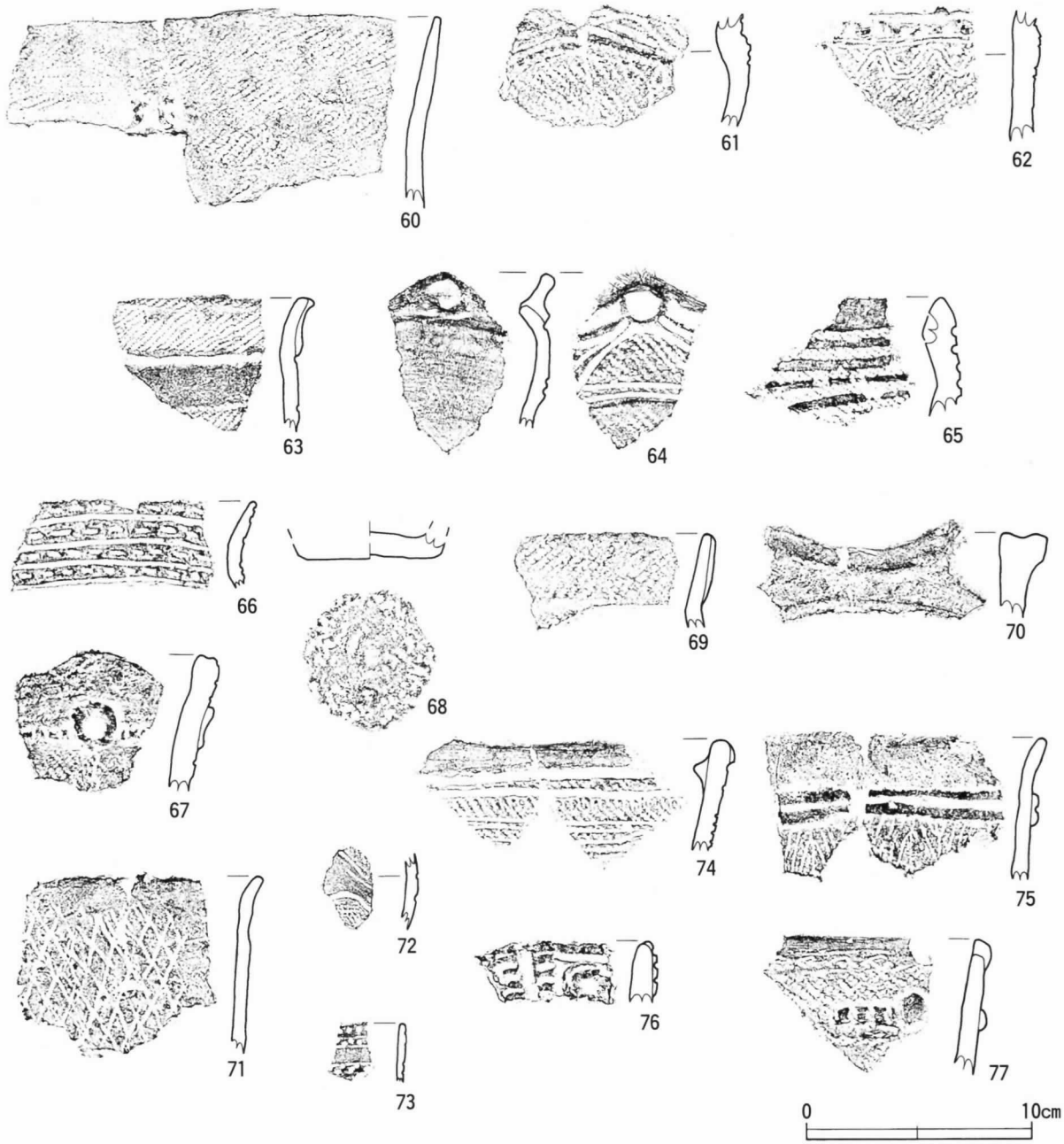
No	出土地点・層位	器種・部位	外面（文様・装飾、地文、原体など）	内面（調整など）	備　考	本文記載
33	D区・1－2層	深鉢・口縁部	口唇部縄文・縄文(LR)	ナデ	外面スス付着	
34	D区・1－2層	深鉢・口縁部	突起・縄文（LR）→太く深い沈線、横位の刺突列	ナデ	突起内面4条沈線・縄文(LR)	
35	C区？1－2層	深鉢・胴部	ヒレ状突起、縄文(LR)→ナデ・太めで浅い沈線	ナデ		
36	D区・1－2層	深鉢・胴部	縄文(LR）→太く浅い沈線→ミガキ	ミガキ？	外面スス付着	
37	D区・1－2層	深鉢・胴部	太い沈線→縄文(LR)→ナデ	ナデ		
38	D区・1－2層	深鉢・胴部	縄文(RL）→太い沈線→ナデ	ナデ	外面スス付着	
39	D区・1－2層	深鉢・胴部	撚糸文(R)	ナデ	外面スス付着	
40	D区・1－2層	深鉢・口縁部	ナデ・縄文(RLR)→沈線→太く高い隆帯・深い刺突	ナデ		
41	D区・1－2層	深鉢・口縁部	沈線→縄文(LR）→ナデ	ナデ	補修孔（表側からせん孔）	
42	E区・Ⅰb層	深鉢・胴部	縄文(LR）→沈線	ナデ		
43	E区・Ⅲ層	鉢（1/2周弱）	波状口縁・縄文(RL）→隆帯→ミガキ・低い台形状隆帯	ミガキ		
44	E区・Ⅲ層	深鉢・胴部	低い台形状隆帯・縄文（LR）→ミガキ	ミガキ？		
45	A区・Ⅳ層	深鉢・口縁部	突起、隆帯上に縄(R）の側面圧痕・2本一組の縄(R)の側面圧痕	ナデ	内面スス付着	P.47

第15図　岩谷洞穴遺跡出土土器（3）



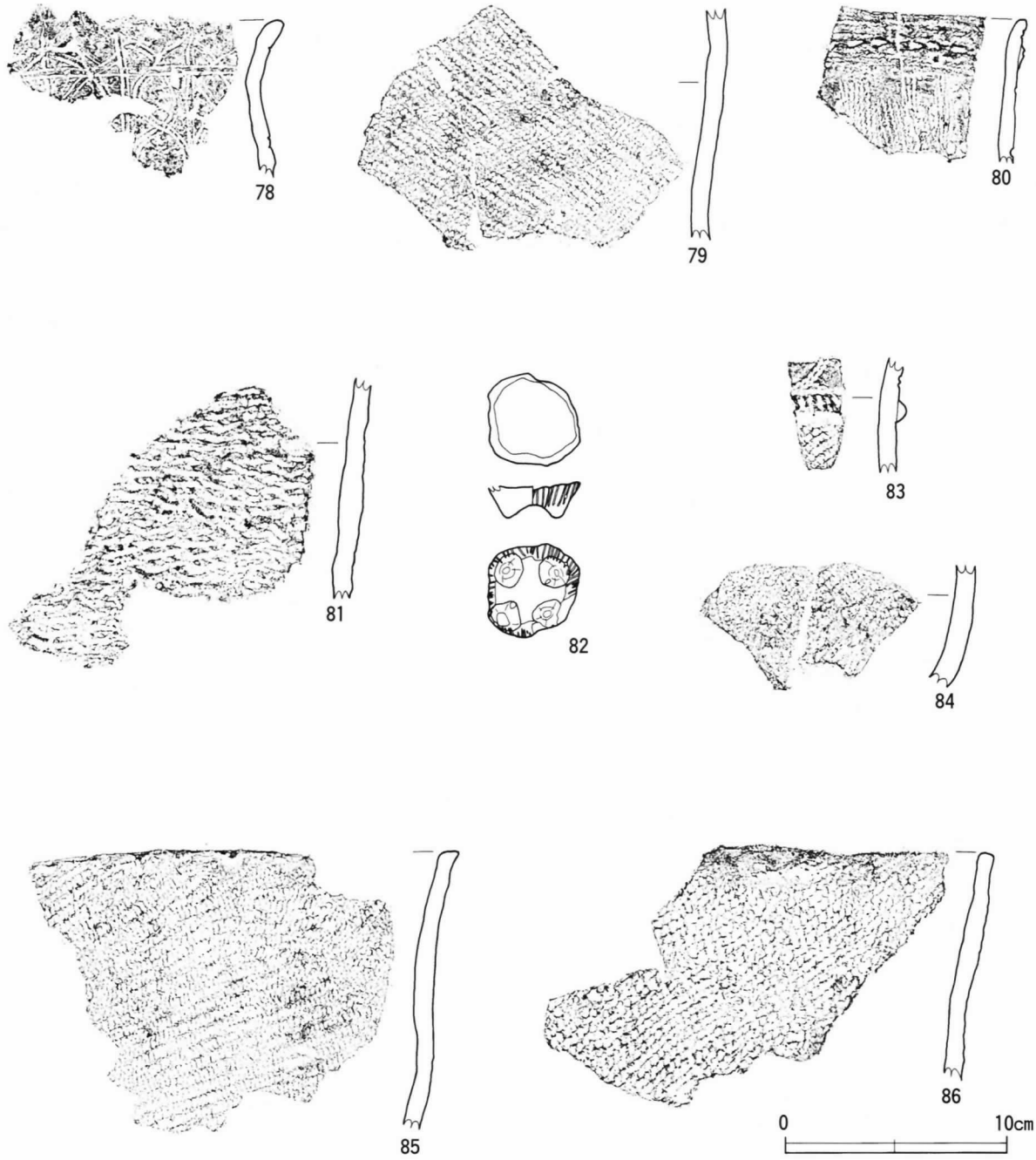
No	出土地点・層位	器種・部位	外面（文様・装飾、地文、原体など）	内面（調整など）	備　考	本文記載
46	C区・Ⅳb層	深鉢・胴部	縄文(RLR)→太く浅い沈線、ナデ（ミガキ？）	ナデ		
47	C区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	口縁部ボタン状突起、縄(LR)の側面圧痕、断面山形隆帯、縄文(LR)	ナデ	内面スス付着	
48	C区・Ⅳb層	深鉢・胴部	断面台形隆帯・縄文(RLR)→隆帯に沿ってナデ	ナデ(丁寧)		
49	C区・Ⅳb層	深鉢・底部	底部付近ナデ・底面網代痕	ナデ	胎土に小石顕著に含む	
50	C区・Ⅳb層	深鉢・底部	底部付近ナデ・底面網代痕	ナデ		
51	C区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	口縁部隆帯状・胴部縄文(LR) →沈線→ナデ	ナデ		
52	E区・Ⅳb層	深鉢・胴部	撚糸文(R)	ナデ	胎土繊維混入	
53	E区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	突起頂部口唇部刻目列・隆帯太く高い	ナデ	外面剥落	
54	E区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	口縁部肥厚・隆帯、縄文(RLR？) →ナデ→ミガキ	ミガキ		
55	E区・Ⅳb層	深鉢・胴部	低い隆帯・縄文（RL？）→ナデ	ナデ		
56	E区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	断面三角形の細い隆帯・羽状縄文(RL,LR,0段多条)	ナデ		
57	E区・Ⅳb層	深鉢・底部	縄文(LR)	ナデ(雑)	内面におこげ付着？	
58	E区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	口縁内外面隆帯・縄文(LR)→沈線	ナデ		
59	E区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	大波状口縁・縄文(LR)の側面圧痕による文様	ナデ		

第16図　岩谷洞穴遺跡出土土器（4）



No	出土地点・層位	器種・部位	外面（文様・装飾、地文、原体など）	内面（調整など）	備　考	本文記載
60	F区・Ⅳb層	深鉢	対向する三ケ月形突起・縄文(RL)→ナデ	ナデ	外面スス付着？	
61	F区・Ⅳb層	深鉢・胴部	縄文(RL)→縄(LR)の側面圧痕による文様	ミガキ？		
62	F区・Ⅳb層	深鉢・胴部	押圧による横並びの突起状・その下に半裁竹管による文様←縄文(LR)	ナデ	胎土に小石顕著に入る	
63	F区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	折り返し口縁・その下および頸部に縄(LR)の側面圧痕←縄文（LR）	ナデ		
64	F区・Ⅳb層	深鉢・口縁部	突起内外面に親指大の盲孔・口縁突起両側に刺突列・縄文（RL）→浅い沈線	ミガキ？		
65	E区・Ⅵ層	深鉢・口縁部	波状口縁？深く太い縄(LR)の側面圧痕	ナデ		
66	E区・Ⅵ層	深鉢・口縁部	口唇部縄文・縄文(LR,0段多条）・細く深い沈線、刺突列	ミガキ？	C区Ⅳb層出土破片と接合	
67	E区・Ⅵb層	深鉢・口縁部	突起口縁部横位の短沈線・口縁縄(R)の側面圧痕による文様・縄文(LR)	ナデ	胎土に小石顕著に入る	P.77
68	F区・Ⅵb層	深鉢・底部	底面網代痕	ナデ		
69	E区・Ⅵc層	深鉢・口縁部	折り返し口縁・縄(LR)	ナデ		
70	F区・Ⅶ層	深鉢・口縁部	（ナデ）	ナデ	F区Ⅳb層出土破片と接合	
71	E区・Ⅶb層	深鉢・口縁部	網目状撚糸文(R)	ナデ	胎土に小石顕著に入る	
72	F区・Ⅶb層	胴部	縄文(LR)→沈線→ナデ	ナデ	外面赤色付着物	
73	F区・Ⅶb層	口縁部	半裁竹管状沈線の底に細い竹管状刺突	ナデ		
74	F区・Ⅶc層	深鉢・口縁部	口縁肥厚・縄文(LR)→細く深い沈線、刻目列	ナデ	口縁内面水平に断面三角形隆帯	
75	E区・Ⅷ層	深鉢・口縁部	撚糸文(R) →太い隆帯→隆帯上に沈線	(ただれている)	口縁文様なし（ナデ）	
76	E区・Ⅷa層	深鉢・口縁部	隆帯上に縄(RL)→の側面圧痕	ナデ		
77	F区・Ⅷa層	深鉢・口縁部	口縁部肥厚・縄文(RL)→隆帯→隆帯上に縄(RL)の側面圧痕	ナデ（ミガキ？）		

第17図　岩谷洞穴遺跡出土土器（5）



No	出土地点・層位	器種・部位	外面（文様・装飾、地文、原体など）	内面（調整など）	備　考	本文記載
78	E区・Ⅸ層	深鉢・口縁部	2個1対の三角形突起・半裁竹管工具による文様	ナデ(雑)		
79	E区・Ⅸ層	深鉢・胴部	縄文(LR)	ナデ	外面スス付着	
80	E区・Ⅸb層	深鉢・口縁部	低い隆帯→刺突、縄(L,R)の側面圧痕・胴部撚糸文(L,R)	ナデ	胎土に繊維混入	P.77
81	E区・Ⅸc層	深鉢・胴部	横位綾繰文	ナデ	胎土に繊維混入	
82	E区・Ⅸc層	・底部	四脚・くし描状沈線文（・底面に指紋）	ナデ		
83	E区・Ⅸe層	深鉢・頸部	口縁縄（R）の側面圧痕による文様・頸部隆帯上に縄（R）の側面圧痕・胴部斜縄文(LR)	ナデ	外面スス付着	
84	E区・Ⅸh層	深鉢・底部付近	縄文(LR)（・尖底と思われる）	ナデ(雑)	胎土に繊維混入	
85	E区・Ⅹa層	深鉢・口縁部	口唇部押圧、一部刺突・縄文(LR)	ナデ(雑)	胎土に繊維混入	
86	E区・Ⅹb層	深鉢・口縁部	体部斜縄文(LR)→口唇部押圧	ナデ(雑)	胎土に繊維混入	

第18図　岩谷洞穴遺跡出土土器（6）

(2)石器

ア　概要

本洞穴遺跡から出土している石器は、礫石器及び剥片石器を合わせてコンテナ0.5箱程度である。このほか、明瞭に石器と認識することが困難な礫類がほぼ同量保管されていたが、今回分析し報告の対象としたのは、これを除いたものである。

イ　トゥール（第19図～第21図、第３～４表）

いわゆるトゥール（以下石器と呼ぶ）は96点出土している。その内訳は、第３表～第４表のとおりである。そのうち、出土層位がほぼ明らかなものは74点で、土器の時期別出土傾向を参照することにより、それらのおおよその帰属時期を推定することができる。これ以外は表面採集・撹乱層及びその他の不明層出土のもので、帰属時期を推定する場合にはその形態等によることになる。

（a）石鏃

石鏃は57点出土し、本洞穴遺跡出土石器の中で最も高い割合を占めている。形態は、茎を有するいわゆる有茎のものと、有しない無茎（凹基、平基）のものの両者が出土している。有茎石鏃は後期前葉以降多数を占めるようになる。石材は硬質頁岩、珪質頁岩を用いる割合が高く、チャート・ギョクズイがそれに次ぐ。表裏いずれかの面に主剥離面と考えられる広い面を残すものが多い。欠損は、基部により多く認められる。先端部に衝撃剥離の認められる例が3点ある。

（b）石匙、スクレイパー類

石匙もしくは石匙と考えられる石器は11点出土している。いずれも剥片を素材とし、長軸または短軸の一端にノッチを入れてつまみ部を作り出す。Ⅵ層（中期初頭）中で最も多く出土する。それより下位の層ではあまり明瞭でない。25，60は、肉眼で刃部に光沢が観察される。石材は硬質頁岩、珪質頁岩が用いられ、それ以外の石材は認められない。このほか、つまみ部の作り出しの認められないスクレイパーエッジを有する石器が9点出土している。頁岩のほか、鉄石英、ギョクズイが用いられているものが少数ある。46はギョクズイが用いられているもので、先端を尖頭部の作り出しと見るなら石鏃または尖頭器として分類することも可能である。

（c）礫石器類

磨石４点、敲石５点、凹石５点出土している。いずれも握拳大以下の川原石を用いている。14は両端に敲打痕を有しほぼ中央部に擦痕を有している複合石器。前期末葉～中期初頭と考えられる。48は長軸の一端に敲打痕が認められる。61は表裏面の敲打による凹部のほか、端部にも敲打痕が観察できる。62は一方の側縁部に研磨痕が認められ、他方に敲打痕が観察される複合石器。このほか、磨製石斧の基部が出土している。明確ではないが、礫素材と考えられる。

ウ　まとめ（第22図）

本洞穴遺跡から出土した石器及び剥片類は少量であるが、県内における数少ない洞穴遺跡調査例であることや、同一層中で共伴した土器片からおおよその帰属時期が特定できることなどから、貴重な情報を提供できるものと考えられる。ここでは、剥片類から見た場合の遺跡の形成と、剥片類の石材について触れておく。

（1）遺跡の形成

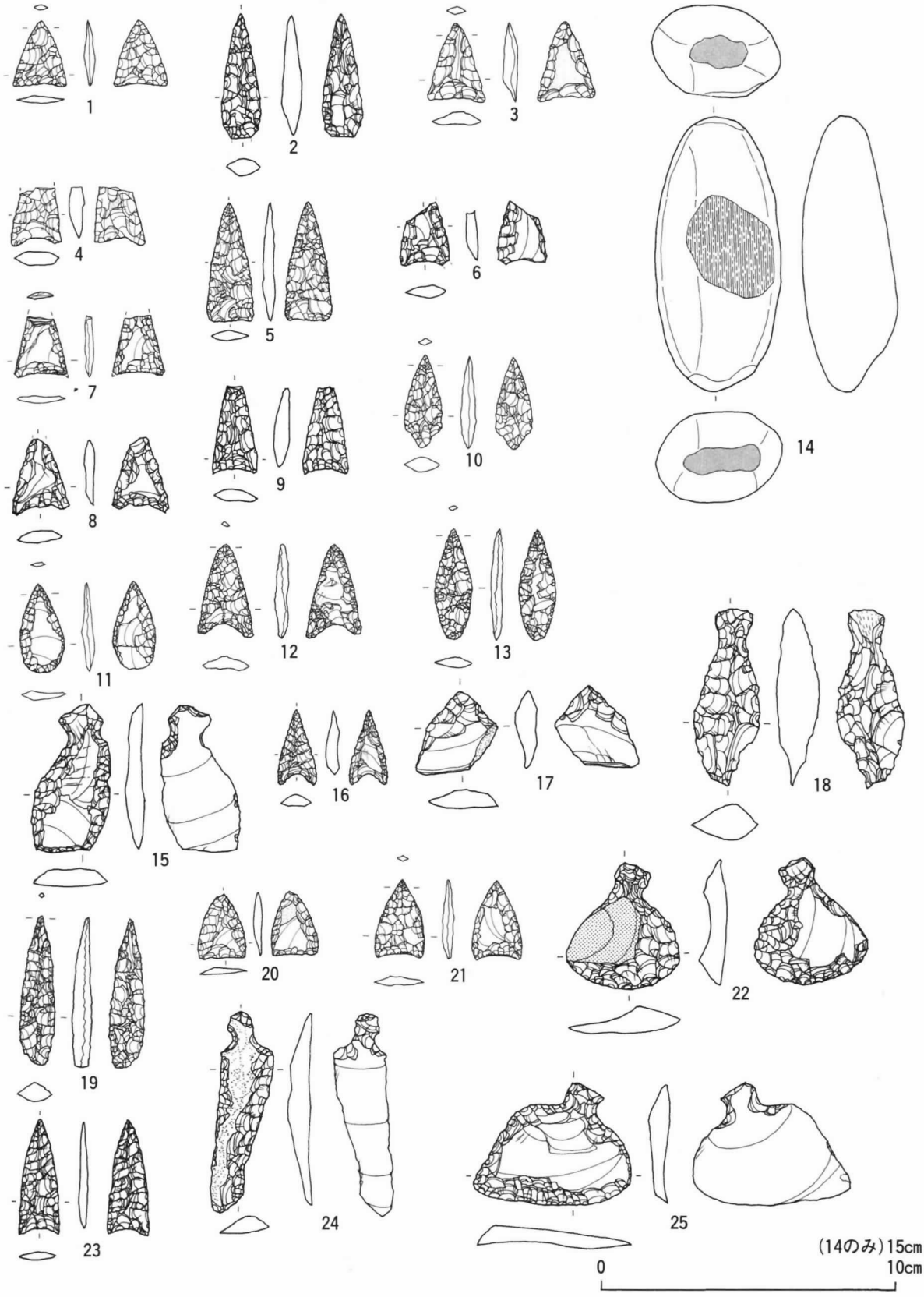
剥片類を、20mm以上の最大長を持つものとそれ未満のものに分けている。ここでは前者を剥片、後者を砕片と呼んだ。剥片は、出土層位等の明確なものは107点、総重量879.3ｇである。砕片は表面採集等のものを含めて84点である。石器数に比して、剥片・砕片の数量が少ないように見受けられる。これは、発掘調査時のロスによる部分もあると考えられるものの、洞穴内における石器製作

や剥片類の廃棄の機会が極めて少なかったことを予想させるものである。なお、石核は出土していない。第22図A～Dに、出土区及び層位別剥片類一覧を示した。

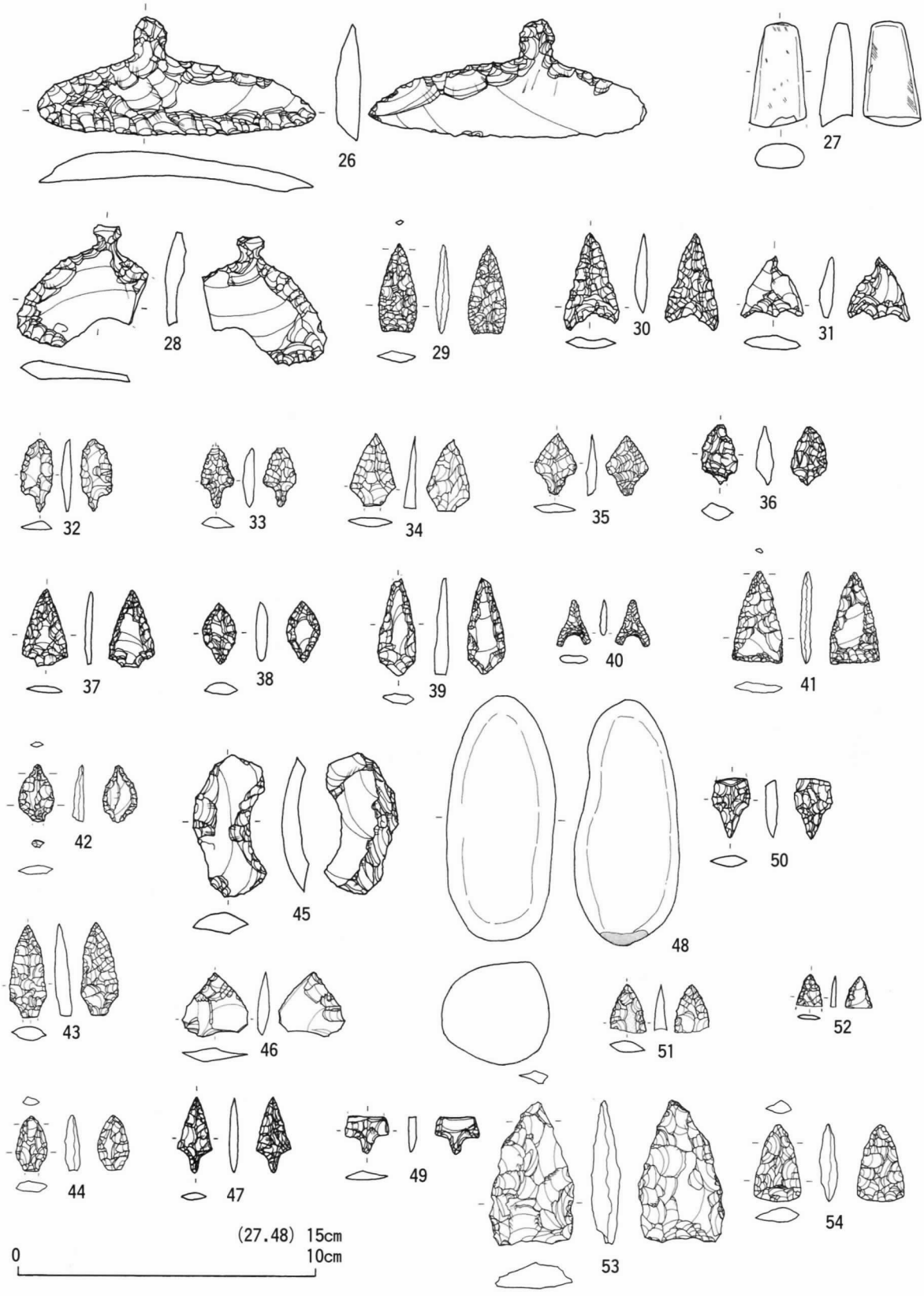
（b） 石材について

本洞穴遺跡から出土した剥片石器を含めた剥片類の石器石材は、硬質頁岩（珪化が著しいものを珪質頁岩として分離した）、ギョクズイ（酸化鉄による赤化の著しいものを鉄石英として分離した）、チャート及び粘板岩（ただしこの石材は石製品加工により生じたものかもしれない）である。北部北上山地の縄文時代の遺跡に一般的に見られる黒曜石や硬質のホルンフェルスは認められなかった。

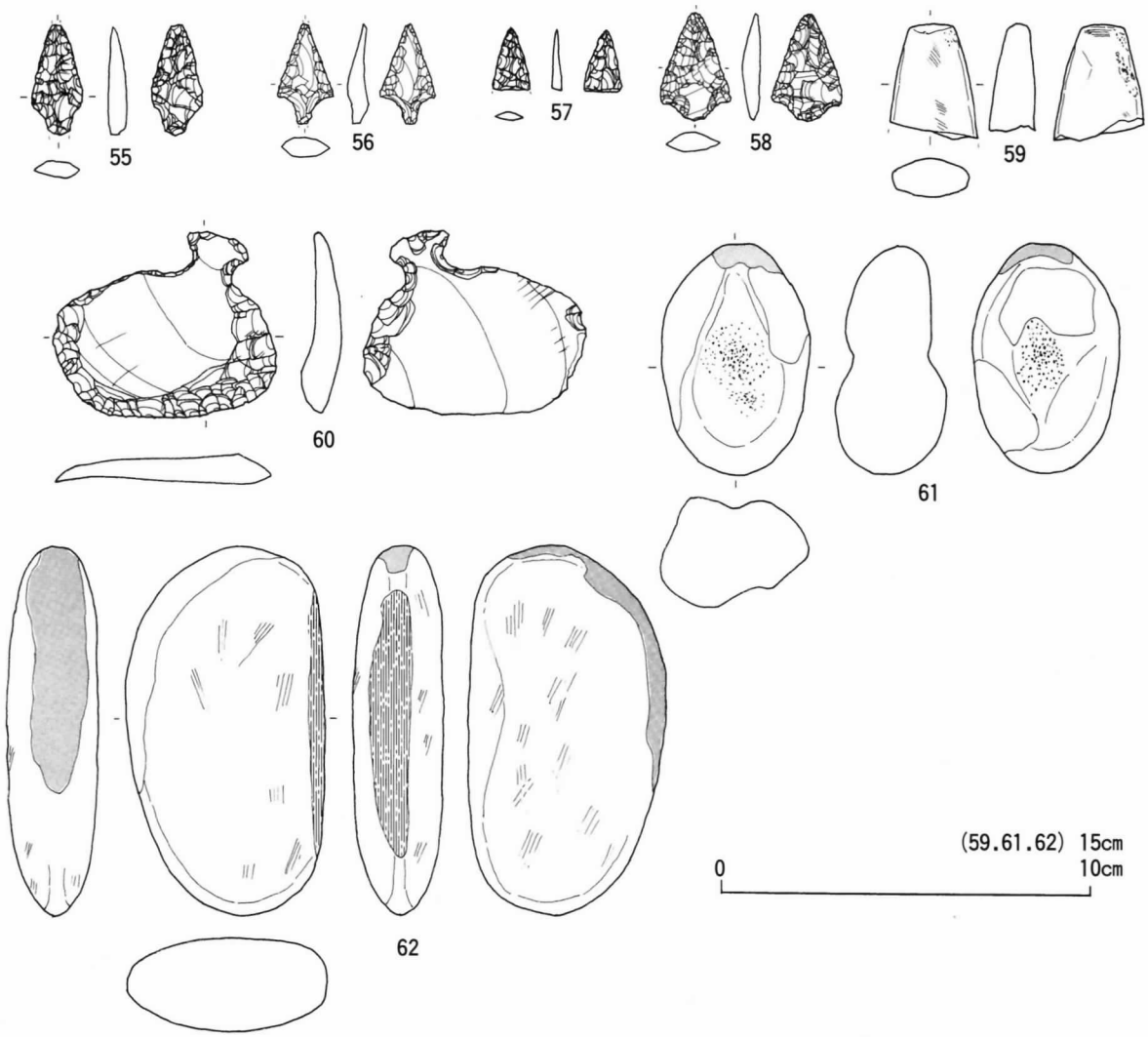
これらの石材の重量比を時期別に見たのが第22図Eである。資料数が十分でない時期もあるものの、中期前葉以降石材が多様化し、特に後期中葉以降は、鉄石英の大型剥片が大きく影響しているものの、硬質頁岩の比率が著しく低下している。この傾向は、この地域の他遺跡の一般的傾向と合致するものと思われる。



第19図　岩谷洞穴出土石器（1）



第20図　岩谷洞穴出土石器（2）



第21図　岩谷洞穴出土石器（3）

第3表　岩谷洞穴出土石器一覧（1）

	出土区	層位	型式	石材	長	幅	厚	重量	折れ	原礫面	備考	図面番号
1	E	Xe	スクレイパー	硬質頁岩	103.2	55.5	13.8	92.5			主剥離面	
2	E	Xde	敲石		123.8	78.3	47.9	690.8				
3	E	X	石匙？	硬質頁岩	60.9	28.5	12.3	19.9	基部			
4	E	Ⅸc	石鏃	硬質頁岩	22.7	18	3	0.9				1
5	F	Ⅸc	石鏃	硬質頁岩	41.5	12.5	7	2.8				2
6	E	Ⅸb	石鏃	硬質頁岩	26.7	19.8	5	2.1		○		3
7	E	Ⅸb	石鏃	硬質頁岩	30.7	19.8	2.9	1.5				
8	E	Ⅸb	石鏃	チャート	37	15.9	5.5	3			主剥離面	
9	E	Ⅸb	石鏃	チャート	37.1	15.6	54	3			主剥離面	
10	E	Ⅸ	磨石		137	61.7	46.5	591.7				14
11	E	Ⅸ	スクレイパー	ギョクズイ	98.3	33.4	14	44.9	左縁		主剥離面	
12	E	Ⅸ	スクレイパー	チャート	63.2	37.5	16.4	28.4			主剥離面	
13	E	Ⅶb	石鏃	硬質頁岩	20.7	18	3.3	1.1	先端部			7
14	E	Ⅶb	石鏃	硬質頁岩	40	16	3.8	2.1				5
15	E	Ⅶb	石鏃	硬質頁岩	19.6	16.8	5.1	1.7	先端部			4
16	E	Ⅶb	石鏃	硬質頁岩	39.3	19.2	5	2.8				
17	E	Ⅶb	石鏃	硬質頁岩	36.2	19.4	3.3	2.1				
18	E	Ⅶb	石鏃	硬質頁岩	21.7	16.7	4.3	1.4	先端部	○		6
19	E	Ⅶb	凹石		168	45.6	18.7	216.7				
20	E	Ⅶb	凹石		133.6	61.2	34.6	367.8				
21	F	Ⅶb	石鏃	硬質頁岩（珪質）	31.4	12.7	5.2	1.7				10
22	F	Ⅶb	石鏃	硬質頁岩（珪質）	23.4	16.2	3.6	1.2				

A　出土区毎剥片数

	硬質頁岩	珪質頁岩	鉄石英	ギョクズイ	チャート
撹乱	5		1		2
表土黒色土	4		4		1
Ⅰ	1		1	4	2
Ⅰb	1				
Ⅱ				2	
Ⅳ	1				
0	7	2	1	1	

A区

	硬質頁岩	珪質頁岩	鉄石英	ギョクズイ	チャート	粘板岩
撹乱	1			1		
Ⅰc	2					
Ⅲ	1		1	1		
Ⅳb	4			2		1

C区

	硬質頁岩	珪質頁岩	鉄石英	ギョクズイ	チャート
Ⅰ・Ⅱ	3	2			1
Ⅲ	2	3		1	
Ⅳb				1	

D区

	硬質頁岩	珪質頁岩	鉄石英	ギョクズイ	チャート
表採	1				
表土黒色土	4		1	1	
Ⅲ		1			
Ⅳa	1				
Ⅳb	14	2		2	
Ⅵ	7	1		1	
Ⅵc	1			1	
Ⅶa	1			1	
Ⅶa	3	1			
Ⅷb	1				
Ⅸ	1	1			
Ⅸb	4				
Ⅸc	2				
Ⅹa	1				
Ⅹe	1	1			
撹乱	2			1	

E区

	硬質頁岩	珪質頁岩	鉄石英	ギョクズイ	チャート
Ⅳb	1				
Ⅶb	1				
Ⅶc	1				
Ⅷb	1				
Ⅸb	1			1	

F区

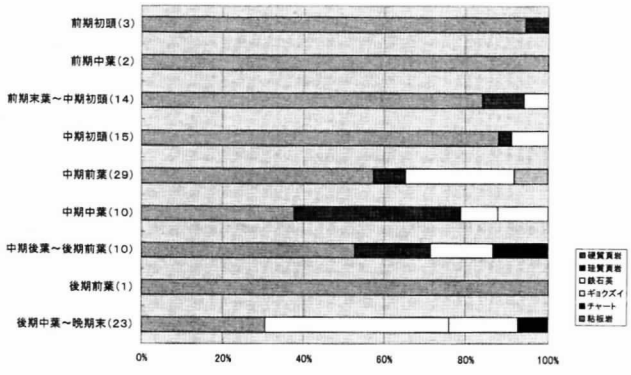
B　岩谷洞穴出土剥片数

出土層位	硬質頁岩	珪質頁岩	鉄石英	ギョクズイ	チャート	粘板岩
表土黒色土	8	0	5	1	1	0
Ⅰ	1	0	1	4	2	0
Ⅰb	1	0	0	0	0	0
Ⅰc	2	0	0	0	0	0
Ⅰ・Ⅱ	3	2	0	0	1	0
Ⅱ	0	0	0	2	0	0
Ⅲ	3	4	1	2	0	0
Ⅳ	1	0	0	0	0	0
Ⅳa	1	0	0	0	0	0
Ⅳb	19	2	0	5	0	1
Ⅵ	7	1	0	1	0	0
Ⅵc	1	0	0	1	0	0
Ⅶa	1	0	0	1	0	0
Ⅶb	1	0	0	0	0	0
Ⅶc	1	0	0	0	0	0
Ⅶa	3	1	0	0	0	0
Ⅷb	2	0	0	0	0	0
Ⅸ	1	1	0	0	0	0
Ⅸb	5	0	0	1	0	0
Ⅸc	2	0	0	0	0	0
Ⅹa	1	0	0	0	0	0
Ⅹe	1	1	0	0	0	0
合計	65	12	7	18	4	1

C　岩谷洞穴出土砕片資料数一覧

出土区	層位	硬質頁岩	珪質頁岩	鉄石英	ギョクズイ	チャート
E	表土黒色土	2				
OA	表土黒色土	3				1
A	Ⅰ	1		1	1	1
OA	Ⅰ	2				
OA	Ⅰb				1	
C	Ⅰc				2	
D	Ⅰ・Ⅱ	1				
A	Ⅱ				3	1
A	Ⅲ				2	
C	Ⅲ	5			4	2
D	Ⅲ	9	2		2	1
C	Ⅳb	1		1	1	
E	Ⅳb	7	2		1	
E	Ⅵ		1		1	
F	Ⅶa	1				
F	Ⅷb	1				
E	Ⅸ	1				
E	Ⅸb				1	
E	Ⅸc	2				
A	0	1				
A	0	4				1
D	Z			1	1	
A	撹乱	6		1		
C	撹乱					
OA	撹乱	1				
合計		14	0	2	1	1

E　岩谷洞穴剥片類石材出土層位(時期)別重量比(数字は資料数)



D　岩谷洞穴出土剥片重量(g)

出土層位	硬質頁岩	珪質頁岩	鉄石英	ギョクズイ	チャート	粘板岩
表土黒色土	38.9	0	63.5	3.5	3.1	0
Ⅰ	5.8	0	3.3	20.7	7.7	0
Ⅰb	10.2	0	0	0	0	0
Ⅰc	5.3	0	0	0	0	0
Ⅰ・Ⅱ	8.9	5.1	0	0	3.6	0
Ⅱ	0	0	0	4.1	0	0
Ⅲ	16.8	18.5	4	5.4	0	0
Ⅳ	2.4	0	0	0	0	0
Ⅳa	11.3	0	0	0	0	0
Ⅳb	194.7	29.4	0	96.4	0	29.7
Ⅵ	100.5	4	0	6.5	0	0
Ⅵc	2.1	0	0	2.9	0	0
Ⅶa	4.5	0	0	2	0	0
Ⅶb	3.9	0	0	0	0	0
Ⅶc	2.4	0	0	0	0	0
Ⅶa	10.9	4.9	0	0	0	0
Ⅷb	25.4	0	0	0	0	0
Ⅸ	3.8	2.9	0	0	0	0
Ⅸb	25.7	0	0	4.6	0	0
Ⅸc	9.4	0	0	0	0	0
Ⅹa	40.6	0	0	0	0	0
Ⅹe	26.1	3.9	0	0	0	0
合計	549.6	68.7	70.8	146.1	14.4	29.7

第22図　岩谷洞穴出土別片類データ

第4表　岩谷洞穴出土石器一覧（2）

	出土区	層位	型式	石材	長	幅	厚	重量	折れ	原礫面	備考	図面番号
23	F	Ⅷb	石鏃	硬質頁岩	29.6	15.5	5.6	2.2	先端			9
24	F	Ⅷb	石鏃	硬質頁岩	24.7	19.3	4.2	1.7			主剥離面	8
25	E	Ⅷa	石箆？	硬質頁岩	34.6	43.8	7.4	13.1	先端部			
26	E	Ⅷa	石鏃	硬質頁岩	30	14.8	3.4	1.5				11
27	E	Ⅷa	石鏃	硬質頁岩（珪質）	31.2	18.8	4.7	2			主剥離面	12
28	F	Ⅷa	石鏃	硬質頁岩	37.6	12.8	3.8	1.7				13
29	E	Ⅷ	石匙？	硬質頁岩	74.9	25.6	10.1	19.7	基部	○		
30	E	Ⅶb	石匙	硬質頁岩（珪質）	51.2	25.8	6.5	9.3				15
31	E	Ⅵc	石匙？	硬質頁岩	22.4	31.3	7.5	4.6	基部		主剥離面	17
32	E	Ⅵc	石鏃	硬質頁岩	25.7	12.9	4.1	0.9		○		16
33	D	Ⅵb	石匙	硬質頁岩	59.5	22.7	14.3	16.3	左縁			18
34	E	Ⅵ	石匙	硬質頁岩	69	18.1	5.8	9.3			火	24
35	E	Ⅵ	石匙	硬質頁岩	42.6	39	9.5	11.6			火	22
36	E	Ⅵ	石匙	硬質頁岩（珪質）	39.7	93.3	8.6	27.2				26
37	E	Ⅵ	石匙	硬質頁岩	42.9	54	7.3	15.6			刃部光沢	25
38	E	Ⅵ	石鏃	硬質頁岩	26.4	16.8	4.1	1.6				21
39	E	Ⅵ	石鏃	硬質頁岩	22	16.2	3.4	1.2				20
40	E	Ⅵ	石鏃	硬質頁岩	50.5	11.8	6.2	3.5	基部			19
41	EorF	Ⅵ	石鏃	硬質頁岩	38.7	13.4	3.3	1.5				23
42	E	ⅣorⅨ	石鏃	硬質頁岩（珪質）	29	19.1	5.2	2.3				58
43	E	Ⅳc	石錘		56.7	41.3	14.4	41.2				
44	C	Ⅳb	磨石		104	89.4	38.1	579.7				
45	E	Ⅳb	敲石		74.9	61.4	28.4	186.7				
46	E	Ⅳb	敲石		86.7	52.9	28.3	156.7				
47	E	Ⅳb	スクレイパー	硬質頁岩	47.8	16.9	10	7.6		○	主剥離面	
48	E	Ⅳb	磨製石斧	緑泥岩	53	28	15	35.6	先端部		基部のみ	27
49	F	Ⅳb	石匙	硬質頁岩	42.3	47.3	6.2	9.5	右縁			28
50	F	Ⅳb	凹石		103.8	103.8	45.4	665.9	長軸欠損			
51	E	Ⅳa	磨石		132.9	75	82	813				
52	C	Ⅲ	石鏃	硬質頁岩	29.9	12.7	4	1.3				29
53	C	Ⅲ	石鏃	ギョクズイ	21.2	20.8	4.6	1.3	基部			31
54	C	Ⅲ	石鏃	硬質頁岩	31.5	18.9	4.6	2				30
55	D	Ⅰ・Ⅱ	スクレイパー	硬質頁岩	39.4	25	8	5.2	右縁		火	
56	D	Ⅰ・Ⅱ	スクレイパー？	鉄石英	21.2	23	9	4.2	先端部		火	
57	D	Ⅰ・Ⅱ	石鏃	ギョクズイ	16.8	13.1	2.5	0.4				
58	A	表土黒土	石鏃	チャート	24.4	10.5	4.1	0.9				32
59	A	表土黒土	石鏃	チャート	20.2	11.6	4	0.5	先端部		衝撃剥離	33
60	A	表土黒土	石鏃	ギョクズイ	24.2	14.9	3	1	基部			34
61	A	表土黒土	石鏃	ギョクズイ	20.8	14.1	3.4	0.7	基部			35
62	A	表土黒土	石鏃	硬質頁岩	25.6	15.1	2.4	0.9	基部		主剥離面	37
63	A	表土黒土	石鏃	チャート	20.4	12.3	6	1.2	基部			36
64	A	表土黒土	石鏃	チャート	26.3	17.8	5.3	2.3			主剥離面	
65	E	表土黒土	敲石		144.3	96	56.2	1316.6				
66	E	表土黒土	敲石		122	52.6	51.9	495.5				48
67	E	表土黒土	スクレイパー	硬質頁岩	46.9	21.2	8.2	7.2			主剥離面	45
68	E	表土黒土	石鏃	硬質頁岩	18.8	11.4	3.4	0.6	基部			42
69	E	表土黒土	石鏃	チャート	19.4	9.8	4.1	0.4	基部			
70	E	表土黒土	石鏃	チャート	30.7	17	3.3	1.7			主剥離面	41
71	E	表土黒土	石鏃	硬質頁岩	15.4	11.5	2.5	0.2	基部			40
72	E	表土黒土	石鏃	硬質頁岩	20	11	3.9	0.8		○		38
73	E	表土黒土	石鏃	硬質頁岩	32	13	4.4	1.6	基部			39
74	A	Z	石鏃	硬質頁岩（珪質）	27.7	15.6	6.8	1.7	基部		主剥離面	56
75	A	Z	石鏃	硬質頁岩（珪質）	19.5	16.1	3.1	0.5	先端部		衝撃剥離（樋状）	
76	A	Z	石鏃	硬質頁岩	16.2	9.9	3	0.4	基部		先端のみ	57
77	A	Z	石鏃	硬質頁岩（珪質）	29.4	13.3	5.1	1.8	先端、基部		先端衝撃剥離	55
78	A	0	スクレイパー？	チャート	23	22	4	1.9	左縁		主剥離面	46
79	A	0	石鏃	ギョクズイ	18.4	10	3.9	0.8	基部			44
80	A	0	石鏃	硬質頁岩	10.5	13.8	1.9	0.2	基部		先端のみ	52
81	A	0	石鏃	チャート	16.4	12	3.9	0.7	基部		先端のみ	51
82	A	0	石鏃	硬質頁岩（珪質）	31.6	12.4	4.7	1.7	基部			43
83	A	0	石鏃	チャート	25.2	11.2	3	0.5				47
84	A	0	石鏃	硬質頁岩	12.4	14.3	2.7	0.4	先端部		基部のみ	49
85	A	0	石鏃	チャート	20.2	13.9	4.5	1.1	先端			50
86	?	初期攪乱	凹石		123.4	70	53.5	807.1				
87	E	攪乱	尖頭器	硬質頁岩	48.1	28.4	10	11.2				53
88	F	攪乱	石鏃	硬質頁岩	26.1	15.1	6	2.1				54
89	F	攪乱	石鏃	硬質頁岩	18	12	4.7	0.7	先端部、基部			
90	A	攪乱	スクレイパー	硬質頁岩（珪質）	39.2	38.7	10.7	16.3		○		
91	?	?	石匙	硬質頁岩	51.6	61.8	8.4	25.8			刃部光沢	60
92	?	?	磨石		150	79.3	37	802				62
93	?	?	石鏃	ギョクズイ	33.2	14.3	4.9	1.7			基部アスファルト	
94	?	?	石鏃	硬質頁岩	26.6	14	3.5	0.8				
95	?	?	凹石		93.5	60	47.8	355.4				61
96	?	?	磨製石斧	緑泥岩	46.4	36.6	18.2	45.2	先端部		基部のみ、整形痕残す	59

(3)土製品・石製品

土製品は合計10点出土している。種類別にみると、土偶１点、土製垂飾品４点、腕輪３点、種別不明２点である。石製品は４点出土している。けつ状耳飾り１点、垂飾品等３点である。

１は中実の板状土偶の肩部片である。肩から腕にかけては、ほぼ直角に曲がっている。表、裏面とも上半部に刺突文が施文されている。残存長5.1、残存幅4.7、厚さ1.4㎝、重量は31ｇである。Ｅ区表土黒土の出土である。

２は土製垂飾品で、上端は丸味を帯びたつまみ状の形で、その下で一旦すぼまり、くぼんでいる。下半は逆さのＵ字形に作り出されている。中央のすぼまる部分には焼成前の0.3㎝程の孔があけられている。Ⅳ75Ａ区３層出土、長さ3.1、幅2.3、厚さ1.1㎝、重量は6.4ｇである。写真図版5-6。

３、４は土製環状腕輪片である。３は幅1.6で最大厚0.65㎝で重量は2.2ｇである。４は幅1.6、最大厚0.5㎝、重量は1.7ｇである。内外面に朱彩がなされている。３、４とも全面にミガキが加えられており、Ａ区出土である。

５～７は耳栓で、いずれも中央のくぼんだ所に孔があけられている。５は全面朱彩され、直径1.2、孔径は0.1、厚さ0.7㎝、重量は0.9ｇである。カクラン出土である。６は欠損品で、約半分のみが残存している。全面朱彩され、直径1.5、孔径0.2、厚さ0.6㎝、重量0.7ｇである。Ｄ-Ⅰ・Ⅱの出土である。７は全面朱彩で、直径1.3、孔径0.2、厚さ0.9㎝、重量1.3ｇである。Ⅳ75Ｃ区Ⅳ層出土である。

８は直径0.8㎝の柱状の土製品である。４つの刻目が施文されている。重量は1.1ｇである。Ｄ-Ⅳｂ出土である。

９は種別不明の土製品で、Ｃ区３層出土である。土器の取っ手の可能性がある。外面は、朱彩で磨かれている。中央がややくぼんでおり、ナデによる調整がなされている。上端面は器面から剥離したもので、下端は欠損している。残存長2.4、幅2.2、厚さ0.7㎝、重量は3.9ｇである。

10～13は石製品である。10は一部が欠損したけつ状耳飾りで、ＯＡ区Ⅱ層出土である。最大長3.1、最大幅3.3、最大厚0.35㎝である。重量は4ｇである。両面とも、擦痕が観察できる。中央と、その上に孔があけられており、それぞれ最大直径は、1.2、0.6㎝である。石材は粘板岩である。写真図版5-5。11はＥ区Ⅲ層出土のもので、台形状の形を呈している。中央よりやや上に最大径1.1㎝の孔が両側からあけられている。全体に擦痕がみられ、最大長5.5、最大幅2.7、最大厚1.4㎝、重量は34.3ｇである。12はＣ区Ⅲ層出土のもので、長楕円形の扁平な石に、最大径0.5㎝の両側からの穿孔がみられるものである。最大長3.6、最大幅1.65、最大厚0.4㎝、重量は3.9ｇである。写真図版5-2。

13はカツオブシ形石製品である。長さ10.3ｍ、幅3.6、厚さ1.13㎝、重量64.6ｇである。上方が尖っており、その側面に擦痕がみられる。裏面下端には欠損が見られる。写真図版4-左下。

14ａ～14ｃは、同一の資料の破片と考えられるもので、それぞれ粘土板の上に、漆と思われる接着材を敷き、その上に貝を象眼している。14ａは10枚の貝破片が埋め込まれ、図の左上端の破片には擦痕が残っている。左下のスクリーントーン部分は剥落した貝破片を示しているので、この資料には11の貝破片が存在したことになる。埋め込まれた貝の厚さは0.1㎝程である。厚さは0.3㎝で軽く湾曲している。図の上端のラインは製品が屈曲する所で、内面の上3/1は、いわいる生きている面である。上3/1程を除いて、剥離した面で占められており、スクリーントーンで示した。下のラインも製品の屈曲するラインに近い。したがって幅1.6となる。残存長2.2㎝、重量は1.0ｇである。Ⅳ75Ｅ区表土、黒土出土である。

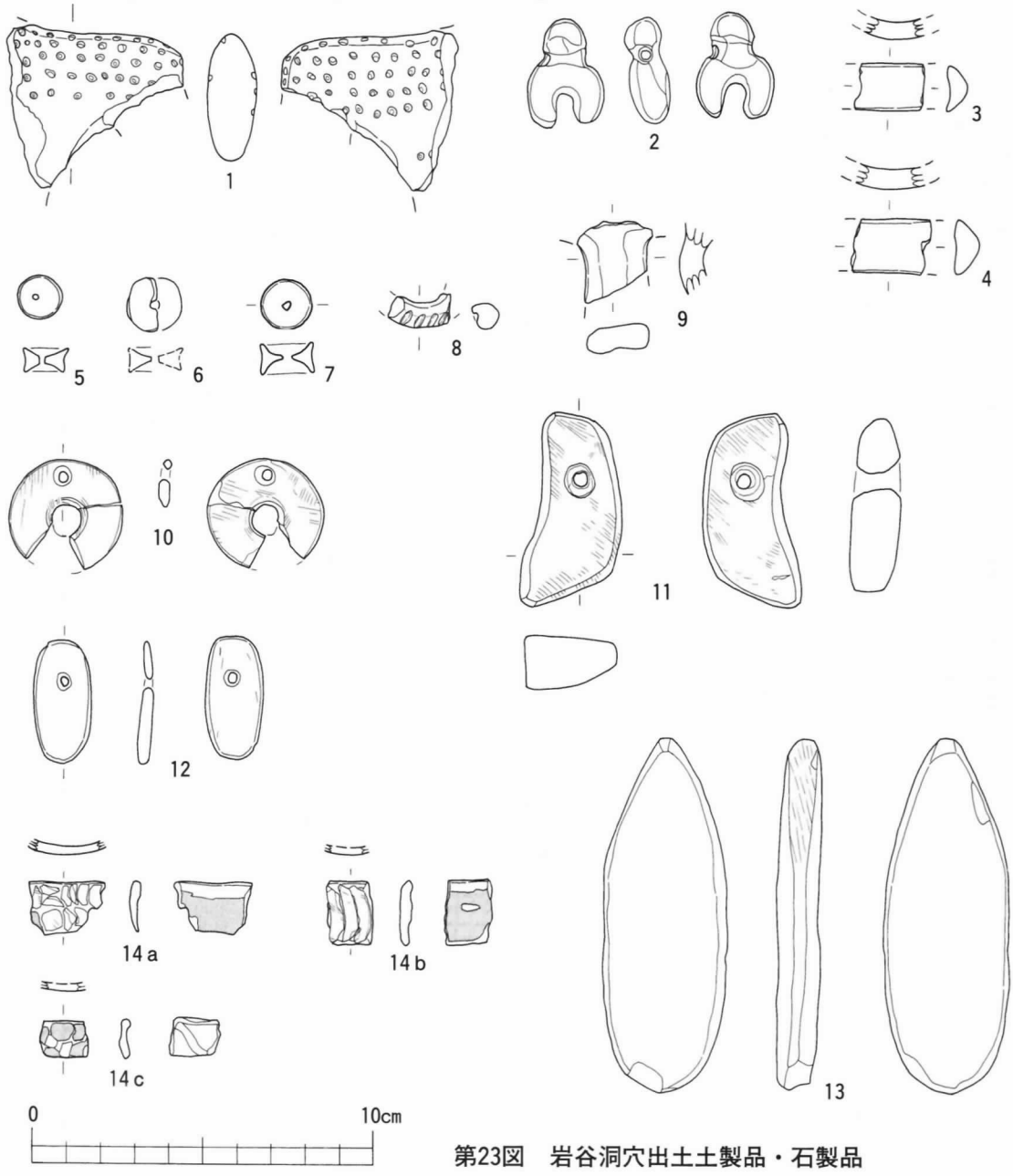
14ｂは、長さ1.7㎝の三日月状に加工された貝破片が３枚埋め込まれたものである。貝破片は図

に向かって、右端→中央の破片の順で埋め込まれている。左端との前後関係は不明である。表面には擦痕が観察できる。資料の上下は屈曲する部分になっており、幅が推定できる。内面は上端と中央の島状に残された部分を除いて、剥離面に占められている。残存長1.2、幅1.8、厚さ0.4㎝、重量は1.2ｇである。ＣＡ区カクラン出土である。

14ｃは貝破片が３つ埋め込まれているものである。既に剥落した貝破片の痕跡が５つあり、計８つの破片が存在したものと考えられる。14ａと比較すると貝が摩滅している。内面では上端がわずかに残存している。内面を斜めに横断するように窪みがあるが、何の痕跡かは不明である。上のラインと下の一部に生きている面があり、幅1.1㎝となる。残存長1.4、厚さ0.2㎝、重量は0.6ｇである。

これら３つは、断面形が若干反っている点、残存幅から象眼された腕輪の一部と推定される。幅にバラツキがあることから、部位によって腕輪の幅が異なっていたと推定できる。写真図版5-14～16。

琥珀片も３点出土しているが、原形を留めておらず、粉状になっている。いずれもＥ区のⅣｂ～Ｘ層から、0.1ｇ、Ⅷａ層から0.1ｇ、Ⅷｂ層から0.6ｇ出土している。



第23図　岩谷洞穴出土土製品・石製品

(4)骨角貝器

骨角貝器は合計54点出土している。

1は加工痕のある鹿角である。先端部は擦痕が集中し、尖っている。基部は折れている。擦痕は裏面の下半部を除いて、ほぼ全体に存在している。長さ10.2、幅1.2、厚さ0.85㎝、重量は10.8ｇである。

2は鹿角製で、残存長13.7、幅1.4、最大厚0.9㎝、重量15ｇである。先端が丸みを帯びいる。擦痕は先端や側面に見られ、下端は折れている。表黒Ｘe出土である。

3は猪下顎犬歯製のもので両端は折れている。内面の湾曲する側に擦痕がみられる。残存長8.5、幅1.5㎝、重量は7.3ｇである。Ｅ区のＸa層出土である。写真図版5-18。

4は骨製で扁平に加工されたものである。表裏面は丁寧に加工され、非常に滑らかで、光沢がある。表面は縦方向に研磨されている。裏面はほぼ平になっている。最大長6.7、最大幅2.0、最大厚0.3㎝である。両端は折れている。重量は2.8ｇである。哺乳類骨が素材と思われる。Ｅ区表土出土である。

5は釣り針である。長さ1.4、幅0.8、厚さ0.12㎝、重量0.1ｇである。返しが付いている。針先部長は0.5㎝である。写真図版5-20。

6は先端部につまみが付くものである。残存長2.0、幅0.7、最大厚0.51㎝、重量0.6ｇである。先端が丸く加工され、その基部には沈線が巡る。下端は、その断面の観察から、加工を全周に施した後、折り取りしたものである。Ｅ区表黒出土である。

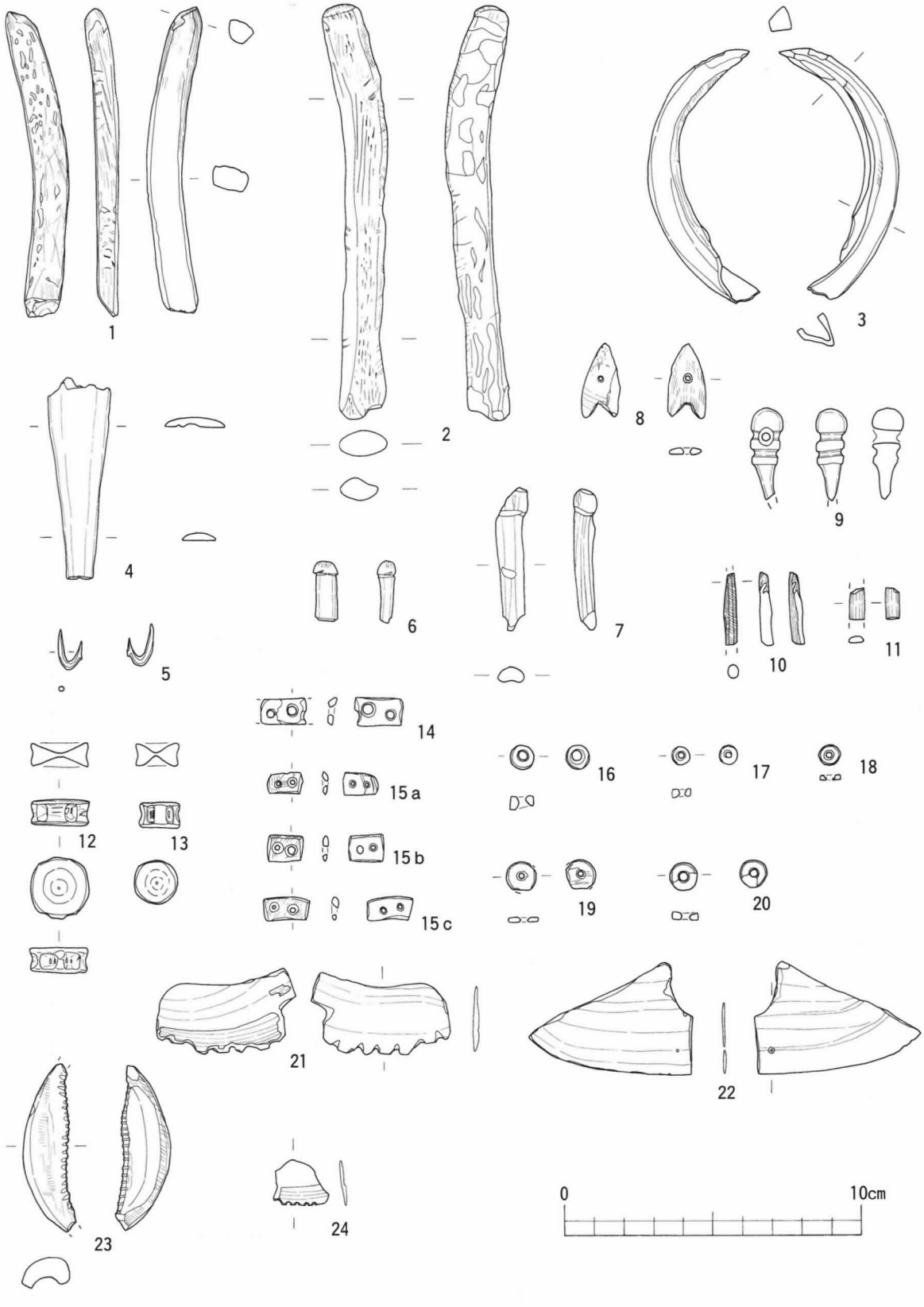
7は、6と同様、つまみが造り出されるもので、残存長4.8、幅1.1、最大厚0.63、重量1.4ｇである。つまみ部の上下には沈線が施文されている。つまみ部以外の断面は半円形となっている。Ｅ区表黒出土である。

8は牙鏃か銛、あるいは垂飾品と考えられるものである。長さ2.5、幅1.3、厚さ0.2、孔径0.35㎝、重量0.4ｇである。穿孔は両側からである。裏面には擦痕が観察できる。OA区カクラン出土である。写真図版5-19。

9は、髪針のつまみ部分と推定されるものである。頂部は丸く作り出され、沈線が2条平行に刻まれ、最初の沈線に直径0.5㎝の穿孔がなされている。残存長は3.0、最大幅1.1、軸径0.4㎝、重量1.37ｇである。動物にかじられた跡と思われる痕跡が残っている。Ｅ区表黒カクラン、Ｘe層出土である。

10、11は骨角器の破片である。10は全体に擦痕があり、残存長2.45、幅0.45、厚さ0.45㎝、重量0.5ｇである。11は残存長1.05、幅0.5、厚さ0.25㎝、重量0.6ｇである。ともに焼成を受け、Ａ区Ⅲ層出土で、素材は哺乳類骨と思われる。

図示しなかった骨器がある。刺突具の先端破片は残存長0.9、幅0.3㎝、で重量は0.05ｇである。鹿角製と推定される。Ｆ区Ⅸc層から出土している。もう一つの刺突具破片は、残存長1.5、幅0.5㎝、重量0.22ｇである。全体に擦痕が見られ、面、稜が形成されている。哺乳類の骨が素材と考えられる。Ｅ区Ⅷa層出土である。また、平面形が長楕円形の骨器が1点出土している。残存長3.6、幅1.7、厚さ0.3㎝、重量1.8ｇである。厚さにややバラツキがあるが、扁平なものである。Ｅ区Ⅷｂ層出土である。カットマークのある鳥骨製製品が1点出土している。残存長0.9、幅0.4㎝、重量0.2ｇである。カットマークは鳥骨長軸に直行する形で上下端と中央に残っている。Ｅ区表土、黒土（壁際）出土である。このほか、加工痕のある骨が、カクランから2点、Ｅ区カクラン（表黒Ｘe層）、Ｅ区表土黒土、Ｅ区表黒（カベギワ）、Ｅ区表黒土から各1点づつ出土している。Ｉａ層からはヘラ状



第24図　岩谷洞穴出土骨角貝器（1）

の骨器１点、Ｅ区カクラン（表黒Ｘｅ層）からは穿孔のあるもの１点が出ている。

12、13は椎骨に穿孔がなされるものである。12は直径2.1～1.95、厚さ0.85㎝、重量は1.3ｇである。Ｅ区カクラン出土である。13は直径1.4～1.45、厚さ0.9㎝、重量は0.7ｇである。素材は共に、サメ類椎骨で、Ｅ区Ⅸ層出土である。図示していないものには、椎骨に穿孔あるもの１点がＥ区カクランから出土している。

14は淡水産二枚貝に両側からの３つの穿孔がなされているものである。うち２つは完全な形で確認できるが、１つは４／１弱しか残存していない。残存長1.5、幅0.9、厚さ0.2㎝、重量0.5ｇである。15aは２つの穿孔がされるものである。残存長1.2、幅0.7、厚さ0.2㎝、重量0.2ｇである。15bは２つの穿孔がされるもので、残存長1.2、幅0.9、厚さ0.2㎝、重量0.2ｇである。15cは２つの穿孔がされるもので、残存長1.5、幅0.8、厚さ0.2㎝、重量0.5ｇである。４つとも側面にも加工痕・擦痕がされている。穿孔径は0.25～0.3㎝である。15a～cは、断面の観察からすると、その左右両端が、加工を全周に施した後、折り取りしたもので、猪牙製である。写真図版5-21～24。

16、17、19、20は両側から穿孔されている。16は全面は丁寧に磨かれ、光沢に覆われ、擦痕は観察できない。直径0.8、孔径0.2、厚さ0.4㎝、重量0.3ｇである。17は焼成を受けたもので、全体に擦痕があり、さらに光沢もある。直径0.6、孔径0.2、厚さ0.3㎝、重量0.2ｇである。18は穿孔部分に段がつくものであり、片側からの穿孔で、Ｅ区Ⅲ層出土である。直径0.7、孔径0.2、厚さ0.2㎝、重量0.1ｇである。19は縁辺の一部が欠損しているが、直径0.9、孔径1.5、厚さ0.2㎝、重量0.3ｇで、Ｅ区Ⅳ層出土である。20は表裏の器面の一部が剥落している。直径1.0、孔径0.3、厚さ0.3㎝、重量0.3ｇである。16、17、20は猪犬歯製である。

21は貝製品である。貝の縁辺にキザミを入れ、鋸歯状に加工したものである。表面の大部分は剥離しており、縁辺部分しか本来の厚さを留めていない。残存長は4.6、残存幅2.25、厚さ0.2㎝、重量4.0ｇで、カラスガイがドブガイ製と考えられる。Ｄ区1,2層出土である。図示しなかったものに、ＦⅦｂ層から巻貝を加工し、軸状にしたものが１点ある。

22は貝に穿孔がなされるものである。0.1㎝の穿孔が１箇所なされている。残存長5.55、残存幅3.7、厚さ0.1㎝、重量は3.5ｇで、穿孔は両側からである。淡水性二枚貝製と思われる。Ｅ区Ⅳｂ-Ｘ層出土である。写真図版5-23。

23はタカラガイ製の垂飾品である。両端が欠損しているが、残存長5.7、幅1.5、厚さ0.9㎝である。内面の切断の際の明瞭な擦痕がある。重量は9.3ｇである。Ｅ区表土黒土からの出土である。写真図版5-17。

24は貝製品で縁辺が鋸歯縁状に加工されている。外面は縁辺よりの下方しか残存していない。残存長1.5、残存幅1.8、厚さ0.1㎝、重量0.9ｇで、エゾアワビが利用されたものと推定される。

25、26は貝輪である。内外面とも磨滅している。残存長4.0、幅0.9、厚さ0.23㎝、重量1.9ｇである。E区カクラン、表土黒土Ｘe層出土で、貝種は不明である。26は、残存長3.5、幅0.7、厚さ0.36㎝、重量1.2ｇである。フネガイ科サルボウもしくは、アカガイ製で、表採資料である。また図示しなかった貝輪が２点ある。１つはカサガイ類で、Ｅ区Ⅸ層から出土している。貝種不明のものはＥ区表土黒壁際から出土している。

27は穿孔されたイシガイ左殻製品である。残存長3.4、残存幅1.8、厚さ0.1㎝、重量2.1ｇで、ＯＡ区１層ａ出土である。内面には３箇所の穿孔があり、図の左端は穿孔途中のものである。その右は、２つの穿孔が重なっている。左側に穿孔途中の孔があり、その右側にそれを切った形で貫通する穿孔がある。孔径は0.3㎝である。

28は内面に外側からの穿孔があるものである。殻高3.3、殻長3.2、高さ1.4㎝で重量5.5ｇである。外面の左側に0.15～0.2㎝の大きさの孔があるが、人為的に穿孔されたものではない。内面の一部には擦痕、直径0.15～0.2㎝の孔があり、面が形成されている。タマキガイ製で、Ｅ区表土出土である。

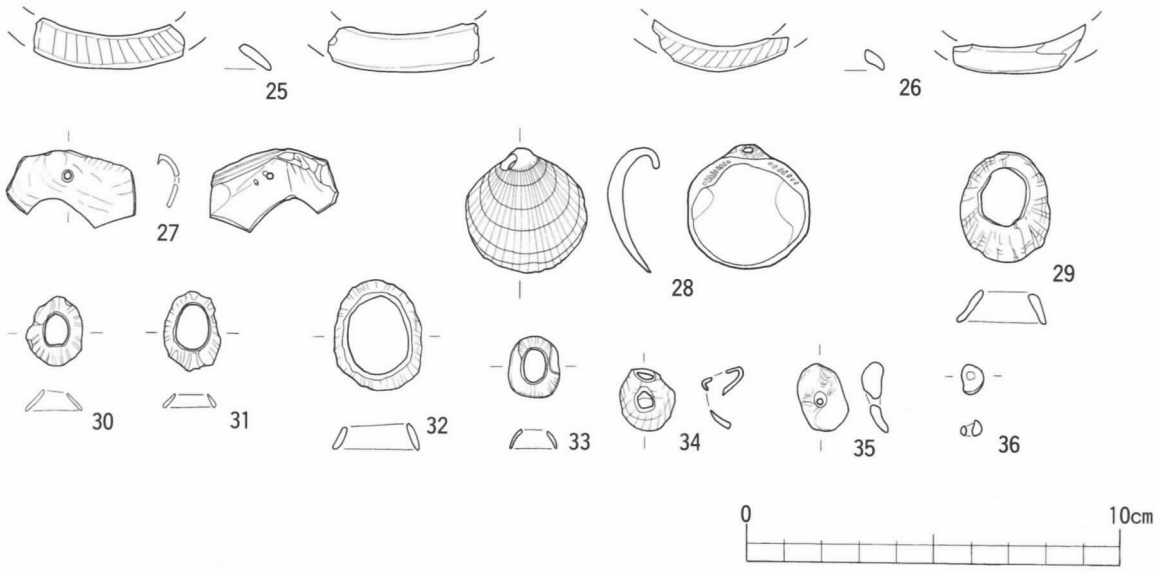
29～31はカサガイ類の殻頂部に孔のあいているものである。29は長径2.4、短径2.3、厚さ0.2、高さ0.8㎝で、孔は長径1.6、短径1.2㎝である。重量2.2ｇ、Ｅ区表黒出土である。30長径1.9、短径1.5、厚さ0.1、高さ0.6㎝である。孔径は長径0.8、短径0.6㎝、重量0.5ｇ、Ｅ区表黒出土である。31は長径2.1、短径1.4、厚さ0.1、高さ0.3㎝である。孔径は長径0.8、短径1.2㎝で、重量は0.7ｇである。Ｅ区表黒出土である。

32は貝に孔があけられたもので、切断されたところは平滑な面となっている。大きさは長径2.8、短径2.4、厚さ0.2、高さ0.7㎝、重量1.5ｇである。孔径は長径2.1、短径1.5㎝となっている。表土出土である。33は長径1.65、短径1.5、厚さ0.1、高さ0.5㎝、重量0.4ｇで、孔径は長径0.8、短径0.6㎝である。孔に見える部分は断面の観察から割れによるものと判断できる。34はアマオブネガイに２つの穿孔をしたものである。孔の周りには擦痕がある。長径1.6、短径1.4、厚さ0.2、高さ1.0㎝、重量1.0ｇである。上の孔の径は0.4～0.5、下の孔の径は0.45～0.5㎝で、Ｆ区Ⅷa層出土である。29～33はカサガイ類製である。

35は長径1.8、短径1.3、厚さ0.5㎝、重量1.0ｇである。両側から穿孔されおり、孔径は0.2㎝ほどである。Ｆ区Ⅷa層出土、貝製である。

36は真珠に穿孔したものである。長径0.8、短径0.6、厚さ0.4㎝、重量0.3ｇである。孔径は0.2㎝で、両側から穿孔である。写真図版5-3。また、図示できなかったが、直径0.36㎝の球形の真珠が１点出土している。重量は0.2ｇである。写真図版5-4。

実物の所在不明で図示できなかった資料が１点ある。鳥骨に３つの穿孔がなされるもので、長さ5.2㎝（写真図版５の上段左端）である。



第25図　岩谷洞穴出土骨角貝器（2）

動物遺存体

今回は1975年の調査資料のうち、表土や撹乱を除いたものとサンプル資料を１㎜メッシュで水洗フルイにかけたもの10袋を対象とした。種名表は掲載しないが、詳細についてはそれぞれの出土一覧表を参照していただきたい。動物の種名については、参考文献としてあげているものに準拠している。

以下で遺物の大きな種類ごとに岩谷洞穴遺跡の動物遺存体を概観していく。

貝類は、ヤマキサゴ、カワシンジュガイが圧倒的に多い。カワシンジュガイは食用のためと考えられるが、ヤマキサゴは陸産の貝類で洞穴内で自然死したと考えられる。海産の貝類も若干含まれるが、ほとんど岩礁性の巻貝である。小本川の河口付近の環境を反映していると考えられる。河口に内湾的な環境もある気仙川上流の小松洞穴遺跡とも内容は異なるようである。

ほ乳類はイノシシ、シカなどのほかツキノワグマ、カモシカ、ニホンザルが多いのが目に付く。また、洞穴内に生息していたと思われるコウモリ類の骨も出土している。ネズミ類も多いが食用にされたかどうかは疑問である。

両生類では、ヒキガエルがほとんどを占めている。上腕骨からみると雄が雌よりかなり数が多いようである。カエル類の同定については現生標本が十分でないため、野苅・長谷川（1979）による検索表を用いている。ヒキガエルはほとんど単一種で且つ出土量が多いこと、人為的に傷をつけられた痕跡を持つものがあることから食用として捕獲されていたと考える。

魚類については、淡水産の魚類より、海産のものがずっと多い。淡水産のものとしてはヤマメと考えられる小型のサケ科魚類、コイ科魚類などが少量出土しているのみである。多くはカツオ・サバ属・ソウダガツオ属・フサカサゴ科等の海産魚類である。出土部位から見ると、頭部の骨はごく少なく、椎骨が最も多い。サバなどの腐りやすい魚を海岸部で加工して持ち込んでいる可能性が高い。持ち込まれる方法に交易の様なものが考えられるが、岩谷洞穴側から海岸部の人へ対価として何があったのか興味深い。水洗フルイの資料からはイワシ類も出土している。

以上簡単だが概要となる。より遺跡の性格を明確にするため河口部の遺跡や他の地域の洞穴遺跡との比較など今後の検討課題としていく必要がある。鳥類は出土しているが、今回、分析できなかった。

今回の遺物の同定の際には陸前高田市の佐藤正彦氏、洞穴遺跡調査員でもある陸前高田市立博物館の熊谷賢氏の多大な御協力を得ている。また、岩手県立博物館には館所蔵の骨格標本を利用させていただいた。

参考文献

野苅家宏、長谷川善和　1979：「日本産蛙類の骨学的研究」『伊江島ナガラ原西貝塚』
岡田要、今泉吉典　1960：『原色日本哺乳類図鑑』
波部忠重、奥谷喬司　1983：『学研西部貝図鑑　貝I』
波部忠重、奥谷喬司　1983：『学研西部貝図鑑　貝II』
益田一他　1984：『日本産魚類大図鑑』
東正雄　1982：『原色日本陸産貝類図鑑』

水洗フルイのデータ

袋番号	体積 cc	重量 kg	土器 g	チップ g	エノキ g	炭化物 g	袋に記された記号等
1	12300	10.84	131.8	0	0.4	8.1	記号あるが不明
2	11700	10.04	36	0	0	11	⑤
3	9000	7.85	43.3	0.7	0.5	12.7	①
4	9600	12.75	6.3	0	0.2	2.1	記号なし
5	8650	7.66	40.3	0	0.1	4.5	②
6	5250	5.07	0	0.01	0.2	4	⑪
7	6000	5.77	0	0.1	1.3	8.4	IY73⑩
8	6350	5.91	7.8	0	0.6	1.3	岩谷⑨
9	6900	5.96	7.2	0	0.3	3.4	⑧
10	8550	7.65	35	0	0.1	12.2	⑥
合計	84300	79.5	307.7	0.81	3.7	67.7	

保存サンプルを除いた体積・重量である。

貝類

地点	層位	マキガイ綱			ニマイガイ綱						
		種名			種名						
		ヤマキサゴ	エゾアワビ	その他	カワシンジュガイ		マシジミ		イガイ		その他
					左	右	左	右	左	右	
A	4					1					
C	Ib				2	5					
C	IVb					2					
D	1-2			チヂミボラ1							
E	IVb			パツラマイマイ1	1	2					
E	IVb下部	1		チヂミボラ1	5	4					ドブガイ・カラスガイの破片
E	VI					1					
E	VIb				3						ドブガイ・カラスガイの破片
E	VIc		1		5	8					ハマグリ左1（擦痕あり）
E	VⅡ	2									
E	VⅡa				1	1				1	
E	VⅡb				2	4					
E	VⅢ	1									
E	VⅢa	26	1	不明1	16	20	1			1	マガキ左1、ドブガイ・カラスガイの破片
E	VⅢb	9	1	イボニシ1、クボガイ1、ユキノカサガイ1、マイマイ属1、ミガキボラ？1、オオウケマイマイ破片	43	46	3				ムラサキインコガイ左1、ヤマトシジミ左2、ドブガイ・カラスガイの破片・ハマグリ破片
E	IX	95	2	キセルガイモドキ2、オオウケマイマイ3、キセルガイ科の一種1、ニッポンマイマイ1、マイマイ属2	25	23	2	2		1	マツカサガイ左3、ムラサキインコガイ左1・右5、ドブガイ・カラスガイの破片
E	IXb		1	ユキノカサガイ1、キセルガイモドキ7、ニッポンマイマイ3、オオウケマイマイ1、マイマイ属1	12	8		1		2	ムラサキインコガイ左1、ドブガイ・カラスガイの破片
E	IXb(純灰)	113		ニッポンマイマイ1、オオウケマイマイ（幼）1							
E	IXb-3	1									
E	IXc	42		ユキノカサガイ5、ユキノカサガイ科の一種1	3	6					
E	IXd	6			2	1					
E	IXe	32		キセルガイモドキ1、ニッポンマイマイ1	2						
E	IXf	24			1						
E	IXi	7			1						
E	X	3									
E	Xa	72		キセルガイモドキ1		1					
E	Xc	65		オオウケマイマイ1、フトキセルガイモドキ1	2	3					
E	Xd	3				1					
E	Xe	46		キセルガイモドキ1、フトキセルガイモドキ3、オオウケマイマイ1、シボリガイ1、パツラマイマイ1	3	2					
E	XI	2			1						
F	VⅡb	2	破片	カサガイ類1	12	8			1		
F	VⅡc	2		マイマイ属1	4	5			破片		
F	VⅢa	3	破片	マイマイ属1	9	4					カモガイ右1
F	VⅢb					2					
F	IXb	15	1	フトキセルガイモドキ1	3	2			1		
F	IXc					3					ムラサキインコガイ右1
OA	I		1								

哺乳類

地点	層位	種　　名	部　位	左右	備考
A	4	ムササビ？	下顎骨	左	1
C	Ib	ノウサギ	中足骨	?	1
E	Ⅳb	サル	下顎骨	右	1
E	Ⅳb	シカ	下顎臼歯	?	1
E	Ⅳb下部	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅸ	アナグマ	下顎骨	左	1
E	Ⅸ	イヌ科？	中手あるいは中足骨		1
E	Ⅸ	イヌ科？	下顎骨	右	1
E	Ⅸ	イヌ科？	基節骨		1
E	Ⅸ	イノシシ	胸椎		1
E	Ⅸ	イノシシ	基節骨		1
E	Ⅸ	イノシシ	上顎Ⅰ2	左	1
E	Ⅸ	イノシシ	下顎pm	左	1
E	Ⅸ	イノシシ	上顎Ⅰ1	左	1
E	Ⅸ	イノシシ	Ⅰ1		1
E	Ⅸ	カモシカ	下顎PM2	右	1
E	Ⅸ	カモシカ	下顎骨	右	2
E	Ⅸ	カモシカ	下顎M2	左	1
E	Ⅸ	キツネ？	基節骨		2
E	Ⅸ	クマ	末節骨		1
E	Ⅸ	サル	下顎骨	右	1
E	Ⅸ	シカ	中節骨	左	1
E	Ⅸ	シカ	基節骨	左	1
E	Ⅸ	シカ	下顎臼歯	左	1
E	Ⅸ	シカ	橈骨	右	1
E	Ⅸ	シカ?	寛骨	左	1
E	Ⅸ	ジネズミ	下顎骨	左	1
E	Ⅸ	ネズミ亜科	下顎骨	右	8
E	Ⅸ	ネズミ亜科	下顎骨	左	11
E	Ⅸ	ネズミ科	上顎骨	左	1
E	Ⅸ	ネズミ科	上腕骨	左	1
E	Ⅸ	ネズミ科	上腕骨	右	2
E	Ⅸ	ネズミ科	大腿骨	左	1
E	Ⅸ	ネズミ科	橈骨	左	1
E	Ⅸ	ネズミ科	尺骨	左	1
E	Ⅸ	ネズミ科	尺骨	右	1
E	Ⅸ	ネズミ科	大腿骨	右	4
E	Ⅸ	ネズミ科	寛骨	右	1
E	Ⅸ	ノウサギ	下顎骨	左	1
E	Ⅸ	ノウサギ	下顎Ⅰ	左	1
E	Ⅸ	ノウサギ	下顎M	左	3
E	Ⅸ	ノウサギ	第三中足骨	左	1
E	Ⅸ	ノウサギ	第二中手骨	左	1
E	Ⅸ	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	5
E	Ⅸ	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅸ	ハタネズミ亜科	臼歯片	?	1
E	Ⅸ	ハタネズミ亜科	上顎骨	右	2
E	Ⅸ	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	8
E	Ⅸ	ヒト	尺骨	左	1
E	Ⅸ	ムササビ?	踵骨	左	1
E	Ⅸ	モグラ科	下顎骨	右	2
E	Ⅸ	モグラ科	上腕骨	右	1
E	Ⅸb	イノシシ	基節骨	右	1
E	Ⅸb	イノシシ	基節骨	左	1
E	Ⅸb	イノシシ	下顎M3	右	1
E	Ⅸb	イノシシ	下顎切歯	左	1
E	Ⅸb	イノシシ	第五中手骨?	右	1
E	Ⅸb	カモシカ	下顎M3	右	1
E	Ⅸb	シカ	基節骨	左	1
E	Ⅸb	シカ	脛骨	左	1
E	Ⅸb	ネズミ亜科	下顎骨	右	3
E	Ⅸb	ネズミ亜科	下顎骨	左	2
E	Ⅸb	ネズミ科	下顎I	左	1
E	Ⅸb	ネズミ科	上腕骨	左	1
E	Ⅸb	ネズミ科	大腿骨	右	1
E	Ⅸb	ネズミ類	下顎骨	左	1
E	Ⅸb	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	3
E	Ⅸb	ハタネズミ亜科	頭骨		1

地点	層位	種　　名	部　位	左右	備考
E	Ⅸb	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅸb	モモンガ？	下顎骨	左	1
E	Ⅸb	食虫目の一種	上顎骨		1
E	Ⅸb	不明	基節骨		1
E	Ⅸb(純灰)	イノシシ	側頭骨	左	1
E	Ⅸb(純灰)	イノシシ	PM	?	1
E	Ⅸb(純灰)	イノシシ	橈骨	右	1
E	Ⅸb(純灰)	ネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅸb(純灰)	ネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅸb(純灰)	ハタネズミ亜科	上顎骨		1
E	Ⅸb(純灰)	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅸb-3	ネズミ亜科	下顎骨	右	2
E	Ⅸb-3	ネズミ科	上腕骨	左	1
E	Ⅸc	イヌ	踵骨	左	1
E	Ⅸc	イノシシ	上顎切歯	右	1
E	Ⅸc	イノシシ	上顎I2	右	1
E	Ⅸc	イノシシ	上顎骨	左	1
E	Ⅸc	クマ	第五中足骨	右	2
E	Ⅸc	シカ	臼歯	?	1
E	Ⅸc	シカ?	臼歯		1
E	Ⅸc	タヌキ?	下顎犬歯	左	1
E	Ⅸc	タヌキ?	下顎犬歯	右	1
E	Ⅸc	テン	踵骨	左	1
E	Ⅸc	ネズミ亜科	下顎骨	右	3
E	Ⅸc	ネズミ亜科	下顎骨	左	3
E	Ⅸc	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	8
E	Ⅸc	ヒト?	頭骨片		1
E	Ⅸc	小形ほ乳類	腰椎		1
E	Ⅸc	不明	基節骨		1
E	Ⅸd	イノシシ	中節骨	左	1
E	Ⅸd	クマ	第三中手骨	左	1
E	Ⅸd	サル	下顎M3	右	1
E	Ⅸd	シカ	上顎M3	左	1
E	Ⅸd	シカ	中節骨	左	1
E	Ⅸd	ネズミ亜科	下顎骨	右	2
E	Ⅸd	ネズミ亜科	上顎骨	右	1
E	Ⅸd	ハタネズミ亜科	上顎骨	右	2
E	Ⅸd	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅸd	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	2
E	Ⅸd	ヒト	第一中手骨	左	1
E	Ⅸe	カモシカ	上顎臼歯	右	2
E	Ⅸe	ネズミ科	大腿骨	左	1
E	Ⅸe	ハタネズミ亜科	上顎骨		1
E	Ⅸe	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅸf	ネズミ科？	仙椎		1
E	Ⅸf	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅸg	ネズミ亜科	下顎骨	右	2
E	Ⅵb	イノシシ	腰椎		1
E	Ⅵb	イノシシ	頬骨	左	1
E	Ⅵb	イノシシ	下顎骨	左	1
E	Ⅵb	カモシカ	中手骨		1
E	Ⅵb	カモシカ	下顎M1	右	1
E	Ⅵb	クマ	下顎骨	左	1
E	Ⅵb	サル	下顎骨	右	1
E	Ⅵb	サル	下顎骨	左	1
E	Ⅵb	サル	下顎M3	右	1
E	Ⅵb	シカ	角	?	1
E	ⅥIb	シカ	中節骨	右	1
E	Ⅵb	シカ	中手骨	?	1
E	Ⅵb	シカ	橈骨	右	2
E	Ⅵc	サル	距骨	右	1
E	Ⅶb	イヌ科	中手骨	?	1
E	Ⅶb	イノシシ	脛骨	左	1
E	Ⅶb	イノシシ	橈骨	右	1
E	Ⅶb	イノシシ	第四中手骨	右	1
E	Ⅶb	カモシカ	上顎臼歯M1or2	右	1
E	Ⅶb	カモシカ	上顎臼歯pm2	右	1
E	Ⅶb	サル	上胸骨	右	2

地点	層位	種　　名	部　位	左右	備考
E	Ⅶb	サル	上腕骨	左	2
E	Ⅶb	サル	下顎臼歯M1or2	左	2
E	Ⅶb	シカorカモシカ	下顎骨	右	1
E	Ⅶb	ヒト	基節骨		1
E	Ⅶb	ヒト	中節骨		1
E	Ⅶb	ヒト？	上腕骨	右	1
E	Ⅶa	イノシシ	臼歯片	?	1
E	Ⅷa	シカ	末節骨	左	1
E	Ⅷa	シカ	距骨	左	1
E	Ⅷa	ネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅷa	ネズミ亜科	下顎骨	右	2
E	Ⅷa	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅷa	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	2
E	Ⅷa	モグラ科	上腕骨	左	1
E	Ⅷb	イノシシ	下顎切歯I2?	右	1
E	Ⅷb	イノシシ	下顎骨	左	1
E	Ⅷb	イノシシ	距骨	右	1
E	Ⅷb	イノシシ	下顎PM3	右	1
E	Ⅷb	イノシシ	第五中手骨	右	1
E	Ⅷb	キツネ	第三中足骨	右	1
E	Ⅷb	キツネ	第四中足骨	右	1
E	Ⅷb	キツネ	第二中足骨	右	1
E	Ⅷb	キツネ	橈骨	右	1
E	Ⅷb	キツネ?	基節骨		2
E	Ⅷb	シカ	中足骨	?	1
E	Ⅷb	シカ?	末節骨	左	1
E	Ⅷb	テン?	踵骨	左	1
E	Ⅷb	テン?	距骨	左	1
E	Ⅷb	ネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅷb	ネズミ科	上腕骨	左	1
E	Ⅷb	ネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅷb	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅹ	ハタネズミ亜科	上顎骨		1
E	Ⅹ	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅹ	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅹa	イノシシ	上顎C	右	1
E	Ⅹa	イノシシ	上顎PM2	右	1
E	Ⅹa	イノシシ	PM	?	1
E	Ⅹa	ニホンキクガシラコウモリ?	下顎骨	左	1
E	Ⅹa	ネズミ亜科	下顎骨	右	3
E	Ⅹa	ネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅹa	ネズミ科	上腕骨	右	1
E	Ⅹa	ハタネズミ亜科	上顎骨	右	1
E	Ⅹa	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	2
E	Ⅹa	ヒト?	頭骨片		1
E	Ⅹc	イノシシ	下顎骨	右	1
E	Ⅹc	イノシシ	上顎I2	左	1
E	Ⅹc	シカ	寛骨	右	1
E	Ⅹc	シカ	末節骨	右	1
E	Ⅹc	シカ	肩甲骨	右	1
E	Ⅹc	ネズミ亜科	下顎骨	右	2
E	Ⅹc	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	Ⅹd	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	1
E	Ⅹe	シカ	距骨	左	1
E	Ⅹe	シカ	基節骨	右	1
E	Ⅹe	シカ	基節骨	左	1
E	Ⅹe	ネズミ科	大腿骨	左	1
E	Ⅹe	ハタネズミ亜科	下顎骨	右	1
E	ⅩⅠ	シカ	下顎M3	右	1
E	ⅩⅠ	ジネズミ	下顎骨	左	1
E	ⅩⅠ	ネズミ亜科	下顎骨	右	2
E	ⅩⅠ	モグラ科	上腕骨	左	1
E区	Ⅶb	シカ	角先端部	?	1
F	Ⅶb	イノシシ	下顎I1?	左	1
F	Ⅶc	ネズミ亜科	下顎骨	左	1
F	Ⅷb	イノシシ?	末節骨	左	1

魚類1

地点	層位	種　　名	部位	左右	数量
E	Ⅳb	サケ科	腹椎		1
E	Ⅳb		尾椎		1
E	Ⅳb	サバ属	尾椎		1
E	Ⅳb	板鰓亜綱	椎骨		1
E	Ⅳb下部	サケ科	尾椎		1
E	Ⅳb下部	サバ属	尾椎		2
E	Ⅳb下部	ソウタカツオ属	椎骨		1
E	Ⅳh下部	サバ属	舌顎骨	左	1
E	Ⅳh下部	ブリ属	尾椎		2
E	Ⅵc	カツオ	尾椎		2
E	Ⅵc	サケ科	尾椎		2
E	Ⅵc	サバ属	尾椎		2
E	Ⅵc	板鰓亜綱	椎骨		2
E	Ⅵc	不明	椎骨		1
E	Ⅶa	カツオ	尾椎		1
E	Ⅶa	カツオ	万骨	左	1
E	Ⅶa	カワハギ科	尾椎		1
E	Ⅶa	タイ科	尾椎		1
E	Ⅶa	フサカサゴ科	尾椎		1
E	Ⅶb	板鰓亜綱	椎骨		1
E	Ⅶb	タイ科	椎骨		1
E	Ⅶb	ブリ属	尾椎		1
E	Ⅶb	不明	椎骨		1
E	Ⅷa	アイナメ科	尾椎		3
E	Ⅷa	カツオ	腹椎		4
E	Ⅷa	カツオ	尾椎		9
E	Ⅷa	カツオ	扇状骨		1
E	Ⅷa	サケ科	椎骨		2
E	Ⅷa	サケ科	腹椎		3
E	Ⅷa	サケ科	尾椎		3
E	Ⅷa	サバ科	前上顎骨	左	1
E	Ⅷa	サバ属	腹椎		7
E	Ⅷa	サバ属	尾椎		14
E	Ⅷa	板鰓亜綱	椎骨		13
E	Ⅷa	板鰓亜綱	遊離歯		1
E	Ⅷa	ソウダカツオ属	椎骨		9
E	Ⅷa	ソウダカツオ属	尾椎		6
E	Ⅷa	タイ科	尾椎		1
E	Ⅷa	フサカサゴ科	歯骨	右	1
E	Ⅷa	フサカサゴ科	腹椎		2
E	Ⅷa	フサカサゴ科	尾椎		5
E	Ⅷa	ブリ属	椎骨		1
E	Ⅷa	ブリ属	腹椎		3
E	Ⅷa	ブリ属	尾椎		11
E	Ⅷa	不明	椎骨		2
E	Ⅷa	不明	腹椎		1
E	Ⅷa	不明	尾椎		4
E	Ⅷb	アイナメ科	腹椎		1
E	Ⅷb	アイナメ科	尾椎		8
E	Ⅷb	カワハギ科	尾椎		1
E	Ⅷb	カツオ	椎骨		5
E	Ⅷb	カツオ	腹椎		27
E	Ⅷb	カツオ	尾椎		48
E	Ⅷb	コイ科	尾椎		1
E	Ⅷb	サケ科	腹椎		8
E	Ⅷb	サケ科	尾椎		4
E	Ⅷb	サバ属	前上顎骨	右	1
E	Ⅷb	サバ属	腹椎		14
E	Ⅷb	サバ属	尾椎		32
E	Ⅷb	板鰓亜綱	椎骨		34
E	Ⅷb	ソウダカツオ属	椎骨		21
E	Ⅷb	ソウダカツオ属	腹椎		6
E	Ⅷb	ソウダカツオ属	尾椎		3
E	Ⅷb	タイ科	前上顎骨	右	1
E	Ⅷb	タイ科	腹椎		2
E	Ⅷb	タイ科	尾椎		6
E	Ⅷb	タイ科	遊離歯		1
E	Ⅷb	フサカサゴ科	舌顎骨	右	1
E	Ⅷb	フサカサゴ科	尾椎		1
E	Ⅷb	ブリ属	腹椎		3
E	Ⅷb	ブリ属	尾椎		6
E	Ⅷb	マグロ属	尾椎		1
E	Ⅷb	不明	腹椎		1
E	Ⅷb	不明	尾椎		1
E	Ⅷc	板鰓亜綱	椎骨		12
E	Ⅸ	アイナメ科	腹椎		5

地点	層位	種　　名	部位	左右	数量
E	Ⅸ	アイナメ科	尾椎		4
E	Ⅸ	マアジ	尾椎		1
E	Ⅸ	カワハギ科	腹椎		5
E	Ⅸ	カワハギ科	尾椎		2
E	Ⅸ	カワハギ科	尾部棒状骨		1
E	Ⅸ	カツオ	椎骨		1
E	Ⅸ	カツオ	腹椎		29
E	Ⅸ	カツオ	尾椎		26
E	Ⅸ	カツオ	方骨	右	1
E	Ⅸ	カツオ?	肩甲骨	右	1
E	Ⅸ	カツオ?	扇状骨		3
E	Ⅸ	サケ科	腹椎		15
E	Ⅸ	サケ科	尾椎		17
E	Ⅸ	サバ属	腹椎		18
E	Ⅸ	サバ属	尾椎		35
E	Ⅸ	サバ属	尾部棒状骨		1
E	Ⅸ	板鰓亜綱	遊離歯		1
E	Ⅸ	板鰓亜綱	椎骨		49
E	Ⅸ	スズキ	腹椎		1
E	Ⅸ	ソウダカツオ属	角骨	左	1
E	Ⅸ	ソウダカツオ属	椎骨		29
E	Ⅸ	ソウダカツオ属	腹椎		4
E	Ⅸ	ソウダカツオ属	尾椎		6
E	Ⅸ	タイ科	尾椎		1
E	Ⅸ	フサカサゴ科	腹椎		13
E	Ⅸ	フサカサゴ科	尾椎		12
E	Ⅸ	フサカサゴ科	前鰓蓋骨	右	1
E	Ⅸ	ブリ属	椎骨		2
E	Ⅸ	ブリ属	腹椎		3
E	Ⅸ	ブリ属	尾椎		15
E	Ⅸ	不明	歯骨	右	1
E	Ⅸ	不明	椎骨		3
E	Ⅸ	不明	腹椎		5
E	Ⅸ	不明	尾椎		8
E	Ⅸb	アイナメ科	腹椎		4
E	Ⅸb	アイナメ科	尾椎		4
E	Ⅸb	カワハギ科	腹椎		2
E	Ⅸb	カワハギ科	尾椎		1
E	Ⅸb	カワハギ科	背鰭棘		1
E	Ⅸb	カツオ	腹椎		4
E	Ⅸb	カツオ	尾椎		17
E	Ⅸb	カツオ	扇状骨		2
E	Ⅸb	カツオ?	扇状骨		1
E	Ⅸb	サケ科	椎骨		1
E	Ⅸb	サケ科	腹椎		2
E	Ⅸb	サケ科	尾椎		3
E	Ⅸb	サバ属	腹椎		1
E	Ⅸb	サバ属	尾椎		3
E	Ⅸb	板鰓亜綱	遊離歯		1
E	Ⅸb	板鰓亜綱	椎骨		13
E	Ⅸb	スズキ	腹椎		5
E	Ⅸb	スズキ	尾椎		1
E	Ⅸb	ソウダカツオ属	椎骨		5
E	Ⅸb	ソウダカツオ属	腹椎		1
E	Ⅸb	ソウダカツオ属	尾椎		1
E	Ⅸb	タイ科	腹椎		2
E	Ⅸb	タイ科	尾椎		6
E	Ⅸb	フサカサゴ科	腹椎		2
E	Ⅸb	フサカサゴ科	尾椎		4
E	Ⅸb	ブリ属	腹椎		3
E	Ⅸb	ブリ属	尾椎		5
E	Ⅸb	不明	擬鎖骨	右	1
E	Ⅸb	不明	椎骨		2
E	Ⅸb	不明	腹椎		3
E	Ⅸb	不明	尾椎		2
E	Ⅸb-2	カツオ	尾椎		1
E	Ⅸb-2	ソウダカツオ属	椎骨		1
E	Ⅸb-2	不明	椎骨		1
E	Ⅸb-3	カツオ	尾椎		1
E	Ⅸb-3	不明	尾椎		1
E	Ⅸb-4	板鰓亜綱	椎骨		2
E	Ⅸb-7	カツオ	尾椎		4
E	Ⅸb-8	カツオ	腹椎		1
E	Ⅸc	カワハギ科	腹椎		1
E	Ⅸc	カワハギ科	尾椎		1
E	Ⅸc	カツオ	前上顎骨	右	1
E	Ⅸc	カツオ	尾椎		4

地点	層位	種　　名	部位	左右	数量
E	Ⅸc	サケ科	腹椎		2
E	Ⅸc	サバ属	腹椎		1
E	Ⅸc	板鰓亜綱	椎骨		1
E	Ⅸc	フサカサゴ科	腹椎		4
E	Ⅸc	フサカサゴ科	尾椎		2
E	Ⅸc	不明	腹椎		3
E	Ⅸc	不明	方骨	右	1
E	Ⅸe	フサカサゴ科	腹椎		1
E	Ⅸg	不明	方骨	?	1
E	Ⅹa	フサカサゴ科	腹椎		2
E	Ⅹa	フサカサゴ科	尾椎		1
E	Ⅹa	ブリ属	尾椎		1
E	Ⅹc	カワハギ科	腹椎		5
E	Ⅹc	カワハギ科	尾椎		3
E	Ⅹc	サケ科	腹椎		1
E	Ⅹc	ソウダカツオ属	尾椎		1
E	Ⅹd	カワハギ科	腹椎		1
E	Ⅹd	カワハギ科	尾椎		1
E	Ⅹe	カワハギ科	尾椎		1
E	Ⅹe	カツオ?	尾椎		3
E	Ⅹe	サケ科	腹椎		1
E	Ⅹe	サバ属	尾椎		2
E	Ⅹe	ソウダカツオ属	椎骨		1
E	Ⅹe	フサカサゴ科	腹椎		2
E	Ⅹe	フサカサゴ科	尾椎		4
E	Ⅹe	ブリ属	尾椎		2
E	Ⅹe	マグロ属	尾椎		1
E	Ⅹe	不明	腹椎		2
E	ⅩⅠ	フサカサゴ科	擬鎖骨	右	1
E	Ⅶa	カツオ	主上顎骨	左	1
E	Ⅶa	板鰓亜綱	椎骨		1
E	Ⅶb	カツオ	腹椎		1
E	Ⅶb	カツオ	尾椎		1
E	Ⅶb	サケ科	腹椎		1
E	Ⅶb	サケ科	尾椎		2
E	Ⅶb	サバ属	腹椎		4
E	Ⅶb	サバ属	尾椎		6
E	Ⅶb	板鰓亜綱	椎骨		5
E	Ⅶb	スズキ	尾椎		1
E	Ⅶb	ソウダカツオ属	腹椎		1
E	Ⅶb	ソウダカツオ属	尾椎		1
E	Ⅶb	タイ科	尾椎		1
E	Ⅶb	ブリ属	腹椎		5
E	Ⅶb	ブリ属	尾椎		4
E	Ⅶb	マグロ属	尾椎		1
E	Ⅶb	不明	腹椎		3
E	Ⅶb	不明	尾椎		4
E	Ⅶc	アイナメ科	腹椎		4
E	Ⅶc	アイナメ科	尾椎		2
E	Ⅶc	コイ科	腹椎		1
E	Ⅶc	コイ科	尾椎		1
E	Ⅶc	サケ科	腹椎		1
E	Ⅶc	サバ属	腹椎		2
E	Ⅶc	サバ属	尾椎		4
E	Ⅶc	板鰓亜綱	椎骨		8
E	Ⅶc	ソウダカツオ属	椎骨		1
E	Ⅶc	フサカサゴ科	前上顎骨	左	1
E	Ⅶc	フサカサゴ科	尾椎		2
E	Ⅶc	ブリ属	腹椎		1
E	Ⅶc	不明	椎骨		2
E	Ⅶc	不明	尾椎		2
E	Ⅷa	アイナメ科	腹椎		1
E	Ⅷa	カツオ	腹椎		3
E	Ⅷa	コイ科	尾椎		1
E	Ⅷa	サケ科	腹椎		1
E	Ⅷa	サケ科	尾椎		1
E	Ⅷa	サバ属	腹椎		1
E	Ⅷa	サバ属	尾椎		2
E	Ⅷa	板鰓亜綱	椎骨		4
E	Ⅷa	ソウダカツオ属	椎骨		2
E	Ⅷa	ソウダカツオ属	尾椎		2
E	Ⅷa	フサカサゴ科	尾椎		1
E	Ⅷa	ブリ属	尾椎		1
E	Ⅷa	不明	腹椎		1
E	Ⅷb	カツオ	腹椎		2
E	Ⅷb	カツオ	尾椎		9
E	Ⅷb	カツオ?	扇状骨		1

魚類2

地点	層位	種　　名	部位	左右	備考
F	Ⅷb	サケ科	腹椎		1
F	Ⅷb	サケ科	尾椎		4
F	Ⅷb	サバ属	腹椎		5
F	Ⅷb	サバ属	尾椎		13
F	Ⅷb	板鰓亜綱	椎骨		5
F	Ⅷb	タイ科	尾椎		1
F	Ⅷb	フサカサゴ科	前上顎骨	右	1
F	Ⅷb	フサカサゴ科	腹椎		1

地点	層位	種　　名	部位	左右	備考
F	Ⅷb	ブリ属	腹椎		1
F	Ⅷb	ブリ属	尾椎		1
F	Ⅷb	不明	腹椎		3
F	Ⅸb	アイナメ科	腹椎		1
F	Ⅸb	カツオ	尾椎		1
F	Ⅸb	サケ科	椎骨		1
F	Ⅸb	板鰓亜綱	椎骨		2
F	Ⅸb	フサカサゴ科	前上顎骨	左	1

地点	層位	種　　名	部位	左右	備考
F	Ⅸb	フサカサゴ科	腹椎		1
F	Ⅸb	フサカサゴ科	尾椎		2
F	Ⅸb	ブリ属	尾椎		1
F	Ⅸc	サケ科	腹椎		1
F	Ⅸc	タイ科	腹椎		2
F	Ⅸc	タイ科	尾椎		1
F	Ⅸc	フサカサゴ科	腹椎		1
F	Ⅸc	ブリ属	腹椎		1
F	Ⅸc	マグロ属	尾椎		1

両生類

地点	層位	種　　名	部位	左右	備考
C	Ⅰb	ヒキガエル	寛骨	左	1
C	Ⅰb	ヒキガエル	肩甲骨	左	1
C	Ⅰb	ヒキガエル	肩甲骨	右	1
C	Ⅰb	ヒキガエル	上腕骨	右	2
C	Ⅰb	ヒキガエル	仙椎		1
C	Ⅳb	ヒキガエル	寛骨	左	1
C	Ⅳb	ヒキガエル	上腕骨	左	1
C	Ⅳb	ヒキガエル	寛骨	右	2
C	Ⅳb	不明	椎骨		1
E	Ⅲ	ヒキガエル	寛骨	右	1
E	Ⅳb	ヒキガエル	上腕骨	左	1
E	Ⅳb	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	Ⅳb	ヒキガエル	肩甲骨	左	1
E	Ⅳb	不明	椎骨		2
E	Ⅳh	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	Ⅳh	不明	上腕骨	左	1
E	Ⅸ	ヒキガエル	寛骨	右	5
E	Ⅸ	ヒキガエル	上腕骨	左	5
E	Ⅸ	ヒキガエル	肩甲骨	左	7
E	Ⅸ	ヒキガエル	寛骨	左	6
E	Ⅸ	ヒキガエル	仙椎		2
E	Ⅸ	ヒキガエル	肩甲骨	右	6
E	Ⅸ	ヒキガエル	上腕骨	右	4
E	Ⅸ	不明	椎骨		30
E	Ⅸ	ヤマアカガエル？	上腕骨	左	1
E	Ⅸb	ヒキガエル	上腕骨	左	5
E	Ⅸb	ヒキガエル	上腕骨	右	10
E	Ⅸb	ヒキガエル	寛骨	右	5
E	Ⅸb	ヒキガエル	寛骨	左	10
E	Ⅸb	ヒキガエル	肩甲骨	右	5
E	Ⅸb	ヒキガエル	肩甲骨	左	6

地点	層位	種　　名	部位	左右	備考
E	Ⅸb-3	ヒキガエル	上腕骨	右	1
E	Ⅸb-3	ヒキガエル	寛骨	右	2
E	Ⅸb-8	不明	椎骨		1
E	Ⅸc	ヒキガエル	上腕骨	左	2
E	Ⅸc	ヒキガエル	上腕骨	右	5
E	Ⅸc	ヒキガエル	肩甲骨	左	1
E	Ⅸc	ヒキガエル	肩甲骨	右	1
E	Ⅸc	ヒキガエル	寛骨	左	3
E	Ⅸc	ヒキガエル	仙椎		2
E	Ⅸc	不明	椎骨		9
E	Ⅸd	ヒキガエル	寛骨	左	3
E	Ⅸd	ヒキガエル	寛骨	右	1
E	Ⅸd	ヒキガエル	上腕骨	左	2
E	Ⅸd	ヒキガエル	肩甲骨	右	2
E	Ⅸd	ヒキガエル	上腕骨	右	1
E	Ⅸe	ヒキガエル	肩甲骨	右	1
E	Ⅸe	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	Ⅸe	不明	椎骨		3
E	Ⅸi	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	Ⅵ	ヒキガエル	上腕骨	右	1
E	Ⅵa	ヒキガエル	寛骨	右	1
E	Ⅵa	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	Ⅵb	ヒキガエル	上腕骨	右	2
E	Ⅵc	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	Ⅶb	ヒキガエル	寛骨	右	1
E	Ⅶb	不明	椎骨		1
E	Ⅷa	ヒキガエル	上腕骨	右	1
E	Ⅷa	ヒキガエル	肩甲骨	左	2
E	Ⅷa	ヒキガエル	肩甲骨	右	1
E	Ⅷa	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	Ⅷa	ヒキガエル	寛骨	右	1

地点	層位	種　　名	部位	左右	備考
E	Ⅷa	不明	椎骨		2
E	Ⅷb	ヒキガエル	上腕骨	左	1
E	Ⅷb	ヒキガエル	仙椎		3
E	Ⅷb	ヒキガエル	肩甲骨	左	6
E	Ⅷb	ヒキガエル	上腕骨	右	3
E	Ⅷb	ヒキガエル	寛骨	右	4
E	Ⅷb	ヒキガエル	寛骨	左	3
E	Ⅷb	ヒキガエル	上腕骨	右	3
E	Ⅷb	不明	椎骨		15
E	Ⅹa	ヒキガエル	上腕骨	左	1
E	Ⅹa	ヒキガエル	肩甲骨	右	1
E	Ⅹc	ヒキガエル	寛骨	右	1
E	Ⅹc	不明	椎骨		1
E	Ⅹe	ヒキガエル	寛骨	右	2
E	Ⅹe	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	Ⅹe	ヒキガエル	上腕骨	左	2
E	Ⅹe	ヒキガエル	仙椎		1
E	Ⅹe	不明	椎骨		6
E	XI	ヒキガエル	寛骨	左	1
E	XI	不明	椎骨		2
F	Ⅶb	ヒキガエル	寛骨	左	1
F	Ⅶb	不明	椎骨		1
F	Ⅶc	ヒキガエル	寛骨	右	1
F	Ⅶc	不明	椎骨		1
F	Ⅷa	ヒキガエル	肩甲骨	左	1
F	Ⅷa	ヤマアカガエル？	寛骨	右	1
F	Ⅷb	ヒキガエル	肩甲骨	右	1
F	Ⅷb	ヒキガエル	肩甲骨	左	1
F	Ⅷb	ヒキガエル	上腕骨	左	1
F	Ⅷb	ヒキガエル	肩甲骨	左	1
OA	2	ヒキガエル	上腕骨	右	1

ハ虫類

地点	層位	種　　名	部位
E	IX	ヘビ類	椎骨
E	Ixc	ヘビ類	椎骨
E	Ixc	ヘビ類	椎骨
E	Ixc	ヘビ類	椎骨
E	Ixc	ヘビ類	椎骨
E	Xe	ヘビ類	椎骨
E	Xe	ヘビ類	椎骨
F	VIIc	ヘビ類	椎骨

水洗フルイの動物遺存体

地点	層位	種名	部位	左右	数量
袋1	カワシンジュガイ		右	3	
袋1	カワシンジュガイ		左	5	
袋1	ムラサキインコ		左		
袋1	ムラサキインコ		右	2	
袋1	イガイ		左	1	
袋1	ヤマキサゴ			1	
袋1	カサガイ類				
袋1	微小陸産巻貝			3	
袋1	ウニ綱殻板				破片
袋1	マイワシ	腹椎	2		
袋1	ヤマメ	腹椎	4		
袋1	ヤマメ	尾椎	1		
袋1	サケ科	椎骨片		1点あり	大型
袋1	サケ科?	遊離歯	1		
袋1	不明	臼歯片	?	1	破片
袋1	ネズミ科	大腿骨	左		遠位欠
袋1	不明	指骨		7	小形ほ乳類

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋2	チシマフジツボ				破片
袋2	アカフジツボ				破片
袋2	カワシンジュガイ		左	6	
袋2	カワシンジュガイ		右	4	
袋2	ムラサキインコ		右	1	
袋2	ムラサキインコ		左	1	
袋2	カサガイ類			2	5ミリ以下
袋2	微小陸産巻貝			1	
袋2	ヤマメ	腹椎		3	
袋2	ヤマメ	尾椎		4	
袋2	マイワシ	尾椎		1	
袋2	マイワシ	腹椎		4	
袋2	サケ科	椎骨片			大型
袋2	サバ	腹椎		5	
袋2	サバ	尾椎		4	小形
袋2	不明	尾椎		1	
袋2	不明	腹椎		1	
袋2	ヤマメ	角骨	左	1	
袋2	不明小形ほ乳類	尾椎		3	
袋2	不明	犬歯		1	
袋2	不明	臼歯片			

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋3	カワシンジュガイ		左	2	
袋3	ヌマガイ、カラスガイ		破片	破片	
袋3	チシマフジツボ		破片		
袋3	イガイ		破片		
袋3	エゾアワビ		破片		
袋3	ヤマキサゴ			1	
袋3	微小陸産巻貝			6	
袋3	マイワシ	腹椎		15	
袋3	マイワシ	尾椎		7	
袋3	カタクチイワシ	尾椎		1	
袋3	カタクチイワシ	腹椎		10	
袋3	ヤマメ	腹椎		4	
袋3	ヤマメ?	腹椎		1	
袋3	ヤマメ	尾椎		6	
袋3	イワナ?	尾椎		1	
袋3	サケ科	遊離歯		1	大型
袋3	サケ科	椎骨片			大型
袋3	サバ属	腹椎		3	
袋3	ハゼ科	腹椎		1	
袋3	不明	尾椎		2	
袋3	板鰓亜綱	歯		3	
袋3	ヒキガエル	寛骨	左		
袋3	不明鳥類	脛骨	左		小形鳥類

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋4	ウニ綱殻板				破片3点
袋4	微小陸産巻貝			7	
袋4	カワシンジュガイ		右	5	
袋4	レイシガイ?			1	
袋4	不明巻貝				殻頂部破片
袋4	エゾアワビ			1	
袋4	スズキ	腹椎		1	
袋4	板鰓亜綱	椎骨		1	
袋4	マイワワシ	腹椎		1	
袋4	ヤマメ	腹椎		1	
袋4	ヤマメ	尾椎		3	
袋4	コイ科	尾椎		1	
袋4	不明	尾椎			
袋4	ヒキガエル	寛骨	左	1	
袋4	ネズミ科	寛骨	左	1	
袋4	不明	基節骨	?	1	小形ほ乳類
袋4	不明	末節骨	?	1	小形ほ乳類

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋5	チシマフジツボ				破片
袋5	ウニ綱殻板				破片3点
袋5	カワシンジュガイ		右	3	
袋5	カワシンジュガイ		左	4	
袋5	ムラサキインコ		左	1	
袋5	ムラサキインコ		右	1	
袋5	不明巻貝		右	1	
袋5	微小陸産巻貝		右	2	
袋5	カサガイ類				
袋5	イガイ				破片
袋5	ヤマメ	尾椎		1	
袋5	カタクチイワシ	尾椎		1	
袋5	ネズミ亜科	下顎骨	右	1	
袋5	ネズミ科	腰椎		1	
袋5	小形ほ乳類	尾椎		6	
袋5	小形ほ乳類	指骨		1	
袋5	小形ほ乳類	頚椎		1	

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋6	微小陸産巻貝			6	
袋6	カニ類可動指			1	
袋6	チシマフジツボ				破片4点
袋6	ブリ	尾椎		1	
袋6	フサカサゴ科	尾椎		1	
袋6	板鰓亜綱	椎骨		1	
袋6	コイ科	尾椎		1	
袋6	コイ科	基後頭骨		1	
袋6	カタクチイワシ	腹椎		3	
袋6	カタクチイワシ	尾椎		3	
袋6	マイワシ	尾椎		3	
袋6	マイワシ	腹椎		3	
袋6	ヤマメ	尾椎		2	
袋6	不明	尾椎		2	
袋6	不明	腹椎		1	
袋6	不明	椎骨		2	
袋6	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	1	
袋6	小形ほ乳類	尾椎		1	

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋7	チシマフジツボ				破片4点
袋7	カニ類可動指			1	
袋7	微小陸産巻貝			20	
袋7	ムラサキインコガイ		左	2	
袋7	ムラサキインコガイ		右	1	
袋7	エゾアワビ			1	破片
袋7	カワシンジュガイ		左	1	

袋7	カタクチイワシ	腹椎		11	
袋7	カタクチイワシ	尾椎		8	
袋7	マイワシ	尾椎		5	
袋7	マイワシ	腹椎		8	
袋7	ヤマメ	腹椎		7	
袋7	ヤマメ	尾椎		5	
袋7	サケ科	腹椎		1	大型
袋7	サケ科	尾椎		1	大型
袋7	サケ科	遊離歯		1	大型
袋7	ソウダガツオ属	椎骨		2	
袋7	カツオ	尾椎		1	
袋7	フサカサゴ科	腹椎		1	
袋7	サバ属	腹椎		1	
袋7	コイ科	腹椎		1	
袋7	不明	腹椎		4	
袋7	不明	尾椎		6	
袋7	サケ科?	角骨	右	1	大型
袋7	不明	前鰓蓋骨	右	1	
袋7	ハタネズミ亜科	上顎骨		1	白歯部分
袋7	小形ほ乳類	腰椎		1	

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋8	カワシンジュガイ		左	3	
袋8	ウグイ	咽頭骨	左	1	
袋8	サバ属	尾椎		1	大型
袋8	サケ科	腹椎		1	
袋8	板鰓亜綱	椎骨		2	
袋8	コイ科	尾椎		1	
袋8	マイワシ	尾椎		1	
袋8	マイワシ	腹椎		3	
袋8	不明	尾椎		1	
袋8	小形ほ乳類	尾椎		1	完形
袋8	小形ほ乳類	PM?		1	完形

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋9	チシマフジツボ				加熱痕
袋9	カワシンジュガイ		左	1	
袋9	カワシンジュガイ		右	1	
袋9	ヤマキサゴ			1	
袋9	ブリ属	尾椎		1	
袋9	マイワシ	腹椎		5	
袋9	フサカサゴ科	尾椎		1	
袋9	ヤマメ	腹椎		1	
袋9	不明	尾椎		1	
袋9	サケ科	椎骨片		1	大型

地点	種名	部位	左右	数量	備考
袋10	チシマフジツボ				破片7点
袋10	微小陸産巻貝				
袋10	カワシンジュガイ		右	1	
袋10	カワシンジュガイ		左	4	
袋10	微小陸産巻貝			4	
袋10	サバ属	腹椎		1	
袋10	サバ属	尾椎		1	
袋10	板鰓亜綱	遊離骨		2	
袋10	マイワシ	腹椎		18	
袋10	マイワシ	尾椎		5	
袋10	ヤマメ	尾椎		3	
袋10	ヤマメ	腹椎		4	
袋10	不明	腹椎		3	
袋10	不明	尾椎		1	
袋10	サケ科	椎骨片		1	大型
袋10	カタクチイワシ	腹椎		3	
袋10	不明	尾椎		6	
袋10	小形ほ乳類	頚椎		1	ほぼ完形
袋10	小形ほ乳類	指骨		3	ほぼ完形

3．まとめ

岩谷洞穴は小本川支流三田貝川の最上流域に位置し、現河床面との比高は約７ｍと低く、下流域に発達する段丘群との対比からしても洞穴生成時期はそれほど遡らず、おそらく最終氷期頃と考えられる。

発掘地点は開口部付近で、しかも岩盤に達していないため洞穴利用の開始時期を特定するのは難しい。出土土器に基づくならば縄文時代前期初頭となる。三田貝川流域では縄文早期の確実な遺跡は極めて少なく、前期以降に遺跡が増加することからも、この時期観は妥当ではなかろうか。以後、岩谷洞穴は縄文晩期末までほぼ間断なく利用されている。だが弥生時代以降は顕著な痕跡はない。文化層（灰層を含む）の形成からすると縄文前期末葉から中期中葉が最も活発な利用が展開したと推定できる。これは、小本川下流域など岩泉町内に分布する洞穴の利用状況とは相違するようだ。

岩泉町内に多数分布する洞穴遺跡では、縄文時代早期中葉や前期前葉の土器が発見できる。これらの時期に本格的な利用がはじまるのだろうが、以後は断続的で、大まかに見るなら晩期中葉・末葉頃に再び増加する。特にほとんどの洞穴遺跡から弥生後期のいわゆる赤穴式土器が出土するのが大きな特徴である。縄文前期末～中期には小本川流域でも拠点的集落が営まれるが、その時期には洞穴がほとんど利用されていない。それに対し、岩谷での活発な動きは、ここが他の洞穴とは異なる理由で利用された可能性を示唆していよう。

岩谷洞穴では、土器が多く、しかも接合しない破片が主体的だった。人骨も出土しているが、埋葬遺構は確認できていない。大量の土器は副葬・埋納目的ではなく積極的な生活痕跡を示すのだろう。さらにそれを支持するのが動物遺存体である。サル・カモシカなどが目に付き山岳領域の動物相を対象とした狩猟活動の展開拠点であったことを窺わせる。特にサルは顎骨が多い点など特定の部位に偏る。このような出土は、長野県湯倉洞穴などと類似し、動物祭祀を含め単なる解体処理以外の行為があったのではなかろうか。さらに、本遺跡を特徴づける遺物がカエルである。周辺で捕獲し食用にしたと推定できる。カエルは宮城県里浜貝塚・田柄貝塚から断片的な出土が報告されているが、県内の貝塚ではほとんど出土していない。洞穴遺跡では住田町蛇王洞穴でアカガエルが報告されている。全国的には山岳部の沢奥に位置する洞穴で多量のカエルが出土している遺跡があり（愛媛県上黒岩洞穴等）、遺跡周辺の環境が関わるのだろう。カワシンジュガイやイワナと思われる小形サケ科魚骨の出土もその一環の活動結果と見なせよう。

このような洞穴周辺の資源利用と同時に、本遺跡では海産資源も少なくない。サバ・カツオ・タイ・ブリなどのうち、特にサバは椎骨に比べて頭骨が極端に少なく、海浜部で加工して持ち込まれた可能性が高い。気仙地方の洞穴遺跡では内陸部の洞穴からも多数の海産魚貝類が出土しており、これまでも海岸部との積極的な関係が指摘されてきた。しかし、岩谷洞穴は海岸部まで川筋を辿れば40㎞を超す距離にある。貝塚とは異なってイワシ類など地先の魚種を欠く構成は、海産資源の持ち込みが日常的な食料供給・消費活動とは別の次元で行われたことを示すのだろうか。すなわち、本遺跡の西方約２㎞には北上川水系との分水嶺である早坂峠があり、かつては小本街道として塩や鉄を内陸部へ輸送する道筋に位置し、峠を越えるあるいは越えてきた人々が休息をとる場所でもあった。おそらくここは、狩猟者集団による山岳狩猟の基地であると同時に、沿岸部と北上川流域との交通交易活動でも重要な機能を果たしていた場と思われる。

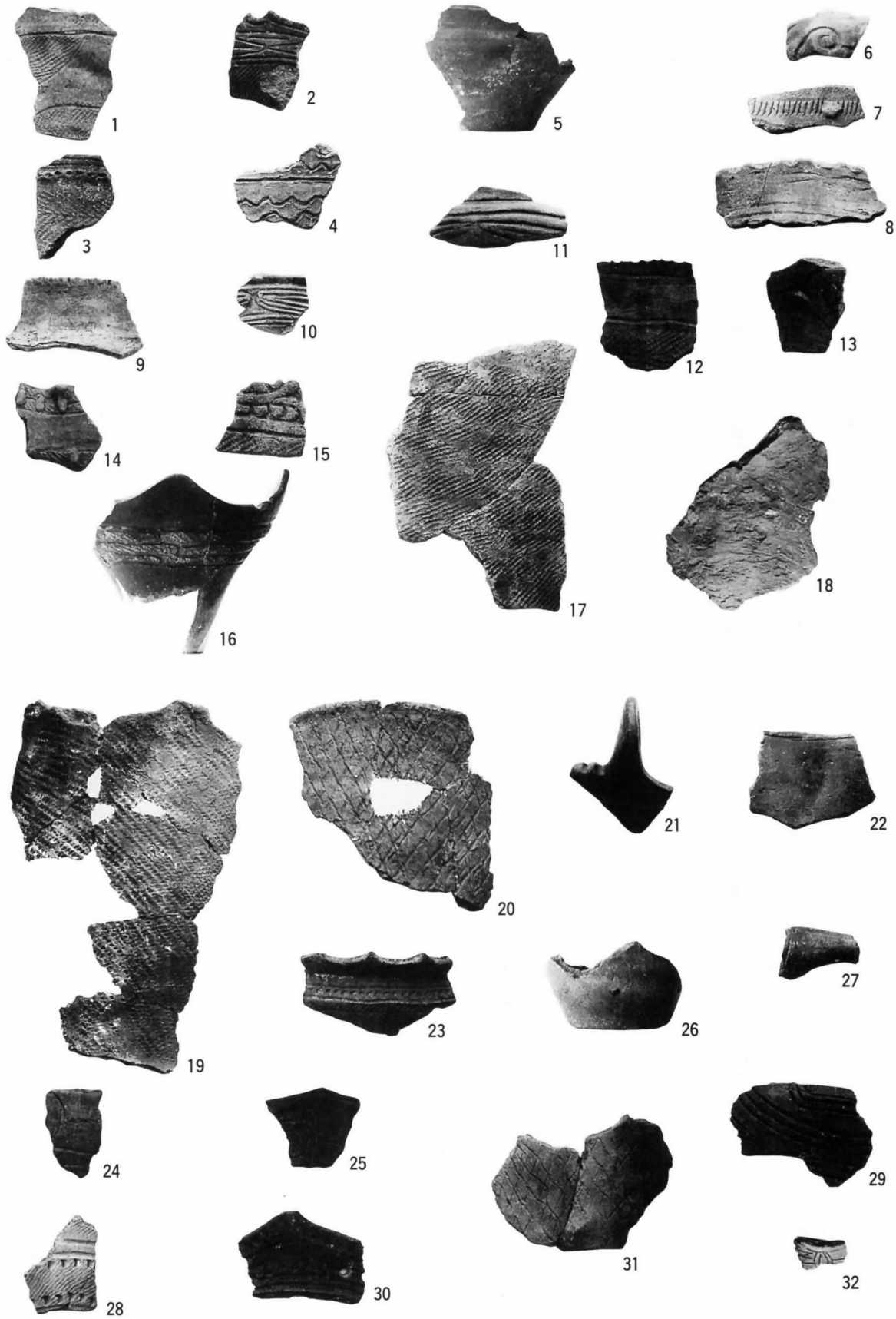
最期に本洞穴出土の特異な遺物に関して簡単に触れる。小形釣針やイノシシ牙製鏃は県内の遺跡ではほとんど類例がない。特に牙鏃は、穿孔があり垂飾品的な使用も考えられる。また、縄文時代の真珠は福井県鳥浜貝塚・高知県宿毛貝塚で出土しているが、穿孔例は本遺跡だけであり、古墳時代の奈良県纒向古墳例と共に稀少な資料といえよう。さらに貝殻を象眼した漆製腕輪は、卓越した漆工芸技術に加え白く輝く貝殻片の斬新なモチーフから、これを制作した人物の個人的な美意識まで感じざると得ない作品と言えよう。

第５表　岩手県内洞穴関連文献一覧表（1）

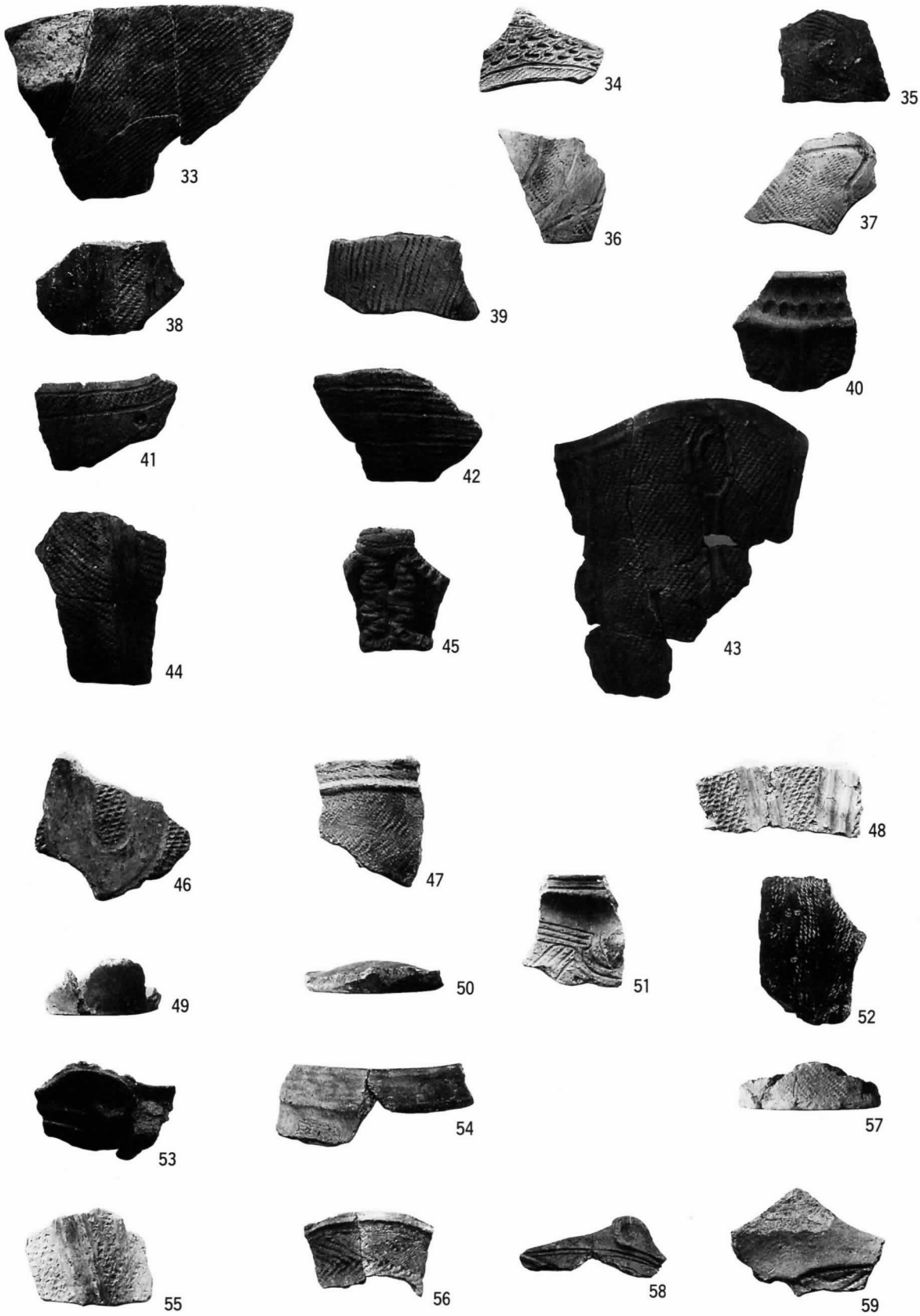
No.	著　　者	刊行年	論　文　名　・　書　名	雑誌名・シリーズ名	巻数・号数	発　行　所
1	柴田常恵	1906	「東北地方踏査概要」	東京人類学会雑誌	第21巻第243号	東京人類学会
2	伊能嘉則・鈴木重男	1923	石器時代遺物発見地名表			内田書店
3	鈴木貞吉	1924	「猿沢川筋大洞窟遺跡発見に就て」	考古学雑誌	第14巻14号	日本考古学会
4	大山柏・八幡一郎	1925	「岩手県南部石器時代遺跡調査旅行」	人類学雑誌	第40巻第10号	人類学会
5	小金井良精	1925	「岩手県に於ける石器時代の遺跡（発表要旨）」	人類学雑誌	第40巻第11号	人類学会
6	小田島禄郎	1926	岩手考古図集			岩手県教育会江刺郡部会
7	松本彦七郎	1927	「陸前國既氣仙郡蛇王洞窟の石器時代遺跡」	人類学雑誌	第42巻２号	人類学会
8	八幡一郎、中谷治宇治郎編	1928	「日本石器時代遺物地名表（第五版）」	人類学雑誌	第43巻12号	人類学会
9	田沢金吾	1928	「日本石器時代遺物発見地名表」追補	人類学雑誌	第43巻12号	人類学会
10	大場磐雄	1934	「本邦上代の洞穴遺跡（二）東北」	史前学雑誌	第６巻３号	史前学会
11		1942	気仙郡上有住村郷土教育資料　上			
12	江坂輝弥	1953	「岩手県小本川流域の洞窟遺跡」	貝塚	第45号	土曜会
13	草間俊一・吉田義昭	1953	考古学提要			
14		1956	金沢郷誌			金澤村教育委員会
15	吉田義昭	1956	「鬼ヶ瀬山洞窟遺跡踏査記」	奥羽史談	第６巻第４号	奥羽史談会（盛岡市）
16	江坂輝弥	1957	「岩手県下閉伊郡岩泉町洞窟遺跡」	日本考古学年報	5	日本考古学協会
17	草間俊一	1958	「先史期」	盛岡市史	第１巻	盛岡市
18	酒詰仲男	1959	日本貝塚地名表			土曜会
19	司東眞雄ほか	1961	埋蔵文化財包蔵地調査カード			江刺市教育委員会
20	小岩末治	1961	「上古篇」	岩手県史	第１巻	岩手県
21	根来功範	1961	住田の遺跡			
22	及川千代松	1962	遺跡を尋ねて	社教シリーズ	第13集	大船渡市教育委員会
23	八幡一郎	1962	「洞穴遍歴　　１岩手県気仙郡女神洞穴」	日本考古学協会洞穴遺跡調査会会報	2	
24	芹沢長介・林謙作	1965	「岩手県蛇王洞洞穴」	石器時代	７号	石器時代文化研究会
25		1966		探査	No.3	立命館大学探検部
26	日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会	1967	日本の洞穴遺跡			平凡社
27	江坂輝弥・笹津海祥	1967	「岩手県岩泉町洞穴遺跡」	日本の洞穴遺跡		平凡社
28	芹沢長介・林謙作	1967	「岩手県蛇王洞洞穴」	日本の洞穴遺跡		平凡社
29	後藤勝彦・及川洵・山口興典	1968	関谷洞窟	社教シリーズ	第14集	大船渡市教育委員会
30	芹沢長介	1969	「岩手県気仙郡蛇王堂洞穴遺跡」	日本考古学年報	17	誠文堂新光社
31	岩手県立一関第一高等学校地学部	1969	布佐洞の形態とその発達			
32	菊池強一	1969	瓢箪穴遺跡第３次発掘調査報告	岩手県岩泉町文化財調査報告	第１集	岩泉町教育委員会
33	船木実	1970		住田町鍾乳洞のしおり	第一集	住田町・住田町観光協会
34	龍泉洞新洞遺跡発掘調査団	1971	龍泉洞新洞遺跡発掘調査報告	岩手県岩泉町文化財調査報告	第２集	岩泉町教育委員会
35	立命館大学	1971	安家石灰洞窟群調査報告書			岩泉町
36	川崎村教育委員会	1971	川崎村布佐洞遺跡第一次調査報告			川崎村
37	根来功範	1971	続住田町風土記			
38	草間俊一・小片保・森本岩太郎・及川洵	1973	岩手県住田町湧清水洞穴遺跡			住田町教育委員会
39		1973	江刺市口沢石灰洞調査報告書			江刺市教育委員会、江刺青年会議所
40	大迫町文化財保護委員会	1973	大迫の洞穴			
41	東北大学教養部地学ゼミナール	1974	岩手県東磐井郡砂鉄川流域に発達する鍾乳洞群について　第１次調査報告			
42	遠野市史編集委員会	1974		遠野市史	第1巻	遠野市
43	根来功範	1974	改訂住田の歴史			
44	東北大学教養部地学ゼミナール	1975	岩手県東磐井郡砂鉄川流域に発達する鍾乳洞群について　第２次調査報告			
45	根来功範	1975		住田町風土記	第３集	
46	東北大学教養部地学ゼミナール	1976	岩手県東磐井郡砂鉄川流域に発達する鍾乳洞群について　第３次調査報告			
47	東北大学教養部地学ゼミナール	1977	岩手県東磐井郡砂鉄川流域に発達する鍾乳洞群について　第４次調査報告			
48	涌谷高校地学部鍾乳洞班	1977	岩手県南部の布佐洞の総合的研究			
49	明治大学地底研究部	1977	CAVE AREA SURVEY OF OOHAZAMA-CHO, IN IWATE PREFECTURE			
50	東北大学教養部地学ゼミナール	1978	布佐洞の地球化学的研究			
51	宮城県涌谷高校地学鍾乳洞班	1978	岩手県南部布佐洞のRim-stoneの研究第２報			
52	千葉房夫	1978	「前編　歴史」	東山町史		東山町
53	及川洵	1978	「考古編」	大船渡市史	第1巻	大船渡市
54	秋田大学ケイビング部	1979	第34字春季合宿報告			
55	関口喜多路	1980	岩泉地方史		上・下	岩泉町教育委員会
56	第22回日本ケイビング大会実行委員会	1981	岩手県住田町洞穴特集号	JAPAN CAVING		日本ケイビング協会

第６表　岩手県内洞穴関連文献一覧表（2）

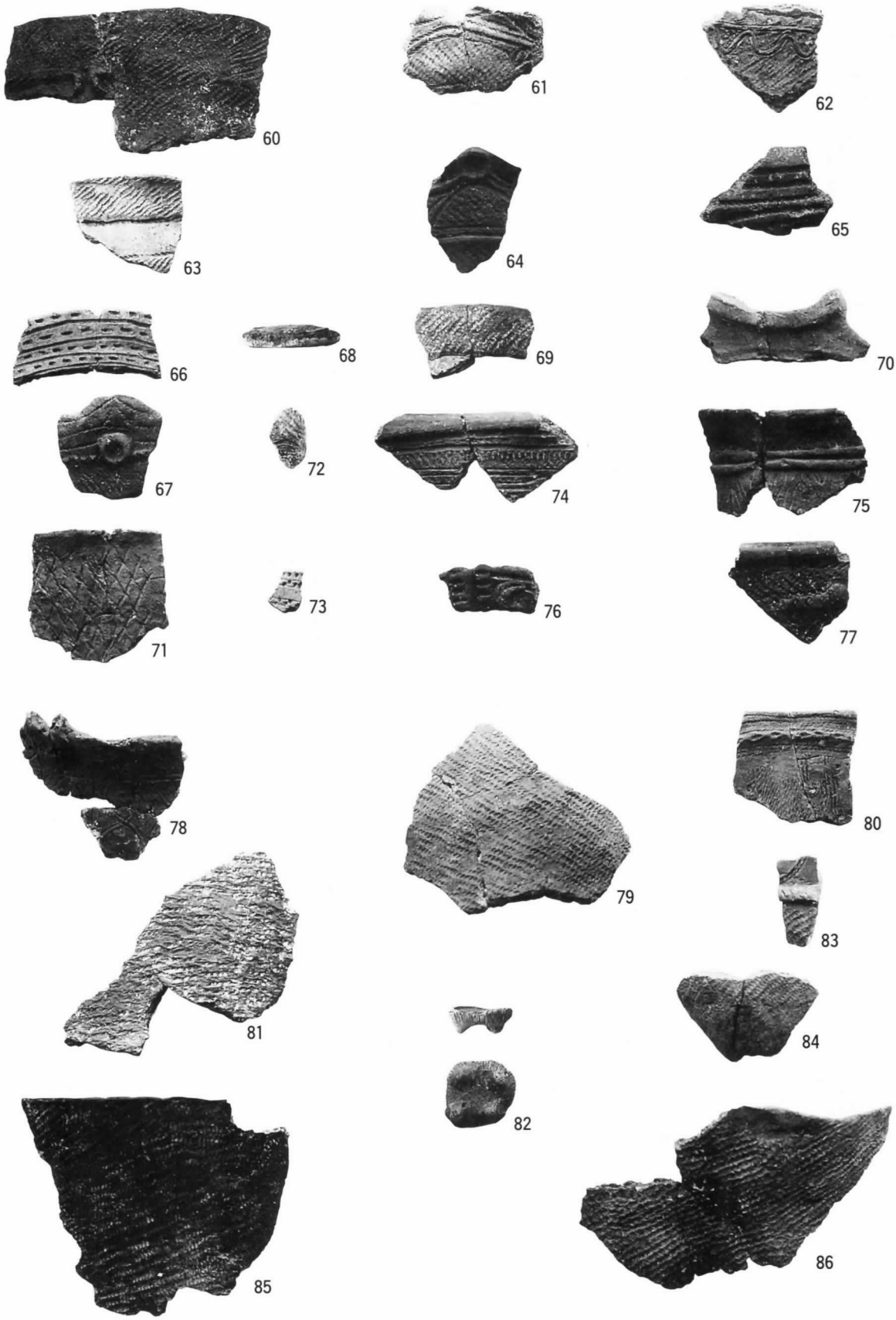
No.	著　　者	刊行年	論　文　名　・　書　名	雑誌名・シリーズ名	巻数・号数	発　行　所
57	相原康二	1981	考古資料篇	江刺市史	第５巻	江刺市教育委員会
58	加藤守	1981	日本列島洞穴ガイド			コロナ社
59	東山町文化財調査委員会	1982	資料編	東山町史		東山町
60	東北大学文学部	1982	東北大学文学部考古学資料図録		第1巻	
61	明治大学地底研究部	1982	陸前高田市編	岩手県洞穴地域調査報告書	第3号	
62		1982	日本歴史地図　原始・古代（上）			柏書房
63		1983	考古遺跡遺物地名表　原始・古代			柏書房
64	高橋信雄ほか	1983	昭和58年度第2回企画展“石灰岩”展示図録			岩手県立博物館
65	日本ケイビング協会	1983	大東町大原の石灰岩洞穴調査報告書			
66	根来功範	1983		住田町風土記	第６集	
67	佐々木清文	1984	「岩泉町内の洞穴遺跡」	紀要	Ⅳ	財団法人岩手県埋蔵文化財センター
68	及川洵	1984	縄文時代の気仙			大船渡市立博物館
69	梅尾禪牛	1984	「十二　衣川誌」	衣川村史Ⅲ　資料編２		衣川郷土史研究会
70	東山ケイビングクラブ	1985	岩手県大船渡市日頃市町洞穴群調査概要			大船渡市教育委員会
71	小田野哲憲ほか	1985	岩手県東山町　熊穴洞穴遺跡発掘調査報告書			岩手県立博物館
72		1986	岩手県立博物館分類展示資料目録			岩手県立博物館
73	東山ケイビングクラブ	1987	岩手県東磐井郡大東町沖田　清水沢洞穴情報			
74		1988	岩手県川崎村布佐洞穴遺跡調査報告書Ⅱ			川崎村
75	東山ケイビングクラブ	1988	岩手県東磐井郡　東山町の洞穴			東山町教育委員会ほか
76	東山ケイビングクラブ	1988	紫波町の洞穴:紫波町洞穴地域調査報告書			紫波町教育委員会
77	小田野哲憲ほか	1989	「洞穴遺跡パトロール報告」	日本洞穴学研究所報告	第7号	日本洞穴学研究所
78	熊谷常正	1989	「川口相良向かい洞穴採集の資料について」	日本洞穴学研究所報告	第7号	日本洞穴学研究所
79	三留孝ほか	1990	「洞口遺跡パトロール（２）」	日本洞穴学研究所報告	第8号	日本洞穴学研究所
80	山形村教育委員会	1990	山形村遺跡分布調査報告書１	山形村埋蔵文化財調査報告書	3	
81		1990	衣川村史Ⅵ　資料編５			衣川村
82	小田野哲憲ほか	1991	「おなめ穴遺跡試掘調査報告」	日本洞穴学研究所報告	第9号	日本洞穴学研究所
83	田鎖康之	1991	岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅰ－小川･安家地区－			岩泉町教育委員会
84	三留孝	1991	釜石市埋蔵文化財分布調査報告書			釜石市教育委員会
85	金野良一ほか	1991	気仙の遺跡－大船渡市・三陸町の遺跡の出土品			大船渡市立博物館
86	佐藤嘉広ほか	1992	考古Ⅱ　小田島コレクションその１	岩手県立博物館収蔵資料目録	第８集	岩手県立博物館
87	田鎖康之	1992	岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅱ			岩泉町教育委員会
88	山形村教育委員会	1992	山形村遺跡分布調査報告書３	山形村埋蔵文化財調査報告書	4	山形村
89	田鎖康之	1993	岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅲ－大川地区－			岩泉町教育委員会
90	佐藤正彦ほか	1994	「考古編」	陸前高田市史	第二巻	陸前高田市
91		1994	岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅳ－岩泉地区－			岩泉町教育委員会
92		1995	ケイビング入門とガイド			(株)山と渓谷社
93	濱田宏ほか	1995	考古Ⅲ　小田島コレクションその２	岩手県立博物館収蔵資料目録	第１１集	岩手県立博物館
94		1995	岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅴ－製鉄関連遺跡－			岩泉町教育委員会
95	ひょうたん穴調査団	1995	「岩手県岩泉町ひょうたん穴遺跡」	旧石器考古学	51	
96	高橋信雄・昆野靖	1996	岩手	日本の古代遺跡	51	保育社
97	阿部祥人・工藤敏久・百々幸雄・奈良貴史	1996	アバクチ洞窟遺跡調査略報－1995年の調査－			東北大学医学部解剖学第1講座
98	鎌田俊昭	1996	「岩手県下閉伊郡ひょうたん穴洞穴」	シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨		麻生優（千葉大学）
99	麻生優	1996	「附　日本の洞穴遺跡地名表（参考文献）」	シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨		麻生優（千葉大学）
100	三浦謙一	1997	「岩手県小松洞穴」	第2回シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨		麻生優（千葉大学）
101	麻生優	1997	「日本における洞穴遺跡研究の現状と課題」	第2回シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨		麻生優（千葉大学）
102	地土井健太郎	1997	「蛇王洞縄文早期人骨の人類学的研究」	人類学雑誌	105－5	
103		1997		住田町史	第１巻	
104		1997	葛巻の自然			葛巻町教育委員会
105	柳沢忠昭・岡本透	1997	「北部北上山地のカルストと湧水」	岩手県立博物館研究報告	第15号	財団法人岩手県文化振興事業団
106	百々幸雄・阿部祥人・阿子島香・奈良貴史	1997	アバクチ洞穴・風穴洞穴遺跡発掘調査略報－1996年の調査－			東北大学医学部解剖学第1講座
107	百々幸雄・阿部祥人・阿子島香・中村良幸・奈良貴史	1998	アバクチ洞穴・風穴洞穴遺跡発掘調査略報－1997年の調査－			アバクチ洞穴・風穴洞穴遺跡発掘調査団
108		1998	東北地方から発見された古人骨－縄文から現代まで－			東北大学総合学術博物館
109	麻生優	1998	日本における洞穴遺跡の構造論的研究　平成7～9年度科学研究費補助金　研究成果報告書			麻生優（愛知学院大学）
110	百々幸雄・阿部祥人・中村良幸・奈良貴史	1999	アバクチ洞穴・風穴洞穴遺跡発掘調査略報－1998年の調査－			アバクチ洞穴・風穴洞穴遺跡発掘調査団
111		1999	ひょうたん穴遺跡発掘調査報告書Ⅰ			東北旧石器文化研究所・東北福祉大学考古学研究会



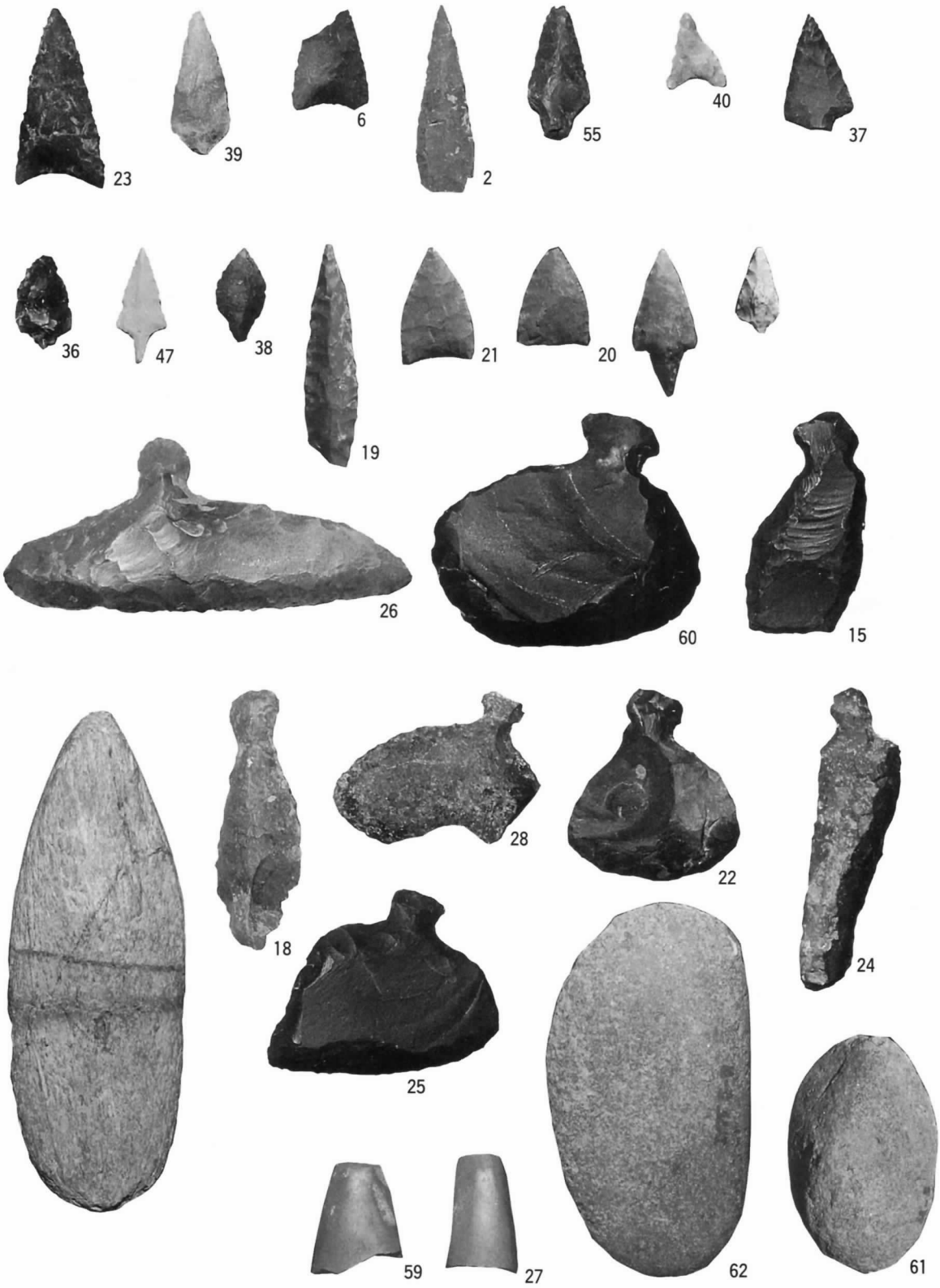
写真図版１　岩谷洞穴出土土器（1）



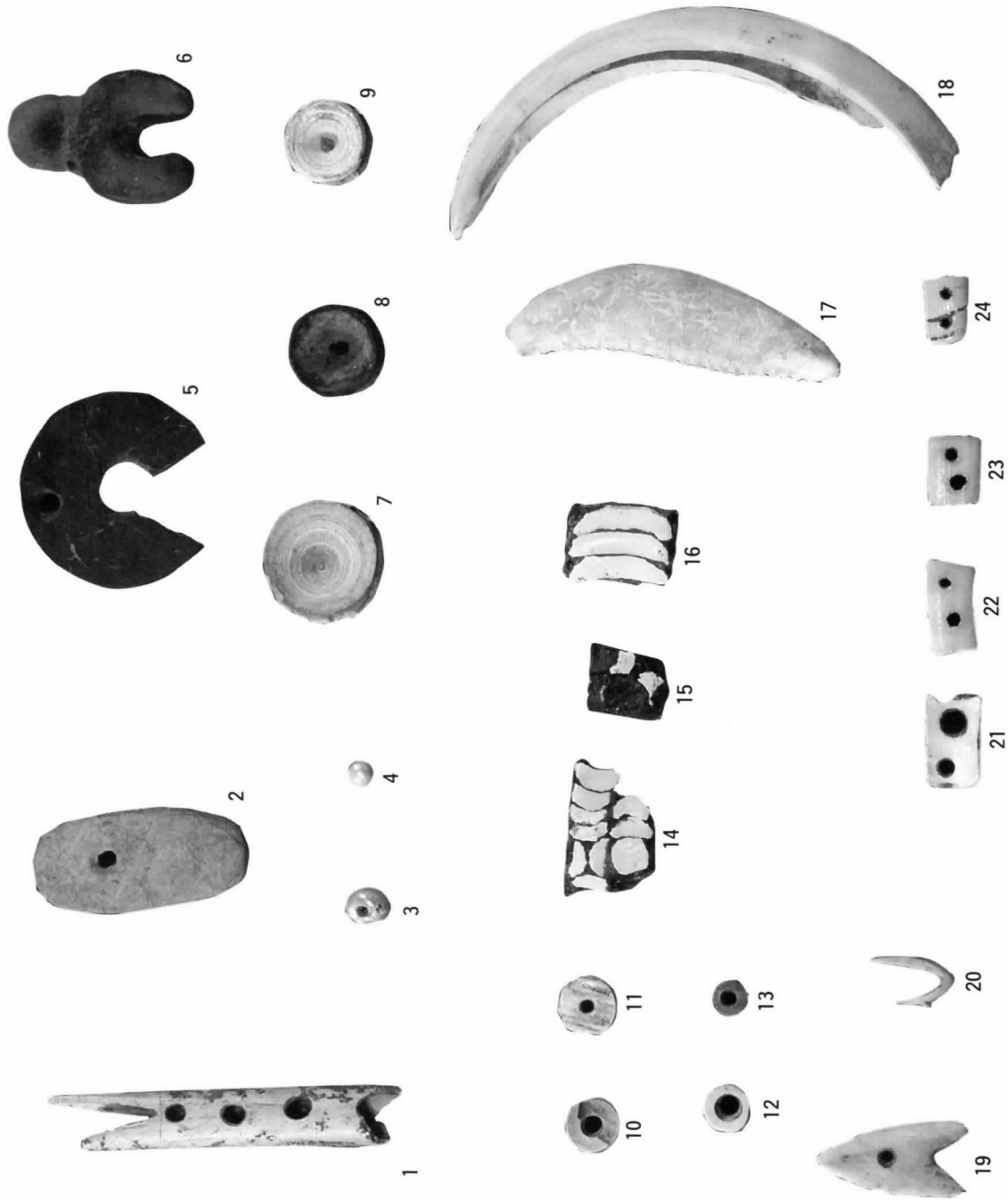
写真図版２　岩谷洞穴出土土器（2）



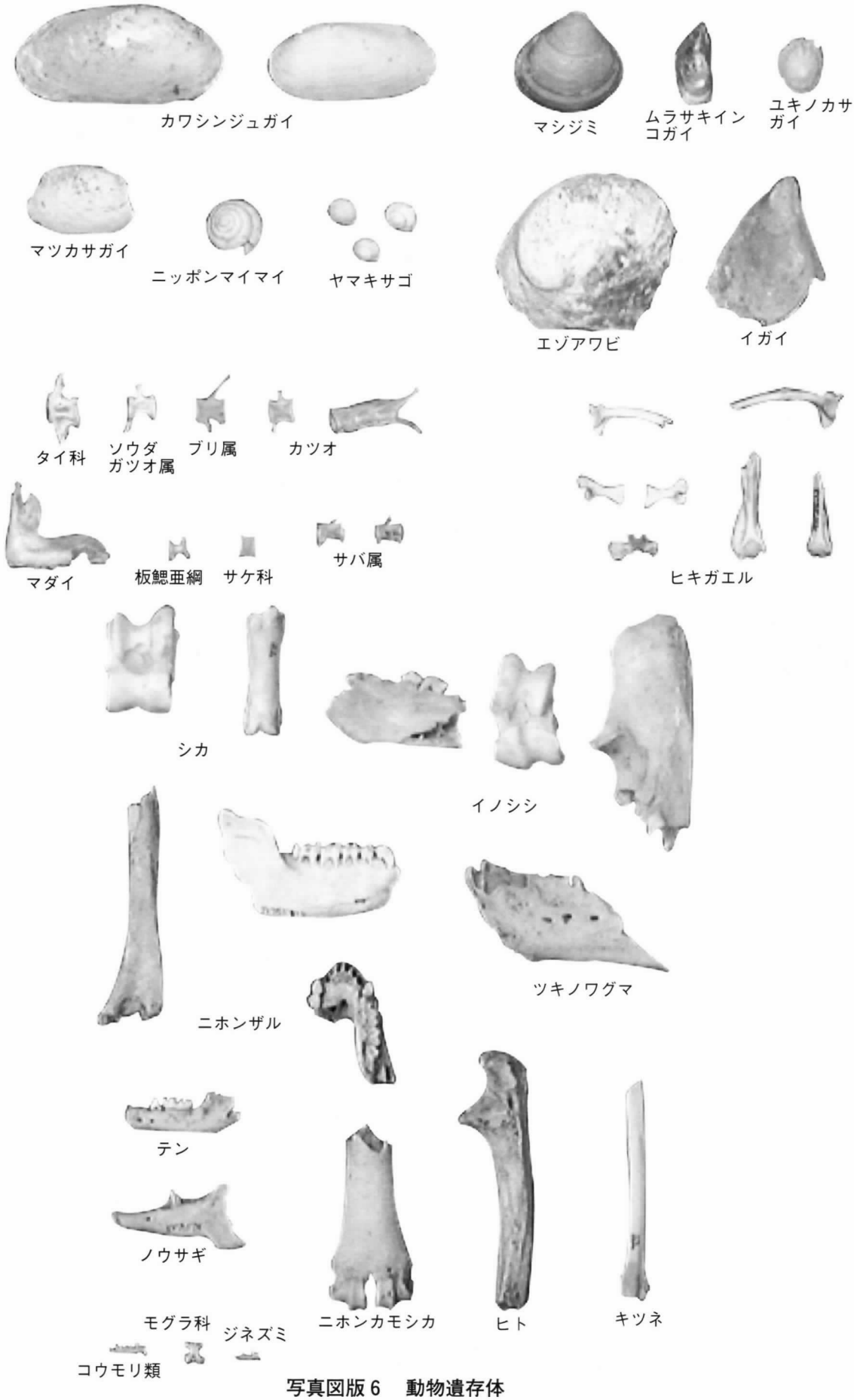
写真図版 3　岩谷洞穴出土土器（3）



写真図版 4　岩谷洞穴出土石器（縮尺不同）



写真図版５　岩谷洞穴出土骨角貝器


カワシンジュガイ
マシジミ
ムラサキインコガイ
ユキノカサガイ
マツカサガイ
ニッポンマイマイ
ヤマキサゴ
エゾアワビ
イガイ
タイ科
ソウダガツオ属
ブリ属
カツオ
マダイ
板鰓亜綱
サケ科
サバ属
ヒキガエル
シカ
イノシシ
ツキノワグマ
ニホンザル
テン
ノウサギ
モグラ科
ジネズミ
コウモリ類
ニホンカモシカ
ヒト
キツネ

写真図版 6　動物遺存体

岩手県文化財調査報告書第106集

岩手の洞穴遺跡

―― 岩手県内重要遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ ――

発行年月日　平成12年３月31日

発　　行　岩手県教育委員会
020-8570　盛岡市内丸10-1

編　　集　岩手県教育委員会事務局文化課

印　　刷　川嶋印刷株式会社